み-3-31

ストライク・ザ・ブラッド2
戦王の使者

三雲岳斗

電撃文庫
590

ストライク・ザ・ブラッド 2
戦王の使者

監視者・姫柊雪菜につきまとわれる生活にもようやく慣れて、平和な日常を取り戻しつつあった〝第四真祖〟暁古城。

そんな古城の前に欧州の真祖〝忘却の戦王〟の使者ディミトリエ・ヴァトラーと、彼の監視役・煌坂紗矢華が現れる。

なぜか古城に異様な興味を示すヴァトラーと、そして親友の雪菜を守るためにと古城の命をつけ狙う紗矢華。しかし彼らの到来は、絃神島の存亡をかけた巨大な陰謀の前触れに過ぎなかった――

世界最強の吸血鬼が、常夏の人工島で繰り広げる学園アクションファンタジー、待望の第二弾！

み-3-31

ストライク・ザ・ブラッド2

戦王の使者

三雲岳斗

電撃文庫 ¥590

9784048707527

1920193005905

ISBN978-4-04-870752-7
C0193 ¥590E

ASCII MEDIA WORKS

発行● アスキー・メディアワークス

定価: 本体 590 円
※消費税が別に加算されます

三雲岳斗（みくもがくと）

大分県生まれ横浜市在住。まさに猛暑の時期に仕事場のエアコンがぶっ壊れて、泣きながら書いてたのがこの作品です。一年中真夏の絃神島気分を思いがけず味わってしまい、そんな無茶な設定にして古城たちには正直すまんかったと反省したとか……。

【電撃文庫作品】

コールド・ゲヘナ①～④
コールド・ゲヘナ あんぷらぐど
レベリオン 全5巻
i.d. Ⅰ～Ⅲ
道士さまといっしょ
道士さまにおねがい
アスラクライン①～⑭
ストライク・ザ・ブラッド 1～2

イラスト：マニャ子（こ）

佐賀県出身の神奈川県在住。フリーでイラストレーターやってます。最近は開封すらしていないゲームソフトを横目に絵を描いています。趣味はゲームと昼寝です。

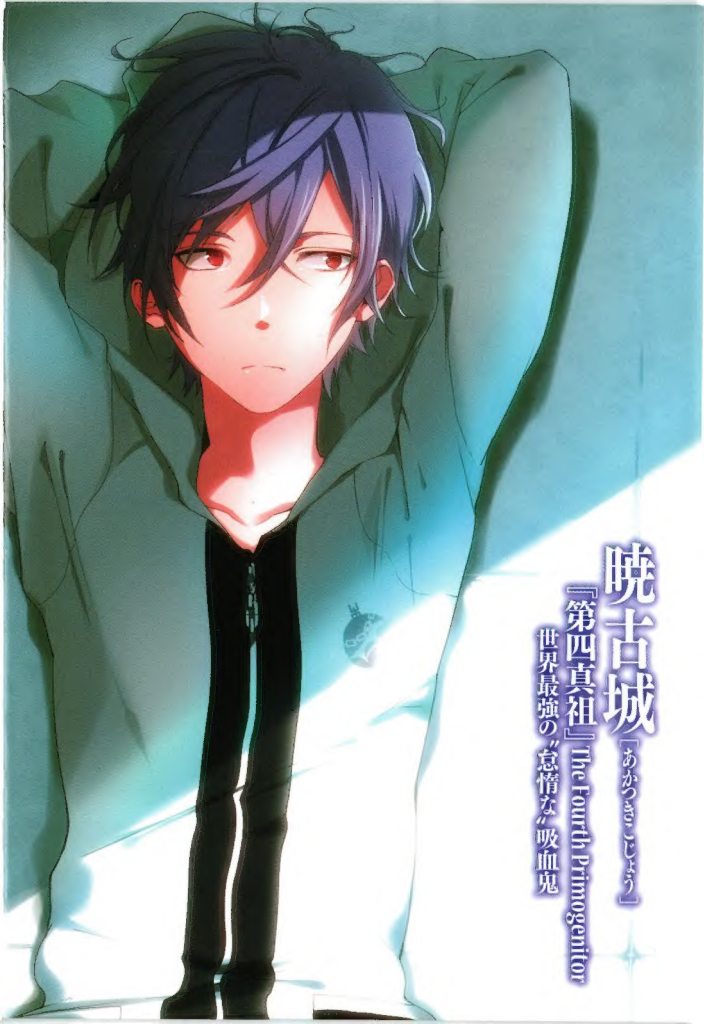
カバー／加藤製版印刷

ストライク・ザ・ブラッド 2

戦王の使者

STRIKE THE BLOOD

三雲岳斗
illustration マニャ子


暁古城「あかつきこじょう」
『第四真祖』The Fourth Primogenitor
世界最強の〝怠惰な〟吸血鬼

姫柊雪菜【ひめらぎゆきな】
『剣巫』Swords - Shaman
獅子王機関の可憐な監視者

藍羽浅葱
「あいばあさぎ」
『電子の女帝』Cyber Empress
華麗で気儘な天才電脳女子高生

煌坂紗矢華
「こうさかさやか」
『舞威媛』Shamanic War Dancer
優美に舞う魔弾の射手

アスタルテ
『人工生命体』Homunculus
蒼獣を宿した無垢なる人形
南宮那月（みなみやなつき）
『空隙の魔女』Witch of the Void
唯我独尊の高貴なる女教師

ディミトリエ・ヴァトラー
『公爵』Duke of Ardeal
軽佻浮薄な蛇遣いの〝貴族〟

Contents

序　章　Intro　11

第一章　戦王の使者　From The Warlord's Empire　29

第二章　テロルの胎動　Revelation Of The Terror　119

第三章　機神覚醒　The Nalakuvera　197

第四章　双角の深緋　The Bicorn　261

終　章　Outro　329

あとがき　342

デザイン／渡邊宏一（有限会社ニイナナニイゴオ）

ストライク・ザ・ブラッド

戦王の使者

2

月齢二十一。弦月の夜。

特区警備隊強襲班が、港湾地区にある古い倉庫を襲撃したのは、その日、深夜のことだった。密入国の犯罪者集団が、武器の闇取引を行っているという情報があったのだ。

爆薬が倉庫の扉を吹き飛ばし、ボディーアーマーを着込んだ隊員たちが正面から突入する。

錆びた鉄柱。積み上げられた木箱。薄暗い水銀灯の明かりの下で、倉庫内にいた男たちが、一斉に立ち上がる。カードゲームに興じていたらしい彼らの足元で、投擲された音響閃光弾が炸裂する。視界を奪われた男たちを薙ぎ払ったのは、サブマシンガンの弾丸だ。

強襲班が使用する弾丸は聖別された琥珀金弾。魔族の肉体再生能力を封じる、対獣人用特殊弾頭である。

倉庫裏側の壁を破って、強襲班の第二分隊が突入する。窓から逃げ出そうとした容疑者は、周囲の建物に潜んだ狙撃班が撃ち抜いていく。

戦闘は、分足らずで終了した。完全武装の特区警備隊二個分隊の前に、不意を討たれた容疑者たちはなすすべもなく制圧された。催涙ガスの霧が晴れた倉庫内には、折り重なるように倒れた彼らの姿があった。

男が七人。全員が魔族。それも登録証を持たない不法入国魔族たちだ。

銃弾を浴びた血まみれの姿で、彼らは床の上に倒れている。

並外れた生命力を持つ獣人を、この程度のダメージで殺すことはできないが、獣化を阻止して行動不能にする程度の成果はあったらしい。

全員を拘束するようにと、強襲班の分隊長が部下たちに指示を出すだが、そのときに彼はふと思い出す。突入直前の作戦会議で聞かされた情報。倉庫に潜伏している容疑者たちは全部で八人。どこかにもう一人いるはずだ。

――まずい！

咄嗟に銃を構え直した分隊長の眼前で、倒れていた獣人たちの身体が、勢いよく撥ね飛んだ。その下から現れたのは、ほとんど無傷の魔族だった　しなやかな巨軀と、黒い毛並みを持つ豹頭の獣人だ。仲間たちを楯にして自分の身を守り、気配を殺して隠れていたのだろう。

完全な獣化を終えた魔族の手の中には、リモコンのような小さな装置が握られている。恐ろしくシンプルなその機械が、倉庫中に仕掛けられた爆弾の起爆スイッチだと気づいて、分隊長は息を呑んだ。

退避しろ、と分隊長が怒鳴る。だが彼のその声は、巻き起こった轟音にかき消される。積み上げられた木箱を衝撃波が粉砕し、渦巻く熱風が倉庫の内部を一瞬にして焼き尽くした炎が、夜空を紅く染めていく

†

「糞っ、糞っ、糞っ、糞っ……やってくれたな、人間ども！」

嗄れた声で口汚く罵りながら、豹頭の男は深夜の街を疾走する。

銃撃で受けた傷がズキズキと疼いた。目や鼻の痛みは催涙ガスの影響だろう。呪力を込めた武器による攻撃は、獣人の再生能力を阻害し、苦痛をひどく長引かせる。

だが、男の苛立ちの原因はそれだけではない。

爆発にまぎれて倉庫を脱出したのはいいが、同志を失い、武器の取引も潰された。計画に支障が出るほどの損失ではないが、失態なのは間違いない。このままでは組織内における彼の権威は失墜し、少佐からの信頼も失うことになるだろう。

「許さんぞ、やつら……必ず後悔させてやる」

いまだ炎に包まれている背後の倉庫を、男は憎悪の眼差しで睨みつけた。

そして月明かりに照らされた夜の街並みへと目を向ける。

東京都絃神市――太平洋上に浮かぶ巨大な人工島。人類と魔族が共存する、聖域条約の申し子。忌まわしき〝魔族特区〟である。

豹頭の男は欧州〝戦王領域〟の出身だ。絃神市の人間に特別の恨みはない。

しかし彼には、この街を破壊する理由があった。〝魔族特区〟の崩壊は、彼ら黒死皇派の健在を世に知らしめ、魔族の地位を貶めた呪わしき僧王への反逆の狼煙となるだろう。

すでに計画は動き出している。特区警備隊ごときが今さらなにをしようとも、この街の運命が変わることはない。

少しばかり段取りは狂ったが、連中の注意を自分が惹きつけていると考えれば、むしろ好都合ですらあった。彼が囮となって特区警備隊を混乱させれば、それだけ計画の成功率が上がることになる。あるいは彼がそう考えることすら、少佐の計画の一部なのかもしれない。

いずれにせよ、彼から同志を奪った特区警備隊への復讐の機会は、すぐに巡ってくるだろう。繁華街に爆弾のひとつでも仕掛けて、連中を困らせてやるのもいい。

市民が何人か巻き添えになったところで、どうということもない。死ぬ順番が、少しばかり早まったというだけの話だ。そう、この街は、どのみち滅びる運命なのだから。

ふはは、と頬まで裂けた唇を吊り上げて、男は笑う。

獣人化形態を保ったまま跳躍して、彼は五階建てのビルの屋上へと一気に躍り出た。人豹は、L種と呼ばれる獣人族の中でも、特に身軽さと敏捷性に秀でた種族だ。夜の市街地を逃走する彼を、追跡できる者などいるはずもない。

せいぜい今はどこかに身を隠し、傷が癒えるのを待たせてもらおう

だがその前に、と男は、握っていたリモコン起爆装置のスイッチに指をかける。

彼らが前もって仕掛けておいた爆弾はふたつ。最初のひとつは倉庫で使ってしまったが、もうひとつ、港湾地区の地下通路に仕掛けたものが残っている。

負傷者の救助のために呼ばれた特区警備隊の増援部隊が、ちょうどそのあたりを通過している頃合いだ。最初の爆発で敵の仲間を引き寄せ、第二の爆弾で彼らを殲滅する。戦場では広く使われる手口である。

「同志の仇だ。思い知れ　！」

男が、リモコンを握る手に力を入れた。

だが、たしかに触れたはずのスイッチからは、なんの手応えも返ってこなかった。

その強烈な違和感に、男は自分の右手を見つめた。そして呆然と息を呑む。

握りしめていたはずのリモコンが、跡形もなく消えていた。

代わりに彼の腕に巻きついていたのは、鎖だった。どこからともなく伸びてきた銀色の鎖が、手錠のように彼の手首を縛りつけている。

「なんだ……こいつは⁉」

鎖を引きちぎろうとして、豹頭の男は腕に力を込めた。しかし獣人の腕力をもってしても、銀色の鎖はほどけない。逆に鎖に引きずられ、男はその場から動けなくなる。

その直後、彼の背後から聞こえてきたのは、どこか笑いを含んだ舌足らずな声だった。

「――まがりなりにも神々の鍛えた〝戒めの鎖〟だ。貴様ごときの力ではちぎれんよ」

「なにっ!?」

思いがけないその声に、男は低く唸りながら振り返る。

声の主は若い女。ビルの屋上、給水塔の上に、女が一人で立っていた。幼女と見まがうばかりの小柄な女だ。馬鹿馬鹿しいほど豪華なドレスを身にまとい、真夜中だというのに日傘を差している。あどけなくも整った顔立ちは、愛くるしい人形を見ているようだ。あまりにも場違いなその姿に、男はわけもなく恐怖を覚える。

「今ドキ、暗号化処理もされてないアナログ無線式起爆装置か。安物だな。よくもまあ、これまで暴発しなかったものだ」

リモコン状の小さな機械を掌の上で転がしながら、女が嘲るように呟いた。

それを見て、男が表情を引き攣らせる。日傘の女が弄んでいるその機械は、彼が持っていたはずの爆弾の起爆装置だった。どんな手品を使ったのか、この女は、獣人である彼に気配すら感じさせずに近づき、起爆装置を奪ってみせたのだ。

「攻魔師か。どうやって俺に追いついた？」

豹頭の男が、金色の目を細めて女を睨んだ。女が、口元を覆ってくっくっと笑う。

「貴様こそ、この私から逃げ切れるつもりだったのか？　思い上がりも甚だしいな、野良猫が」

「……調子に乗るなよ、小娘！」

嘲るように笑う女の姿に、豹頭の男が声を荒らげた。腰のベルトからナイフを引き抜いて、

彼はそれを自分自身の右腕へと叩きつける。鎖につながれた手首を斬り落とし、身体の自由を取り戻そうとしたのだ。日傘の女が、ほう、と感心したように息を吐く。

「ふん、野良猫にしては見上げた根性だな。察するにクリストフ・ガルドシュの部下といったところか。黒死皇派の死に損ないが、わざわざ海を渡ってご苦労なことだ」

「……殺す！」

右腕から鮮血を撒き散らしながら、男が吼えた。

高い治癒能力を持つ獣人といえども、斬り落とした腕を完全に回復させるのは容易ではない。だが、それだけの犠牲を払ってでも、この得体の知れない女は、ここで倒しておく必要があった。彼らの計画を成功させるためにも、少佐　クリストフ・ガルドシュの名前を知る人間を放置しておくわけにはいかないのだ。

自分自身の手首を引きちぎり、獣人特有の爆発的な加速で、男は日傘の女へと突進する。

もはやナイフに頼るまでもなかった。獣人の筋力は、魔族の中でも突出している。非力な人間の女など、素手でもずたずたに引き裂くことができるのだ。

しかしそれを知りながら、日傘の女は優雅に笑ってみせた。

「無理だよ。貴様にはな――」

鉤爪を伸ばした男の指先が、彼女の細い肩に触れる。そう思われた瞬間、女の姿は、まるで水面に沈むように、美しい波紋を残して虚空へと溶けこんだ。

「なんだ……と!?」

驚愕の表情を浮かべて、豹頭の男が振り返る。

女は、優雅に日傘を掲げたまま、十数メートルも離れた隣のビルの屋上へと移動している。音もなく、気配もなく、髪の毛の一筋すら動かさないままに。すべては一瞬の出来事だ。

砂漠の蜃気楼を思わせる光景だが、その女の存在は決して幻などではない。

心臓の鼓動。息づかい。体温。匂い。常人の数百倍の精度を誇る獣人の感覚器官が、女の実在を伝えてくる。彼女は間違いなく実体を持った普通の人間だ。

「言っただろう、貴様には私は殺せないと……」

からかうように笑って、日傘の女は指を鳴らした。

男の周囲の空間に、大きな波紋が広がった。波紋のように見えたそれらが、高密度の魔法陣だと気づいたときには手遅れだった。虚空から出現した無数の銀鎖が、意思を持つ蛇のように男を襲って、その全身を搦め捕る。

「空間制御の魔術だと……!? 馬鹿な! そんな芸当ができるのは、練達者級の高位魔法使いだけだぞ! おまえのような小娘がなぜ……!?」

鎖に全身を拘束されて倒れた男が、愕然と声を震わせた。

しかし女は無言のまま、日傘をたたんで、つまらなそうに息を吐く。月光に照らし出された彼女の横顔を見上げて、豹頭の男は低くうめいた。

「そうか……おまえ、南宮那月か!?　なぜおまえがこんなところにいる!?　まだ魔族を殺し足りないのか、〝空隙の魔女〟め……！」

「やれやれ……野良猫がよく喋る」

日傘の女が、冷ややかに告げた。彼女が軽く手を振ると、ちぎれたはずの豹頭の男の手首が虚空から出現し、無理やり縫い合わせたように彼の腕へと接合された。

なんの真似だ、と男が憎々しげに那月を睨め上げる。那月は無表情にそれを見返し、

「心配するな。親切で治してやったわけじゃない。出血を抑えるための間に合わせの処置だ。必要な情報を聞き出す前に、貴様に死なれては困るからな」

「……俺がおまえたちに、仲間の情報を喋るとでも思っているのか？」

「あのクリストフ・ガルドシュが、貴様ごときに本当の計画を伝えているとも思わないがな」

「どういう意味だ……？」

動揺する男になにも答えず、那月は彼に背を向けた。

「〝戦王領域〟のテロリストどもが、こんな極東の〝魔族特区〟でなにをする気だったのか、興味はあるが、尋問は特区警備隊の連中に任せるさ。私はこう見えて忙しい。明日の授業の支度があるからな」

「授業の支度……？」

ひどく場違いな那月の言葉に、豹頭の男が困惑する。

〝空隙の魔女〟の異名で欧州の魔族を震え上がらせた彼女の本業が、高校の英語教師だとは、さすがに想像もできなかったのだろう。

ゆらり、と空間に波紋を残して、那月の姿がかき消えた。そのあとには、鎖でがんじがらめに縛り上げられた獣人が、一人取り残されて倒れている。

糞、と悪態をつきながらも、男は低く笑い出す。

そう、なにも変わってはいないのだ。ここで自分が捕らえられても、状況はなにひとつ変わらない。すでに計画は動き出している。たとえ〝空隙の魔女〟の力をもってしても、この街の未来が変わることはない。いずれにせよ、この都市は、滅びる運命なのだから。

銀鎖に縛られた豹頭の男は、暗く笑い続けている。

なにも知らずに眠る街を、真夏の月が、今夜も静かに照らしている。

十

夜明け前――

東京の南方海上二百二十キロ付近を、一隻の船が悠然と航行っていた。

船名は〝オシアナス・グレイヴ〟、全長約四百フィート。俗にメガヨットなどと呼ばれる、外洋クルーズ船である。軍用駆逐艦に匹敵する大型の船体を、豪華客船すら足元にも及ばない

ほど壮麗に飾り立てた美しい船だ。その姿は、まさに洋上の宮殿とでも呼ぶべき威容である。だが、〝オシアナス・グレイヴ〟は、あくまでも個人の所有物だった。たった一人の船主のために造られた、恐ろしく贅沢な城なのだ。

およそ非現実的な事実だが、船主の名前を聞けば、誰もが納得するに違いない。〝オシアナス・グレイヴ〟の所有者はアルデアル公ディミトリエ・ヴァトラー　〝戦王領域〟の貴族なのだから。

その船主は、愛船の屋上デッキで月光浴を楽しんでいた。豪華なサマーベッドに横たわり、のんびりとカシス酒のグラスを傾けている。

金髪碧眼の美しい男だ。外見の年齢は、二十代の半ばといったところだろうか。

しかし彼の肩書きは、貴族。それはすなわち、彼が〝旧き世代〟と呼ばれる破格の力を持った吸血鬼であることを示している。〝戦王領域〟にある広大な彼の領土には、西欧諸国の軍隊にも匹敵する強大な戦力が常備され、彼自身もまた、大都市を瞬く間に壊滅させるほどの巨大な権能を持った怪物だ。

そんな青年貴族の傍らへと、ほっそりとした人影が近づいていく。

年若い日本人の少女である。すらりとした長身に、華やかさと優美さを感じさせる顔立ち。肌は白く、髪の色素も薄い。そのせいか咲き誇る桜を連想させる美しい少女だった。

ポニーテールの長い髪が、海風に吹かれて音もなく舞っている。

彼女が身に着けているのは、関西地区にある名門女子校の制服だ。
そして彼女の右手には、キーボード用の黒い楽器ケースが握られている。
「こちらでしたか、閣下」
長い髪の少女は、立ち止まって恭しく礼をした。
折しも彼らを乗せた船の前に、目的地が見えてきたところだった。洋上にぽつりと浮かぶ、絶海の孤島。超大型浮体式構造物によって構築された人工島――龍脈を制御するという目的のために造られ、今は魔族の生態や能力についての研究を行う学究都市。総神島〝魔族特区〟である。
「クズ鉄と魔術で生み出された紛い物の大地か。ずいぶんとまあ大仕掛けなガラクタを造ったものだね。これだから人間は面白い」
けなしているとも褒めているともつかない態度で、青年が独り言のように呟いた。
そんな彼の言葉を冷ややかな微笑で受け流し、少女は一通の書状を差し出した。
「日本政府からの回答書をお持ちいたしました」
「……ん？」
初めて少女の存在に気づいた、とでもいうふうに、貴族の青年がゆっくりと振り返る。人懐こく微笑む彼の表情に、強大な力を秘めた吸血鬼特有の威圧感はない。
どこか皮肉っぽい彼の視線を正面から受け止め、少女は淡々と言葉を続ける。

「本日午前零時をもって、閣下の絃神島〝魔族特区〟への訪問を承認。以後は閣下を聖域条約に基づく〝戦王領域〟からの外交特使として扱う――とのことです」

「それは結構。まあ妥当な結論だね。来るなといわれても勝手に上がりこむつもりだったけど、いくらか手間が省けたかな」

サマーベッドに寝転んだまま、ディミトリエ・ヴァトラーは無邪気に笑う。

しかし少女は、彼を戒めるように表情を硬くして、

「ただし条件がひとつ」

「へえ。なんだい？」

「日本政府が派遣した監視者の帯同を受け入れて、その勧告に従っていただきたいのです」

「お目付役というわけか」

なるほど、とヴァトラーは面白そうにうなずいてみせた。

「で、その監視者ってのは誰なのかな？」

「僭越ながら、私がその役目を果たさせていただきます」

静かな口調とは裏腹の挑発的な表情で、少女が答える。

監視者を名乗る以上、彼女の任務は、ただの案内役ではない。ヴァトラーの存在が日本政府の脅威と見なされた場合には、最悪、彼を抹殺する、と彼女は宣言しているのだ。それは彼女が〝旧き世代〟の吸血鬼を滅ぼすほどの力を持っている、ということでもある。

そんな少女を、不思議そうに見返してヴァトラーは訊いた。
「ああ、そう。そういえば、キミって誰だっけ？」
見事な無関心さを滲ませた青年貴族の言葉に、少女は薄く溜息を洩らす。
「煌坂紗矢華と申します。獅子王機関より、舞威媛の肩書きを名乗ることを許された者です」
「獅子王機関か。どこかで聞き覚えのある名前だなァ」
緊張感のない声でヴァトラーが呟いた。少女は苛々と呆れたように首を振り、
「魔導テロ対策を担当する日本政府の特務機関です」
「……魔導テロ？」
「このたびの閣下の絃神市訪問は、機関の監視対象となりますので、私たちが随伴を担当させていただきます。どうかご承知を」
「ふうん。まァ、なんでもいいよ」
青年貴族はあっさりと受諾した。そして彼は笑顔で目を眇め、
「それにしてもお目付役がキミみたいな可愛い女の子とはね。日本政府もなかなか粋な計らいをしてくれるじゃァないか」
可愛い男の子だったらもっとよかったんだけどサ、と独りごちるヴァトラーへと、紗矢華はさすがに不愉快そうな視線を向けた。
「お言葉ですが、閣下。これでも私は、六式重装降魔弓の所有を許された攻魔師です。私の判

断で、閣下を討ち滅ぼす権利が与えられていることをお忘れなきよう」

恫喝のような紗矢華の言葉に機嫌を損ねるかと思いきや、意外にもヴァトラーは愉快そうに声を上げて笑い出した。

「ははは、いいね。キミ、なかなか面白い。気に入ったよ。そうそう、ボクのことは、ディマでもヴァトラーでも、好きに呼んでくれたまえ。閣下なんて堅苦しいのはやめにしてサ」

「……承知しました、アルデアル公」

紗矢華は他人行儀な態度を崩さない。ヴァトラーは拗ねたようにかぶりを振ると、上体を起こして紗矢華を見た。彼の両眼が、うっすらと紅く陽炎のように揺らめく。

「それで、ボクのもうひとつのお願いごとのほうはどうなってるのかなァ」

「お願いごと……ですか」

ヴァトラーの放つ冷ややかな気配に、紗矢華が表情を硬くする。

「今さらとぼけるのはなしにしてくれないかな。キミたちはとっくに彼を見つけ出して、今も監視中なんだろ。あの世界最強の吸血鬼のことをさ」

「第四真祖のことを仰っているのでしたら、あえて否定はしない、と申し上げておきましょう」

平然と告げる紗矢華の態度に、ヴァトラーはかすかに歯を剝いて笑った。

「ぜひ紹介してもらいたいね。キミたちが彼を匿いたい気持ちはわかるけどサ」

青年貴族は人懐こい笑顔のままだが、今や彼の全身からは、物理的な圧力にも似た凄まじい

呪力が放たれている。猛り狂う感情が、そのまま形になったかのような光景だ。攻魔師ならぬ普通の人間であれば、この場にいるだけで意識を失いかねないほどの強烈な邪気。

しかし紗矢華は、無表情のまま静かに首を振った。

「いえ。彼を庇う理由はありません」

そう言って彼女は、一枚の写真を取り出した。制服を着た男子高校生の写真である。どこにでもいそうな平凡な少年。暁古城。それが彼の名前だった。

水平線がかすかに白く輝き始めていた。間もなく夜が明けようとしているのだ。

「第四真祖・暁古城は私たちの敵ですから」

そう呟いた紗矢華の手の中で、少年の写真がぐしゃりと潰れた。

青年貴族と少女を乗せた船は、ゆっくりと絃神島に近づいていく。

第1章 覇王の誕生
From The Warlord's Empire

1

九月半ばの水曜日。午前六時二十五分——

その朝、暁占城はめずらしく一人で目を覚ました。

それは極めて異例の出来事だといえた。あまりおおっぴらにできない事実だが、暁占城は吸血鬼であり、吸血鬼とは古来、太陽に弱いものだと相場が決まっている。第四真祖などというふざけた肩書きで呼ばれていてもそれは同じだ。特に朝の陽射しはヤバい。焼けただれて灰になるようなことはないのだが、倦怠感や脱力感、眠気に疲労、食欲不振などの諸々の症状に悩まされることになる。厄介なのはそれらの症状が、夜更かしして寝不足な普通の人間とまったく見分けがつかない、ということである。そんなわけで占城は世間的には、ただ朝に弱い駄目な高校生だと認識されているのだった。

そして大変残念なことに、そんなふうに思っているのは、占城の妹であるところの暁凪沙も例外ではなかった。毎朝、世話焼きの妹に長々と説教されながら無理やり叩き起こされるのが、いつの間にか占城の日課になってしまったのはそのせいだ。

しかし今朝に限っては、凪沙が占城の部屋に入ってくる気配はなかった。

代わりに彼女の楽しげな話し声が、壁越しに途切れ途切れに洩れ聞こえてくる。こんな早朝

から訪ねてくる客がいるとも思えない。誰かと電話でもしているのだろうか、と訝しみながら占城は自分の部屋を出た。寝ぼけたままの足取りで洗面所に向かい、寝癖のついた髪を直す。顔を洗ってリビングに戻ってきた占城は、テーブルの上に用意されていた朝食に気づいた。凪沙手製のベーグルサンドとイタリアンサラダが二人ぶん。いつもより少し手の込んだメニューだ。それを見て占城は納得する。どうやら久しぶりに母親が帰ってきているらしい。

両親が四年前に離婚したせいで、暁家は現在、二人家族だ。しかし占城たちの母、暁深森は、絃神市内の企業で研究主任などという偉そうな役職についており、自宅に帰ってこない日が多い。一週間や十日くらい家を空けるのはしょっちゅうで、そのくせ深夜や早朝に予告もなしに帰ってきたりする。ほとんど野良猫のような生活を送っているアウトローな女なのだった。

だから、知らない間に帰宅した母親が凪沙の部屋にいるのだと、なんの根拠もなく占城が信じてしまったとしても、ある意味、仕方がないことだ。そう、不可抗力だったのだ。

「凪沙。悪ィ、先に朝メシ喰わせてくれ。コーヒー飲むなら、おまえのぶんも淹れるけ……」

あくび混じりの声でそう言いながら、占城は妹の部屋のドアを開けた。

それまで絶え間なく続いていた凪沙の話し声が、唐突に途切れた。びっくりしたように目を見開いて、彼女は占城を呆然と見上げる。

まだ少し幼さを残してはいるが、普通に可愛らしい顔立ちの中学生だった。長い髪を結い上げて、ショートカット風に見えるようにピンで止めている。膝の上に抱いているのは、チアリ

ーダーのユニフォームだ。凪沙は中等部のチアリーディング部員なのである

そして古城が予想していたとおり、部屋には凪沙以外にもう一人いた。

ただし予想と違っていたのは、その人物が古城たちの母親よりも、ずっと年若い少女だったこと。そして古城に背を向けて立っている彼女が、下着以外なにも身につけていないということだった。

「ど……」

まったく想定外のその光景に、古城は混乱して立ち尽くす。起き抜けのせいか頭が回らない。なにがどうなっているのかさっぱりわからない。

無防備な下着姿で立っていた少女が、ぎこちない仕草で振り返る。

思わず息を呑むような、清冽な美貌の少女だった。細身で華奢だが、儚げな印象はない。幼さを残しながらも均整の取れた体つきと、すらりと伸びた背筋。美しい猛獣を見ているような、しなやかな強靭さを感じさせる少女である。

黒目がちの大きな瞳が、硬直したままの古城を正面から見つめる。

古城はそんな彼女の姿に目を奪われたまま、

「……どうして姫柊が……ここに？」

かすれた声で疑問を口にした。

姫柊雪菜。それが彼女の名前だった。古城よりも一歳年下の中等部三年生。半月ばかり前に

彩海学園に転校してきた、凪沙のクラスメイトである。

そして彼女はもうひとつ、獅子王機関の剣巫という奇妙な肩書きを持っていた。

彼女はその機関とやらが派遣してきた第四真祖・暁古城の監視者だ。常に古城につきまとい、危険な存在だと判断した場合には抹殺する　それが彼女の任務なのだ。

しかしそれはそれとして、彼女の見た目が可憐な少女である事実に変わりはない。

「せ、先輩……!?」

ようやく状況を把握したのか、雪菜が古城に向かって呟いた。おう、と古城は、条件反射的に間の抜けた挨拶を返す。それでも古城は彼女を凝視したまま動けない。

肌もあらわな雪菜の姿に見とれている、というのはもちろんある。

ガラス細工のような白い肌。芸術品のような細い鎖骨。肉付きは薄いが、そのくせ不思議と柔らかそうな曲線を描き出す胸元。それらに目を惹かれるな、というのは無理がある。

だが、古城が彼女から視線を外せない理由はそれだけではない。世界最強の吸血鬼であるところの第四真祖の本能が、危険を訴えているからだ。

瞬でも目を逸らしたら、たちまち襲いかかってくる肉食獣と正面から対峙している気分、とでも言えばいいのか。あるいは武道の達人同士が、互いの隙をうかがって身動きできない状態と言うべきか。身じろぎもせずに見つめ合う古城と雪菜の沈黙は、そんな際どいバランスの上に成立している。ほんの些細なきっかけで、その均衡は呆気なく崩れてしまうだろう。

そしてそのきっかけを作ったのは、ベッドの縁に座る凪沙だった。

「こ、古城君!?　なにやってんの――！」

甲高い悲鳴を上げて凪沙が立ち上がる。その声に古城と雪菜の金縛りが解ける。

わ、わ、とうろたえながら古城が後ずさるのと、両腕で胸を隠した雪菜が音もなく旋回したのはほぼ同時だった。雪菜の髪がふわりと舞い、白いうなじと剝き出しの背中、そして彼女が身につけた面積の小さな布きれが古城の視界を横切った。その直後、ハイソックスに覆われた雪菜の踵が、古城の顔面に突き刺さる――

後ろ回し蹴りを喰らったのだと気づいたときには、古城の身体は綺麗に一回転しながらリビングの端まで吹き飛ばされていた。普通の人間なら、頭蓋骨の半分くらいが持って行かれてもおかしくないくらいの衝撃だ。

少し遅れて、きゃあああ、という雪菜の悲鳴が聞こえてくる。悲鳴より先に回し蹴りが出るのか、と突っ込んでやりたいところだが、もちろん今の古城にそんな余力はない。仰向けに倒れて起き上がることもできないまま、古城は右手で顔面を押さえた。派手に噴き出した鼻血を拭って、溜息混じりに弱々しく呟く。

「……勘弁してくれ」

暁古城の長い一日は、そんなふうにして始まった。

2

「あの、先輩……鼻血……本当にもう大丈夫ですか？」

通学に使うモノレールの車内で、制服姿の雪菜が古城を見上げて訊いてくる。

彼女が肩に背負っているのは、ベースギター用の黒いギグケース。

その中身は実は楽器ではなく、獅子王機関の秘奥兵器　吸血鬼の真祖を抹殺するために用意されたという、恐ろしく強力な霊槍なのだという。

〝第四真祖〟暁古城の監視役である雪菜は、その物騒な小道具を常に肌身離さず持ち歩いており、そんな彼女の姿を見るたびに、どんよりした気分になってしまう古城だった。

「まあ、なんとか。俺のほうこそ悪かったな。のぞくつもりはなかったんだけど」

いまだにむず痒さの残る鼻を押さえて、古城は謝罪する

雪菜に蹴り折られた鼻骨は吸血鬼の回復力でどうにか治ったか、鼻血が止まるまではしばらくかかった　もっとも、そのおかげで吸血衝動に襲われずに済んだのだから、それについては感謝するべきなのかもしれない。

「いえ……そのことは、もう怒ってませんから」

わたしも手加減せずに蹴ってしまいましたし、と溜息混じりの声で雪菜が言った、羞恥と

諦めが入り混じったような口調だが、たしかに怒りの気配はもうなかった。古城は安堵の表情を浮かべ、

「そ、そうなのか」

「ええ、まあ……先輩がいやらしいのは最初からわかってたことですし、警戒を怠ったわたしの責任です」

「え？」

「事故を装って先輩があのような行動に出る可能性は、失念するべきではありませんでした」

「なんで俺がのぞきをするのが当然みたいな扱いになってんだよ!?　あれは本当に事故だったろ。いや、反省はしてるけど！」

慌てて反論する古城を眺めて、クス、と雪菜が小さく笑った。どうやら本当に許してくれる気になったらしい。ぜひ猛省してください、と澄まし顔で雪菜に諭されて、古城は唇を歪めながらもホッと胸を撫で下ろす。が、

「駄目だよ、雪菜ちゃん。この変態君をそんな簡単に許したりしたら！」

そんな和解ムードをぶち壊してくれたのは、雪菜を庇うように割りこんできた凪沙だった。

雪菜と同じ制服を着た彼女は、怒りもあらわな目つきで古城を見上げている。

モノレールの窓の外に広がっているのは、遮るもののない青空と群青の海。朝の陽射しが容赦なく照りつける暑苦しい車内に、声量を抑えつつも剌々しい凪沙の声が響く。

「もう信じられない。ホントあり得ない。だいたいあれのどこが事故なのよ、ノックもしないで女の子の部屋に入って来るなんて。古城君ってば最低。昨日、寝る前に言っておいたでしょ。明日の朝、雪菜ちゃんがうちに来るからって」

「あー……そういや、なんかそんなことを言われたような気もする……」

曖昧な記憶を辿りながら古城は顔をしかめた。

「けど、姫柊がうちで着替えるなんて話は聞いてなかったぞ。朝っぱらからおまえらなにやってたんだよ」

「だーかーらー、そういう変な想像するのやめてよね。球技大会で使う衣装の採寸と仮縫いをやってたんだってば」

昨日からそう言ってたでしょ、と鼻息も荒々しく凪沙が言う。が、そう言われても古城には今イチ事情がよくわからない。

「……球技大会の衣装ってなんだ？　普通に体操服かジャージだろ？」

「違うよ。試合じゃなくて応援のときに着るチアの衣装だよ。クラスの応援にチア部のユニフォームを使うわけにはいかないでしょ。だから新しく作ることになったの。細かい作業は家庭科部の子がやってくれるし、材料費は男子が出してくれるんだって」

凪沙が聞きもしないことまでぺらぺらと説明してくれる。異様なまでの口数の多さは凪沙の数少ない欠点のひとつだが、こんなときには話が早くてありがたい。

「チアのユニフォーム……って、姫柊が着るのか？」

古城は怪訝そうに眉を寄せ、なぜか暗い顔をしている雪菜に訊いた。

球技大会はいちおう正式な学校行事だが、女子が仮装して応援しなければならない、などという決まり事は特にない。現役チア部員の凪沙が応援係に駆り出されるのはわかるが、雪菜が自発的にそんなイベントに参加するというのは、少し意外な感じがした。

そして雪菜は、端整な顔立ちに気鬱そうな表情を浮かべ、

「そんなつもりはなかったんですけど、どうしても断り切れなくて……」

重苦しげに深々と息を吐く。そうそう、と対照的に明るい声で凪沙が笑い、

「クラスの男子全員が、土下座して雪菜ちゃんに頼んだの。姫がチアの衣装で応援してくれるなら家臣一同なんでもする、死に物狂いで優勝目指して頑張るって」

「男子全員、土下座？」

古城は、凪沙の説明に唖然とした。雪菜はますます困ったような顔で目を伏せる。姫というのは雪菜のあだ名か。上手いことを言う、と古城は少し感心する。どうやら古城が知らないところで、雪菜はクラスのお姫様的な立ち位置に祭り上げられていたらしい　土下座するヤロウどもの群れを前にして、困り果てている雪菜の姿が目に見えるようだった。

「普通ならそんなのドン引きなんだけど、なにしろほら、相手が雪菜ちゃんだし、男子がそう言いたくなる気持ちもわかるから、女子も協力しようって話になったんだ」

なぜか偉そうに胸を張る凪沙。古城はようやく大体の事情を呑み込んで、
「それでおまえも一緒になってチアをやるのか」
「へっへー、いいでしょ。あ、もしかして古城君も応援して欲しかった？」
「いやそれはべつにどうでもいい」
古城は無頓着に答えて首を振る。くるくるとよく動く凪沙の表情が、たちまち目に見えて不機嫌なものへと変化して、
「えー、どうして!?　嬉しくないの!?」
「たかが学校の球技大会で、そんな気合い入れた恰好で妹に応援されたら恥ずかしいっての」
古城は素っ気ない口調で言い放った。実の妹にチアガールをやらせて喜ぶ趣味はない、という程度の意見だったのだが、それを横で聞いていた雪菜は、違う意味に受け取ったらしい。
「は、恥ずかしい……恰好……」
ショックを受けたように呟いて、憂鬱そうにうつむく雪菜。生真面目な彼女にとって、チアガールの衣装を着るのはやはりハードルが高いものなのだろう。
いや、違う。姫柊に応援されるのが恥ずかしいとか、そういう意味じゃないからな」
「は？　なにそれ？　雪菜ちゃんはよくて、あたしに応援されるのは恥ずかしいわけ!?」
「そうじゃねーよ。学校の球技大会なんて遊びみたいなもんだから、わざわざ俺の試合なんか見に来なくていいって言ってんだよ」

古城は面倒臭げに手を振りながら言い訳する。風沙はそんな古城の顔を、唇を尖らせたままじばらく見上げていた。そして不意に表情を硬くして、どこか不安そうな口調で訊いてくる。

「……古城君、もしかしてまだ気にしてる？　その……去年の大会のこと」

「大会？」

一瞬、なにを言われているのか本気でわからず、古城は妹の瞳をまじまじと見返した。めずらしく言い淀んでいる彼女の様子に気づいて、ようやく質問の意図を理解する。

中学時代、バスケ部員だった古城には、勝利にこだわりすぎてチームの中で孤立したという苦い記憶がある。それなりに落ちこみもしたし、古城がバスケをやめたのもそれがきっかけだ。自分の応援に来るなと言う古城を見て、凪沙はそのことを思い出したのだろう。

しかし古城は笑いながら妹の額をポンポンと叩き、

「ああ、違う。それは全然関係ねーよ」

「本当に？」

「綺麗さっぱり無関係だ。それに俺はべつにバスケが嫌いになったわけじゃないからな」

そう言って古城は、照れ隠しのように肩をすくめた。

昔のことを気にしていない、というのは真実だ。高等部への進学を機に部活を辞める生徒は古城だけではないし、そこに特別な意味はない。当時のバスケ部員たちとも、今はそれなりに上手くやっているつもりだ。

とはいえ、今の古城にはもう、本気でスポーツに没頭することはできない。なにしろ古城は、世界最強の吸血鬼なのである。魔族特有の異常な身体能力を持つ〝真祖〟が、普通の高校生に混じってインターハイ出場を目指すわけにはいかないのだ。

しかし、そのあたりの事情を知らない凪沙は、古城の言葉を聞いて嬉しそうに笑う。

「そうなんだ。じゃあ今度の球技大会で、古城君の試合がまた見られたりするのかな」

「希望どおりの種目に出られるとは限らないけどな」

かすかな良心の疼きを感じながら、古城は投げやりに言った。

球技大会における高等部男子の種目は、バスケットボールと卓球、バドミントンの三種目。古城がどの競技に出るのかは、まだ決まっていない。

もっとも、経験者は優先的にその競技に割り当てられるだろうし、古城がバスケに出場させられる可能性は高かった。それならそれでもいいか、と古城は思う。

かつて真剣に取り組んでいた競技を本気で楽しめないのは寂しいことだが、心配してくれた妹へのサービスだと思えば、適当に手を抜きながらのプレイもそう悪くない。

「仕方ないなあ。まあ、そういうことならやっぱり応援してあげるよ。ね、雪菜ちゃん」

なぜか機嫌よくうなずきながら、凪沙が雪菜に同意を求める。

雪菜が一瞬、面喰らったように目を瞬いた。まさか自分までもが古城の応援をさせられることになるとは思っていなかったのだろう。

ただでさえチアガールの衣装で悩んでいる雪菜には、まったく迷惑な勧誘のはずだ。そもそも雪菜は第四真祖の監視役として彩海学園に派遣されてきたのであって、球技大会で古城を応援するのは、彼女の本来の任務ではない。

しかし眩しい笑顔を向けてくる凪沙に向かって、さすがに嫌とは言えなかったらしい。

「そうですね……私も応援します」

雪菜はついに諦めたように、溜息を零しながら古城に告げた。弱々しく微笑む彼女を見て、古城も苦笑。モノレールが目的の駅に到着したのは、その直後だった。

二人は、いつもと同じように車両を降りて、いつもと同じように改札へと向かう。いつもと同じありふれた朝の風景――

モノレールの車窓から見える絃神港に、見慣れない豪華船が一隻停泊していたことに、古城たちはまだ気づいていない。

3

校門をくぐったところで、古城は雪菜たちと別れた。雪菜と凪沙は少し離れた中等部の校舎へと向かい、古城は正面にある高等部の建物を目指す。

絃神島は太平洋のド真ん中に浮かぶ常夏の島だ。九月も半ばを過ぎたというのに秋の気配は

微塵もなく、真夏の陽射しが容赦なく朝の校庭に降りそそぐ。

紫外線から逃げ惑う粘膜になった気分で古城が昇降口に駆けこむと、ちょうどそこには先客がいた。古城のクラスの靴箱の前で、女子生徒が靴を履き替えている。

華やかな髪型に、垢抜けた化粧。センスよく制服を着崩した、目立つ容姿の同級生だった。

「おはよ、古城。めずらしいわね、あんたが遅刻しないで来るなんて」

男友達のような気安い口調で、彼女が声をかけてくる。端整な口元に浮かぶニヤニヤ笑いが、人懐こくて妙に印象的だ。揃えて置かれた彼女のローファーの隣には、大きなスポーツバッグが投げ出されている。

「浅葱？　なんだ、その荷物？」

古城は、自分のぶんの上履きを取り出しながら何気なく訊いた。

藍羽浅葱は、そんな古城を見上げてニヤリと笑い、

「ちょうどいいところに来てもらっちゃって、悪いわね。意外に重くて面倒だったのよ」

「運んでやるなんてひと言も言ってねえぞ」

「やー、ホント助かるわ。ロッカーの前に置いといてくれたらいいからさ」

ささやかな古城の反論を無視して、浅葱が一方的に指示を出す。古城は、それ以上の抵抗を諦めて、渋々とバッグを持ち上げた。閉まりきらないファスナーの隙間から見えたのは、使い古しのラケットが数本と白い羽根　バドミントン用のシャトルコックだ。

「バドミントンのラケットか？　なんでこんなに？」
「球技大会の練習に使うやつ。うちの姉ちゃんに頼んで借りて来たのさ。学校の備品だけじゃ数が足りないっしょ」
へえ、と古城は感心したように呟いた。
「おまえってたまに気が利くよな」
「たまに、は余計だっての。あたしのあだ名は『気配りのできる美人女子高生・浅葱さん』よ」
「気配りのできる美人女子高生は、自分でそんなこと言わねえから」
「うっさいなー。まあ、ホントのとこは、お偸に昨日頼まれただけなんだけどさ」
教室に向かう階段を上りながら、浅葱が悪びれない態度で告白する。
「んで、古城はなんに出ることにしたわけ？」
「さあなー……築島には、なるべく楽な種目にしてくれって頼んでおいたけど」
古城はやる気のない口調でそう答えた。球技大会の出場種目は、学級委員の築島倫がクラス全員の希望を聞いたあと、独断で割り振ることになっている。割り当てられた種目に文句があれば、自分で勝手に交渉して、ほかの誰かに替わってもらえ、という合理的なスタンスだ。
やれやれ、となぜか落胆したように浅葱が息を吐く。
「いい加減ねえ。あんたみたいな元体育会系の熱血ウザ野郎には、球技大会のときくらいしか存在価値がないんだから、もっと張り切りなさいよ、ウザ古城」

「誰がウザ古城だ。おまえ、もっと言葉を選べよ。てか、全国の元運動部員に謝れよ――」

いつもと同じように軽口を叩き合いながら階段を上りきり、古城と浅葱は教室へと入る。

ざわっ、と空気がどよめいたのは、その直後のことだった。

教室内にいたのは、クラス全体の七割ほど。その全員が、一斉に振り返って古城たちを見る。

「な、なんだ？」

「あたしに訊かないでよ。あんたと一緒に今来たばかりなんだから」

クラスメイトたちの視線に晒されて、古城と浅葱は軽くうろたえた。

教室の中に漂っているのは、納得と信頼が入り混じったような奇妙な一体感。冷やかされているという感じではない。むしろ変に期待されているような感覚がある。

謎めいた彼らの反応に、古城たちが困惑しながら立ち尽くしていると、

「よお、古城。相方と一緒に道具持って登場とは、さすがに気合い入ってるな」

教卓の近くにいた一人の生徒が、やけに調子よく声をかけてきた。短髪をツンツンに逆立てた軽薄そうな雰囲気の男子、矢瀬基樹だ。古城にとっては中学時代からの悪友であり、浅葱の幼なじみでもある。

そんな気心の知れた友人を、古城と浅葱は不機嫌そうに睨んで、

「相方？」

「……なに言ってんの、あんた？　年上の彼女に振られて錯乱した？」

「錯乱してねえし、振られてもねえよ、縁起でもねえ！　あれだ、あれ！」

上擦った声でそう言って、矢瀬は背後の黒板のほうを指さした。

そこに立っていたのは築島倫だった。長身で大人びた雰囲気の女子生徒だ。黒板には、いかにも彼女らしい几帳面な文字で、クラスメイトたちの名前が全員ぶん書かれている。

「球技大会の参加種目、ちょうど今、発表したところなの」

「ああ……」

古城と浅葱は、気の抜けたような声を出し、互いに顔を見合わせた。なぜそれで自分たちが注目されるのかさっぱりわからない。どうにも腑に落ちない気分のまま、古城は黒板に書き記された白いチョークの軌跡を眺め、

「バドミントンの男女混合ダブルス？　俺と浅葱のペアで？」

意外な場所にある自分たちの名前に気づいて、古城は軽く唖然とする。

もちろん古城にはバドミントンの経験はないし、出場を希望した覚えもない。男女混合ダブルスなんて種目があること自体、今初めて知ったのだ。おまけに古城たち以外の選手ペアは、クラス公認のカップルばかりだった。

「……なんであたしが古城と組まなきゃならないのよ？」

警戒したような表情で浅葱が訊く。しかし倫は平然と微笑んで、

「今年からそういう規定になったの。シングルスが廃止で、代わりに男女混合ダブルスの選手

ペアを増やすように。あ、現役のバド部の子は出場禁止ね」
「だから、なんであたしと古城のペア!?」
「浅葱、前から好きだって言ってたじゃない」
「は、はい!? あ、あ、あたしがいつそんなこと……!?」
「バドミントンの話よ」
いつもの冷静な声で倫が言う。浅葱は、うぐ、と言葉を詰まらせて、
「……たまに姉貴の練習につき合わされてただけで、べつに上手くもなんともないわよ」
「ルールがわかってれば十分だから」
落ち着いた口調でそう言って、倫は浅葱を沈黙させた。
「暁くんも希望の種目はないって言ってたし、文句ないよね。本当はバスケに出てもらおうと思ってたんだけど、ごめん。知らなかったから」
「なんの話だ？」
気まずそうに目を伏せる倫を見て、古城は怪訝顔で訊き返した。倫は、なぜか憐れむように古城を見つめて首を振り、
「無理しないで。矢瀬くんから聞かせてもらったわ。中学時代の暁くんのこと」
「え？」
女子バスケ部員を相手に変態的なストーキング行為を繰り返したせいで、バスケットコート

への立ち入り禁止命令を出されてるんでしょう？」

「は!?」

あまりにもぶっ飛んだ倫の発言に、古城はしばらく思考停止する。たしかに中学時代の古城はバスケに嫌な思い出があるが、それはそんな犯罪風味な記憶ではないはずだ。

「なんだそれ!?　ストーキングってなんの話だ？」

「でも大丈夫よ。心配しないで。たとえ暁くんが女子のバスケットシューズやビブスの匂いを嗅ぐことに執念を燃やす変態だとしても、うちのクラスでは爪弾きにしたりしないから」

「だからっ……信じるよ、そんなヨタ話！　どう考えても捏造だろうが！」

古城がたまらず絶叫するが、無言のクラスメイトたちから返ってきたのは、同情混じりの生暖かい視線だけだった。なるほどね、と浅葱が半眼になって大きく溜息をつく。

「だいたいの事情はわかったわ、全部あんたの策略なわけね、基樹」

「ナイスアシストだろ？」

幼なじみの少女に睨まれながら、矢瀬はなぜか得意げに親指を立ててみせた。古城が浅葱とペアを組まされることになった元凶は、どうやらこの男だったらしい。なんのつもりなのかは知らないが、どうせロクでもないことを企んでいるのだろう。

「あんたはまたそういう余計な真似を……！　で、お倫もグルなわけね」

浅葱が拗ねたような表情で、澄まし顔の学級委員を問い詰める。

倫はどこか悪戯っぽく微笑みながら、普段と同じようにクールに告げた。
「コートの使用申請はしておいたから。今日の放課後から自主練習、よろしくね」

4

「浅葱？　まだ教室に残ってたのか？」
その日の授業が終わって迎えた放課後――
ちょっと目を離した隙に視界から消えていた暁古城に、いきなり死角から名前を呼ばれて、藍羽浅葱は硬直した。危うく洩れかけた悲鳴を呑みこみ、平静を装って振り返る。
そんな浅葱の苦労も知らず、古城はいつもどおりの気怠そうな顔で立っていた。
ダブルスのペアに選ばれたことも、たかが球技大会のチーム分けだろ、という感じでまったく特別な意識がないらしい。
緊張感と無縁のその表情に、思わず殺意が芽生えそうになるが、浅葱は奥歯を鳴らしただけでどうにか自制する。さすがに逆恨みだということくらい、いちおう自覚しているのだ。
露骨に不機嫌な浅葱の態度に、古城は一瞬、怯んだように眉をひそめたが、
「球技大会の練習するんなら、適当にやって早いところ終わらせようぜ」
「あー……う、うん。着替えてくるから、先に体育館に行ってて」

引き攣った笑顔で浅葱がそう言うと、古城は素直にうなずいた。
「んじゃあ、あとでな。ラケット借りてくぞ」
「あー、はいはい」
手を振って立ち去る古城を見送り、浅葱は長い溜息をつく。
すると横合いから唐突に声がした。
「ふーん」
大人びた冷静な声の主は築島倫だった。長身を青い体操服に包んだ倫は、立ち去る古城と、座ったままの浅葱を、どこか愉しげな表情で見比べている。
「なによ？」
「暁くん、あっさり行っちゃったね、球技大会の練習なんて面倒なこと、嫌がるかと思ってた」
「なんだかんだで勝負ごととか好きなのよ。ホント、ガキなんだから」
浅葱は大げさに肩をすくめて言った。しかし倫は、真面目な顔で小さく首を傾げ、
「そうかな。暁くんが乗り気なのは、浅葱と一緒だから、だったりして」
「あのねえ」
浅葱が拗ねたように唇を曲げて倫を睨む。
「まったく、あんたといい基樹のバカといい、あたしと古城で遊ぶのやめてくれない？　球技大会なんかにかこつけて余計なことばっかり……」

「迷惑だったかな？」

笑いを含んだ声で倫が訊いた。浅葱は不機嫌そうに嘆息し、

「大迷惑よ。そもそもなんなのよ、この服は」

そう言って膝の上に抱いたナイロン生地のバッグを指さしてみせる。バッグの中に詰めこまれているのは、球技大会の練習で使うスポーツタオルや運動着などの一式だ。

「なにって……ユニフォームでしょ。バドミントン用の。浅葱のために用意してきたんだけど、サイズ合わなかった？　まさか、いろいろ育ちすぎて着られなかったってことはないよね？」

倫が心配そうに訊き返す。着られたわよ、と浅葱は思わず正直に告白してしまい、

「だ、だからって、たかが学校行事で、なんでこんな気合い入れた俗好しなきゃなんないのさ」

ヒラヒラの短いスコートに、丈の短いノースリーブのポロシャツ――異様に肌の露出の多いそのユニフォームに、浅葱は本気で難色を示す。公式の大会に出場る選手ならともかく、球技大会ごときの練習でこれを着るのはさすがに恥ずかしい。

にもかかわらず、倫は悪戯っぽく微笑んで、

「だって浅葱、脚が綺麗じゃない」

「……は、はい？」

普段あまり冗談を言わない友人の意外な言葉に、浅葱は反応できずに固まってしまう。けれど倫は冷静な口調のまま、

「……って、矢瀬くんが言ってたよ。例の中等部の転校生にも引けを取らないって」
「どうしてそこであの姫柊って子の話が出てくるわけ？」
浅葱が声を低くして訊いた。平静を装ったつもりだったが、不意を衝かれたせいで不機嫌な響きが混じってしまう。
中等部の転校生、姫柊雪菜。嫉妬する気も起きないくらいのデタラメな美少女で、おまけになぜか転校前から古城と妙に仲がいい。一部の生徒たちの間では、古城の彼女だと認識されているらしい。あまり認めたくない事実だが、浅葱が最近ペースを乱しているのは、間違いなく彼女の存在が原因だ。
「理由は、私よりも浅葱のほうがよくわかってると思うけど……」
倫は表情を動かさないまま、中等部の校舎の方角にちらりと視線をやって、
「可愛いよね、あの子。暁くんの妹さんのクラスメイトなんだっけ？」
「そ、そうみたいね」
動揺を隠しきれない浅葱を見つめて、倫が優しく微笑んだ
「ユニフォーム、せっかく用意したんだけど、無理にとは言わないわ。午前中の授業で使った汗臭い体操服で、暁くんと一緒に過ごしたいならそうすれば？」
「あ、汗臭くないわよ。ちゃんとデオドラント使ってるし……」
浅葱が弱々しい声で反論する。倫はなにも答えずに、ひらひらと手を振って歩き出した

「それじゃあ、私も卓球場に行くから。浅葱、頑張ってね」

卓球組の生徒たちを連れて彼女が出て行くと、教室の中には浅葱だけが残された。

机の上に広げたユニフォームを見下ろして、浅葱は苛々と息を吐く。

「もう……なんであたしがこんなことで悩まなきゃいけないのよ！　古城のバカ！」

5

どうにもよくわからない、というのが古城の素直な感想だった。もちろん浅葱のことである。

矢瀬と倫の謀略で無理やり古城とペアを組まされて、彼女が腹を立てるのは理解できる。が、実際のところ、浅葱は真剣に怒っているという感じでもないのだった。

午前中のうちこそふて腐れていた彼女も、昼休み前には機嫌を直して、矢瀬たちとも普通に会話を交わしていた。もともとクラスの連中が古城と浅葱の仲の良さをからかうのは、中学時代からの日常茶飯事だ。浅葱が今さらそんなことを気にするとも思えない。

不可解なのは彼女の、古城に対する態度のほうだった。

話しかけても妙によそよそしかったり、そのくせチラチラと古城のことを見ていたり、とにかく全体的にぎこちない。だからといって機嫌が悪いわけでもないらしい。

ここ最近の浅葱はそんな感じで、らしくない不審な挙動を見せることが多かった。

そういえば、と古城は何気なく思い出す。
浅葱の態度がおかしくなったのは、ちょうど夏休みが終わった頃――
それはちょうど古城が雪菜と出会ったあたりのことである。

「――あれ、暁くん、一人なの？　藍羽さんは？」
体育館に辿り着いた古城を見つけて、クラスメイトの内田が話しかけてきた。小柄で線が細く、制服を着ていてもしばしば女子に間違えられるという美少年だ。
内田の隣に寄り添うように立っているのは棚原夕歩。長身で気の強い彼女だが、内田の前では別人のように可愛らしく従順な姿を見せる。典型的な恋する乙女である。
二人は、体育館の床に立てられた支柱に、バドミントン用のネットを張っている途中だった。ただそれだけのはずなのに、なぜか彼らの周囲には、余人が入りこめないような親密な空気が立ちこめている。二人きりの世界とでもいえばいいのか、とにかく近寄りたくない雰囲気だ。
そんな濃厚なカップル臭を漂わせているのは、彼らだけではなく、館内にいたほかのペアたちも同様だった。サーブの練習をしながら互いに肩を寄せ合ったり、ふとした瞬間に見つめ合ったり――本人たちにいちゃついているという意識はないのだろうが、独り身の古城としては見ていて非常に居心地が悪い。
これは浅葱が怒るのも当然だな、と古城は勝手に納得して、

「浅葱は着替えに手間取ってるらしい。先に練習始めててくれ。俺は柔軟でもやっとくわ」
「じゃあ、そうさせてもらうよ。悪いね」
朗らかに返事をする内田に手を振って、古城は体育館の外に出た。
時刻は午後四時を過ぎていた。空には淡く夕焼けが広がり始めているが、西陽が強く、殺人的なまでに蒸し暑い。
少しでも涼しい場所を求めて渡り廊下を彷徨い歩き、古城は、非常階段の踊り場に脚を投げ出して座った。そのまま目を閉じて、ごろりと仰向けに寝転がる。と、
「――先輩？」
頭上から、唖然としたような誰かの声が聞こえてきた。
聞き覚えのあるその声に、古城は薄く瞼を開ける。
視界に映ったのは、紺色のハイソックスに包まれたしなやかな脚だった。
古城が驚いて上体を起こすと、冷ややかな表情で睨んでいる雪菜と目が合ってしまう。ちょうど非常階段を降りてきたところだったらしい。
「こんなところでなにをやってるんです？」
制服のスカートを押さえたまま、雪菜が訊いた。明らかになにか誤解しているような雰囲気だ。古城は慌てて首を振り、自分の着ている体操服を指さした。
「見てのとおり、バドミントンの練習……の準備だよ。相方が来るのを待ってるとこ」

「バドミントン……ですか？　バスケではなく？」
雪菜がきょとんと目を瞬いて訊いた。そして不意に声を硬くして、
「相方というのは、もしかして女子ですか？」
「そうだけど、べつに俺が男女混合ダブルスに出るのを希望したわけじゃないからな」
なぜか責められているような気配を感じて、古城は弁解を口にする。
「わたしはべつに気にしてませんけど」
なにか心に疚しいところでもあるのか、とでも言いたげに古城を見つめてくる雪菜。
奇妙な居心地の悪さを感じて、古城は無理やり話題を変えた。
「姫柊はこんなところでなにをやってたんだ？　ここって高等部の敷地なんだが」
「……そうでした。すみません、先輩、チアリーディング部の部室をご存じないですか？」
「チア部の部室？　高等部の？」
「はい。凪沙ちゃんに呼ばれてたんですけど、道に迷ってしまって」
雪菜の口から出てきた言葉を、古城は怪訝に思った。彩海学園のチアリーディング部は、中等部と高等部でそれぞれ個別に活動をしており、部室も離れているはずだった
「場所はわかるけど、どうして高等部のチア部にあいつがいるんだ？」
「衣装合わせです。スコートというのを貸してもらえるそうなので……」
表情を曇らせながらそう言って、雪菜は弱々しく息を吐く　やはりチアガール役には気乗り

しないのだろう。それでも言われたとおり真面目に衣装合わせに向かうところが雪菜らしい。少しは協力してやるか、と占城は苦笑して、

「案内する。あのあたりは入り組んでるから、上手く口で説明する自信がない」

「ありがとうございます。でも、先輩、練習はいいんですか？」

気遣うような表情を浮かべる雪菜に、占城は軽い気分でうなずいた。

「まあいいだろ。浅葱のやつもまだ来ないし、往復で五分もかからないだろうし」

「藍羽先輩……なんですか？　先輩のダブルスの相方というのは……？」

なぜか不意に立ち止まった雪菜が、重々しい声で訊いてくる。

占城はわけもなく焦りを感じて、

「いや、そうだけど、違うからな。俺が浅葱とペアを組むのを希望したわけじゃないから」

早口でそう言い訳した。雪菜は、無感動な瞳で占城を見つめて溜息をつく。

「わたしはべつに気にしてませんけど」

言葉のわりに不機嫌そうな雪菜の声を聞きながら、占城は空を見上げて嘆息した。

6

雪菜をチア部の部室まで送り届けた帰り道。暁占城は、体操服のポケットから奇跡的に発

見された小銭を握りしめ、自販機コーナーに立ち寄っていた。

「くっそ……なんか、気に疲れた……」

自販機から取り出した紙コップには、味気ないカチ割り氷が嫌がらせのように山盛りになって、その底に色つきの炭酸水がうっすらと沈んでいる。ざっけんなてめえ、と無抵抗の自販機相手にひとしきり説教を垂れたあと、古城はベンチに座りこんで、ぼんやりと夕陽を眺めた。

浅葱もそろそろ着替えを終えて、体育館に着いている頃合いだった。

あのカップルまみれの桃色空間に戻るのは正直気が進まなかったが、あんなところに浅葱を一人で放置していたら、それはそれでのちのち面倒なことになる。氷を噛み砕きながら古城はのろのろと立ち上がり、裏手から体育館の入り口へと回ろうとした。

その直後――

古城がそれまで座っていたベンチが、突然、膨らみきった風船のように弾け飛んだ

「……え？」

砕け散った木々の破片が、古城の頬をかすめて飛んだ。それでも古城にはなにが起きたのか理解できなかった。

爆散したベンチの残骸が、スローモーションで地面に向かって落ちていく。本能的に危険を察知した吸血鬼の神経細胞が活性化。ほんの刹那の時間が、何十倍にも引き延ばされて感じられる。目と肌に感じる焼けつくような痛みはその代償だ　鋭敏になった感覚器官が、降りそそ

ぐ直射日光に悲鳴を上げている。

だが、その苦痛と引き替えに得られた超知覚が、古城に新たな危険を知らせた。

硬直して動けない古城の足元に向かって、銀色の閃光が飛来する。

考えるよりも先に身体が動いた。顔面から突っ込むような勢いで地面に転がり、ギリギリのタイミングで閃光をかわす。閃光の正体は金属製の矢。鋭い鏃と羽根を備えた洋弓の矢が、古城の足元の地面に突き刺さっている。

「な、なんだっ!?」

自分が狙われたという現実を把握できずに、古城は地面に埋もれた矢柄を呆然と見つめた。発射時に音を立てない弓矢は、視界の悪い市街地の戦闘では時として銃以上の脅威となる。渡り廊下。非常階段。校舎。屋上。記念樹の陰。ざっと周囲を見回しただけでも、射手が潜伏可能な場所は数え切れない。誰にどこから狙われているのかわからない、という状況が、古城を軽いパニックに陥れる。そして

地面に突き刺さっていた矢が、突然するすると解けて形を変えた。留め具を失ったカーテンのように、金属の薄板と化してふわりと広がり、そして再び変形していく。

膨張し、鋭角に折り曲げられた金属板が、複雑な獣の姿へと変わる。

その姿は、見えない巨大な手が生み出す鋼鉄製の折り紙を連想させた。

「い、犬!? いや……ライオンか！」

仮初めの命を吹きこまれた金属板が、獣のように大地を踏みしめて咆吼した。本物の猛獣のような野性的な動き。間違いなく呪術によって生み出された怪物だった。

冗談だろ、と古城がうめいた瞬間、鋼鉄の獣が跳躍した。

古城は再び地面に転がって、振り下ろされた獣の前肢を回避する。

厚みを持たない鋼鉄製の獣の脚は、刃物のように鋭く研ぎ澄まされていた。下手に触れたら骨まで切り裂かれそうだ。

「俺を狙ってるのか!?　どうして　!?」

荒々しく息を吐きながら、古城が訊いた。もちろん獣は答えない。鋼鉄製の喉を鳴らして、威嚇するように低く唸るだけだ。

そして焦る古城のすぐ背後に、もう一体の獣が現れる　ベンチの残骸を蹴散らすようにして出現したのは、やはり金属板で造られた狼だ。おそらく最初に撃ちこまれた矢が変形して生まれたものなのだろう。

「まずい、な……これは……」

鋼鉄のライオンと狼に前後を挟まれて、古城が奥歯をギリギリと鳴らす

呪術で生み出されたまがい物とはいえ、この怪物たちの敏捷さは本物の猛獣と変わらない。全身が刃物で構成されているぶん、むしろ危険度は猛獣以上かもしれない。

もちろん、古城が自分の〝容獣〟を解放すれば、この程度の怪物など一瞬で消滅させられ

るだろう。

だが、そんなことをすれば彩海学園の建物もおそらくただでは済まない。下手をすれば全校生徒を巻きこんで、跡形も残さず学校が消滅することになる。世界最強の吸血鬼である古城の能力は、この程度の敵を相手にするには強力すぎるのだ。

かといって、生身ではまったく勝ち目がない。この炎天下では古城の身体能力は大幅に低下しているし、二体同時に攻撃されたら今度こそ逃げ切れそうになかった。そして古城がうっかり致命傷を負うようなことがあれば、やはり古城の眷獣が暴走する可能性は高くなる。

どうする、と古城は自問する。だがその答えが出る前に、二体の獣が同時に跳躍した。よけきれないことを直感して古城は息を呑み、

「――先輩！　伏せて！」

まさにそのギリギリのタイミングで、聞き慣れた少女の声が響いた。

咄嗟に屈みこんだ古城の頭上を、轟然と風を巻いてなにかが駆け抜ける。

それは銀色の槍だった。航空機のように滑らかな姿に成形された、全金属製の長槍である。疾風のように飛来したその槍が、古城を襲う鋼鉄製のライオンを貫いて粉砕する。

「姫柊!?」

槍を投げて古城の危機を救ったのは、小柄な中等部の女子生徒。ついさっき部室棟の前で別れたはずの雪菜だった。まるで美しい獣のように疾走してきた彼女が、そのままの勢いで宙を

舞い、古城を背後から狙っていた鋼鉄製の狼を蹴り飛ばす。

鋭利な刃物の肉体を持つ狼も、側面から見ればただの薄っぺらい金属板である。雪菜の強烈な回転蹴りを浴びて吹き飛び、轟音とともに壁にのめりこむ。

「〝雪霞狼〟――！」

雪菜が、地面に刺さっていた槍を抜いた。そのまま流れるような動きで、銀色の穂先を、鋼鉄製の狼へと突き立てる。それだけで狼は簡単に砕け散った。もはや戦闘とも呼べない、単なる害獣駆除を見ているような光景だ。

古城を追い詰めた怪物たちを、歯牙にもかけない圧倒的な戦闘力。獅子王機関の剣巫と呼ばれる、雪菜本来の姿である。

「無事ですか、先輩？」

槍を構えて、油断なく周囲を見回しながら雪菜が訊いた。彼女が着ているのはいつもの中等部の制服ではなく、白地に青のラインが入ったチアリーダーの衣装だった。

緊張感をぶち壊しにするその可憐な服装に、古城は脱力して息を吐く。

見えない敵の攻撃も、どうやら中断されたようだった。雪菜を巻きこむつもりがないのか、あるいは彼女には勝てないと判断したのか。どちらにしても雪菜に救われたのは間違いない。

「悪い、助かった。けど、姫柊、どうしてここに？」

古城は、全身の土埃を払い落としながら立ち上がる。

雪菜は槍の柄を握ったまま、ぎくり、と背中を硬直させて、
「すみません。先輩を監視していたわたしの式神が、攻撃的な呪力の存在を知らせて来たので、気になって来てみたのですが……」
「は？　監視？　式神ってなんだそれ？」
聞き咎めた古城から目を逸らし、雪菜が、ぎく、ぎく、と肩を震わせた。
俯く彼女の横顔を、古城が無言のままじっと見つめると、雪菜はわざとらしく咳払いしながら顔を上げた。疚しいところはない、と開き直ったように胸を張る。
「――任務ですから！」
「ちょっと待てエ！　もしかして、これまでずっとそうやって俺のことを見張ってたのか!?　今日だけじゃなくて!?」
「先輩のプライバシーは守りますから、安心してください」
「安心できるかっ！」
古城が頭をかきむしりながら怒鳴る。最近少しは打ち解けたと思って油断していたのだが、やはり彼女は、こういうクソ真面目な性格の国家公認ストーカーなのだった。
式神とやらがどういう仕組みで動いているのかわからないだけに、彼女がどこまで古城のプライバシーを把握しているのか非常に気になるところである。まさか風呂場やトイレの中まで監視されているとは思いたくないのだが。いくら相手が綺麗な女の子でも、古城には私生活を

のぞかれて喜ぶような性癖はない。
「そんなことよりも先輩、誰かに狙われる心当たりは？」
雪菜が、もう一度咳払いをしながら訊いてきた。古城は渋面で首を振る。
監視の件はあとで雪菜にきっちり問いただすとして、とりあえず今すぐに問題なのは、古城を攻撃してきた敵の存在だ。
「やっぱり狙われているのは俺なのか？」
「そうですね……でも、この術式は先輩を狙っていたというよりも……」
独り言のように呟きながら、雪菜は、自分が破壊した鋼鉄製の獣の断片を拾い上げる。厚みのない安っぽい金属の薄片。それを見て古城は唖然とうめく。
「……アルミ箔？　こいつがさっきの怪物の正体か？」
「これも式神です。本来は、遠方にいる相手に書状などを送り届けるためのもので、こんなに攻撃的な術ではないはずなんですけど」
雪菜は訝るように呟きながら、拾った金属片を折り曲げた。三角形をふたつ連結したような形を作り、それをふわりと空中に浮かせる。どうやら蝶のつもりだったらしい。
幼稚園児の落書きに似た蝶モドキは、しばらくの間ヒラヒラと風に乗って飛び回っていたが、やがて力尽きたように地上に落ちた。それを見て雪菜が薄く溜息をついた。
「術者には逃げられてしまったみたいです。呪力を追跡できるかと思ったんですけど」

「そうか」

詳しい理屈を説明されても理解できそうにないので、古城は投げやりにうなずいた。要するに逆探知に失敗した、ということなのだろう。雪菜の呪術でも探知できないのなら、古城にはもう犯人を追いかける手段がない。

破壊されたベンチを眺めて古城は無責任に肩をすくめ、雪菜も落胆したように溜息をついた。そんな雪菜の表情が不意に青ざめる。

彼女が見つめていたのは体育館裏にある自転車置き場。下校中とおぼしき二人組の女子生徒が、フェンス越しに古城たちのほうを指さして、なにか話している。

「……姫柊？」

「すみません、先輩。〝雪霞狼〟を見られました。すぐに捕まえて記憶消去の処置を――」

「ま、待った、姫柊！」

槍を握って飛び出そうとした雪菜を、古城が慌てて引き留めた。

「そんなことはしなくて大丈夫だから！　心配要らないって！」

「どうしてそんなことが言い切れるんです!?」

雪菜が余裕のない表情で振り返る。想定外のトラブルにたやすく浮き足立つのは、真面目な優等生である雪菜の最大の弱点だ。勢いこむ彼女をなだめながら、古城が冷静に指摘する。

「いやだって、その服でそんなものを振り回してたら、痛いコスプレ趣味の女子だと思われる

だけだし」

「う……ぐ……」

自分の恰好を見下ろした雪菜が、反論できずに沈黙する。

チアリーダーのユニフォームに、未来的なフォルムの銀色の槍。こんな装備の中学生を見て、特務機関所属の攻魔師だと思う人間はまずいない。コスプレ趣味などという誤解を受けたことに不満な表情を浮かべつつも、雪菜は目撃者の追跡を諦めた。

悄然とする雪菜の姿を、古城は苦笑しながら見つめて、

「なあ。姫柊のその服ってもしかして――」

「衣装合わせの途中で抜けてきたんです。あんまりじろじろ見ないでください」

プリーツスカートの裾を押さえた雪菜が、上目遣いに古城を睨む。スカート丈が短いせいで、ちょっとした動きでも中身が見えてしまうのだ。

「いやでもスパッツ穿いてんじゃん」

「それでも先輩は見ては駄目です　目つきがいやらしいです」

「失礼だな、おい」

ひどく理不尽なことを言われた気がして、古城は口を曲げた。とはいえ、そんな恥ずかしい服装のまま古城を助けに来てくれたのだから、ここは彼女に感謝するべきところなのだろう。

「まあいいや。とにかく、おかげで助かったよ」

「いえ。任務ですから」
雪菜が普段と同じ素っ気ない口調で言う。予想どおりの彼女の返答に古城は小さく舌を出し、
「あー……あと、その服も似合ってる」
「えぅ!?」
その瞬間、雪菜の頬が爆発したように赤く染まった。彼女は、落ち着きのない挙動で自分の服装をもう一度確認し、羞じらうような怒っているような不思議な表情を浮かべ、どうも、と消え入りそうな声で言う。いちおう喜んではいるらしい。どことなく子犬っぽい彼女の反応を、面白いなあ、と思いながら古城は眺める。
女の子がいつもと違う服を着ていたら必ず褒めるように、というのは、常日頃からの凪沙の口癖だ。古城としては、その言いつけに忠実に従っただけだが、雪菜のこんな表情が見られるのなら、口うるさい妹の忠告も無駄ではなかったということか。
「さっきの折り紙……手紙を届ける術だって言ってたよな」
雪菜がうろたえている間に、古城は地面に目を留めた。飛び散ったベンチの残骸にまぎれてなにかが落ちている。気を取り直したような表情で雪菜がうなずき、
「はい。そのはずですけど」
「だったらこいつは、俺宛ってことでいいのかな」
そう言って古城が拾い上げたのは、一通の真新しい封書だった。金色の箔押しが施された豪

華な封筒を、銀色の封蠟が閉じている。
そこに刻まれた印璽に気づいて、雪菜が表情を強張らせた。
「この刻印……まさか……」
「姫柊？」
動揺している雪菜を見つめて、古城が困惑の声を出す。
「この手紙、なにか心当たりでもあるのか？　俺もなんか嫌な気配は感じるんだが……」
「はい……ですけど、そんなはずは……」
雪菜はそう言って強く唇を噛んだ。封蠟に施された刻印は、蛇と剣を模した紋章だった。格調高くはあるが、どことなく不気味さを感じるデザインである。
雪菜と二人で封書を見下ろしながら、古城は彼女の言葉の続きを待つ。
「――古城？」
そのとき、誰かが不意に彼の名を呼んだ。
古城たちの声を聞きつけた同級生が、建物の陰からのんびりと顔を出す。華やかな顔立ちの女子生徒だ。古城と雪菜が、ぎくり、と顔を見合わせる。
「こんなところでなに騒いでんのよ。あんたがいつまでも練習に来ないから、捜しに来てやったのよまったくあたしをあんなカップル時空に置き去りにするとはいい度胸……」
「あ、浅葱？」

古城が唖然とした表情を浮かべたのは、彼女が予想外の服を着ていたせいだった。
ノースリーブのポロシャツと、恐ろしく短い純白のスコート。バドミントンのユニフォームだからべつにおかしくはない――のだが、公式戦の試合ならともかく、たかが球技大会の練習で着るには、露出度が高すぎるのではないかと思う。
浅葱はなぜか無表情のまま、立ち尽くす古城と雪菜を眺めている。そして、
「……その手紙、なに？」
「え？」
静かな声で彼女に訊かれて、古城はようやく事態の深刻さを把握した。
放課後の体育館裏で、人目を避けるようにして会っている一組の男女。
そして彼らの手に握られているのは、妙に豪華な一通の手紙。見ようによっては古城たちのどちらかが、それを相手に手渡そうとしているとも思えるわけで
客観的に判断して、どう考えてもそれは甘酸っぱい告白の場面だった。
「もしかして、邪魔しちゃった？」
ぎこちない表情を浮かべて、浅葱が訊く。なぜかショックを受けているような態度だ。
古城と雪菜は、二人同時に激しく首を振り、
「いや、違う。俺が姫柊とここで会ったのは予期せぬ事故というか緊急事態というか、決してこの手紙を俺たちが渡したり受け取ったりしてたわけじゃなくて、なあ、姫柊」

「は、はい。この服もクラスの応援用で、断じて暁先輩の嗜好に合わせているわけでは……」

事実をありのままに述べているはずなのに、なぜこんなに説得力がないのだろう、と古城は自分でも不思議に思う。スコート姿の女の子二人に挟まれていたら、普通もっと幸せな気分になるものではないのだろうか。

息の合った言い訳を続ける古城たちを、浅葱は奇妙に静かな瞳で見つめている　もういいよ、と彼女は長く嘆息し、

「べつになんでもいいわよ。あたしには関係ないことだしさ」

そう言って彼女はにこやかに笑った。造形的には完璧だが、いつも気まぐれな浅葱らしさを感じない、感情の抜け落ちた不自然な笑顔だ。

その人工的な笑顔のまま、浅葱は古城たちに背中を向けた。

「あたし、帰る」

「あ、おい、浅葱……！」

古城の制止の言葉も虚しく、浅葱の姿は再び建物の陰に隠れて見えなくなる。

浅葱に気を遣われてしまったことに古城はなんとなくショックを受けて、完璧に誤解されてしまったなー、と他人事のように考える。

「あー、くそ。あいつ絶対、俺の弱みを握ったとか思ってんだろうな。また口止め料とか言ってメシ奢らされちまうじゃねーか……てか、あいつ、なんであんな恰好してたんだ？」

浅葱が妙にあっさり立ち去った理由を、自分なりに納得して古城は頭を抱える。
そんな古城を、雪菜はなぜか責めるような眼差しで見上げ、
「先輩……」
溜息混じりに弱々しくそう呟いた。

7

男は、鉄骨を剝き出しにした殺風景な部屋の片隅にいた。
静寂に満ちた薄暗い研究室に、冷却ファンの音だけが響いている。呼気が白く煙るほどに室温が低いのは、密林のように室内を埋め尽くす電子回路を保護するためだろう。
中央のモニタに映し出されているのは、得体の知れない奇怪な文字の羅列。
たった一人きりでそれを睨んで、彼は苛立ったように舌打ちを繰り返している。と
研究室の隔壁が、なんの前触れもなく突然開いた。
乱暴な足取りで入ってきたのは、奇妙な三人組だった。
黒い背広姿の男が二人。そしてフリルまみれのドレスを着た若い女が一人。幼女といっても通用しそうな、あどけない顔立ちの女である。
男は椅子を軋ませて、場違いな侵入者たちのほうへと向き直る。

「なんだ、きみたちは？　ここはクラスVIの機密区域だぞ。職員以外の立ち入りは　」

縄張りを荒らされた猛禽のような目つきで、彼は黒服たちを威嚇した。だが、その表情は途中で凍りつく。黒服の男たちが掲げていた身分証に気づいたのだ。

「――カノウ・アルケミカル・インダストリー社開発部、槙村洋介だな」

抑揚の乏しい機械的な声で黒服の一人が言う。

黒服の身分証に記されているのは、護身用の簡易魔法陣を兼ねた五芒星。特区警察局攻魔部、国際魔導犯罪を担当する国家攻魔官たちの紋章である。

「槙村研究主任。この研究所内で扱っている荷物には、魔導貿易管理令に違反する物品が含まれている疑いがある。すみやかに所内の全資料の開示、並びに荷物の引き渡しを要求したい」

「ぼ、貿易管理令違反？」

槙村と呼ばれた男が、額に汗を浮かべて立ち上がる。

「待ってくれ。なにかの間違いだ！　ここで研究しているのは古代言語の解析だ。管理公社の許可も取っている。総務部のほうに問い合わせてくれれば――」

「我々は、すでに先日、クリストフ・ガルドシュの部下一名を拘束している」

もう一人の黒服が、手錠を取り出しながら威圧的に告げた。槙村がハッと息を呑む。

「特区治安維持条例第五条に基づき、これよりあなたの身柄を拘束する。あなたの供述は裁判で不利な証拠として使われることがある。言動には気をつけたほうがいい」

「くっ……！」

黒服が槙村の腕をつかんで手錠をかける。――と思われた瞬間、ずん、と鈍い衝撃が黒服を襲った。

痩身で見るからに非力な槙村に対して、黒服の体格は屈強だ。体重差は四十キロ近くあるだろう。だが、槙村がつかまれた腕を振ったとき、吹き飛んだのは黒服のほうだった。近くの柱に叩きつけられた黒服が、苦悶の息を吐きながら床に転がった。

その間に槙村は変身を終えていた。

膨れ上がった全身の筋肉が白衣を引き裂き、金属製の手錠を引きちぎる。ある種の爬虫類が感情によって体細胞の色を変えるように、槙村は自らの意思で細胞の形質そのものを変貌させていく。獣人化。人狼。猛獣の筋力と瞬発力を得た研究員は今や恐るべき狂戦士と化していた。

もう一人の黒服が、咄嗟に拳銃を抜いて槙村に向けた。訓練された動きで撃ち放たれたのは、人狼殺しとも呼ばれる銀イリジウム合金弾。しかし槙村は、弾丸の雨をくぐり抜けて黒服の拳銃を叩き落とし、そのままの勢いで跳躍した。開け放たれたままの隔壁から、外に逃げようとしているのだ。

「やはり、未登録魔族……黒死皇派の賛同者か」

そんな槙村の後ろ姿を見送って、ドレスの女　南宮那月がつまらなそうに呟いた　そして、彼女は静かに命令する。

「――アスタルテ、少しくらい手荒に扱っても構わん。そいつを拘束しろ」

「命令受諾」

槙村の行く手を遮るように隔壁の前に立ったのは、藍色の髪の小柄な少女だった。

透き通るような白い肌と、水色の瞳。完全に左右対称の整った顔立ち。生物としての匂いがまるで希薄な、妖精じみた娘である。

彼女が身に着けている服装は、大きく背中の開いたエプロンドレス。武器を持たない彼女を見て、獣人化した槙村は獰猛に牙を剝いて笑い、

「人工生命体!? こんなガキが、この俺を止められるとでも思ったか――!」

「実行せよ、〝薔薇の指先〟」

次の瞬間、アスタルテの肉体を突き破るようにして彼女の背中に出現したのは、虹色に輝く翼だった。撒き散らされた衝撃が、研究室内の大気を歪める 実体と質量を伴うほどの濃密すぎる魔力の波動。それを間近で浴びた槙村が絶句する

「なっ……!?」

少女の背中から生えた翼が、巨大な腕の形へと変化する。虹色の鎧に覆われたゴーレムの腕。砲弾のような勢いで放たれたその拳が、突っ込んでくる人狼の男を正面から殴りつけた。

鈍い激突音に混じって、骨と肉が潰れる気配が伝わってくる。

普通の人間なら確実に即死するほどの威力。だが、アスタルテと呼ばれた少女は、それでも

手加減していたらしい。槙村はかろうじて原型を留めたまま、壁に叩きつけられてずるずるとくずおれる。

「け……眷獣だと!?　馬鹿な……どうして人工生命体が眷獣を……!?」

血の塊を吐きながら、槙村がうわごとのように弱々しくうめく。

アスタルテは厭いだ湖面のような無感情な瞳でそれを見下ろし、背中から伸ばした腕で槙村の身体を拘束した。その巨大な腕の正体は、眷獣と呼ばれる意思を持った魔力の塊だった。

実体化する代償として宿主の寿命を喰らう、異界からの召喚獣。不老不死の吸血鬼以外が召喚すれば、たちまち生命力を奪い尽くされて死に至るという最凶最悪の使い魔である。

だがそれだけに眷獣の持つ戦闘能力は凄まじい。その眷獣を使役できるからこそ、吸血鬼は魔族の中でももっとも恐れられているのだ。

眷獣を飼い馴らせるのは、無限の〝負〟の生命力を持つ吸血鬼だけ――

アスタルテは、その唯一の例外だった。〝薔薇の指先〟は、ある目的のためにロタリンギアの殲教師が造り出した人工眷獣なのである。

重傷を負って獣人化を保てなくなった槙村が、人間の姿に戻って激しく咳きこんだ。その隙に駆け寄ってきた黒服たちが、槙村の首に金属製のリングを嵌めた。微弱な電流によって神経の働きを狂わせ、獣人化を阻止する対魔族用の拘束具だ。

「――南宮教官、申し訳ない。おかげで助かりました」

折れた右腕を押さえながら、黒服の一人が那月に礼を言った。那月は、黒いレースの扇子を広げながら優雅に首を振り、

「礼には及ばん。働いたのは私じゃない」

そう言ってつまらなそうに鼻を鳴らした。高圧的な物言いだが、幼い子どものような舌足らずな声と、生まれ持った気品のせいで嫌味には感じない。彼女に冷たくあしらわれたことを、黒服たちはむしろ喜んですらいるようにも見えた。那月のカリスマ性のなせる業である。

そんな彼女が眺めていたのは、槙村の机に散らばっていた数枚の写真だった。

どこかの古代遺跡から出土した石板を写したものらしい。

石板の表面に刻まれているのは、研究室のモニタに映し出されているものと同じ、解読不能な文字の羅列。だが、その文字列を見ただけで直感的に理解できることがある。

そこに書かれている内容は、恐ろしく危険な力を秘めた代物だ

「黒死皇派が、西域からわざわざ運びこんできた密輸品というのはこいつか……ただの骨董品ではなそうだが……現物はどこにある？」

「――対象確認不能。すでに当施設から運び出されたものと推定されます」

那月の呟きに、アスタルテが淡々と答える。人工生命体の少女が指さしたのは、部屋の隅に残された金属製の輸送用ケースだった。

呪的な封印処理が幾重にも施された特殊な代物だが、その封印はすでに破られており、中身

はない。そこに収められていた石板は何者かが持ち去ってしまったのだろう。
「出遅れた、というわけか」
不機嫌な声で自問しながら、那月はモニタに映し出された映像を見上げた。
槙村はどうやら自分の会社の研究設備を使って、石板の解読作業を行っていたらしい。だが解読はいまだ不完全であり、解読できているのは、ごく限られた一部の単語だけ　その中に、〝ナラクヴェーラ〟の文字を見つけて那月が険しい表情を浮かべる。
「馬鹿な……なにを考えている、クリストフ・ガルドシュ……」
彼女たちの会話を聞いていた槙村が、床に倒れたまま甲高く笑い出す。それは世界の破滅を願うテロリストの狂気の哄笑だった。

8

夕陽に照らされた海沿いの歩道を、暁古城は歩いていた。
隣には、ギターケースを背負った雪菜の姿もある。浅葱の気まぐれで球技大会の練習がうやむやになって、そのまま一緒に帰宅する流れになったのだ。
二人は少し寄り道をして、自宅近くにあるスーパーマーケットへと向かう　部活で遅くなる凪沙の代わりに、夕飯用の食材を買って帰るのが最近の古城たちの日課なのだった

「差出人は、アルデアル公ディミトリエ・ヴァトラー……誰だ？」

道すがら、体育館裏で拾った封筒を眺めて、古城は困惑したように呟いた。

鋼鉄製の式神たちが残していった手紙は、今夜開催されるというパーティの招待状だった。紘神港に停泊中のクルーズ船で、なにやら大々的な催しが行われることになっているらしい。

封筒の表には、たしかに暁古城の名前が書かれている。しかしヴァトラーなる人物を古城は知らない。当然パーティに誘われる理由も思いつかない。嫌な予感しかしない招待状だ。

「アルデアル公国は、戦王領域を構成する自治領のひとつです」

雪菜が重々しい口調で説明した。古城たちは、ちょうど目的のスーパーに到着したところだ。自動ドアの隙間から流れ出す冷房の効いた空気が心地いい。

古城は、入り口近くに置かれたショッピングカートに、買い物カゴを載せながら訊き返す。

「戦王領域？」

「東欧にある夜の帝国……第一真祖の支配地です。第一真祖〝忘却の戦王〟のことはご存じですよね」

「名前だけはいちおうな。七十二体の眷獣を従える吸血鬼の覇王……だっけ」

あまりにも非現実的なその肩書きに、自分で口にしながら古城は呆れる。

なにしろ真祖クラスの吸血鬼が操る眷獣といえば、都市のひとつやふたつ簡単に壊滅させる正真正銘の怪物だ。そんなものを何十体も操るといわれても、スケールが大きすぎてピンと

こない。本当にそんな生物が存在するのか、と疑わしい気持ちになってしまう。

実はそんなことを考えている古城こそ、その第一真祖が一日置く世界最強の吸血鬼だったりするのだが

「人類と魔族の共存のために締結された聖域条約も、彼の王が協力してくれたから実現できたのだと言われてます。そうでなければ、残る二人の真祖が交渉に応じることはなかったでしょう。同じ真祖という立場でも、やはり戦王領域は圧倒的な戦力を誇る最古の夜の帝国ですから」

緊張感のない古城をたしなめるように、雪菜が第一真祖の恐ろしさを説く。古城は黙って肩をすくめた。とりあえず今のところ問題なのは〝忘却の戦王〟本人ではない。

「……で、このヴァトラーってのは、その第一真祖の臣下ってわけか」

「そのはずです。白沿領の君主ということは貴族、つまり第一真祖直系の血族から生まれた、純血の吸血鬼ということになりますから」

「ふうん」

凪沙に渡されたメモを頼りに、古城が買い物カゴに野菜や果物を入れていく。食材の分量は二人前。古城と凪沙、そして雪菜のぶんである。雪菜が一人暮らしだと知った凪沙が、うちで夕飯食べていきなよ、と強引に誘い続けた結果だ。

食事中に話し相手がいるときの凪沙は上機嫌だし、聞き役を雪菜が肩代わりしてくれるので古城としてもありがたい。もともと雪菜の目的は古城の監視なのだから、彼女にとっても悪

い話ではない。そんなこんなで二人の思惑が一致した結果、雪菜が暁家で夕飯を摂るのが、いつの間にか普通になってしまっていたのだった。

そんな大物が、なんで紘神島なんかに来てるんだ？　ちょっ……タマネギ多すぎるだろこれ」

「野菜の好き嫌いは駄目ですよ。たぶん先輩に会うのが目的なんだと思いますけど」

「まさか俺が第四真祖だからっていうんじゃないだろうな？」

「ほかに理由、ないですよね……それよりも、先輩、こっそりピーマンを売り場に戻さないでください。子どもじゃないんですからもう」

雪菜が溜息をつきながら、古城の苦手な緑黄色野菜をカートに戻す。仲良く買い物に来た新婚夫婦のような姿だが、古城たちにその自覚はない　むしろ深刻な事態について話し合っているつもりなのだ。実は古城と雪菜の関係については、この店の店員や近所に住む人々の間で、『同棲中？』『兄妹じゃないの？』『ほかの女の子とも一緒に住んでるみたいよ』『それってもしかして三人で　』などという噂がまことしやかに囁かれていたりするのだが、もちろん本人たちは気づいていない。

「なんでヨーロッパだかどっかの吸血鬼が俺の名前を知ってるんだ……？」

招待状の宛名をもう一度確認しながら、古城が不服そうに呟いた。

雪菜は、なぜか責任を感じているように溜息をついて、

先日のロタリンギア殲教師の一件で、先輩の存在に気づいたんだと思います。先輩があん

な派手に街を焼き払ったりするから……」

「俺じゃねえよ！　あれは眷獣が勝手にやったんだ！」

「わたしはもちろんわかってますけど……でも、世間はそう思ってくれないのではないかと」

「くそ……だからって、あんな折り紙みたいなのに襲われる理由はねーぞ。わざわざ海外から喧嘩売りにきたのか、こいつ」

古城は、学校で遭遇した鋼鉄製の獣の姿を思い出して苦々しげにうめく。雪菜が来てくれたからあの場はどうにかなったが、そうでなければ古城は眷獣を暴走させていたかもしれない。真祖の眷獣の危険度を知っているにしては、ずいぶん手荒なやり口だ。

「宣戦布告……ですか」

雪菜が物騒な言葉を口にする。夜の帝国の支配者である真祖は、国際法上は、一国の軍隊と同じ扱いだ。それは自分の眷属や同胞を持たない古城もいちおう例外ではない。

「あり得ない話ではないですけど、とりあえず交渉してみないことにはなんとも……」

「どっちにしても、この招待に応じるしかないわけか……」

そう言って招待状を広げた古城は、その文面を眺めて困惑の表情を浮かべた。

目聡くそれに気づいた雪菜が、古城を怪訝そうに見上げてくる。

「先輩？　どうかしましたか？」

「あ、ああ……なんか、ここにパートナーを連れてこいって書かれてあるんだが」

「パートナー？」
雪菜が、ああ、と納得したようにうなずいた。
「そういえば、欧米のパーティでは夫婦や恋人を同伴するのが基本なんですよね」
「……いきなり無理難題を吹っかけてくれるなオイ。独り身の人間はどうすりゃいいんだ？」
「そういう場合は、知り合いの誰かに代役を頼むのではないでしょうか」
「代役……と言われてもな」
古城は困ったように唇を歪める。恋人の代役という条件なら、年の近い家族か親しい友人で、しかも異性ということになるのだろうが
「吸血鬼がらみのパーティなんかに凪沙を連れてくわけにはいかないし、浅葱はなんか怒ってたみたいだし、あんまりヤバいことに巻きこむわけにもいかないしな……」
「そうですね」
雪菜が、こほん、と可愛らしく咳払いして古城を見た。
「先輩の正体を知ってて、危険な状況にも対処できる人材というと、選択の余地はあまりないと思いますけど」
「そうだな」
古城はやれやれと目を伏せて、不本意そうに嘆息する。
「巻きこむのは気が引けるけど……頼んでみるか、那月ちゃんに」

「は、はい？」

雪菜が、ぽかんと目を丸くして固まった。古城はそれに気づかずにガリガリと頭をかき、

「あとでたっぷり恩に着せられそうで恐いんだが、贅沢言ってる場合じゃないしな……まあ、叮愛い教え子が真剣に頼めばパーティくらいつき合ってくれるだろ」

「……どうしてそこで南宮先生の名前が出てくるんでしょうか？」

雪菜が声を低くして訊いてきた。表情に大きな変化はないが、言葉の端々から帯電したような刺々しい気配が伝わってくる。なぜか彼女は怒っているらしい。

「いや、だってあの人なら俺の体質のことを知ってるし、攻魔師資格も持ってるし、適任だろ。たしかに見た目がちょっと若すぎるのは問題だとは思うが」

「先輩の体質のことを知ってて、攻魔師資格も持ってて、年齢的な釣り合いもとれてる異性がほかにもいると思うんですけど。ほかにもいると思うんですけど」

雪菜が素っ気ない口調で独り言のように呟く。それを聞いて、古城もようやく雪菜の怒りの理由に思い当たった。

姫柊に頼んでもいいのか？　そんなことをして獅子王機関で問題になったりしないのか？」

「仕方ないです。この場合、先輩から目を離すことのほうが問題になると思いますから」

雪菜が、照れ隠しのように冷たく言った。どうにか機嫌が回復した彼女を見て、古城はホッと苦笑する。

「そうか。悪いな」
「いえ、先輩の監視が私の任務ですから……あ！」
冗談めかした口調でそう言いかけて、雪菜は不意に表情を暗くした。
「姫柊？　やっぱりなにか問題でも？」
「そうですね……問題かも知れません。わたし、パーティに着ていく服がありません」
雪菜が思い詰めたような表情で唇を噛む。そんな彼女の横顔をしばらく眺めて、古城は思わず吹き出した。俯いて肩を震わせる古城を、雪菜が憤慨したように睨みつける。
「どうして笑うんですか？」
「ああ、悪い。まるでシンデレラみたいだな、と思って。姫柊でもやっぱり、そういうことを気にするんだな」
「……そうですか。私が灰かぶり姫なら、先輩は意地悪な姉の役ですね」
雪菜が氷のような視線を古城に向けてくる。古城は地味に傷つきながら、
「王子とは言わないから、せめて魔法使いくらいにしてくれないか」
「グリム童話のシンデレラでは、意地悪な姉は爪先や踵を削ぎ落とされたり、目を潰されたりするそうですね。先輩も気をつけてください」
「……姫柊さんなら、なにを着てても可愛いから問題ないですよ」
精いっぱい真面目な表情を作って古城が言った。べつにお世辞のつもりではなく、それなり

に本気の感想だったのだが、

「白々しいです、先輩」

雪菜は諦めたように溜息をついただけだった。そのまま怒ったように早足で歩き出す雪菜を、古城はカートを押しながら追いかける。

買い出しを終えた古城たちは、それぞれ買い物袋を抱えて自宅へと向かった

夕陽はすでに水平線に沈んで、街は夕闇に包まれ始めている。ディミトリエ・ヴァトラーが指定したパーティの開始時刻まで、あと三時間と少し。もうあまり時間に余裕がない。

「商業地区まで行けば貸衣装屋くらいあるだろうけど、この時間に店が開いてるかどうかは微妙だな。パーティ用の服は凪沙も持ってないだろうから、それこそ那月ちゃんにでも借りるしか……」

「南宮先生のお洋服……ですか……さすがにそれは着られないと思いますけど」

雪菜が自分の胸元を押さえながら呟いた。たしかに那月は、どちらかといえば小柄な雪菜と比べてもう一回り以上小さい。身長、それにもちろん全体的な骨格も

「いやでも……」

「着られませんけどなにか？」

胸囲は似たようなものじゃ、とうっかり言いかけた古城は、雪菜に睨まれて沈黙した　そんな冷え冷えとした空気のまま古城たちはマンションに辿り着く　そして、

「なんだ、この荷物？」

郵便受けに入っていた伝票に気づいて、古城は首を傾げた。宅配便用のロッカーに、荷物が届いていたらしい。心当たりはなかったが、特に疑問も覚えず、古城はロッカーを開けた。

入っていたのは、平たい長方形の段ボールだった。大きさの割に重量はそれほどでもない。爆弾などの危険物という可能性は低そうだ。

だがそこに記されていた差出人の名前を見て、古城と雪菜は愕然となる。

獅子王機関？」

「そんな……どうして先輩宛に？」

まったく予期しない相手からの届け物に、古城たちは絶句した。

獅子王機関は、大規模な魔導災害やテロに対処するための、日本政府の特務機関だ。

彼らが雪菜を古城の監視役として派遣したのも、国家の安全を守るため　―つまり彼らは古城の存在を、重大な国家的危機だと認識しているというわけだ。

そんな連中が、わざわざ古城に送りつけてきた荷物だ。到底まともな代物だとは思えない。

獅子王機関の剣巫である雪菜にも、その正体は知らされていないらしい。

古城は雪菜と険しい表情で見つめ合い、覚悟を決めたように段ボールの蓋に手をかけた。慎重な手つきで包装を剝がし、息を殺して開封する。

箱の中には、光沢のある薄い布地が、丁寧に折り畳まれて入っていた。あからさまに高級そ

うな生地である。咄嗟に古城が疑ったのは、なんらかの呪術がこめられたものではないか、ということだ。しかし雪菜は黙って首を傾げるだけ。特に危険は感じないらしい。

箱の隅に荷物の明細書を見つけて、古城はそれを拾い上げた。

その間に雪菜が、そっと布の端をつまんで持ち上げる。ふわりと広がったのはボリュームのあるフリルのスカートだ。一緒に折り畳まれていた付属品が、バサバサと落ちてくる。カップつきのアンダードレスにシルクの下着。

「なんだこれ……オーダーメイドのパーティドレス一式？　身長百五十六センチ、B七六・W五五・H七八、C六〇……姫柊雪菜様、代金領収済み……え？」

「は？　え？　あ……!?」

明細書に記された数字を読み上げていた古城は、ふと顔を上げて目の前の雪菜を見る。赤面する雪菜と、彼女が握りしめているアンダードレス、そして明細書に記載された謎の数字。それらを見比べて古城はようやく、雪菜が羞恥に肩を震わせている理由を把握した。

気まずい沈黙が訪れる。居心地の悪い気分になった古城は、このまま黙っているのは愚策だと判断。とりあえず雪菜を励ますべきだと、彼女の制服の胸元を見つめて、

「えーと……Cか。意外にあるんだな。うん、見直した」

その瞬間、空気が凍りついた。無表情な雪菜の全身から、凄まじい殺意の波動が放たれた。自らの失言を悟った古城は、死体のように硬直して動けない。

「記憶をなくす前に言い残すことは、それだけですか、先輩？」

ゆらりと音もなく立ち上がった雪菜が、拳を握りしめながら古城に訊いた。待て、落ち着け、冷静になれ、と古城は必死で彼女をなだめて、

「大丈夫だ、姫柊。このドレス、ちゃんと胸パッドも用意されてる――」

その言葉が終わる前に、雪菜の放った踵落としが古城の頭頂部にめりこんだ。ぐお、と頭を押さえて古城は悶絶し、雪菜はそれを見下ろしながら、拗ねたように頬を膨らませていた

9

午後九時を少し過ぎた頃、古城は服を着替えて自分の部屋を出た。

身に着けているのはスリーピースのタキシード。獅子王機関から届いた荷物の中に、雪菜のドレスと一緒に入っていたものである。彼らの目的は不明だが、どうやら獅子王機関の連中は、古城たちを〝戦王領域〟の貴族と会わせたがっているらしい。

わけがわからないまま利用されるのは不愉快だったが、ほかにパーティに着ていく服があるわけでもない。服に罪はない、と自分に言い聞かせながら古城はネクタイを締め、ベストのボタンを留めながら玄関へと向かう。と――

「こ、古城君？　なにそれ？　その服、どうしたの？」

リビングで鉢合わせた風呂上がりの凪沙が、古城を見てぎょっと目を丸くした。
濡れた髪と、ほのかに赤く上気した頬。まだ水滴が残る肌にバスタオルを巻きつけただけの無防備な姿である。そんな恰好でうろついている凪沙のほうが問題あるだろう、と古城は少し呆れながら、
「ああ。実は今からバイトなんだ」
前もって考えておいた言い訳を口にした。
凪沙は一瞬呆気にとられて、驚いたように古城の全身を眺め回す。
「バイト？　夜のお仕事ってこと？」
「過労でぶっ倒れたクラスメイトの代理で、今夜だけな。そいつん家は、両親が一億五千万円の借金を残して蒸発してしまって、俺が代わりにバイトに出ないと、病弱なお姉さんの治療費が払えないらしいんだ」
「そ、そうなんだ……」
我ながら苦しい言い訳だと思っていたのだが、意外にも凪沙はあっさりと信じたらしかった。やはりタキシードの存在が効いたのかもしれない。実際、酒場でアルバイトでもしなければ、普通の高校生がこんなものを着る機会は滅多にないはずだ。
「それじゃあ、仕方ないね　でも、いやらしいことはしちゃ駄目だよ」
凪沙が不安そうな表情で警告する。いったいなんの心配をしてるんだ、と古城は苦笑し、

「ああ、大丈夫。それはない。というわけで、悪いけど、一人で留守番頼むな」
「うん、わかった……古城君も気をつけてね」
明るく手を振る凪沙に見送られながら、古城は外に出た。
妹を騙すことに罪悪感がないわけではないが、戦王領域の吸血鬼に会いに行くのだと正直に告げるわけにもいかないから仕方がない。廊下に出て、古城はうんざりと自己嫌悪の息を吐く。
そのとき古城のすぐ傍に、そっと寄り添うように近づく誰かの気配があった。
振り返ると雪菜が立っていた。古城たちの会話を聞いていたのだろう。暁家のドアをちらりと眺めて、古城を励ますように話しかけてくる。
「凪沙ちゃん、いい子ですね」
「まあ、嘘は突飛なほうが信じやすいって言うし……な……」
そう言いながら雪菜のほうに向き直り、その瞬間、古城は言葉をなくした。
いつもと違う彼女の服装に、目を奪われてしまったのだ。
白地に紺色のパーティドレス。胸元の露出は控え目だが、そのぶん肩から背中にかけては大胆にカットされている。薄い布地は雪菜の身体の輪郭をくっきりと浮き上がらせて、華やかなフリルのミニスカートからは白く引き締まった太腿がのぞいている。
さすがにオーダーメイドというだけあって、恐ろしく雪菜に似合っていた。清楚さと可憐さ、そして仄かな色香すら感じさせる危険な衣装だ。雪菜の美少女ぶりにはいいかげん慣れている

はずの古城ですら、間抜けな顔で呆然と見とれてしまい、
「先輩？」
そんな古城を、雪菜が警戒したように半眼で睨んでいた。
「あ、ああ」
「この服……やっぱりおかしかったですか？」
「いや、全然そんなことはないけど！　え!?　ちょっ……なんで槍を向ける!?」
目の前に突きつけられた槍の穂先を見て、古城は慌てて表情を引き締める。雪菜は銀色の槍を構えたまま、冷淡な眼差しで古城を眺めて、むしろ咎めるような口調で言った。
「すみません。身の危険を感じてしまって、思わず」
「そ、そうか」
古城は鼻の奥にツンと金臭い気配を覚えて顔をしかめた。
あまり自覚はないのだが今の古城は吸血鬼であり、そして吸血鬼という種族には、その名の由来でもある厄介な衝動が存在する。
他者の首筋に牙を突き立て、血を呑むことへの抗いがたい渇望　すなわち吸血衝動である。
そして吸血衝動の引き金となるのは性欲だ。今の雪菜を見て興奮した古城は、危うく吸血衝動に意識を奪われそうになった。雪菜はそれを本能的に察して〝雪霞狼〟を抜いたのだろう。
これが剣巫の霊視というやつか、と密かに感心していると、

「――先輩がわかりやす過ぎるんです。いやらしいことを考えているのが顔に出てますよ」
まるで古城の心を読んだようなタイミングで、雪菜が溜息混じりに言った
「やっぱり、背中……開きすぎてますよね。生地も薄いし、スカート丈もこれはさすがに」
「動きやすくていいんじゃないか。戦闘になったとき、スカートが邪魔になるよりはマシだろ」
「……そんな下心まみれの顔でまともなことを言われても……」
「まみれてねえよ」
古城が不機嫌な声で唸る。雪菜は小さく肩をすぼめると、なにを思ったのか、突然スカートの裾を小さくめくり、
「まあいいです。チアリーディング部で貸してもらったアンダースコートが役に立ちましたし」
「アンスコなのかよ!?」
思わず身を乗り出しかけた古城が、がっくりと肩を落として喚いた。
「先輩、やっぱり……」
「いや、違う。のぞきたかったわけじゃないけど、その衣装でアンスコは反則というか、夢を壊された気持ちになるというか、ほら、シュレディンガーの猫だって生死がはっきりしないからこそ物理学者の心を惹きつけるわけで」
「なにが言いたいのかさっぱりわかりませんが、先輩が女子のスカートの中に並々ならぬ期待を持っていることだけはよくわかりました」

「だからその槍を向けるのはやめろ！」

壁際まで追い詰められた古城が必死の形相で訴える。

「本当にもう、先輩は……」

雪菜はなぜか諦めたように嘆息して、静かに槍を下ろした。格納状態に変形させたそれを、足元に置いてあったケースにしまう。

彼女が持っているギターケースは、いつもの黒いギグバッグではなく、手提げ式のハードケースだった。パーティドレス姿の彼女が持っていてもそれほど違和感はない　オーケストラの演奏会場へと向かうクラシック奏者のような雰囲気だ。そして、

「この衣装……本当におかしくないですか？」

ケースを閉めて立ち上がった雪菜が、不意に古城を上目遣いに見上げて、ぼそりと訊いた。めずらしく普通の女の子のような仕草だった。

「いや、全然。似合うよ」

「そうですか」

古城の返事に素っ気なくうなずき、雪菜はそのままエレベーターのほうへと歩き出す　髪を上げている彼女のうなじがほんのりと赤い。密かに照れているらしい

その雪菜の髪をまとめている髪飾りに気づいて、古城はふと首を傾げた　十字架を模した銀色のヘアクリップ。獅子王機関から送られてきた荷物の中にはなかったものだ　私物をほとん

ど持たないはずの雪菜が、そんなふうにアクセサリを身に着けているのはめずらしい。
「姫柊、その髪飾りって――」
「えっ……」
雪菜が驚いたように髪に手を当てる。悪戯がばれた子どものような表情だ。
「これ……もしかして変ですか？」
「いや、全然。似合うよ」
古城がさっきと同じセリフを繰り返す。今度は雪菜も、素直に嬉しそうな表情を浮かべた。
「高神の杜にいたときに、紗矢華さんに……ルームメイトの子にもらったんです」
「ルームメイト？　その子も姫柊と同じ剣巫なのか？」
古城は少し興味を惹かれて訊き返す。
高神の杜とは、雪菜が先月まで通っていたという全寮制の女子校の名だ。
しかしその実体は、獅子王機関による攻魔師の教育施設である。雪菜の剣巫の能力も、そこでの修行で身につけたものだと聞いている。そんな雪菜と一緒に暮らしていたという少女が、呪術と無縁の一般人だという可能性は低い。
「剣巫ではありませんが、紗矢華さんも獅子王機関の攻魔師です」
雪菜が、古城の予想どおりの答えを口にした。なぜか少し得意げな声の響きがある。
「わたしよりもひとつ年上だったので、今はもう高神の杜を出て、正式な任務についてます」

「へえ……仲が良かったんだな」
古城の呟きに、雪菜は軽くはにかみながら首肯した。
「そうですね。本当の姉のように思ってました。美人で可愛くて、性格も可愛くて、優しい、自慢のルームメイトです」
「ちょっと会ってみたい気がするな」
古城が何気ない気分で感想を口にする。その瞬間、雪菜が不意に表情を曇らせた。髪飾りに一度手を触れて、彼女はぽそりと小声で告げる。
「先輩は会わないほうがいいかもしれません……たぶん命を狙われることになると思うので」

10

アルデアル公ディミトリエ・ヴァトラーのクルーズ船は、港湾地区の大桟橋に停泊していた。遠目からでも異様に目立つ豪華船だ。
パーティの開始時刻は午後十時、大勢の招待客たちが、タラップを上って、船の中へと乗りこんでいる姿が見える。
「……洋上の墓場……か　趣味の悪い名前だな」
船体に刻まれた〝オシアナス・グレイヴ〟という船名を見上げて、古城は呆れたように呟い

た。しかしその不吉な名前とは裏腹に、ライトアップされた船体は、宮殿のような華やかな威容を夜空に誇示している。

「あれが個人の持ち物って……どんだけ金持ちなんだよ、戦王領域の貴族ってのは」

「そんなふうに権力を誇示するのが、目的のひとつなんだと思います」

雪菜が冷静な口調で解説する。

「吸血鬼が海を越えられないというのは迷信ですけど、彼らの能力が海上で制限されるのは事実ですから。そんな夜の帝国の貴族が堂々と船に乗ってきたということは、それだけでも訪問先の国に対する示威効果があるんです。たとえそれが、軍艦ではないただの民間船でも」

「ふーん……ただ派手好きなだけじゃないってことか」

占城はなんとなく重苦しい気分になりながら、青白い船体を再び見上げた。

民間船である〝オシアナス・グレイヴ〟に武装はない。だが、この船の持ち主は、吸血鬼の貴族だ。彼らが喚び出す眷獣は、最大級の空母にも匹敵する戦闘能力を持っている。つまり今の絃神島は、目の前に夜の帝国の軍艦がいるのも同然という、際どい状況にあるわけだ。

そのせいか〝オシアナス・グレイヴ〟に乗り込んでいく人々には、ニュースなどで見かける顔が多い。大物政治家や経済界の重鎮、政府や絃神市の要人たちだ。

パーティの主催者が戦王領域の貴族なら、この程度は不自然なことではないのだろう。が、

「――俺たちだけ完璧に浮いてるよな」

本当にこんなところに来てよかったんだろうか、と不安を覚えながら古城は独りごちる。

考えてみれば、この招待状は、誰かが古城たちを騙すために送りつけてきた偽物という可能性もあるわけだ。招待状が届けられたときの状況が状況だし、あながち根拠のない不安というわけではない。

しかし雪菜は、そんなことを思っている古城を呆れ顔で見上げて、

「いえ、第四真祖の使者がこの島を訪れて、真っ先に挨拶するべき相手は、この地を支配する第四真祖です。先輩がこのパーティのメインゲストですよ。もっと堂々としていてください」

「そんなこと言われても知るか。俺はただの高校生なんだよ！」

古城は弱々しく反論する。周囲が勝手に真祖扱いしているだけで、古城自身は、ほんの数カ月前まで普通の人間だったのだ。こんな場違いな場所に連れてこられても、正しい振る舞い方などわかるはずがない。

招待状のチェックを済ませて船内に入ると、場違いな気分はいっそう増した。きらびやかな照明と豪勢な料理。そんな会場に集う偉そうな大人たち。古城のような若造が歩いていても、路傍の石ころを見るような視線を向けられるだけである。

「で……俺たちを呼びつけた張本人はどこにいるんだ？」

そんな居心地の悪い会場内を見回しながら、古城は呟いた。

会場になっている広間は船の中とは思えないほど広大だ。訪れている招待客も五百人はくだ

らない。その中から見知らぬ第一真祖の使者を捜し出すのは、それほど簡単なことではない。

だがその一方で、この船に乗りこんだ直後から、古城は奇妙な感覚を味わっていた。

バスケの試合が始まる直前の昂ぶりに似ている。恐怖と歓喜、危機感と高揚感が一体となったような心地好い緊張感。強大な力を持つ同胞の接近に気づいて、全身の神経が研ぎ澄まされていくような気分だ。吸血鬼としての古城の〝血〟が――その中に棲まう眷獣たちが、強敵との遭遇を予感して滾っているのだ。

その昂ぶりが教えてくれる。〝戦王領域〟の貴族は間違いなくこの近くにいる。

「上です。アルデアル公はおそらく外のアッパーデッキに――」

そんな古城の予感を裏付けるように、頭上を見上げて雪菜が言った。彼女も古城と同じように、剣巫の霊視でディミトリエ・ヴァトラーの居場所を知ったのだろう。

「アッパーデッキ……か。どうやって行けばいいんだ？」

「こっちです、先輩」

広間の隅の階段を指さした雪菜が、招待客で混み合う通路を歩き出す。

慌てて追いかける古城のほうへと、彼女は振り返って手を伸ばした。古城はなんの疑問も覚えず、その手を握り返そうとする。

殺気を伴った銀色の光が、古城に向かって振り下ろされたのは、その直後のことだった。

「――せいっ！」

「うおっ!?」

咄嗟に跳び退いた古城の眼前を、鋭く研ぎ澄まされたフォークの先端がかすめていく。

フォークを握っていたのは若い女。身長は百七十センチ近くありそうだが、まだ十代半ばほどの少女である。長い栗色の髪に、白い肌。人目を惹きつける優美な顔立ち。すらりとした細身の身体に、チャイナドレス風の衣装がよく似合っている。

「失礼。つい、手が滑ってしまったわ」

特に反省した素振りもなく、長い髪の少女が言った。古城はムッとして彼女を睨み、

「どう手が滑ったら、フォークを他人の腕に向かって振り下ろそうとするのか、ぜひ教えて欲しいんだが……てか、なんか今、掛け声っぽいものも叫んでたよな!?」

「あなたが、下劣な性欲を剝き出しにした手で雪菜に触れようとするからよ、暁古城」

「なに……!?」

少女が自分の名前を知っていたことに、古城は驚いて目を眇めた。フォークを逆手に握ったまま、彼女は冷ややかに古城を呪んでいる。

出会った直後の雪菜に少し雰囲気が似ているが、こちらのほうが遥かに攻撃的だ。少しでも隙を見せたら、問答無用で襲われそうだ。

「誰だ、おまえ?」

古城は困惑を覚えながら少女に訊いた。周りにいたパーティの客たちも、ただならぬ雰囲気

を察してざわめき出す。雪菜が戻ってきたのはその直後だった。

「――紗矢華さん!?」

睨み合う古城たちの間に割って入った雪菜が、唖然として長い髪の少女の名を呼んだ。

その瞬間、紗矢華と呼ばれた少女は劇的な変化を見せた。硬い雪が花開くように、華やかな満面の笑みが広がり、全身から放たれていた殺意の波動が、優しい愛情に満ちた気配に変わる。

「雪菜！」

長い髪の少女が勢いよく雪菜に抱きついた。まるで奇跡的な再会を遂げた、仲のいい姉妹を見ているようだった。ポニーテールにまとめた後ろ髪が、喜ぶ犬の尻尾のように揺れている。

「久しぶりね、雪菜。元気だった!?」

「は、はい」

彼女との突然の再会に、雪菜は軽く戸惑っているようだった。再会の喜びよりも驚きのほうが勝っているという印象だ。しかしそんな雪菜の反応などお構いなしに、紗矢華という少女は自分の頬を、雪菜の首筋にぐりぐりと押しつけ、

「ああ、雪菜、雪菜っ……！　私がいない間に、第四真祖なんかの監視任務を押しつけられて可哀想に！　獅子王機関執行部も私の雪菜になんてむごい仕打ちをするのかしら！」

「あ、あの……紗矢華さん……!?」

「でも、もう大丈夫よ、この変質者があなたに指一本でも触れようとしたら、私が即座に抹殺

するわ。生命活動的な意味でも社会的な意味でも――」

「ちょっ……さ、紗矢華さん……さすがにそれは……やっ」

「おい」

雪菜にむしゃぶりつく紗矢華の隙だらけの後頭部に、古城がチョップを叩きこむ。きゃっ、と悲痛な声を上げて、紗矢華が怯えたように跳びずさった。

ようやく紗矢華から解放された雪菜が、ホッとしたような表情で古城の背後に回りこむ。

紗矢華は、殴られた後頭部を押さえて、キッと古城を睨み、

「なにするの。触らないでよ、第四真祖！　いえ、変態真祖！」

「誰が変態だ!?　言い直すな！　だいよんとへんたいって、言い間違うほど似てないだろ！」

古城が歯を剝いて怒鳴り返す　紗矢華は、ふん、と荒々しく息を吐き、

「そうね。失礼したわ、ド変態真祖。とりあえず雪菜があなたと同じ空気を吸わないように、半径五メートル以内に立ち入らないようにして欲しいんだけど。あと、そのいやらしい目玉を一個ばかり抉っておいて。あなたなんかに見られたら雪菜が汚れてしまうわ」

「抉るかっ！　なんなんだよ、おまえは。いきなり出てきて好き勝手言いやがって」

「近寄らないで。気持ち悪い」

威嚇するように古城にフォークを突きつけて、紗矢華が叫ぶ。

なんて失礼な女だ、と憤慨しながら古城は雪菜のほうに向き直り、

「紗矢華って、たしか姫柊がさっき言ってた元ルームメイトだっけか？」

「……はい」

どこか申し訳なさそうに古城を見上げてうなずく雪菜。そんな古城たちの会話を遮るように、紗矢華が横から割りこんできて、

「煌坂紗矢華。獅子王機関の舞威媛よ、あほつき古城」

「あ、か、つ、き、だ。わざとらしく言い間違えんな！」

古城もいい加減うんざりして怒鳴り返す。

不思議なことに、これだけの騒ぎを起こしていても、パーティ会場にいる客たちは、それを気にしている様子はない。どうやら雪菜がこっそりと人払いの呪術を使ったらしい

「舞威媛ってなんだ？　剣巫とは違うのか？」

その雪菜に古城がもう一度質問する。雪菜は小さく首を振り、

「どちらも同じ攻魔師ですけど、修めている業が違うんです」

「業？」

眉をひそめた古城を見て、紗矢華が得意げに言い放つ。

「舞威媛の真髄は呪詛と暗殺。つまり、あなたのような雪菜につきまとう変態を抹殺するのが、私の使命よ」

「つきまとってねえよ！　どっちかと言うと、つきまとわれてるのは俺のほうだ！」

「なに勝ち誇ってるのよ!?　べつにうらやましくなんかないんだけど！」
「うらやましがらせようと思って言ってんじゃねえよ！」
互いに激昂しながら古城と紗矢華が睨み合う。雪菜は目を覆いながら弱々しく首を振り、
「でも、どうして紗矢華さんが？　外事課で多国籍魔導犯罪を担当していたんですよね？」
「今もそうよ。この島には任務で来たの」
別人のように優しげな口調で紗矢華が答える。雪菜が驚いて目を細める。
「任務？」
「あなたと同じよ、雪菜。吸血鬼の監視役。アルデアル公が絃神市の住民に危険にさらさないよう、監視するのが私の任務。今は彼に依頼されて、あなたたちを案内に来たの」
紗矢華の投げやりな説明を聞いて、古城はようやく事態を把握する。
雪菜が古城の監視役として絃神島に来たように、紗矢華はヴァトラーの監視を命じられて、この船に乗りこんだのだ。ヴァトラーが危険な存在となった場合に、彼を抹殺するために。
だからといって、いきなり古城をフォークで刺そうとしたことの説明にはならないが
「もういいや。だったらさっさと案内しろよ」
「言われなくても連れて行ってあげるわよ。だからさっさと死んできてちょうだい」
「死ぬかっ！」
苛々と怒鳴り返しながら、古城は紗矢華のあとについて階段を上る。最後尾にいる雪菜が、

そんな古城たちの姿を心配そうに眺めている。

紗矢華の端整な後ろ姿を眺めて、古城はやれやれと溜息を洩らす

彼女はヴァトラーの依頼で、古城たちを彼の元に案内すると言った

だとすれば、昼間、招待状を届けるついでに式神たちに古城を襲わせたのも、彼女だろう。べつになにか特別な目的があったわけではない。ただの古城に対する嫌がらせだ。

どうやら紗矢華は、雪菜に対して姉妹同然の深い愛情を抱いているらしい。そんな彼女から見れば古城は、大切な雪菜を危険な目に遭わせる邪悪な吸血鬼というわけだ。

これで、もしも古城が雪菜の血を吸ったことがばれたら、紗矢華がどんな反応をするか想像するのも恐ろしい。古城が命を狙われるかも、と心配していた雪菜の気持ちがよくわかった。

しかし、古城にとっての本当の脅威は紗矢華ではない。

古城の〝血〟の昂ぶりが激しさを増している。強大な力を持つ吸血鬼が近づいていることを、古城の体内に流れる真祖の血が教えてくれているのだ。

相手の正体も目的も古城にはわからない。真祖同士は休戦協定を結んでいるというが、公式には存在しないはずの第四真祖にその協定が適用されるとも思えない。交渉の内容によっては、最悪、この場で戦闘になることもあり得る。

戦王領域の貴族。真祖直系の子孫たる純血の吸血鬼。第一真祖には及ばずとも、それに近い戦闘能力を持っていると考えていいだろう。

対する古城は、第四真祖と呼ばれてはいても、その能力をほとんど使いこなせない。まともに戦って勝てる見込みはほとんどなかった。

改めて不安と困惑を覚えながら、古城は船の上甲板に出る。

漆黒の海と夜空を背景にして、広大なデッキの隅に立っていたのは一人の男。

純白のコートをまとった美しい青年だ。長身だが線は細く、威圧感はない。

金髪を揺らして振り返った青年が、碧い瞳で古城を見た。

刹那、彼の全身が純白の閃光に包まれた。

「――先輩！」

真っ先に反応したのは雪菜だった。楽器ケースから槍を引き抜いて、古城の前に飛び出そうとする。その雪菜を庇って紗矢華も動いた。瞬きするほどの時間の出来事だ。

だが、彼女たちの機敏さをもってしても、純白の閃光は防げない。

コートの男が放った光の正体は、光り輝く炎の蛇。灼熱をまとった吸血鬼の眷獣だ。流星の如き速度で撃ち放たれたその眷獣に、古城はまったく反応できない。なにが起きているのかすらわからない。

「ぐお……っ……！」

反応したのは古城ではなく、古城の〝血〟の中に棲む眷獣だった。古城の全身が眩い雷光に包まれて、放たれた稲妻が炎の蛇を迎え撃つ。

第四真祖が従える、十二体の眷獣の中のひとつ。そして古城が唯一まともに制御できる眷獣、〝獅子の黄金〟の雷槌である。呆然としている宿主に代わって、敵の攻撃を防いでくれたのだ。

無闇に解き放てば、この船どころか周囲の港一帯を丸ごと破壊しかねない巨大な力――だが、そんな天災じみた獅子の眷獣も、今回はどうにか思いとどまってくれたらしい。

純白の炎蛇が消滅すると同時に、古城の稲妻も消滅する。

「あっ……ぶねえ！　なんだこれっ!?」

焼け焦げた甲板と、熱せられた大気。巨大な魔力同士の激突の余韻に、ようやく我に返った古城がうめく。そのとき突然、疎らな拍手の音が鳴り響いた。

拍手の主は、白いコートの男。古城に攻撃を仕掛けておきながら、それを防がれたことを、むしろ喜んでいるようにも見える。

「いやいや、お見事。やはりこの程度の眷獣では、傷をつけることもできなかったねェ」

のんびりとした声で男が言う。緊張感のない無邪気な声だ。

古城は低く身構えたまま男を睨んでいる。

相手の軽薄な態度の裏に潜む、巨大な力。それを無意識に察知して、古城の肉体が、警告を発していた。炎の蛇は彼の力の片鱗に過ぎない。もしも彼が本気で眷獣を解き放っていたら、

果たして〝獅子の黄金〟でも防ぎきれるかどうか

そんな戦慄を覚えながら、古城は近づいてくる相手を凝視する。

しかし次に男がとった行動は、古城の意表を衝くものだった。

彼は古城の前で片膝を突き、恭しい貴族の礼をとったのだ。

「御身の武威を検するがごとき非礼な振る舞い、衷心よりお詫び申し奉る。我が名はディミトリエ・ヴァトラー、我らが真祖〝忘却の戦王〟よりアルデアル公位を賜りし者。今宵は御身の尊来をいただき恐悦の極み」

あまりにも見事な彼の口上に、古城のほうがうろたえた。

銀色の棺を構えた雪菜、そして紗矢華までもが呆然とその場に立ち尽くしている。

「あんたが、ディミトリエ・ヴァトラー……？　俺を呼びつけた張本人？」

かすれた声で古城が訊いた。

ヴァトラーはニヤリと微笑んで顔を上げた。人懐こさと狡猾さが同居する悪戯っぽい微笑だ。

「初めまして、と言っておこうか、暁古城。いや、〝焰光の夜伯〟――我が愛しの第四真祖よ！」

そう言って、ヴァトラーは古城を愛おしげに見つめた。そして古城を迎え入れんとするかのように大きく両腕を広げた。やはりこうなるのか、と首を振る紗矢華。唖然とする雪菜。

「……はい？」

告げられた言葉の意味を理解できずに、古城は弱々しい呟きを洩らす。
それが〝第四真祖〟暁古城とアルデアル公ディミトリエ・ヴァトラーの、ある意味、運命の出会いだった。

11

『え？　それでおまえは逃げてきたわけ？』
電話回線の向こうから、幼なじみの呆れたような声が聞こえてくる
ベッドの上に寝転んでいた浅葱は、少しムッとして乱暴に跳ね起きた。
時刻は間もなく午前零時。見慣れた自宅。タンクトップに下着だけという、あまり他人に見せられない恰好だ。湿気の残った風呂上がりの髪には、バスタオルが巻かれている
「べ……べつに逃げたわけじゃないわよ　ただちょっと頭にきたっていうか、馬鹿馬鹿しくてつき合いきれなくなったっていうかさ」
長電話の相手は矢瀬基樹　なにしろつき合いが長いせいで、お互いに恋愛感情とは無縁だが、気軽に腹を割って話せる貴重な友人だ。球技大会の件で文句を言ってやろうと電話したはずが、いつの間にか話題は古城に対する愚痴に変わっていた
『中等部の転校生がチアガールの衣装で攻めてきたのはたしかに誤算だろうけどよ、おまえも

スコート穿いてたんだし、戦力的には互角だったんじゃねえの。むしろ意外性という点では、おまえのほうが有利だったかもよ』

「戦力って……いったいなんの話よ？」

揶揄するような口調の矢瀬に、浅葱が苛々と訊き返す。矢瀬は、そうだな、と少し考えて、

『古城の所有権を賭けた女同士の仁義なき争い？』

「違うって。古城が誰とつき合おうが、あたしには、む、無関係だしさ」

『俺にはそうは見えないけどな』

妙に真面目くさった声で矢瀬が言う。うっさいわね、と浅葱は声を低くする。

「あたしは、あのバカがコソコソ隠れてなんかしてるのが気に入らないの。姫柊って子とつき合うならつき合うで堂々としてればいいのに。あたしたちにまで内緒にしてるのがムカつくんだってば。水臭いでしょうが」

当然の同意を求めた浅葱に、しかし矢瀬は意外な言葉で応じた。

『そりゃ本当につき合ってないから、じゃねえの』

「え？」

『だってよ、古城がおまえのことをマジでただの友達としか思ってないんなら、姫柊ちゃんとつき合ってるのを秘密にする理由がねえだろ』

思いがけず論理的な矢瀬の発言に、浅葱は渋々と納得する。

「うん……まあね。むしろ自慢するとこだよね」
『かといって、あいつに股をかけるほどのマメさがあるとは思えない』
「あー……ないね。それはない」
今度は浅葱も即座に同意する。だろ、と矢瀬が得意げに続ける。
『だからやっぱり古城には、姫柊ちゃんとつき合ってることを俺らに隠す理由がない。なのに、あいつは後ろめたそうな顔をしながら姫柊ちゃんと二人でコソコソ行動してる……』
「うん」
『そうなると考えられる可能性はひとつだわな』
「……なに？」
『古城はあの転校生に、なにか弱みを握られてんだわ、きっと』
「は、はい？　弱み？」
予想の斜め上を行く矢瀬の推理に、浅葱はしばし唖然とする。しかし矢瀬は真面目な口調で、
『そうだなー……たとえば恥ずかしい秘密を知られて脅迫されてるとか……なんか心当たりがあったりしないか？』
「そういえば……たしかに転校生と一緒にいるときのあいつって挙動不審よね」
ここ最近の古城の態度を思い出しながら、浅葱はうめいた。不愉快な記憶ばかりだが、あれが姫柊雪菜に脅された結果の行動だとするといろいろ納得できる。そういえば雪菜自身も言っ

ていた　自分は暁古城の監視役なのだと

『な。そうだろ？』

矢瀬が電話の向こうで勝ち誇ったような声を出す　浅葱はそこはかとなくむかついて、

「それで、あたしになにをどうしろって言うのよ」

『そうだな……とりあえず彼女に対抗して、古城を誘惑してみるっていうのはどうだ？』

「はぁ!?　ゆ、誘惑って、なんであたしが……!?」

あまりにも無責任な矢瀬のセリフに、浅葱は狼狽して怒鳴り返す。しかし矢瀬はあくまでも真剣な口調で言う

『おいおい、色仕掛けは情報収集の基本だろ　ハニートラップってやつ』

「基樹……あんた、なんかものすごく悩しそうね」

『いやいや、なに言ってんだ。俺は大切な幼なじみのために、いつになく真面目に考えてるぜ。古城のことも、あいつが誰にも相談できずに悩んでるなら、友達として力になってやりたいじゃんよ』

「そ、そうね……友達としてね。あくまでも友達として」

矢瀬がロクでもないことを企んでいるのはわかっていたが、そんなふうに言われてしまうと浅葱としても反論するのが難しい。しかし色仕掛けといっても、自分と古城の関係でいったいなにをすればそんな状況に持ち込めるのか、と浅葱は途方に暮れる。あの鈍感男を簡単に籠絡

できるなら、浅葱としてもこんな苦労はしていない。

『じゃあ、俺はそろそろ緋稲さんに電話する時間だから、この話はまた今度な』

矢瀬が唐突にそう言って、一方的に会話を切り上げる。緋稲さんというのは、矢瀬が夏休み前からつき合い始めたという年上の彼女の名前である。

「ちょっ……話はまだ終わってな……あんた、それが大切な幼なじみに対する態度!?」

浅葱が猛烈に抗議するが、電話はすでに切れていた。浅葱は、自分の携帯電話を乱暴にベッドに投げ捨てる。

「まったくもう、どいつもこいつも……」

ぶつぶつと文句を言いながら、浅葱は机の前に座った。クローゼットからあふれ出した洋服。雑誌とメイク用品とぬいぐるみが少々。浅葱の自室はごくありふれた女子の部屋だ。

だが、この机周りの一角だけは違う。無骨な業務用のディスプレイに、ラックマウント式の並列PCクラスタ。ちょっとしたIT企業や大学の研究室レベルのコンピュータが、勉強机に並んで無造作に置かれている。どことなくシュールな光景である。

ごく一部の友人たちしか知らないことだが、浅葱の特技はコンピュータープログラミング。もちろん自分で名乗ったりはしないが、〝電子の女帝〟などという世にも恥ずかしいあだ名で呼ばれるハッカーなのである。個人的な趣味と実益を兼ねて、綾神島内の企業や人工島管理公社から高額なバイトを請け負うこともある。

とはいえ今日は仕事をする気分ではない。とりあえず築島倫がまだ起きているなら愚痴でも聞いてもらおうと、浅葱はメッセンジャーを起動して、ふと見慣れないメールの存在に気づく。発信者のアドレスは、カノウ・アルケミカル・インダストリー社。浅葱も何度か仕事を依頼されたことがある紘神市内の大手企業である。

だが、これは仕事の依頼のメールではない。書かれていたメッセージはひと言だけ。

『解読希望――』

「なにこれ？　ウィルスメールって感じでもないけど……」

浅葱は首を傾げながら、添付されていたデータを展開する。

表示されたのは、得体の知れない奇怪な文字の羅列だった。恐ろしく複雑な言語体系。破綻した論理配列。これまでに地球上に存在したどの民族の言語とも違う。だが魔術や呪術で使用される呪文とも違う。いかなる言語学者、あるいは魔術師の集団をもってしても、これを解読するのは困難だろう。だが――

「パズル？　このあたしに勝負を挑むなんて、いい度胸ね」

ふふん、と愉しげに息を吐いて、浅葱がディスプレイに向き直る。

ハッカーとしてのカンが教えてくれている。これは人間のために存在する文字列ではない。だから普通の言語学的アプローチでは決して解読できない。

これは人間以外のモノのために造られた言語。今の人類が知らない特殊なアーキテクチャを

操るための命令体系――プログラムだ。

面倒臭い現実からの逃避と腹いせ。そして純粋な知的好奇心に衝き動かされて、浅葱は文字列の解読に没頭していく。奇怪な文字が解体されて、翻訳された文字が表示される。

「〝ナラクヴェーラ〟……？」

ディスプレイに浮かび上がった単語を眺めて、浅葱は素っ気なく呟いた。

絃神市〝魔族特区〟の夜が更けていく――

Revelation Of The Lotus

1

海を見下ろすマンションの一室。窓辺から洩れ射す朝陽を浴びて、暁古城は目を覚ました。

「古城君！　古城君ってばもう！」

目覚まし代わりに耳元で鳴り響いているのは、普段より五割増しで甲高い凪沙の声だ。

とっくに制服に着替えた彼女が古城の部屋のカーテンをこじ開けて、直射日光から逃げ惑う古城のタオルケットを奪い取る。

「朝だよ、起きなよ。遅刻するよ。朝ご飯どうするの。あー、また目覚まし時計勝手に止めて。ちゃんと教科書は揃えたの？　宿題は？　服もこんなに脱ぎ散らして……って、なにこれ!?　なんでこのタキシード焼け焦げてるの!?」

「悪い、凪沙……あと三十秒だけ寝かせてくれ」

うつ伏せて枕に顔を埋めながら、古城はかすれた声で頼りなくうめいた。

ディミトリエ・ヴァトラーとの面会を終えて、古城たちが帰宅したのは昨夜の深夜二時過ぎ。どう考えても寝不足だ。タキシードが焦げたのは、もちろんヴァトラーの攻撃のせいで、そのことも疲労に拍車をかけている。

「古城君、さっきもそう言ったじゃない。もう、本当に遅刻しても知らないからね」

諦めたように溜息をついて、凪沙が部屋を出て行く気配がした。
取り返したタオルケットで頭を覆って、古城はホッと一息つく。遠ざかる妹の足音を聞きながら、寝ぼけた頭で古城が思い出していたのは、昨夜のヴァトラーとの会話内容だった。

「――今の気配、〝獅子の黄金〟だね……ふぅん、普通の人間が第四真祖を喰ったって噂、わざわざ確かめに来たのも、案外無駄じゃなかったわけだ」
古城にいきなり攻撃を仕掛けておきながら、戦王領域の貴族は悪びれもせずにそう言った。クルーズ船〝オシアナス・グレイヴ〟の広大な上甲板。夜風にコートの裾を遊ばせながら、彼は愉しげな表情で笑っている。
「……〝獅子の黄金〟を知ってるのか……？」
無邪気にすら思えるヴァトラーの笑顔を、古城は困惑の表情で睨みつけた。
見た目は、十代前半の若者だが、相手はまぎれもない〝旧き世代〟の吸血鬼。外見から想像するよりも何倍もの長い時間を生きている怪物だ。当然、彼の持つ記憶の量は、古城のそれを大きく上回る。古城の知らない多くの知識を、ヴァトラーは持っているはずだ。そしてそれは第四真祖――すなわち古城自身にまつわる知識においても、おそらく例外ではない。
「〝焔光の夜伯〟アヴローラ・フロレスティーナの五番目の眷獣だろ。制御の難しい暴れ者と聞いてたけど、うまく手懐けてるじゃないか。よっぽど霊媒の血がよかったんだな」

淡々と告げられたヴァトラーの言葉に、古城は無言で顔をしかめた。先代の第四真祖〝焔光の夜伯〟アヴローラ・フロレスティーナ　その言葉の響きが古城の精神をかき乱し、耐え難いほどの頭痛を呼び起こす。

かつてどこかで出会ったはずの彼女のことを、古城は断片的にしか思い出せない。呪いにも似た強固な封印が、古城の記憶を奪っているのだ。

「あんたとアヴローラ……どういう関係なんだ？」

原因不明の激しい頭痛に耐えながら、古城が訊いた。

ヴァトラーは、芝居がかった仕草で自分の胸に掌を当て、懐かしげに目を細める。

「最初に言わなかったっけ？　ボクは彼女を愛してるんだ。永遠の愛を誓ったんだよ」

「愛を誓った……って、あんたは第一真祖の一族なんじゃないのかよ？」

「まあね。でもうちの真祖は、そういうのをあまり気にしない吸血鬼だからね」

そう言ってヴァトラーは、ニヤリと白い犬歯を剝いた。

「要は〝血〟が強ければいいのさ。先祖が誰だろうが無関係に、強い血族が生き残る。吸血鬼ってのはそういうものだろ？　そんなわけで仲良く愛を語らおうじゃないか、暁古城」

「待て待て待てっ、なんでそうなる!?」

近づいてくるヴァトラーを、古城が慌てて制止する。

「ん？」

「おまえが愛を誓った相手は、アヴローラじゃないのかよ!?」
「だけど彼女はもういない。きみが彼女を喰ったんだろう？」
平然と投げかけられたヴァトラーの言葉に、ぐっ、と古城が息を呑む。
古城にはその夜の記憶がない。なにが起きたのか思い出せない。だが、ほんの数カ月前まで普通の人間だった古城は、そのときを境に第四真祖と呼ばれる吸血鬼の力を手に入れた。
考えられる可能性はただひとつ、それは古城が真祖を喰ったということだ。先代の第四真祖を融合捕食して、その存在と能力を奪ったのだ。
人間だったはずの古城が吸血鬼を喰う　想像するだに忌まわしい光景である
しかしヴァトラーの声音には、古城を責めるような響きはなかった。むしろ彼は古城を賞賛するように微笑んで、歪めた唇の端をちらりと舐める。
だからボクは、彼女の〝血〟を受け継いだきみに愛を捧げる　彼女に永遠の愛を誓ったボクとしては、当然の行動じゃないか」
「その理屈がおかしいって言ってんだよ！　血筋が同じならなんでもいいのかよ!?」
「もちろんそうだよ。きみが第四真祖の力を受け継いだということは、つまりは彼女がきみを認めたということだ。それに比べれば、ボクたちが男同士だという事実なんて些細なことだよ」
「些細じゃねえーよ。そこは重大な問題だから。あと、その舌使いはやめろ！」
挑発するように舌先をちらつかせる青年貴族に、古城が怒鳴った。

そして、じりじりと後ずさる古城を押しのけ、楽器ケースを提げた雪菜が前に出る。
「アルデアル公――恐れながらお尋ねします」
意外な邪魔者の乱入に、ヴァトラーが不思議そうな表情を浮かべた。これまで雪菜の存在を、石ころほどにも意識していなかったらしい。
「きみは？」
「獅子王機関の剣巫、姫柊雪菜と申します。今夜は第四真祖の監視役として参上いたしました」
「ふぅん……なるほど。紗矢華嬢のご同輩か」
恭しい言葉遣いで名乗る雪菜を、ヴァトラーは退屈そうに見下ろして呟いた。
「ところで古城の身体から、きみの血と同じ匂いがするんだが……もしかしてきみが〝獅子の黄金〟の霊媒だったりするのかな？」
「……っ!?」
思いがけないヴァトラーの指摘に、雪菜の全身がぎこちなく硬直する。
表情を凍りつかせていたのは、古城も同じだ。先代の第四真祖から古城が受け継いだ眷獣は、全部で十二体。しかし彼らは古城をいまだに主人として認めておらず、今も制御不能な危険な状態が続いている。
そんな中で、〝獅子の黄金〟は古城が手懐けることのできた唯一の眷獣だった。いろいろあって紆余曲折の末、雪菜の血を吸うことで、古城はようやく自分の眷獣の一体を掌握するこ

とができたのだ。監視役である彼女の血を吸った、などという事実は、もちろん迂闊に他人に話せることではなかったが――

「血の匂い……って、そんなことまでわかるものなのか……!?」

占城が思いきり動揺しながら訊き返す。背後から突き刺さるような視線を感じる。振り返るまでもなく原因はわかっていた。煌坂紗矢華が憎しみに満ちた目つきで占城を睨んでいるのだ。吹きつけてくる凄烈な殺気に、占城の背筋が冷たくなる。紗矢華は自分を呪詛と暗殺の専門家だと呼んでいたが、たしかにこれだけの殺気なら、人の一人や二人、簡単に呪い殺せそうだ。

「いや、嘘だよ。ちょっと言ってみただけだ」

そんな占城たちの動揺を愉しむかのように、ヴァトラーが満足そうな笑顔で言う。

「でもまあ、きみが占城の〝血の伴侶〟候補だというのなら、ボクにとっては恋敵ってことになる。それに敬意を表して特別に質問を受けつけてあげるよ。なにが聞きたい？」

「前提からしていろいろ間違ってるだろ。候補でもねえし、恋敵でもねえよ！」

古城が律儀に反論するが、ヴァトラーは何事もなかったかのように聞き流すだけだ。

雪菜は重々しく息を吐き、険しい表情でヴァトラーを真っ直ぐに見据えた。

「貴公が絃神市を来訪された目的についてお聞かせください。そうやって第四真祖といかがわしい縁を結ぶことが目的なのですか？」

咎めるような雪菜の発言にも、ヴァトラーは笑顔を崩さない。むしろ愉快そうに眉を上げ、

「ああ、そうか、忘れていたな。本題はべつにある。もちろんそっちもあるんだけどね」
「やっぱりそっちもあるのかよ」
古城がうんざりと呟いた。雪菜は、攻撃的な気配を漂わせながら、威嚇するようにヴァトラーを睨んで、
「本題というのは……？」
「ちょっとした根回しってやつだよ。この魔族特区が第四真祖の領地だというのなら、まずは挨拶しておこうと思ってね。もしかしたら迷惑をかけることになるかもしれないからねェ」
そう言いながらヴァトラーは優雅に指を鳴らす。それが合図になって、船内からぞろぞろと大勢の使用人たちが現れた。彼らが運んできたワゴンの上には、料理の皿が満載されている。パーティ会場に出されていた食事が、みすぼらしく思えてくるほどの豪華料理たちだ。
「――迷惑とは、どういうことですか？」
出された料理には目もくれずに雪菜が訊く。
ヴァトラーは、生ハムを一切れ、行儀悪くつまみ上げながら笑った。
「クリストフ・ガルドシュという名前を知っているかい、古城？」
「いや？　誰だ？」
首を振る古城に、ヴァトラーの執事らしき男がワイングラスを手渡してくる。未成年なので、と断りかけた古城だが、男の顔を見て逆らうことを諦めた。物腰は静かで知性的だが、凄まじ

い威圧感を備えた強面の老人だ。頬に残された大きな古傷が、彼の苛烈な人生を想像させる。

ヴァトラーも同じように執事からグラスを受け取って、乾杯、と古城の前に掲げてみせた悔しいが絵になる光景だ。

「戦王領域出身の元軍人で、欧州では少しばかり名前を知られたテロリストさ　黒死皇派という過激派グループの幹部で、十年ほど前のプラハ国立劇場占拠事件では民間人に四百人以上の死傷者を出した」

「黒死皇派って名前は聞いたことがあるな。だけど、何年も前に壊滅したんじゃなかったか？たしか指導者が暗殺されて――」

古城は、うろ覚えの古いニュースを思い出して呟いた。当時小学生だった古城ですら覚えているのだから、かなりの大事件だったはずである。

「そう。彼はボクが殺した　少々厄介な特技を持った獣人の爺さんだったけどね」

ワイングラスを傾けながら、ヴァトラーは悠然と笑って答える　古城は黙って目の前の青年貴族を凝視した。今更ながらこの軽薄そうな男が、世界的な重要人物なのだと実感する。

「ガルドシュは、その黒死皇派の生き残りだ。正確に言えば、黒死皇派の残党たちか、新たな指導者としてガルドシュを雇ったんだ。テロリストとして圧倒的な実績を持つ彼をね」

「ちょっと待て。あんたが絃神島に来た理由に、そのガルドシュって男が関係してるのか？」

唐突に嫌な予感を覚えて、古城が訊いた。ヴァトラーは感心したようにうなずいて、

「察しがよくて助かるよ、占城。そのとおりだ。ガルドシュが、黒死皇派の部下たちを連れて、この島に潜入したという情報があった」

「……なんでヨーロッパの過激派が、わざわざこんな島に来るんだよ？」

「さあね……まったくなにを考えてるんだか」

青年貴族のとぼけた態度に、古城は苛々と歯を軋ませる。それを無言で眺めていた紗矢華が、突然、事務的な口調で古城に告げた。

「黒死皇派は、差別的な獣人優位主義者たちの集団よ。彼らの目的は聖域条約の完全破棄と、戦王領域の支配権を第一真祖から奪うこと――」

そんなことも知らないのか、とでも言いたげな彼女の冷ややかな態度に、古城は思わずムッとして、

「ますますこの島は関係ねーじゃんかよ」

「いえ、先輩。違います」

雪菜が小声で古城をたしなめた。そうそう、ヴァトラーも悪戯っぽく片目を瞑って、

「紋神島は魔族特区　聖域条約によって成立している街だ。彼らが、この街で事件を起こすことには意義があるのサ。黒死皇派の健在を印象づけるという程度の自己満足だけどねェ」

「な……」

そんな勝手な理屈があるか、と古城は低く唸る。

「とはいえ、魔族特区がある国は日本だけじゃない。彼らが絃神島に来たことには、ほかにもなにか理由があると考えるのが妥当だろうねェ」

「なにか……ってなんだ？」

「そんなことは知らないよ」

ヴァトラーがぞんざいに首を振った。そして奇妙に浮き立つような声で、

「考えられるとすれば、そうだな、真祖を倒す手段を手に入れるため、というのはどうかなァ。なにしろ彼らの最終目的は第一真祖を殺すことだからねェ」

「……あんたはそれでいいのかよ」

古城は呆れ顔で溜息をついた。

真祖とは、もっとも古く、もっとも強大な力を持つ吸血鬼だ。その真祖を倒す手段を手に入れる、ということは、ほかのすべての吸血鬼にとっても黒死皇派の存在が脅威になるということを意味している。危険なのは、ヴァトラーも同様のはずなのだ。だが、

「べつに構わないよ……と、あの真祖なら言いそうだけどねェ　ボクにもいろいろと立場ってものがあってサ、そうも言ってられないわけだ」

他人事のような態度で両腕を広げて、ヴァトラーは意味ありげな含み笑いを洩らす。

そんな得体の知れない青年貴族を、雪菜が生真面目な表情で睨めつけた。

「クリストフ・ガルドシュを、暗殺なさるつもりなのですか？」

「まさか、そんな面倒なことはしないよ。そもそもボクの眷獣たちは、そういう細かい作業に向いてないんだ。街ごと焼き払うとか、そういうのは得意なんだけどねェ」

ヴァトラーが、のらりくらりと雪菜の詰問をはぐらかす。自慢することか、と古城は密かに嘆息する。しかし吸血鬼の眷獣が、個人を相手にするような精密攻撃に向いてないのは事実だった。ヴァトラーにテロリストと戦う意志がないというのなら、ひとまずは安心だ　と古城が胸を撫で下ろしかけたそのとき、

「でもサ、もし仮にガルドシュのほうからボクを殺そうと仕掛けてきたら、応戦しないわけにはいかないよねェ　自衛権の行使ってやつだよ　そうだろ？」

油断した古城を嘲笑うかのように、ヴァトラーはそう言って同意を求めてくる

そのときになって古城もようやく、彼の目的を理解した

ヴァトラーは、黒死皇派と呼ばれる過激派グループの指導者を殺した、いわば彼らの仇敵だ。黒死皇派の残党たちは、ヴァトラーに復讐する機会を、今も待ちわびていることだろう。

もしもガルドシュが本当に真祖を殺す力を手に入れたなら、彼は真っ先にヴァトラーを狙う。それこそがヴァトラーの狙いでもあるのだ。

「あんたが絃神島に来たのは、テロリストを挑発して誘き出すのが目的か、こんなクソ目立つ船で乗りつけたのも　」

「いやいや……どちらかといえば、愛しいきみに会うのが目的なんだが」

ヴァトラーはそう言って、しつこく古城に色目を使ってくる。古城は声を荒らげて、
「ふざけてる場合か。戦争がしたけりゃ自分の領地でやれ。他国の街に迷惑かけんな！」
「もちろんボクはそう願ってるよ。この都市の攻魔官たちがガルドシュを捕まえてくれれば文句はない。手間が省けていいよねェ。彼らがガルドシュを捕えられるなら、の話だけどサ」
やれやれと肩をすくめて、ヴァトラーが大げさに息を吐く。そして彼は、ゾッとするような美しい笑顔を古城に向けた。
「だが、ボクが従えている九体の眷獣　こいつらは宿主であるボクの身に危険が迫ったら、なにをしでかすかわからない。この島を沈めるくらいのことは平気でやるヨ。だから、きみには最初に謝っておこうと思ったのサ」
「なっ……」
古城は今度こそ絶句した。
ヴァトラーは、絃神島を沈める気があると言ったのだ　彼の命を狙う、せいぜい数十人のテロリストを始末するために、絃神島ごとまとめて滅ぼすと
そして、それを古城の前で宣言した。それはつまり、古城が止めようとしても無駄だという彼の意思表示でもある。もしも邪魔をするなら古城も倒す――それが、軽薄そうな彼の言葉に隠された、ディミトリエ・ヴァトラーの本心だ。
腹が立たないわけではない　だが、事実、古城にはヴァトラーを止めるすべがない　刀すく

で彼を止めようにも、古城とヴァトラーが戦えば結果的に絃神島には甚大な被害が出るからだ。ヴァトラーが正当防衛を主張する限り、雪菜たち獅子王機関も彼には手が出せない。正式な外交使節であるヴァトラーを、テロリストに狙われているというだけの理由で絃神島から追い出すことも不可能だ。

八方塞がりの状況に、古城が絶望を覚え始めたそのとき――

「せっかくですが、そのようなお気遣いは無用でしょう、アルデアル公」

冷たく澄んだ声で献言したのは雪菜だった。

「ひ、姫柊？」

「……どういうことかな？　まさか古城が、ボクの代わりにガルドシュを始末してくれるとでも？　だけど第四真祖のやつよりは、まだボクの眷獣たちのほうが大人しいと思うけどね」

古城とヴァトラーが、それぞれ意外そうな表情で訊き返す。

端整な面立ちに、静かな決意を浮かべて雪菜は首肯し、

「そうですね。ですから、わたしが第四真祖の代わりに、黒死皇派の残党を確保します」

「――雪菜!?」

紗矢華が悲鳴のような声を洩らした。有能ぶっている彼女も、雪菜のことになるとそんな余裕は吹き飛ぶらしい。しかし古城にも紗矢華が焦る気持ちはよくわかる。

「なんでそうなる!?　代わりもなにも俺はガルドシュとかの相手をする気なんて――」

「先輩たちは黙っていてください。監視役として当然の判断です。第四真祖をテロリストと接触させるわけにはいきませんから。相手が真祖を殺そうとしているのなら、なおさら」

抑揚のない硬い声で雪菜が言う。傍目には冷静そうに見えるが、これは半ば意地になっているときの彼女の特徴である。なまじ生真面目な性格だけに、一度思いこんだら頑固なのだ。

そしてヴァトラーは、そんな雪菜をなぜか警戒したように見つめて、

「ふぅん……なるほど。面白い……さすがにボクの恋敵になろうというだけのことはあるな」

「え？　いえ、べつにそういうわけでは……」

雪菜が強張っていた表情を緩めて、戸惑ったような声を出す。

しかし青年貴族は愉快そうに、そしてどこか酷薄そうに微笑んで宣告した。

「ならば、まずは獅子王機関の剣巫の実力、見せてもらおうか　古城の伴侶にふさわしいか、見極めさせてもらうよ」

勝手に決めるんじゃねーよ、という古城の呟きは、睨み合う雪菜たちにきっぱり無視される。

ふと見れば紗矢華は軽い放心状態で、絶句したまま固まっていた。黙っていろと雪菜に言われたことが相当にショックだったらしい。

挑発的に微笑む青年貴族に向かって、雪菜が静かにうなずいてみせる。

それが昨夜のヴァトラーとの遭遇の顚末。第一真祖の使者と古城たちの深夜の会談は、こうして終わりを告げたのだった。

そして――

「古城！　古城ってば！」

不意に耳元で聞こえてきた声に、古城は驚いて目を覚ます。

決して不愉快な声ではない。むしろ耳に馴染んだ響きだ。ただ強烈な違和感がある。なぜ彼女の声がここで聞こえてくる――？

「いつまで寝てるの。ほら、早く起きないと遅刻するわよ」

乱暴に身体を揺すられて、古城はゆっくりと瞼を開けた。

長い夢を見ていたせいか、意識がまだ少し混乱している。視界に映る少女の姿に、今ひとつ現実感がない。手入れの行き届いた髪と、形のいい眉。意外なほどに整った華やかな顔立ち。柔らかな体温とほのかな石鹸の香りに、古城はぎょっとして起き上がり、

「あ、浅葱？」

「おはよ、古城。遅いわよ」

早朝の暁家。見慣れた自室。寝起きの古城を見下ろして、藍羽浅葱が笑っていた。

2

一般に驚きというものは日常との落差に対して発生するのであって、状況があまりにも突飛すぎると、むしろ冷静になる、というのはよく聞く話だ。

ゆえに戦王領域の貴族などという現実離れした人物との遭遇よりも、自宅のベッドに出現した同級生の女子のほうが、意表を衝かれるという意味で遥かに衝撃度は上だった。

呆然としている古城に馬乗りになって、浅葱が古城の鼻に指を当ててくる。

「まったく古城ったら。いつまでも寝てると悪戯しちゃうゾ！」

「……なにやってんだおまえ。なんか変なものでも喰ったのか？」

あまりにも可愛らしい彼女の仕草に、むしろ不気味さを感じて古城はうめいた

顔の造作だけなら浅葱は文句なく美人の範疇に入るが、間違っても男子に愛想を振りまくタイプではない。気まぐれで色気とは無縁で、その代わりに余計な気遣いも要求しない。古城に言わせれば、むしろ対等の男友達に近い分類である　照れくさくて口には出せないが、そこが彼女の美点だとも思う。そんな相手にいきなり可愛く迫られても、警戒心しか感じない。

浅葱本人も、やはり無理があると自覚したのか、いつもの皮肉っぽい口調に戻って、

「違うわよ。男の子はこういうのが好きだって……その……ネットに書いてあったから」

「よくわからないけど、その情報は、たぶんいろいろ間違ってると思うぞ」
「あー……やっぱり？　なーんかおかしいとは思ったのよね、あたしも」
やれやれ、と億劫そうに嘆息しながら、浅葱が天井を仰ぐ。
そんな彼女の態度を見て、古城は確信する。どうやら浅葱は、なにかべつの目的があって古城の寝起きを襲撃したらしい。どうせろくな目的ではないのだろうが――
「つか、早く退いてくれ。重い」
「あんた何気に失礼なことをはっきりと言ってくれるわね。言われなくてもどくわよ　て、なによ、この硬いの……」
よいしょ、と寝ている古城を跨いでベッドを降りようとした浅葱が、何気なく触れた異物の感触に首を傾げる。仰向けになっている古城の下腹部。朝の生理現象によって活性化した肉体の一部を、浅葱の繊手が無造作に握っていた。
「こ、こここここ古城っ！」
自分が触れているものの正体に気づいて、浅葱が悲鳴混じりの怒声を放つ。女姉妹しかいない浅葱にとって、それは何気に恐怖の対象だったらしい。古城はベッドの上で跳びはねる彼女に翻弄されながら、
「なんで俺が怒られるんだよ!?　おまえが勝手に乗っかってきたんだろうが！」
「もういやー……なんてもの触らせるのよ。なんかこりこりした感触が……うう、気持ち悪い」

「なすりつけるなっ！」

浅葱の反応に地味に傷つきながら、古城も反論。暴れる彼女を落ち着かせようとして、そのまま二人もつれるような形でベッドに倒れこみ、

「――浅葱ちゃん、ごめんね押しつけちゃって。あたしそろそろ、チア部の朝練に行かなきゃなんだけど、古城君、起こしてくれたかな？」

そのとき乱暴に部屋のドアを開けて、バタバタと慌ただしく飛びこんできたのは凪沙だった。ベッドの上で絡まっている古城たちを見て、彼女の笑顔が凍りつく。

古城と浅葱も、もつれ合った姿のまま硬直した。部屋の中には息苦しいほどの静寂が訪れた。

「……なにやってるの、二人とも」

その静寂を破って、凪沙が厳かに訊いてくる。

「な、凪沙……!?　そうか、浅葱を勝手に家に上げたのはおまえか……！」

古城はどうにか状況を把握する。考えてみれば当然だった。いくら浅葱が傍若無人でも、一人で勝手に古城の部屋にまで上がりこむのは不可能だ。誰か彼女を家の中に招き入れる人間がいなければ。

しかしその共犯者の凪沙も、よもや古城たちがこんな行為に及ぶなどと想像していたはずもなく、

「ベッドの上にまで上がってもらった覚えはないんだけど　浅葱ちゃんになに握らせてるの、

古城君……！」

「俺のせいなのかよ――!?」

明らかな不可抗力の責任を問われて、古城は泣き出したい気分になる。そしてさらにダメ押しのように、仁王立ちに立つ凪沙の背後から、小柄な人影がひょっこりと顔を出し、

「……先輩？　なにかあったんですか？」

「あ、ダメ！　こんな不潔な人たちのことを見たら雪菜ちゃんが汚れるから！」

「……え？」

きょとんと目を瞬きながら雪菜が部屋の中をのぞきこみ、その瞬間、彼女の瞳から、一切の感情が消えた。顔立ちが並外れて整っているだけに、人形のような無感動な瞳が恐怖をそそる。

「ちょっと待て!?　なんで姫柊まで家の中に……！」

「古城君が寝坊するからいけないんでしょ！　この暑いのに外で待たせとくわけにはいかないから、家の中で涼んでてもらおうと思ったの！」

早口でまくし立てられて古城は沈黙する。

なるほど。べつに凪沙にも古城を陥れようという悪意があったわけではないらしい。だが、それなのに古城の部屋に立ちこめるこの居たたまれない空気はなんなのだろう。

浅葱は半ば押し倒されたような姿勢のまま、逃げようとする古城の手首をがっちりと固定し、挑発的な視線を雪菜に向けている。対する雪菜の表情は読めない。

「ごめんね雪菜ちゃん……もしかして、怒ってる？」
「いえ、べつに」
こわごわと不安そうに訊いてくる凪沙に、獅子王機関の剣巫は穏やかに首を振る。
そして雪菜は何事もなかったかのように古城たちに会釈し、
「わたしはやっぱり外で待ってますから、先輩方、どうぞごゆっくり」
そう言い残して静々と部屋を出て行った。まったく普段どおりのクールな態度である。
だが、玄関のドアが閉まる気配があって二十秒ほど経った頃。
ドォン、という落雷のような音が聞こえて、マンションが揺れた。
まるで空手の達人が、壁に向かって腹立ちまぎれに前蹴りをぶちかましたような衝撃だった。わけもなく背筋に冷たい感触を覚えて、古城は戦慄する。
浅葱は、そんな古城の反応と、雪菜が立ち去った方角を興味深そうに見比べながら、
「あれって、やきもちなのかしら？」
「それはないだろ。べつにつき合ってるわけでもないんだし」
たいして深く考えもせずに古城は答えた。浅葱がなぜか目を大きくして古城を見つめてくる。
「……そう。つき合ってるわけじゃないんだ」
念押しするようにそう呟いたあと、浅葱は雪菜が出て行った方角を指さして訊いた。
「彼女っていったいどういう子なの？」

「どうって、見た感じそのままだよ。悪いやつじゃない。たまに迷惑なときもあるけどな」
つきまとわれたり、監視されたりしている現状を思い出しながら、古城は薄く溜息をつく。
「古城って、あの子になにか弱みを握られてたりするわけ？」
「よ、弱み？」
「そうね、他人に言えない秘密とか」
浅葱がじりじりと古城に顔を近づけて訊いた。
「い、いや……べ、べつにそんなことはない……ぞ」
古城は背中を汗で濡らしながら、無意識に浅葱から目を逸らす。
言われてみれば心当たりが多すぎた。第四真祖などと呼ばれる吸血鬼であること。つい先日もその能力で街を焼き払い、数百億円の損害を出したこと。そして彼女の血を吸ってしまったこと――人生が傾くレベルの秘密を、雪菜には握られまくっている気がする。
「ふうん。なるほどね……基樹もたまにはいいこと言うわね」
挙動不審になった古城を眺めて、浅葱は満足げにうなずいた。
「矢瀬？　あいつがなにか言ったのか？」
古城は激しく不安になって訊き返す。どうやら今朝の浅葱の奇行は、あの男の入れ知恵だったらしい。だがしかし、
「悪いけどあたし、やっぱり先に行くわ」

浅葱は妙に晴れやかな笑顔でそう言うと、古城を踏みつけながらベッドから飛び降りた。
「あんたも遅れずに学校来なさいよね　凪沙ちゃん、学校まで一緒に行こ！」
「お、おい。浅葱」
まだ少し憮然としている凪沙の肩を親しげに抱きながら、浅葱は、じゃあね、と古城に手を振った。古城は寝癖のついた頭をかきながら、部屋を出て行く二人を見送って、
「おまえ、本当になにしに来たんだ……？」
独り言のように洩れた呟きに、一瞬だけ振り返って浅葱が答える。
「ん……なんだろ。宣戦布告……かしら」
ぽつんと一人取り残された古城は、なんのことだ、と首を傾げた
そんな古城を、窓辺に止まった一羽の鳥が見ていた。
金属で造られたような鈍色の羽を持つ鳥が、眩い朝陽の中で古城を見つめていた。

同時刻。
アイランド・サウス　―絃神島南地区のビルの屋上に、一人の少女が立っていた。
髪の長い少女である。彼女の足元には、黒い大型の楽器ケースが置かれている
少女が視線を向けているのは、道路を挟んだ対岸にある九階建てのマンションの一室だ。

その部屋の窓辺に止まっている一羽の鳥。その鳥の目を借りて、彼女は建物の中の様子を見ているのだ。

「なんて……なんて破廉恥な……」

彼女の唇から低い呟きが洩れる。色の白い彼女の頬が、ほんのりと赤く染まっているのは、隠しきれない怒りのせいか、あるいは羞恥によるものだろうか。

「やはり、あの男には相応の裁きを下す必要がありそうね……」

色素の薄い栗色の髪が、強い海風に吹かれてふわりと舞う。

屈みこんだ彼女が楽器ケースから取り出したのは、一振りの剣――滑らかな金属曲面で構成された、銀色の両手剣だった。

3

「なあ、姫柊」

通学に使うモノレールの中で、古城が雪菜に呼びかける。

銀色の手すりにつかまっていた雪菜が、ゆっくりと振り向いて古城を見た。深い湖のような彼女の瞳には、出会ったばかりの頃に見た冷ややかな光が浮かんでいる。

「なんでしょうか、私を外で待たせて、クラスメイトの女子といちゃついていた暁先輩？」

雪菜が機械的な声で淡々と訊き返す。古城はぐっと喉を鳴らして、
「その説明的な呼びかけに露骨な悪意を感じるんだが!?」
「すみません。失礼しました、朝からクラスメイトの女子とベッドで仲良くしていた暁先輩」
「だーっ！　だからあれは浅葱のやつが、俺が寝てる間に勝手に乗っかってきたんだって！　あいつのいつもの悪ふざけだろ。昨日の腹いせのつもりなのかもな」
両手で自分の頭を抱えて、古城が喚いた。我ながら説得力のある仮説だと思う　球技大会の練習をサボって雪菜といた古城に、軽く意趣返しをしてやろう、というのは、いかにも浅葱の考えそうなことに思える。
「藍羽先輩が勝手にやったこと――ですか」
雪菜が、はあ、と溜息のような声を出す。
「それはそうだと思ってました。悪ふざけかどうかはともかく、ですけど」
「なんだ。誤解してたわけじゃなかったのか」
ようやくいつもの口調に戻った雪菜を、古城はホッとしながら見つめる。彼女は半眼でそんな古城を睨んで、
「いくら先輩がいやらしいといっても、凪沙ちゃんがいる場所でいかがわしい行為に没頭するような人ではない、という程度には信用してます」
「いやらしいってのは否定してくれないのかよ」

古城が不満げに唇を歪めた。だが、いくら古城が鈍くても、ここまで言われると薄々気づく。雪菜が怒っている理由は、やはり古城に対するやきもちなどではない。

「で、それがわかってて、なんでそんなに怒ってるんだ？」

「藍羽先輩との淫らな行為が、先輩の計画的犯行ではなかった、というのは信用しますけど、だからといって先輩が誘惑に耐えられるとも思ってませんから」

「誘惑？」

「あのとき、先輩が、吸血衝動に襲われていたらどうするつもりだったんですか？」

雪菜の静かな問いかけに、一瞬、古城の息が止まる。

無言で古城を見つめる雪菜が、背負ったギターケースの肩紐を強く握りしめている。

吸血鬼という種族が持つ忌まわしい特性。血の渇き。本能のもっとも深い部分に根ざした吸血の欲求は、たやすく吸血鬼の理性を奪い去り、凶暴な怪物へと変える。

真祖といえども制御できない、強烈な衝動。それを呼び覚ますのは、性欲だ。

もしあの場面で吸血衝動に襲われていたら、古城は浅葱を襲っていたかもしれない。そして浅葱の喉に牙を突き立てた姿を、凪沙に見られていただろう。古城は大切な友人と妹を傷つけ、一瞬で失っていたかもしれないのだ。

「……そうだな。悪い」

古城がぼそりと呟いた。雪菜に指摘されるまで、そのことを忘れていた自分の迂闊さに腹が

立つ。なんだかんだで、雪菜は最初から古城のことを心配してくれていたのだろう。彼女に怒られるのも当然だった。

「もう二度とあいう危険な状況に陥らないように反省してください」

小さな子どもを叱るような口調で、雪菜が言う。

まあそうだけど、と古城は少し不服そうに唇を尖らせて、

「いやでも、やっぱり今朝のは不可抗力だと思うんだが」

「いえ。先輩がもっと毅然としていればよかったと思います。反省してください」

「いやでも、寝てる間に勝手に部屋に入ってきた相手をどうすれば――」

「そうならないように普段から気をつけていればよかったと思います。反省してください」

「あ、そういえばさ、そんな理由で怒ってたのなら、どうして姫柊は外に出てったりしたんだ？　あの場で俺たちを止めてくれてもよかったんじゃ」

「うー……」

「……以後気をつけます」

なぜか低い声で唸り始めた雪菜に、古城は深々と頭を下げた。

まったくもう、と雪菜が呆れたように息を吐き、

「とにかく、わたし以外の人の血を吸ったりしたら、そのときは本気で怒りますからね」

「あ、ああ」

まるで自分の血なら吸っていいと言われてるみたいだな　などと思いつつ、古城は雪菜の気遣いに感謝した。雪菜は本来ただの監視役であり、古城を抹殺する権利をも与えられた攻魔師なのだ。それなのにこうやって古城のことを気遣ってくれている。少しくらい理不尽な説教をされても文句は言えまい。

「それよりも姫柊、これからどうするつもりなんだ？」

ふと真面目な表情になって、古城が訊いた。

「黒死皇派の捜索のことですね」

すぐに雪菜が察しよく訊き返してくる。ああ、と古城はうなずいて、

「前のオイスタッハのオッサンのときとは状況が違うからな。なんの手がかりもなしにテロリストを見つけるってのは、さすがに無理があるだろ」

「そうですね。ですから、最初は話を聞きに行くつもりです。情報を持っている方のところに」

「……情報屋に知り合いがいるのか？」

警察ドラマみたいだな、と古城は妙なふうに感心する。

しかし雪菜は、違います、と呆れ顔で首を振り、

「ですけど、アルデアル公が言ってましたよね。絃神島の攻魔官も、黒死皇派を捕まえようとしてるって」

「攻魔官？」

「はい。攻魔官です」
古城を見つめて雪菜がうなずく。古城は少し考えて、おお、と思い出したように手を叩いた。

4

彩海学園高等部の職員室棟校舎
なぜか学園長室よりも偉そうな見晴らしのいい最上階に、南宮那月の執務室はあった。
分厚い絨毯と天鵞絨のカーテン。年代物のアンティークの家具。天蓋付きのベッド。どこの王宮だ、と突っこみたくなるような気品あふれる部屋である。
「那月ちゃん。悪い、ちょっと教えてもらいたいことがあるんだけど――」
分厚い木製の扉を開けて、古城はその部屋にずかずかと入りこむ。そして次の瞬間、
「ぐおっ!?」
いきなり頭蓋骨に衝撃を受けて、古城は仰向けに転倒した。
「せ、先輩!?」
古城のすぐ後ろを歩いていた雪菜が、ぐおおお、と苦悶する古城を慌てて抱き起こす。
そんな二人を、部屋の奥から冷ややかに見つめていたのは、黒いドレスを着た南宮那月だ。
幼女にしか見えない童顔の小柄な女性だが、自称二十六歳のれっきとした英語教師。そして

現役の国家攻魔官でもある。絃神市内の教育施設は、生徒の安全確保のために一定数の攻魔官を配置することが義務づけられている。那月もその一人というわけだ。

彼女は高価そうなアンティークチェアに深々ともたれて、黒いレースの扇子を開き、

「私のことを那月ちゃんと呼ぶなと言っているだろう。いいかげんに学習しろ、暁古城」

そう言いながら、じろりと雪菜を睨む。

「おまえもいたのか、中等部の転校生。それで質問というのはなんだ？　子どもの作り方でも訊きにきたのか？」

「は、はい？」

一瞬なにを言われたのかわからず唖然として、それから雪菜はぶるぶると首を振った。古城が額を押さえたまま勢いよく起き上がり、

「んなわけあるかっ！　いきなりなにを言ってんだ、あんたは!?」

「……違うのか。だったらなんの用だ？」

那月がつまらなそうに息を吐く。どんだけ子作りの方法を語りたかったんだよ、と古城は呆れながらも真顔になって、

「クリストフ・ガルドシュって男を捜してるんだ。なにか手がかりがあったら教えて欲しい」

その瞬間、那月の雰囲気が一変した。身長百五十センチにも満たない小柄な身体から、息苦しいほどの圧迫感が滲み出す。

「おまえたち、どこでその名前を聞いた？」

西洋人形のような美しい瞳を細めて、那月が訊いた。

やはり知っていたんだな、と古城は思う。副業でやっているにもかかわらず、那月は絃神市内にいる攻魔官の中でも五指に入る実力者らしい。ガルドシュほどの大物犯罪者が現れたのなら、確実に彼女のもとに情報が回っているはずだと、古城たちは予想したのだ

「ディミトリエ・ヴァトラーだよ。知ってるだろ。絃神港に停泊してる、でかいクルーズ船の持ち主。あいつ、戦王領域から、ガルドシュを始末するために来たんだと」

古城の説明を聞いた那月が、ちっ、と腹立たしげに舌打ちする。

「そうか……あの蛇遣いの軽薄男が、おまえを呼び出す可能性は予想しておくべきだったな。まったく余計な真似をしてくれる」

那月が、まるで知り合いのようにヴァトラーを罵った。蛇というのはおそらくヴァトラーの眷獣を指しているのだろう。あの灼熱の光をまとった眷獣は、一瞬だけだが古城も見ている。

「戦王領域のテロリストが、絃神島に来てるって話は本当なんだな」

「ヴァトラーのやつがそう言うのなら、そうなんだろうな」

那月が投げやりな口調で言った　隠しても無駄だと判断したのだろう

「それでガルドシュの居場所を聞いてどうする？」

「捕まえます。彼がアルデアル公と接触する前に」

那月の質問に、雪菜が即答する。そのひと言で、那月はおおよその事情を理解したらしかった。黒死皇派の残党との戦闘になれば、ヴァトラーは嬉々として自分の眷獣を解放する。そうなれば絃神島には甚大な被害が出るのは間違いない。雪菜はそれを止める、と言っているのだ。

だが、那月の返答は素っ気ないものだった。

「無駄だ。やめておけ。ああ、アスタルテ――そいつらに茶なんか出してやる必要はないぞ。もったいない。それよりも私に新しい紅茶を頼む」

「――命令受諾」

麦茶を運んできたメイド服の少女に、那月がぞんざいに命令する。どこか奇妙な響きを持つ少女の声に、古城と雪菜は驚いて顔を上げた。

銀色のトレイを抱いて立っていたのは、藍色の髪の少女だった。

左右対称の人工的な顔立ちに、感情のない淡い水色の瞳。ほっそりとした未成熟な身体を、露出度高めのエプロンドレスに包んでいる。

「おまえ、オイスタッハのオッサンが連れてた眷獣憑きの――！」

「アスタルテ……さん!?」

「ああ。そういえば、おまえたちは顔見知りなんだったな」

那月が表情を変えずに言う。古城は彼女に詰め寄りながら小声で、

「なんでこの子が学校にいるんだよ。いやそれよりもあの服はなんだ!?」

「キーストーンゲート襲撃に荷担した人工生命体アスタルテは、二年間の保護観察処分中だ」

那月が、面倒くさそうに古城を押し返しながら説明する

「国家攻魔官でしかも教育者でもある私が彼女の身元引受人になるのは、理に適っているだろう。ちょうど忠実なメイドも一人欲しかったところだしな」

「明らかに最後のひと言がメインの理由だよな……まあ、本人が幸せならいいけどさ」

古城は、自分に言い聞かせるようにそう呟いた。

メイド服のアスタルテは、那月に命令されたとおりに紅茶の準備を始めていた。妖精めいた顔立ちに表情の変化はないが、どことなくやり甲斐らしきものを感じているようにも見える。ケープコート一枚しか与えられずに魔族狩りをやらされていた頃に比べれば、たしかに今の彼女は、それなりに幸せなのかもしれなかった。

「――南宮先生。ガルドシュを捕まえても無駄というのは、どういうことですか？」

ようやく驚きから立ち直った雪菜が、思い出したように話を戻す。

「捕まえても無駄とは言ってない。おまえたちがそんなことをする必要はないと言ってるんだ」

「え？」

「黒死皇派どもはどうせなにもできん。少なくともヴァトラーが相手ではな　やつはあれでも真祖にもっとも近い存在〟といわれている怪物だ」

でも、と雪菜は生真面目な口調で食い下がる。

「黒死皇派の悲願は、第一真祖の抹殺だと聞いてます。彼らはそれを実現する手段を求めて、紘神島に来たのではないのですか？」

もしも黒死皇派が第一真祖を殺せる力を手に入れたのなら、それはつまり〝真祖に近い戦闘力〟を持つヴァトラーをも殺せるということになる。だが、それを理解してなお、那月は退屈そうに首を振った。

「そうだな。だから無駄なのさ　ガルドシュの目的はナラクヴェーラだ」

「ナラクヴェーラ……？」

聞き慣れない言葉に、雪菜が眉を寄せた。彼女の知識にもない単語だったらしい。

「南アジア、第九メヘルガル遺跡から発掘された先史文明の遺産だな。かつて存在した無数の都市や文明を滅ぼしたといわれる、神々の兵器だよ」

いちおう教師らしい口調で、那月が説明する。古城は猛烈に悪い予感を覚えながら、

「神々の兵器……って、なんだそのヤバそうな代物は？　まさか、そいつが紘神島にあるって言い出すんじゃないだろうな」

「表向きには、もちろんあるはずのないものだが、実はカノウ・アルケミカルという会社が、遺跡から出土したサンプルの一体を非合法に輸入していたらしい。もっともそいつは少し前にテロリストどもに強奪されてるんだがな」

「あんのかよ!?　しかも盗み出されたあとなのかよ!?」

「九千年も前に造られた骨董品のことで、おまえはなにを焦ってるんだ？」

慌てふためく古城を眺めて、那月が蔑むように言う。

「奪われたのは遺跡からの出土品だと言っただろう。とっくに干からびたガラクタだぞ。仮にまだ動いたとしても、それをどうやって制御する気だ？」

「……制御する方法に心当たりがあったから、黒死皇派は、その古代兵器に目をつけたのではありませんか？」

雪菜が冷静に指摘した。那月は少し愉快そうに口角を上げ、

「ふん、さすがにいいカンをしているな、転校生。たしかにナラクヴェーラを制御するための呪文だか術式だかを刻んだ石板が、最近になって発見されたらしい」

「だったらやっぱりその兵器が使われる可能性があるってことなんじゃねーかよ」

「世界中の言語学者や魔術機関が寄ってたかって研究しても、解読の糸口すらつかめていない難解なブツだぞ。テロリストごときが、ない知恵を振り絞ったところでどうにもならんよ」

不安げに唇を尖らせる古城を、那月がやる気のない声で突き放す。

「石板の解読に協力していた研究員は捕まえた。黒死皇派の残党が見つかるのも時間の問題だ。密入国した国際指名手配犯たちが、馬鹿でかい骨董品を抱えて潜伏できる場所は限られているからな。特区警備隊は今日明日にもガルドシュを狩り出すつもりだそうだ」

「狩り出す……って、もしかして那月ちゃんも助っ人に行くのか？」

古城が顔をしかめて言った。ガルドシュの協力者を捕まえた、ということは、那月はすでに今回の事件に深くかかわっているのだろう。獲物を横取りされることを恐れて、雪菜にかかわるなと警告しているわけではないだろうが――

「私を那月ちゃんと呼ぶな！　とにかく、あの蛇遣いがなにを言ったところで、おまえたちの出る幕はない。強いて言えば追い詰められた獣人どもの自爆テロに気をつけることくらいだな」

「自爆テロ……！」

思いがけない那月の警告に、古城は顔色を変えた。たしかに自爆は、戦力で劣るテロリストたちがヴァトラーにダメージを与え得る数少ない手段だ。絃神島の住人が、それに巻きこまれる可能性は決して低くない。

「それからもうひとつ忠告してやる。暁古城、ディミトリエ・ヴァトラーには気をつけろ」

運ばれてきた紅茶をすすりながら、那月がぼそりと呟いた。

「やつは自分よりも格上の〝長老〟――真祖に次ぐ第二世代の吸血鬼を、これまでに二人も喰っている」

「――同族の吸血鬼を……喰った？　あいつが!?」

人当たりのいい青年貴族の姿を思い出しながら、古城がうめいた。雪菜もさすがに驚愕の相を浮かべている。

「やつが〝真祖にもっとも近い存在〟といわれる所以だよ。せいぜいおまえも喰われないよう

にするんだな」

那月が不敵に笑いながら言う。そのさりげない口調に逆にリアリティを覚えて、古城はただ無言でうなずいた。

5

「南宮先生の話、本当でしょうか」

那月の部屋を出た古城たちは、重い足取りで自分たちの教室へと向かう。その途中で立ち止まって、雪菜が訊いた。

「人格的に少し問題はあるけど、基本的に嘘はつかない人なんだよな」

まだ少し痛みの残る頭を押さえながら、古城は曖昧に感想を洩らす。なんとなくわかります、と雪菜も微苦笑を浮かべた。

雪菜が所属する獅子王機関と、那月たち国家攻魔官は仲が悪い。だから那月が雪菜に対して、虚偽の情報を流すという可能性は、当然考えられることだ。しかし那月の性格を知る者としては、彼女がそんな面倒なことをするとは思えない。

基本的に嘘や駆け引きは、弱者が生き残るための手段である。圧倒的な強者である那月にはそれらはいずれも無用のものだ。彼女を欺く者がいれば実力をもって報復し、行く手を阻む者

がいれば敵味方関係なく粉砕する。それが那月のやり方であり、彼女のカリスマ性の源なのである。ただの人間でありながら、古城なんかよりもよっぽど真祖に近い生き物なのだ。

だからこそ彼女の言葉は、それがどんなに突飛な内容でも信用できる。ヴァトラーが同族を喰ったという情報についてもだ。

「〝長老〟ってのは、第二世代の吸血鬼だって言ってたな」

古城が自信なさげな口調で雪菜に確認する。

はい、と雪菜が硬い表情でうなずいた。

「真祖に認められて彼の〝血〟を分け与えられた者たちです。必ずしも真祖の実の娘や息子というわけではないんですけど」

「――弟子とか後継者ってとこか」

かつて神の子と呼ばれた男と、その弟子たちの関係を連想しながら、古城は呟く。真祖から直接〝血〟を与えられた〝もっとも旧き世代〟の吸血鬼たち。その能力は、当然、普通の吸血鬼とは比べものにならないはずだ。

「ヴァトラーは、そういう意味では第一真祖と直接つながってるわけじゃないんだな」

「そうですね。純血の貴族とはいっても、しょせんは〝長老〟たちの遠い子孫ですから」

そう言って雪菜は表情を曇らせた。

「ですから、もしアルデアル公が、〝長老〟たちを本当に捕食したのだとしたら、彼はなにか

特殊な能力を持っているのかもしれません。なにか血の濃さを窺すような特殊な能力を」

血の濃さ……か、と古城は自分の掌を見る。

不老不死の吸血鬼にとって、〝血〟とは魔力の源であり、眷獣を召喚するための媒体であり、そして存在基盤そのものでもある。長く生きた吸血鬼は、より多くの血を吸うことによって、より強大な魔力をその血の中に蓄える。〝旧き世代〟の吸血鬼が、若い世代よりも強い力を持つのはそのためだ。それが〝長老〟と呼ばれる吸血鬼たちならば尚更だろう

だが、若い世代の吸血鬼が、手っ取り早く強い力を手に入れる方法が、実は存在しないわけではない。強力な吸血鬼の血から直接、彼らの魔力を奪えばいいのだ。

吸血鬼が、他の吸血鬼の存在そのものである〝血〟を奪う

いわゆる〝同族喰らい〟である。

しかし通常、自分よりも強力な吸血鬼を喰うことはできないともいわれている。

たとえ相手の血を吸い尽くしたとしても、身体の内側から肉体と意識を乗っ取られるからだ。喰ったはずの相手に、逆に自分が喰われてしまう。それが〝同族喰らい〟の危険性であり、若い世代が、格上の吸血鬼を倒せない理由だ。

ヴァトラーが〝長老〟を倒したというのは、普通ではあり得ないことなのだ。

「そういや、あいつはやたら〝血〟にこだわってたな」

昨夜のヴァトラーの発言を思い出して、古城が言う。血統にこだわるのは、アルデアル公に

限らず吸血鬼全体の種族的な傾向ですけど、と雪菜は前置きしながらも、
「たしかにあの方の先輩に対する執着はちょっと異常でしたね」
「俺への執着じゃねえよ。あいつがこだわってんのは、第四真祖の〝血〟だろ」
古城が、砂を噛んだような顔で訂正する。アヴローラに愛を誓った、と言いながら、古城が彼女の〝血〟を受け継いだと知るとあっさり乗り換える。軽薄といえば軽薄な態度だが、それほどまでに彼は第四真祖の〝血〟に執着しているのだとも言えた。
「でしたら、やはり南宮先生の助言は当たっていたのかもしれませんね。あの方に捕食られないように注意しろ、というあの言葉は――」
古城をじっと見上げて雪菜が言った。ヴァトラーは自分よりも格上の〝長老〟を、すでに二人も喰っている。ならば〝長老〟たちよりも遥かに強い魔力を持つ〝真祖〟といえども、絶対に捕食されないとは言い切れない。
だよな、と古城が弱気な声で言った。
「あいつが本気で俺を殺そうとしたら、今の俺じゃたぶん勝てないだろうしな……せめて俺が、もう何体か眷獣が使えたら話は違ってくるんだろうけど」
「眷獣、ですか……」
なぜか思い詰めたような表情で雪菜が呟く。
古城がどうにか制御できる眷獣は一体だけ。〝獅子の黄金〟は、第四真祖の魔力で召喚され

た世界最強クラスの眷獣だが、しょせん一体は一体である。

たとえば〝獅子の黄金（レグルス・アウルム）〟を攻撃に使っている間、古城自身は無防備になる。ヴァトラーの持つ九体の眷獣を同時に相手にしたときに、〝獅子の黄金（レグルス・アウルム）〟が勝てるという保証もない。

「――先輩」

「え？」

「もしかして、またあいうことをしたい、とか思ってますか？」

雪菜の瞳が、瞬きもせずに古城の顔を映している。その真剣な様子に、古城は思わず姿勢を正した。しかし彼女の質問の意味はよくわからない。

「ああいうこと……ってなんだ？　また？」

「あれです。その……わたしの……を……吸ったりとか……」

雪菜が不意に目を逸らして、少し怒ったような、照れたような早口で言った。

彼女の細い首筋から鎖骨にかけてのラインが視界に入り、古城はやっと雪菜の発言の真意を理解する。

古城が〝獅子の黄金〟を掌握できたのは、雪菜の血を吸ったからである。だとすれば、再び彼女の血を吸うことで、新たな眷獣を支配できるようになるかもしれない。雪菜はそう言っているのだ。

しかしそれを実行するためには、古城が、雪菜に対して性的な興奮を覚えなければならない

ということであり

「いやっ、違う！　今のはそういう意味で言ったわけじゃないからな！　べつに姫柊の血なんかでどうこうしようとは、これっぽっちも思ってないから！」

古城は必死で否定する。前回は絃神島が崩壊するかもしれないという非常事態で、ある意味仕方がなかったが、今回はまったく状況が違う。恋人でもない雪菜に、あんな行為を強いるわけにはいかない、と思う。

「……べつにわたしの血なんか、ですか。これっぽっちも……ですか」

しかし雪菜の声の響きは、なぜか突然、冷え冷えとしたものへと変わった。古城を見上げる無感情な瞳は、どこか凍てついた刃物を連想させた。

「とにかく、そっちはなんとかなるんじゃないかな。なんとなくだけど、ヴァトラーのやつも今すぐ俺を喰おうとは思ってないと思う。下手に俺を追い詰めたら、いつかみたいに未制御の眷獣が暴走するかもしれないし」

原因不明の後ろめたさを覚えながらも、古城は努めて楽観的な声を出す。

まったく当てにはならないが、古城の言葉にも根拠はある　不老不死の吸血鬼が、もっとも嫌うものは孤独と退屈だ。第四真祖という存在は、ヴァトラーにとって得難い友人、あるいは絶好の退屈しのぎだったのではないか。彼の態度から古城は漠然とそう感じたのだ。それに、宿主の身に危険が迫ったら眷獣たちが暴走する　そう言ったのはヴァトラー本人である。

「そうですね」

雪菜が、冷たく古城を見上げたまま同意した。

「また未制御の眷獣が暴走して、先輩の借金が、何百億円か増えるかもしれませんね　わたしなんかではどうにもできませんけれども」

「え、ああ。まあ……な」

理路整然とした雪菜の言葉に、古城は歯切れの悪い相槌を打つ。

「それにアルデアル公のあの態度だと、先輩を捕食するつもりはなくても、強引に肉体関係を迫ってくるくらいのことはやりそうですよね」

「そういう恐ろしいことを言うのはやめてくれ。すっげえ不安になったじゃないか」

「すみません。なんとなく悪い予感がしたのでつい。だとしても、わたしなんかではどうにもできませんけれども」

そう言って雪菜は古城を哀れむように溜息をついた。

「あのさ、姫柊。もしかしてなにか怒ってるのか？」

「いいえ、全然。これっぽっちも」

とりつく島もない雪菜の態度に、古城はついに耐えきれなくなって目を逸らし、

「……まあ、ヴァトラーのことはあとで考えるとして、当面の問題はテロリストのほうだよな。那月ちゃんは気にしなくていいって言ってたけど……」

「今の段階では情報が少なすぎて、判断に困りますね」

「情報か……」

古城は腕を組んで考えこむ。たしかに情報不足は深刻だった。那月が嘘をつくとは思わないが、彼女の忠告を鵜呑みにして、なにもしないというのも不安だ。せめてべつの情報源から、那月の言葉の裏付けがとれればいいのだが。

「そういやナラクヴェーラってのを密輸したのは、紘神市内の企業だって言ってたな」

古城は、ふと那月に言われたことを思い出す。

「カノウ・アルケミカル・インダストリー社ですね。錬金素材関係の準大手だったはずです」

「もしかしたら、そっちのセンからなにか調べられるかもしれない。悪いけど、姫柊は中等部のほうに戻っててくれないか。あとでまた連絡するから」

「先輩がなにを考えているのか、薄々想像はつきますけど――」

どことなく拗ねたような表情で、雪菜がなにかを告げようとする。が、彼女はなぜか言葉を途中で切り上げて、ゆっくりと周囲を見回した。

感覚を研ぎ澄ますように沈黙する雪菜に、古城が困惑して呼びかける。

「……姫柊？　どうかしたか？」

「いえ」

やがて雪菜は静かに息を吐き、何事もなかったかのように首を振った。

「誰かに見られていたような気がしたんですけど、気のせいだったみたいです」

6

古城が教室に辿り着いたのは、授業前の予鈴が鳴り終わった直後の、遅刻ギリギリのタイミングだった。教室にはすでにクラスメイトたちのほとんどが揃っている。その中にはもちろん浅葱の姿もあった。

「――浅葱！」

「ああ、古城。おはよ」

足早に近づいてくる古城に気づいて、浅葱がのんびりと手を振ってくる。今朝の古城の部屋での騒ぎが嘘のような、まったくいつもどおりの彼女の態度だ。

「ちゃんと学校に来たのね。偉い偉い　わざわざ起こしてあげた甲斐があったわ」

「起こしてあげた？　なんだそりゃ？」

浅葱に宿題を教わっていた矢瀬が、耳聡く彼女の言葉に気づく。近くにいた築島倫も、へえ、と意味ありげに古城を見て、

「それは聞き捨てならないわね」

「聞き捨てといてくれ。本当に叩き起こされただけだ」

彼らを適当にあしらいながら、古城は浅葱の隣に届みこんだ。そして彼女の耳元に顔を寄せ、
「それよりも浅葱、ちょっといいか」
「え？　なによ、いきなり。授業始まるわよ」
口では文句を言いながらも、古城が強引につかんだ腕を、浅葱は振り払おうとはしなかった。浅葱の手を引いて教室を出て行く古城を、クラスメイトたちが興味深そうに眺めていた。が、下手に言い訳するのは逆効果だろうと、なにも言わないことにする。とりあえず教師たちと鉢合わせないようにと、古城はひと気のない非常階段に浅葱を連れ出して、
「悪い。どうしても浅葱に頼みたいことがあってさ」
「なにそれ。嫌な予感しかしないんだけど」
浅葱が胡乱げな表情で古城を睨んでくる。さすがに長いつき合いだけあって、古城のことをよくわかっているらしい。
「カノウ・アルケミカルって会社のことを調べて欲しいんだ。特に絃神市内の支社とか研究所とか、そのあたりのことを」
「はあ？　なんであたしが授業をサボって、そんなことしなきゃなんないわけさ？」
浅葱の当然の質問に、古城はひたすら頭を下げて、
「頼む。あとでメシでもデザートでもおごるから」
「いやよ。どうせあの姫柊って子に頼まれたんでしょ。そんなのの手伝いなんて絶対イヤ」

浅葱が、いーっ、と歯を剝いて言った。
以前から薄々気づいていたのだが、浅葱と雪菜は、どうも相性がよくないらしい　原因はわからないが、やたらと関係がギスギスしているのだ。
「そこをなんとか、彼らが輸入したナラクヴェーラってやつのことだけでいいんだ」
「……ナラクヴェーラ？」
なぜか意外な単語に、浅葱が反応した。ぐい、と古城の胸ぐらをつかんで引き寄せると、
「それってなに？　知ってるの？」
「いや。どこかの遺跡から発掘された古代遺産らしいんだが」
古城が苦しげな声で説明する。ついさっき那月に聞かされたばかりの情報である。
「古代遺産……ねえ。それがカノウ・アルケミカルと関係してるわけ？」
「ああ。たぶん」
うなずく古城を睨みつけて、浅葱が、ふーん、と息を吐いた。少し思案するように彼女は視線を虚空に向けて、
「いいわ。ちょっとだけ気が向いたからつき合ってあげる」
そう言って浅葱はニヤリと笑う。
「そ、そうか。助かる。どうすればいい？」
「とりあえずネットにつながってるパソコンが要るわね。この時間だったら生徒会室かしら」

「生徒会室？」

そういえば学校サイトの運営や事務作業に使っているやつが何台かあったな、と古城は思い出す。

「だけど、鍵がかかってるだろ。警備会社につながってるＩＣカード式のやつ」

「大丈夫よ。任せなさいって」

頼もしい言葉を口にしながら、浅葱は弾むような足取りで生徒会室へと歩き出した。

そろそろ授業の始まる時間だが、特にそれを気にしている様子はない。むしろ古城と二人でいるこの状況を愉しんでいるらしいが、彼女の気まぐれに慣れている古城は、それを特に奇妙だとも思わなかった。

この程度の暗号化が通用するのは幼稚園児までだっての……ほらね」

浅葱が携帯電話を取り出して、それを生徒会室のドアにあてる。と、もの凄い勢いで画面上を数字が流れて、五秒も経たないうちに鍵が開く気配がした。電話機に内蔵された電子マネー端末を利用して、警備会社製の電子ロックをハッキングしたらしい。どうやればそんなことができるのか、もちろん古城にはさっぱりわからない。

「……おまえって実はすごいやつだよな。今さらだけど」

「こ、こんなの感心されるようなことじゃないってば。やめてよね、恥ずかしい」

浅葱が顔を赤くして、怒ったような口調でそう言った。そして不満そうに唇を歪めて古城を

睨み、
「ていうか、ほかにもっと褒めるところがあるでしょうが」
「え？」
「なにその意外そうな顔!?」
「ああ、そういえば前髪がいつもより少し短いような――」
「悪かったわね、切りすぎたのよ！　そこは見て見ぬふりしなさいよ！」
浅葱が眉を逆立てながら、古城の脇腹を右フックでえぐった。古城は、ぐふ、と苦悶の息を洩らしてうめく。よくわからないが、ものすごく理不尽な目に遭わされているような気がした。
「それでカノウ・アルケミカルのなにが知りたいわけ？」
部屋の奥に置かれていたパソコンを起動して、浅葱が訊いた。
「連中が密輸入したナラクヴェーラって古代遺産のことを知りたい、黒死皇派とかいうテロリストの残党に強奪されたらしいんだが」
「ナラクヴェーラ……ね。古城が言ってるのは、たぶんこれのことだと思うわ」
数字だらけの画面に見たこともないコマンドを打ちこんでいた浅葱が、やがて大きな画像ファイルをいくつか表示してみせた。そこに映っていたのは、ずんぐりした卵型の石の塊だった。ちょうど身体を丸めた昆虫の姿に似ている。あるいは分厚い装甲で身を固めた戦車にも。二十世紀末に休眠状態で発掘された出土品……というか一種の無機生命体。生物兵器ね」

「生物兵器？」

「現代風にいうところの無人戦闘機って感じかしらね。多数の武装と飛行能力を持っていたと推定され、インド神話の〝天翔る戦車〟や、道教で崇められている人造神〝哪吒太子〟のモデルになったと考えられる――って」

「よくわからんが、危険なものだってことだけはわかった」

古城が重苦しい気分で言う。具体的にどういうものかは理解できないが、それが本当に神話に描かれるレベルの兵器だとしたら、とてつもない力を秘めているのは間違いないだろう。那月が言っていた〝神々の兵器〟という言葉も、あながち誇張ではないのかもしれない

「たしかにそれなら第一真祖とでも戦えそうだな……黒死皇派が目をつけるわけだ」

「第一真祖？　あんたさっきからなんの話をしてるのよ？」

浅葱が訝しげに目を細めて古城を見た。もっともらしい言い訳を咄嗟に思いつかずに、いや、それは、と古城がうろたえる。と、

「――っ！」

その直後、浅葱が猛然と古城の首筋に両手を回し、床の上に引きずり倒した。抱きかかえられる形になった古城は、突然の浅葱との密着状態に混乱して、

「あ、浅葱!?」

「しっ！　黙って！」

浅葱は小声でそう言うと、パソコンデスクの下に自分と古城の身体を無理やり押しこんだ。
彼女が睨んでいたのは、生徒会室入り口のドア。内側から閉めておいたはずの鍵を開けて、誰かが入ってくる気配がある。
「誰だ？」
「マツイ先生かしら。生徒会の頼みの、意外に仕事熱心なのね」
むう、と親指の爪を噛んで呟く浅葱。
生徒会室に入ってきた中年男性教師は、パイプ椅子に座って書類整理を始めていた。彼に気づかれずに生徒会室から出るのは、どう考えても不可能に近い。
浅葱の機転でパソコンの画面は消えていたが、もしもマツイ教師が近くに来たら、古城たちが隠れていることは一発でばれるだろう。
「感心してる場合か！　どうすんだ!?」
「だから静かにしてなさいってば！　ちょっ……どさくさにまぎれてどこ触ってんのよ!?」
「わざとじゃねえよ！　おまえが押しつけてきてんだろ！」
「せ、狭いんだから仕方ないでしょ！」
小声で囁く浅葱の吐息が、古城の耳に吹きかけられる。
接触しているのはそこだけではなく、古城の二の腕には浅葱の胸の膨らみが当たっていたし、古城の手首はいつの間にか彼女の太腿の付け根に挟みこまれる形になっていた。古城が身動き

するたびに、浅葱がいちいち敏感に反応するのが気になって仕方ない。

しかし相手を突き放すわけにもいかず、二人は密着したまま息を潜めている。

浅葱もどちらかといえばスリムなほうだが、凪沙や雪菜とは胸元のボリューム感が違う。香水だかシャンプーだかのほのかな匂いも漂ってきて、女性らしさを意識せずにはいられない。

心臓の昂ぶりと喉の渇きを覚えて、古城は無意識に歯を噛み鳴らす。非常によくない兆候だった。吸血衝動の前兆だ。このままでは雪菜が心配していたように、理性をなくした古城が、なにも知らない浅葱に襲いかからないとも限らない。

とにかく意識をほかに逸らそうと顔を背けて、古城は、ふと浅葱の耳元に気づく

「浅葱……ひょっとして、そのピアスって……」

小さな石のはまった金色のピアス。それは彼女の誕生日に古城が贈った——というよりも、無理やり買わされたものだった。石の色は緑がかった薄い藍色。いわゆる浅葱色である。

買わされたのは古城だが、浅葱がそれを使っているのを見たのは今日が初めてだ。いったいどういう心境の変化だ、と古城は訝み、

「気づくのが遅いのよ、バカ古城」

浅葱がニヤリと微笑んで、少し潤んだ目で古城を見上げた。古城は、不覚にもそんな彼女を可愛いと思ってしまう。

そのときちょうど生徒会室からマツイ教師が出て行く気配がして、古城の緊張感がぷっつり

と途切れた。そして――

「こ、古城!? 大丈夫なの、それ!?」

その直後、古城が噴き出した大量の鼻血を見て、浅葱がぎょっと目を丸くする。

「え？　うおっ!?」

古城が焦りながら両手で鼻を殺う。危険な状態にまで高まっていた吸血衝動が、あっさりと霧散して消えていく。そう。吸血衝動の源はたしかに性的興奮だが、実際に口にするのは誰の血でも構わないのだ。たとえばそれが自分自身の鼻血であってもだ。

「まあ、なんていうか……あんたにムードとかそういうものを期待したあたしがバカだったわ」

どこからともなく取り出したポケットティッシュを古城の鼻に詰めながら、浅葱が弱々しく溜息をついた。吸血衝動との戦いに打ち勝った古城が、疲れた顔で鼻をすすった。

7

「少しは落ち着いた？」

鼻にティッシュを詰めたままの古城を見て、浅葱が気怠そうに訊いてくる。

生徒会室を抜け出して古城たちが向かったのは、屋上庭園だった。敷地不足気味の彩海学園では、緑化した屋上に花壇やベンチを置いて、中庭代わりに生徒に開放しているのだ。

とはいえ、さすがに陽射しがきついので、利用する生徒は多くない。吸血鬼である古城には、特に厳しい環境だ。しかし利用者が少ないということは、他人に見られる可能性も低いわけで、人目を避けるワケありの生徒には便利な場所だった。

「悪かったな、結局、授業サボらせちまって」

「そうねえ。まあ、あたしはいいんだけどさ……成績優秀だし、出席日数もヨユーだし」

「ぐ……俺も夏休みの補習でギリギリ出席日数は足りてるはず……」

古城が、現実から目を背けるように頼りなくうめく。

無断で授業を休んだことで、たぶん明日あたり那月にこっぴどく叱られることになるだろう。それに見合うだけの成果があったか、といえば、答えは微妙だ　ナラクヴェーラの正体はわかったが、密輸されたサンプルはやはり何者かに奪い去られていたらしい。現在のサンプルの所在地は不明。おそらくガルドシュたちの手元に置かれているのだろう

もちろん那月の言うように、制御用の呪文が解読されない限り、彼らがサンプルを持っていても警戒する必要はないのかもしれない。だが、なぜか古城のカンが不安を訴えていた。自分たちがなにか重大なことを見落としている。そんな気がしてしまうのだ。

「ねえ……古城」

考えこむ古城の横顔を見つめて、浅葱が唐突に質問した。

「さっきのナラクヴェーラってやつ、変な石板もセットで密輸されたのよね？」

「ああ。その辺の記録も残ってたんだよな？」
「そこに書かれてた呪文ってさ、もしかして……解読されたらまずかったりするのかしらね」
「まあな。まともな持ち主が管理してくれてるのならいいんだけど……って、なんでおまえがそんなこと気にしてんだ？」
「え!?　ううん、べつに気にしてないけどさ」
浅葱がそう言って不自然に目を逸らす。なんだそれ、と古城は彼女を問い詰めようとしたが、その前に古城の腹が大きく鳴った。浅葱が、ぷっ、と吹き出して、
「古城、あんた、朝ご飯は？」
「喰ってるわけないだろ、あの状況で」
古城が恨みがましい表情で浅葱を睨む。暁家の平和な朝を乱した張本人は、悪びれない笑顔で古城の背中を叩き、
「それもそうよね。仕方ないから、優しい浅葱お姉さんがお弁当をわけてあげようじゃないの」
「単におまえが腹減ってるだけだろ。わけてもらえるのなら文句はないけどな」
「もっと感謝しなさいよね。あたしが他人に食べ物をわけ与えるなんて滅多にないことよ」
「そのわりに俺はしょっちゅうおまえにメシをおごらされてる気がするんだが」
教室から持ち出したポーチの中から、浅葱が弁当箱を取り出した。見かけによらず大喰いの彼女にしては、意外に小さなランチボックスだ。

箸が一膳しかないことに気づいて、浅葱は少し逡巡したようだが、結局、気にしないことにしたらしい。ふっくらと焼けた卵焼きをつまみ上げ、味見するように一口齧ったあと、おまえが喰うのかよ、とつっこもうとした古城の口の中に、隙あり、とばかりに放り込んでくる。

「美味いな」

「そうね。あたしも母親の料理の腕は認めてるのよね」

浅葱が、まるで他人のことのように母親を語る。彼女の両親は二年前に再婚したばかりで、今の母親と浅葱は血がつながっていないのだ。不仲というわけではないらしいが、お母さん、と呼ぶにはまだ少し抵抗のある距離感なのだろう。

なんとなくコメントしづらい話題だったので、古城は卵焼きを咀嚼しながら話題を変える。

「うちの学校にこんな場所があったんだな」

「基樹が例の彼女に教えてもらったらしいわよ。あたしも来たのは初めてだけどさ　昼休みにここでご飯食べてるのはカップルばっかって噂だし――」

そこまで言いかけて、浅葱が突然沈黙した。

不意に自分たちの置かれている状況を自覚したらしい。授業を抜け出して二人で弁当を分け合っている。しかも自分の箸で食べ物を古城の口に運んだり

客観的に見て、仲のいいカップル以外の何物でもないだろう。

「あ、あたし、飲み物買ってくるわね。残り全部食べちゃっていいから！」

「あ、ああ」

古城に弁当箱を押しつけると、浅葱がもの凄い勢いで走り去っていった。今さら彼女があんなふうに照れる理由が古城にはよくわからなかったが、まあそんな気分の日もあるだろう、と深く考えないことにする。

とりあえず手渡された弁当をありがたく平らげ、ナラクヴェーラの情報をどうやって雪菜に伝えようかと、古城はぼんやり考え始める。

古城が座っていたコンクリート製のベンチが、轟音とともに砕け散ったのはその直後だった。

「な、なんだ!?」

一瞬遅れて、爆風が古城の身体を吹き飛ばした。

瓦礫とともに屋上の床を転がりながら、古城は衝撃に翻弄される。

ベンチが爆発したのかと思ったが、もちろんそんなはずはない。さっきまでベンチがあったはずの場所には、半径一メートルほどのクレーターが穿たれている。

まるで手榴弾でも投げこまれたかのようなダメージだが、火薬の臭いは感じない。代わりに漂ってくるのは呪力の残滓。雪菜の得意な発勁の技に似ている。呪術を応用した物理攻撃だ。

「――授業をサボってクラスメイトと逢い引きとは、ずいぶんいいご身分なのね、暁古城」

仰向けに倒れた古城の頭上から、蔑むような声が聞こえてくる。

咄嗟に振り仰いだ古城が見たのは、ほっそりと背の高い少女の姿だった。

身に着けているのは、短いプリーツスカートにサマーベスト、それだけなら普通の女子高生で通用しそうだが、彼女が左手に提げている巨大な剣が明らかに場違いだ。

戦闘機の主翼を思わせる、流麗な長剣である。刃渡りは百二十センチほど。刀身は分厚く、直線的な接合ラインが模様のように浮き上がっている。陽光を反射して銀色に輝くその姿は、雪菜の〝雪霞狼〟によく似ていた。

「おまえ……昨日の……」

古城は彼女の名前を知っていた　ポニーテールに束ねた栗色の長い髪、咲き誇る桜のような、清楚にして艶やかな美貌。そして古城を見据える攻撃的な眼差し。

獅子王機関の舞威媛、煌坂紗矢華である。

「なんでおまえがここにいるんだよ。ヴァトラーの監視はどうした？」

片膝を突いて起き上がった古城が、紗矢華を睨み返して訊く。紗矢華は表情も動かさず、

「〝オシアナス・グレイヴ〟は、今、日本の領海外の沖合に停泊しているの、ディミトリエ・ヴァトラーは就寝中。わたしの監視任務は一時中断よ」

「ほーう。それと俺の座ってたベンチを爆破したことはなんの関係があるんだ？」

「……これまでのあなたの行動を監視させてもらったわ、暁古城」

紗矢華は、そう言って剣先を古城に向けた。古城は苦々と頭を抱えて、

「監視って、おまえもかよ!?　獅子王機関の人間っていうのはそんなのばっかりか!?」

「黙りなさい、犯罪者！」

「は、犯罪者!?」

予期せぬ紗矢華の叱責に、古城はぽかんと口を開けた。

そんな古城の反応に、紗矢華はますます眦を吊り上げて、

「とぼけても無駄よ、第四真祖。雪菜の血を吸ったのよね？」

「うっ……」

最大の負い目を指摘されて、古城は怯んだ。

「あれは仕方なかったんだよ！　あのときは非常事態で、ああする以外に方法が――」

「そんなことはわかってるわ。当然でしょう。でなければ、天使のような私の雪菜が、あなたみたいな馬鹿で愚かでヘタレでいやらしい男におめおめ血を吸わせるわけがないじゃない」

「そこまで言われるほどかよ!?」

さすがに頭にきて古城が抗議する。いくら引け目を感じているとはいえ、知り合ったばかりの彼女にそこまで言われるいわれはない。

しかし紗矢華は、剣を握りしめた両手を怒りに震わせて、

「あなたとて第四真祖と呼ばれる男。その肩書きに見合うだけの器量を見せ、雪菜に相応しい高潔な気品と人格を身に着け、年収は最低でも一千万円以上、あの子に永遠の愛と絶対服従を誓ってその証として去勢するなら、命ばかりは助けてあげようと思ったのだけど――」

「無茶苦茶言うな！　どんだけハードル高いんだよ!?」

「それなのにあなたときたら、ほかの女とイチャイチャと　」

え、と古城は紗矢華の発言を聞き咎める。

「ちょっと待て、それはなんの話だ？」

「はぐらかそうとしても無駄よ。あなたが朝から同級生をベッドに連れ込み、雪菜の目を盗んで生徒会室で密着、さらにはひと気のない屋上で二人仲良く、同じ箸を使い回しながら食事をする姿、すべて見せてもらったわ。破廉恥なっ！」

自分で古城の罪状を並べ立てながら、紗矢華は勝手に憤激した。

彼女が振り上げた剣の輝きを見て、古城は顔面を蒼白にし、

「ま、待て！　俺と浅葱はべつに疚しいことはなにも――」

「浮気する男はいつもそう言うのよっ！　〝煌華麟〟！」

「――だから、その剣でなにする気だっ!?」

「雪菜がこの島に来たのは、第四真祖を監視するため。あなたが死ねば、ここに留まる理由もなくなるわ。あの子があなたに泣かされるようなことも　！」

「なんでそうなる!?」

あまりにも強引な紗矢華の論理展開に、古城がたまらず悲鳴を上げた、しかし紗矢華は問答無用とばかりに、容赦なく剣を振り下ろしてくる。

吸血鬼化した古城の動体視力でも、完全には見切れない神速の斬撃だ。ほとんどカンだけを頼りに転がって、かろうじて古城はその直撃を回避する。

「どうして避けるの！」

「避けなきゃ死ぬだろうが！」

「大人しく死ねって言ってるのよ、女の敵っ！　よくもあたしの雪菜を辱めてくれたわね！」

理不尽な要求を突きつけながら、紗矢華が剣を振り回す。古城はひたすら逃げ惑うだけだ。実力的には、紗矢華の剣技は雪菜と同等かそれ以上。しかし怒りのせいで無駄に力が入って、本来の技のキレが失われている。古城がどうにか攻撃をかわせるのはそのおかげだ。

「あの子の首筋に唇を這わせたり、息を吹きかけたり甘噛みしたりなんて、私でも滅多にやらせてもらえないのに！　許せない！」

「それってただの嫉妬じゃねえか!?」

「あなたがいなければ、あの子が危険な目に遭うこともないのよ。あの子にはロタリンギアの殲教師や、黒死皇派の残党と戦う理由なんてないのに！」

「うっ」

怒りに我を忘れた紗矢華の言葉が、古城のいちばん触れられたくなかった部分を正確にえぐった。雪菜が古城の監視に生活のほとんどを費やしているのも、彼女が危険な戦闘に巻きこまれたのも、古城の存在が原因なのだ。古城が雪菜に監視され続けているように、雪菜もまた古

城の存在に縛られている。どんなにしつこくつきまとわれても、口うるさく説教されても、古城が彼女を嫌いになれないのはそれが理由だった。

「あの藍羽って子だけじゃない。あなたには妹さんや両親や学校の友人も大勢いるじゃない！　それなのに私から雪菜を奪う気なの!?　私のたった一人の友達を――！」

紗矢華の叫びに集中力を奪われて、彼女の攻撃に対する反応が一瞬遅れた。

殺意そのものが形になったような勢いで、紗矢華の剣が突き出される。避けきれないことを直感して、古城は迫り来る苦痛を覚悟し――

「やばっ……！」

その瞬間、己の体内に起きた変化を自覚して、古城の全身が総毛立った。巨大な魔力の覚醒の予感に、全身の血液が沸騰するような気配を覚える。古城の自己防衛本能に反応して、眠っていた眷獣が目覚めようとしているのだ。いまだに制御できないでいる新たな眷獣が。

「えっ!?」

突きこんだはずの剣を弾かれて、紗矢華が表情を凍らせた。古城を中心に発生した見えない壁が、彼女の攻撃を撥ね飛ばしたのだ。

見えない壁の正体は衝撃波。地鳴りのような震動が屋上のコンクリートに亀裂を走らせ、大気のうねりが暴風となって古城を取り囲む。覚醒前の眷獣の、ほんのわずかな魔力の余波が、これだけの異変を引き起こそうとしているのだ。そして――

「占城!?」

為す術なく立ち尽くす占城の耳に、少女の悲鳴が聞こえてくる。悲鳴の主はペットボトルを抱えた浅葱。買い出しを終えて戻ってきたのだ。

「ちょっとあんた、なにやってるのよ!? その剣、まさか本物 ――!?」

占城と対峙する紗矢華に気づいて、浅葱が走り寄ってくる。浅葱の気の強さが思い切り裏目に出た恰好だ。立て続けに起きた予想外の事態に、紗矢華も対応できずにいる。

「まずい！　来るな、浅葱っ！」

なりふり構わず占城が絶叫した。占城は眷獣の暴走を押さえこむのに精一杯で、魔力の漏出を制御するだけの余裕はない。

「え!?　痛っ……あ……あああっ！」

無差別に放出された大気の震動が、破壊的な超音波となって浅葱を襲う。

浅葱は両耳を押さえて苦悶し、その場にがっくりと倒れこんだ。急激な気圧の変化に耐えきれずに、意識を失ってしまったのだ。

「やめなさい……っ、暁古城っ！」

紗矢華が剣を構えて怒鳴る。浅葱と同じように超音波を浴びながらも紗矢華が無事なのは、その剣が彼女を守っているのだろう。しかし雪菜の〝雪霞狼〟のように、古城の魔力を完全に無効化する能力はないらしい。膨大な魔力の放出に耐えきれず、屋上の崩壊が加速していく。

「浅葱っ！」

倒れたままの浅葱の身体が屋上の崩壊に巻きこまれそうになり、それに気づいて古城が絶望の声を上げた。

その刹那、キンッ、と金属が擦れ合うような甲高い音が鳴り響き、小柄な影が古城たちの頭上から舞い降りた。

「――獅子の神子たる高神の剣巫が願い奉る！」

制服のスカートと黒髪を翻して着地したのは、銀色の長槍を構えた女子生徒だ。彼女は舞い踊るように槍を振りかぶると、崩壊する屋上へとその穂先を突き立てた。

「雪霞の神狼、千剣破の響きをもて楯と成し、兇変災禍を祓い給え！」

彼女の祝詞が澄んだ声色を響かせて、それに呼応するように銀色の槍が光を放つ。

ありとあらゆる結界を切り裂き、真祖の魔力をも無効化するという獅子王機関の秘奥兵器、七式突撃降魔機槍の輝きである。

その輝きに圧倒されたように、古城の魔力の放出も止まった。覚醒間際の眷獣が引き起こす地鳴りや大気のうねりも消え、古城自身の燃え上がるような血の昂ぶりも収まっている。眷獣の制御に成功したわけではないが、とりあえずの暴走の危機は去ったらしい。屋上はあちこちひび割れた廃墟のような姿をさらしていたが、ギリギリのところで浅葱は無事だった。

古城と紗矢華は、二人同時に、力尽きたようにその場にへたりこむ。

そんな古城たちにゆっくりと近づいてきたのは、雪菜だった。

「二人ともこんなところで、なにをやってるんですか？」

ぶっきらぼうにそう言って、彼女は、古城たちの眼前に再び〝雪霞狼〟を突き立てる。

古城と紗矢華の戦闘の気配を感知して、教室を飛び出してきたのだろう。雪菜の細い肩は、呼吸のたびに、弾むように小さく上下している。

「いや、それは……この嫉妬女が、一方的に襲いかかってきて――」

「ち、違うの。そこの変質者が雪菜を裏切るような破廉恥なことをするから――」

古城と紗矢華は、叱られた小さな子どものように、互いに相手を指さして言った。

雪菜は自分の腰に手を当てて、まるで年の離れた姉のような口調で、

「なにがあったのか、だいたいの事情は想像できますけど――紗矢華さん」

「は、はい」

「第四真祖の監視は、わたしの任務です。それを妨害することが紗矢華さんの望みですか？　そんなにわたしが信用できないということですか？」

怯えた子猫のように背中を震わせて、紗矢華が激しく首を振る。

雪菜は深々と息を吐き、

「それから先輩……こんなところで眷獣が暴走したらどうなるか、もちろんわかってるんですよね。生徒のみんなになにかあったら、どう責任を取るつもりだったんですか？」

「……すみません。反省してます。すみません」

古城は消え入りそうな気分で背中を丸めた。

あのとき雪菜が来てくれなかったら、古城の魔力の暴走は確実に浅葱を傷つけていた。それを想像すると、凄まじい恐怖で身が竦む。浅葱を失う恐怖に比べれば、雪菜の辛辣な説教は、まるで慈母の赦しのようにも感じられた。

だが、古城がホッとしていられたのもそこまでだ。

「雪菜ちゃん！　なんかすごい勢いで飛び出していったけど大丈夫？」

忙しない足音が階段のほうから聞こえてきて、中等部の制服を着た女子生徒が顔を出す。耳慣れた凪沙の声だった。凪沙は半壊した屋上と倒れた浅葱、そして反省中の古城たちを、びっくりしたように見回して、

「なにがあったの。わっ、なにこれ。なんで屋上が壊れてるの!?　って、浅葱ちゃん!?　怪我してる!?　どうしよう!?」

「……二人ともしばらく、緒に反省していてください。わたしと凪沙ちゃんで、藍羽先輩を保健室に連れて行きますから、〝雪霞狼〟のこともお願いします」

雪菜は小声でそう言って、格納状態に折り畳んだ槍を古城に差し出した

たしかに倒れた浅葱をこのまま放っておくわけにはいかないし、かといって槍を抱えて保健室には行けない。意識のない浅葱を古城が手当てするわけにもいかないから、保健室には雪菜

と紗沙の二人で連れて行く。雪菜の提案は実に合理的なもので、古城も特に異議はなかった、ただ一点を除いては。

「え？　一緒に反省ってまさか……この嫉妬女と俺が!?」

「ど、ど、どうして私がこの破廉恥男と!?」

古城と紗矢華が、互いに相手を罵りながら激しく抗議する。

雪菜はそんな古城たちを、澄んだ永久氷壁のような瞳で見下ろし、

「なにか文句があるんですか？」

古城と紗矢華は無言でふるふると首を振り、反省の意を表すために二人でその場に正座した。

8

保健室に養護教諭の姿はなく、出張中の彼女の代わりに、そこにいたのはアスタルテだった。実はアスタルテの本来の居場所はこの保健室のほうであり、彼女の便利さに目をつけた那月が、自分専用のメイドとして無理やり連れ出した、というのが真実だったらしい。

そんな人工生命体の少女は現在、メイド服の上に白衣という、やや倒錯的な服装で、ベッドに眠る浅葱の隣に屈みこんでいた。

彼女はもともと、医療品メーカーに設計された臨床試験用の人工生命体だ。医療活動に必要

な知識は、標準装備として遠隔記憶に焼きつけられている。免許取り立ての新人医師と同じ程度には、高度な医療知識を備えているという話だった。

「――診察を終了しました」

簡単なチェックをひととおり済ませて、アスタルテは無感情な声を出す。

「衝撃波、および急激な気圧の変動による軽いショック症状と推定されます。後遺症の心配はありません。ただし本日中は安静を保つことを推奨します」

「わかりました。ありがとうございます」

雪菜はホッと息を吐いて、診察を終えたアスタルテに礼を言った。

アスタルテは少し戸惑うような表情を浮かべて、受諾、と答える。

強張っていた雪菜の頬にも、ほんの少し柔らかさが戻った。浅葱に大きな怪我がなかったのは朗報だ。もしも浅葱が無事ではなかったと知ったら、きっと古城が深く傷つくからだ。

そして安堵する雪菜の背中に半分ほど隠れて、暁凪沙があたふたと慌てている

「ゆ、雪菜ちゃん。メイドさんだよ。本物のメイドさんは初めて見たよ。なんでメイドさんが保健室にいるのかな。それともモデルチェンジした白衣なの？　そういうサービスなの？　雪菜ちゃんの知り合いなの？」

「えー……」

矢継ぎ早に繰り出される凪沙の質問に、雪菜は軽く途方に暮れる。どう答えればいいのか、

彼女にはわからない質問ばかりだった。そして困窮する雪菜の代わりに、
「アスタルテは私の雇ったメイドだ。暁凪沙」
いきなり保健室に入ってきた那月が、迷いなくそう言い放つ。
凪沙はきょとんと目を丸くして振り返り、
「あ、南宮先生。いつもお兄ちゃんがお世話になってます。可愛いですね、その服」
「おまえは兄貴と違って礼儀をわきまえているな」
行儀よく頭を下げる凪沙を尊大に見返して、那月がふてぶてしく微笑んだ。唯我独尊を地でいく那月でも、やはり服を褒められるのは嬉しいらしい。
そして那月は、眠り続ける浅葱をちらりと一瞥し、
「それで、この有様は、おまえの監督不行届きということでいいのか、転校生」
「はい。すみません」
雪菜は、なんの言い訳もせずに頭を下げた。ふん、と那月はつまらなそうに鼻を鳴らし、
「なら、後始末もおまえに任せる。本当なら暁古城のアホを今からしばきに行くところだが、私は急ぎの用ができた」
「黒死皇派の潜伏場所がわかったんですか？」
雪菜が眉をひそめて訊き返した。
「建設途中の増設人工島だそうだ。なんの捻りもない隠れ場所だな。気持ちはわかるが、余計

な真似はしてくれるなよ。今回のテロリストどもの相手は警察局の仕事だ」
雪菜がうなずくのを確認して、那月が悠然と微笑んだ。
「アスタルテは置いていく。看護の手が足りなければ使っていいぞ」
那月はそう言い残して、すぐに保健室を出て行った。
その間に凪沙は、眠っている浅葱の看病を始めていた。
看病といっても特にやることがあるわけでもなく、毛布をかけ直したり、枕の位置を調整したり、浅葱の長い睫毛を見てうらやましそうに溜息を零したり、匂いを嗅いだりする程度だが。
どことなく古城との血のつながりを連想させるそんな凪沙の姿に、雪菜は思わず苦笑して
その直後、浅葱が不意に目を覚ます。
「あれ……ここどこ？　保健室？」
あいたた、と頭を押さえて、浅葱がゆっくりと上体を起こした
そんな彼女の前に、凪沙が勢いよく身を乗り出して、
「浅葱ちゃん、気がついた？　あたしのことわかる？　これ何本に見える？　どこか痛いところはない？　古城君になにかされなかった？」
凪沙のもの凄い剣幕に、浅葱はしばし呆気にとられて、
「起き抜けでその質問攻めはつらいわね、いったいなにがどうなってたんだっけ？」
「えーとね、屋上の配管が破裂したらしいよ。そのときのショックで気絶したんだって」

「配管？　破裂？　あー、そういえば耳がキーンってなった気がするわ」
不快な体験を思い出したように、浅葱が眉間に皺を寄せる。
「ん、でもその前に古城が変な女に刃物で追い回されてたような……古城は？」
「すみません、藍羽先輩。彼女はわたしの友人です。暁先輩もいちおうご無事です」
雪菜が、怖ず怖ずと浅葱の前に進み出て言った。
唐突な雪菜の告白に、浅葱は困惑したように目を瞬く。そもそも雪菜がここにいる理由も、浅葱は理解してないはずだった。
「……えーと、あなた、姫柊さんだっけ。なんで、あなたの友達が古城を襲うわけ？」
至極もっともな浅葱の疑問に、雪菜はしどろもどろになる。
「それは、つまり暁先輩に対して……嫉妬していたのではないかと」
「嫉妬？　ジェラシー？　もしかしてあたしと古城が一緒にいたから？」
「そうですね。それもひとつの要因だと思います」
はっきりしない雪菜の返答に、浅葱が軽く苛立ちをみせる。
紗矢華は、彼女から雪菜を奪おうとする古城に対して嫉妬していたのだが、もちろん浅葱にそんなことはわからない。もっと単純に、自分が古城と仲良くしていたから紗矢華が嫉妬した——すなわち紗矢華は古城のことが好き、というふうに浅葱は理解した。
浅葱の中で紗矢華の存在が『敵』として認識された瞬間である。

そして当然、同じ誤解をした凪沙が、興味津々というふうに雪菜に詰め寄って、
「どういうことなの？　あの人、彩海学園の生徒じゃないよね。すっごく綺麗な人だったけど、古城君、あんな人といつから知り合いだったの？　古城君と一緒に買いてきてよかったの？　二人で変な雰囲気になったりしないかな……？」
「え？　う、うん。暁先輩と紗矢華さんならもう大丈夫だと思うけど……」
雪菜の語尾がどことなく尻すぼみになったのは、二人が喧嘩を再開する可能性を完全に否定できなかったせいである。しかしそんな煮え切らなさが、浅葱を更に苛立たせ、
「なんでそんなことが言い切れるわけ？」
「……浅葱ちゃん？」
いつになく刺々しい浅葱の語調に、凪沙が驚いたような声を出す。浅葱は小さく肩をすくめ、
「前から気になってたんだけどさ、あなたと古城はどういう関係なの？　古城と二人でいつもこそこそしてるけど、あなたは古城のなにを知ってるわけ？」
「それは……すみません、わたしからはお答えできません」
雪菜がきっぱりと首を振る。浅葱がますますムッとして雪菜を睨み、
「なによそれ。いいわ、だったら古城に直接訊くから――」
「いえ、あの、藍羽先輩……！」
毛布をはね除けて立ち上がる浅葱を、雪菜が慌てて止めようとした。

それまで無言だったアスタルテが、雪菜たちの会話に割りこんできたのはそのときだった。

「――警告。校内に侵入者の気配を感知しました」

「侵入者？」

まったく予想しなかったその言葉に、浅葱たちはもちろん、雪菜も呆然と固まった。

「総数は一名。移動速度と走破能力から、未登録魔族だと推定されます」

アスタルテが淡々と警告を続ける。雪菜は咄嗟に屋上を見上げて、

「魔族!?　まさか、暁先輩を狙って？」

「否定。予想される目標地点は、現在地、彩海学園保健室です」

「え？」

アスタルテの言葉が意味する事実を、雪菜は一瞬、理解できなかった。

そんな雪菜の背中に、誰かが突然しがみついてくる。

「嘘……」

全身を激しく震わせながら、そう呟いたのは凪沙だった。その声を聞いて雪菜は愕然とした。いつもの快活な彼女とは別人のような、弱々しい呟きだ。怯える凪沙の顔色は真っ青で、血の気をなくした指先は冷え切っていた。明らかに普通の状態とは思えない。

「凪沙ちゃん？」

「どうしよう、雪菜ちゃん……あたし……恐い……」

生まれたての雛鳥のように震え続ける凪沙を、雪菜が戸惑いながら抱き支える。
魔族特区である絃神島の住人は、魔族の存在に慣れている、と聞いていた。事実、この島の人々は、魔族登録証をつけた魔族を街中で見かけても、ろくに振り返りもしない　短いスカートを穿いた女子中学生のほうが、よっぽど人々の視線を集めるくらいだ
登録魔族の犯罪率は一般人のものよりも格段に低いし、魔族による犯罪が発生すれば、武装した特区警備隊が大挙して押し寄せることになっている。この島では一般市民が魔族を恐れる理由がないのである。
しかしそれでは、凪沙のこの怯えようが説明できない。
「よくわからないけど、逃げるわよ。ここにいなければいいんでしょ！」
震える凪沙を見かねたのか、そう言って浅葱が保健室の出口へと向かった。
だがその前に、扉が乱暴に開けられた。
のっそりと中に入ってきた影を見て、くっ、と浅葱が短くうめく。
浅葱の行く手を阻むように現れたのは、灰色の軍服を着た大柄な男だ。その顔は銀色の獣毛に覆われて、尖った口元から鋭い牙がのぞいている。
「――獣人？」
浅葱の呟きを耳にして、凪沙が、ひっと喉を鳴らした。雪菜は、彼女を抱く手に力を入れた。
相手が獣人一体だけなら、素手でも倒す自信がある。

だが、それは雪菜が一人でいるときの話である。浅葱や凪沙を庇いながらでは不意打ちでも勝つのは困難だろう。ましてや凪沙がこの状態では絶望的だ。

槍を置いてきたのは完全な雪菜のミスだった。いくら学校内とはいえ、やはり〝雪霞狼〟は手放すべきではなかったのだ。

「見つけたか、グリゴーレ」

獣人のあとに続いて、軍服の男がもう一人入ってくる。こちらは人間形態のままだが、凄まじい威圧感を持つ初老の男性だ。

「この二人の誰かですな、少佐。一人ずつ嗅ぎ比べれば、すぐにわかりますがね」

聞き取りにくい声でそう言って、獣人は、手に持っていた小さな靴を投げ落とす。

それを見て雪菜はハッとする。彼らはその靴の臭いを辿って、この保健室までやって来た。つまり靴の持ち主が、彼らの目当てということだ。

少佐と呼ばれた男が、ふむ、と面倒そうに鼻を鳴らす。

「日本人の顔は見分けにくくていかんな……まあいい。まとめて連れて行く。交渉の道具には使えるだろう。人質にもな」

「……」

近づいてくる獣人を睨んで、浅葱がじりじりと後ずさる。

その直後、抑揚のない無機質な声が室内に響いて、白衣の少女がすっと前に歩み出た。

「――人工生命体保護条例・特例第二項に基づき自衛権を発動。実行せよ、〝薔薇の――」

だが、人工眷獣を起動する彼女の命令が、最後まで紡がれることはなかった。

少佐と呼ばれた軍服の男が、雪菜ですら反応できない速度で拳銃を引き抜いて撃ったのだ。

六発の弾丸が一瞬でアスタルテに叩きこまれて、彼女の身体はたちまち壁際まで吹き飛んだ。

眼前で繰り広げられた凄絶な光景に、浅葱たちが絶句する。

「……少佐？」

いくら人工生命体が相手とはいえ、小柄な少女に対する上官の過剰な攻撃に、獣人の男が怪訝な顔をする。

「この人形から、妙な魔力の流れを感じたのでな　護身具でも仕込んでいたか」

少佐と呼ばれた男は、拳銃をしまいながら淡々と言い訳した。特に反省も後悔もしていない口ぶりだった。

しかし雪菜は、残虐に見える彼の態度が、兵士として正しい判断だということを知っていた。

アスタルテの体内には、圧倒的な戦闘能力を持つ人工眷獣が棲んでいる。なんの予備知識もなくその気配を察知して、眷獣を召喚する前に、宿主を戦闘不能にした――並の軍人にできる判断ではない。この男はとてつもない腕を持つ超一流の戦士だ。〝雪霞狼〟を持たない雪菜に倒せる相手ではなかった。否、〝雪霞狼〟があったとしても果たして勝てるかどうか

「ああ、脅かして済まなかった。安心してくれ。大人しく従ってくれれば、きみたちに危害を

加えるつもりはない」

戦慄する雪菜たちを気遣うように、少佐と呼ばれた男が、流暢な日本語で語りかけてくる。

「きみたちの中にアイバ・アサギがいるな。我々のためにちょっとした仕事をしてもらいたい。それが終われば二人とも無事に解放すると約束しよう」

「……あんたたち、何者なの？」

雪菜たちを庇うように前に出て、浅葱が男たちに訊き返す。恐怖を感じていないはずがないのだが、浅葱の声は震えていなかった。

そんな浅葱の勇ましい姿に、少佐と呼ばれた男は賛嘆の表情を浮かべた。勇猛さを重んじる軍人であるからこそ、勇気ある相手には敬意を表する。それが彼の流儀なのだろう。

「これは失礼。戦場の作法しか知らぬ不調法な身の上ゆえ、貴婦人への名乗りが遅れたことは詫びよう」

紳士的な物腰でそう言って、少佐と呼ばれた男が帽子を脱ぐ。

「我が名はクリストフ・ガルドシュ　―戦王領域の元軍人で、今は革命運動家だ。テロリストなどと呼ぶ者もいるがね」

ガルドシュと名乗る男の顔を見て、雪菜はハッと息を呑む。

秀でた額と尖った鷲鼻。知的でありながら、苛烈な威圧感を持つ老人の顔。

その頬には目立つ傷跡が残されていた。大きな古い傷跡が――

第三章
機神覚醒

1

ビルの隙間をぬって張り巡らされたモノレールの高架上を、一人の少年が疾走していた。
彩海学園高等部男子の制服。軽く染めた短髪と、首にかけた密閉型のヘッドフォン。
第四真祖・暁古城のクラスメイト、矢瀬基樹だ。
「ああくそ、よりによってあんなところで暴走しやがって、古城の野郎！」
いまだに消え残る砂嵐のような耳鳴りに、矢瀬が苛々と舌打ちする。
今日の絃神島は快晴で、めずらしく風も穏やかだ。しかし高架上に立つ彼の周囲には、強いビル風が吹き荒れている。
「俺の〝音響結界〟がずたずたじゃねえかよ！　あいつの眷獣は本当にロクでもねえのばかりだな」
そう言って矢瀬は、ポケットから何錠かの薬を取り出した。市販の風邪薬によく似た姿の、二色に塗り分けられたカプセルだ。それを口の中に放りこみ、水も飲まずに乱暴に噛み砕く。
矢瀬基樹は、音響過適応と呼ばれる特殊体質。魔族ではなく、人間として生まれた異能者だ。
もっと簡単な言葉で表現するなら、超能力者ということになる。
矢瀬家は、魔族特区の成立にも深く関わっている大財閥だが、一方で、こうした特殊能力を

持つ人材を輩出する家系でもあった。基樹もそんな規格外品の一人というわけだ。

一種の念動力によって拡張された矢瀬の聴覚は、精密なレーダーに匹敵する解像度を持っている。目で見るように音響を観測る。その異様な聴覚を使って、矢瀬は彩海学園をすっぽりと覆う監視網を張り巡らせ、常に校内を監視していた。古城もその監視対象の一人である。

音の反響を聞くだけの受け身な能力　それゆえに、姫柊雪菜のような卓越した霊視力の持ち主でも矢瀬の監視には気づけない。

だが、もちろん彼の〝音響結界〟にも欠点はある。

強い光を浴びたカメラの画像がホワイトアウトするように、爆発的な大音響は〝音響結界〟を破壊する。古城の眷獣が撒き散らした振動波は、繊細な結界をずたずたに引き裂くのに十分すぎる威力があった。

破壊された結界の再構築に必要な時間は約七十四分。その無防備なタイミングを衝いて、藍羽浅葱の誘拐は引き起こされたのだった。

「しかし、あのタイミングで浅葱を狙うのか。ガルドシュって野郎も相当イカレてんな！」

数錠のカプセルをさらに追加しながら、矢瀬が呟く。

古城の眷獣が、あれだけの魔力を放出した直後だ。ガルドシュたちも当然、第四真祖の存在に気づいたはずである。だが、あの瞬間、彩海学園の警備システムが軒並みダウンしていたのも事実だった。真祖と遭遇する危険を冒してでも、誘拐を成功させるタイミングを優先した。

生半可な度胸ではない。

矢瀬が追っているのは、浅葱たちを乗せた黒死皇派の車だ。

時速六十キロ近くで疾走するワゴン車を、矢瀬は生身で追跡する。彼の周囲を吹き荒れる風速九十メートルの追い風が、その速さでの連続走行を可能にしているのだ。

電気信号の流れる向きが違うだけで、マイクとスピーカーは、原理的には同一ものである。それは矢瀬の能力も同じだ。普段は受信側で使っている『聴く』ための能力を、発振側にすることで大気振動を発生させる　今の矢瀬は、自分の意思で突風を巻き起こし、大気の流れを自在に操っているのである。

もちろん生身の人間が、なんの代償もなしに使えるような力ではない。

矢瀬が呑んでいる薬は、能力を一時的に増幅するためのケミカルドラッグだ。副作用もでかく、使いすぎれば相応の代償を払うことになる。それでも今はこれに頼るしかない。

「ヘリポート？　絃神島の外に連れ出すつもりか……？」

黒死皇派の目的地に気づいて、矢瀬はようやく速度を落とした。

絃神島東地区にある、民間航空会社のヘリ発着場だった。航空写真の撮影や観光客相手の遊覧飛行が主な業務だが、機体の貸し出しも行っている。

飛行可能な状態で待機していたらしく、縛られた浅葱たちを乗せたヘリは、それからすぐに離陸した。

島の外に出られたら、矢瀬の能力をもってしても、もはや追跡は不可能だ。が、

「――届くか？」

大量のカプセル剤を呑みこんだ矢瀬は、ヘッドフォンで耳を寒いで瞼を閉じた。

神経が灼けつくような感覚を味わいながら能力を解放。矢瀬の視界が一気に開け、数十キロ先の海上までも鮮明に視覚する。

矢瀬の頭上　上空数百メートルの地点に出現したのは、気流によって生み出された矢瀬の分身体だった。大気振動で筋肉と神経細胞を疑似的に再現し、そこに自分の意識を移したのだ。

〝重気流躰〟と名付けられた、矢瀬の切り札である。

霊能者が使う幽体離脱と理屈は同じだが、曲がりなりにも肉体を持つ重気流躰は、肉眼で視ているものと同様の鮮明な映像を伝えてくる。

遠い洋上にヘリの目的地を発見して、しかし矢瀬は混乱を覚えた。

「あれが黒死皇派のアジトだと……どういうことだ!?」

矢瀬の本体のすぐ背後から、皮肉っぽい声が聞こえてきたのはその直後だ。

「音響制御か。ふぅん……めずらしい能力だな。ドルイド魔術とも違うようだし、大陸系の仙道と同じ系統の能力かな」

「なにっ!?」

矢瀬の能力の欠点は、分身体に意識を飛ばしている間、自分の本体の感覚が極端に低下する

ことだった。かろうじて声には反応できたが、声の主の姿まではわからない。

そして矢瀬は自分の背後で、巨大な魔力が迸るのを知覚した。

古城の眷獣にも匹敵する爆発的な圧力だ。

「なんだ、この力は――!?」

矢瀬の分身体が、閃光のような魔力に呑みこまれて消滅した。数百メートルも上空に飛ばしていた気流の塊を、何者かが地上から撃ち落としたのだ。

逆流してきた痛覚に苦悶の声を洩らしながら、矢瀬は地面に転がって、

「馬鹿な。あんたがどうしてっ……!?」

そこに立っていた男の姿に、彼は今度こそ絶句する。

逆光の中に立っていた長身の男が、笑いながら軽く指を鳴らした。彼の背後で揺らめいたのは、のたうつ巨大な炎の塊だ。

「悪いね。今はまだ、彼らの邪魔をしてもらっては困るんだ――大丈夫、死にはしないさ。たぶんね」

男の言葉が終わる前に、炎の蛇が矢瀬の足元の地面を薙ぎ払った。高熱で炙られたブロックが爆散し、重力に引かれて雪崩のように崩れ落ちる。

その下にあったのは、海へと続く運河の水面だ。悲鳴を上げることもできないまま、矢瀬は落下する瓦礫に巻きこまれ、派手な飛沫とともに濁った水の中へと沈んでいった。

2

そのころ古城と煌坂紗矢華は、人目につかない校舎裏の非常階段に、二人並んで座っていた。

最初のうちこそ緊張して険悪な雰囲気だったが、一時間も経てばさすがにダレる。

人はやる気のない表情で、流れていく雲をぼんやりと見上げ、やがて紗矢華が、ふわ、と小さくあくびをした。

そんな彼女の横顔に、古城がちらりと視線を向けると、

「――な、なに見てるのよ」

頬を赤らめた紗矢華にいきなり睨まれる。

「ああ。悪い」

古城は億劫げに手を振って謝った。うるさい子犬を追い払うような古城の仕草に、紗矢華が、イラッと唇を曲げる。これと似た不毛なやりとりが、先程から何度となく繰り返されて、古城たちの気力をじわじわと奪っていたのだった。

「なあ。俺たち、いつまでこうしてなきゃいけないんだ？」

「雪菜が帰ってくるまでじゃないの？」

そう言って紗矢華が、膝の上に置いた二つのバッグを抱きかかえる。ひとつは紗矢華の剣が

入ったキーボードケース。もうひとつは雪菜の槍を収めたギターケースだ。

「言っとくけど、私だって本当は、あなたのような破廉恥な男とは一瞬たりとも一緒にいたくないのよ。空気感染で妊娠したりしたらどうしてくれるのよ？」

「そんなことできるかっ。おまえは吸血鬼をなんだと思ってるんだ!?」

「あなたならやりかねないわ。私の雪菜の血を吸ったくせに私の雪菜の血を吸ったくせに」

紗矢華が恨みがましい口調でぼそぼそとうめき、鬱陶しいなあ、と古城は深く溜息をつく。

雪菜よりもひとつ年上の紗矢華は、つまり古城と同い年ということになる。

そのせいでお互い意地になっている、というのはなんとなく古城も自覚していた。相手が雪菜のように年下なら、少しくらい迷惑でも笑って受け流せるし、那月のように——見た目はともかく——年上なら、下手に出るのもやぶさかではないのだが。

そんなことを考えていると、不意に紗矢華と目が合った。ぼんやりとしていた古城のことを、ずっと見つめていたらしい。そして、

「ねえ」

「なあ」

間の悪いことに古城たちは、人同時に口を開く。うんざりしたように息を吐いた紗矢華が、先に言え、と古城を促した。古城はやれやれと肩をすくめる。

「その……なんていうか、悪いな。いろいろ」

「は？」

紗矢華がきょとんと目を大きくした。

「どうしてあなたが謝るのよ？　気持ち悪いんだけど」

「うるせえな！　ていうか、煌坂が言ってたことは正しいと思ってさ」

古城はそう言いながら、羽織ったパーカーのフードを引っ張って目元を覆った。相手の目を見ながらこういう話をするのは、なんとなく照れくさい。

「こないだの殲教師のオッサンのときも、今度のテロリスト騒ぎでも、姫柊は俺のせいで面倒な事件に巻きこまれたんだ。だから姫柊の友達が怒るのは無理もないかな、とか」

「……自分のせい、って素直に認められると、逆に自慢されてるように聞こえるんだけど」

紗矢華がなぜか不服そうに唇を尖らせる。

「たしかにあなたのせいだけど、雪菜は任務だから仕方なくあなたの監視をしているだけで、好きで協力してるわけじゃないんだからね。べつにあなたが気にする必要はないじゃない」

「あー……まあそうなんだけどな。助けてもらったのも本当だし」

古城が苦笑混じりに首を振る。対抗心を燃やしすぎて、紗矢華の言葉は途中から古城を励ますような形になっていた。途中でそれに気づいた紗矢華が、ばつの悪そうな表情になって、

「あなたって変な吸血鬼ね……普通、自分を監視してる相手に感謝なんてしないと思うけどもしかしてそういうのが好きな人？」

「監視されてることに感謝してるわけじゃねえよ」
古城が不機嫌な声で言い返す。
「ただまあ、監視は迷惑だけど、姫柊はいいやつだしな」
「どうしようもない男だと思っていたけど、少しは見る目があるみたいね。そこだけは認めてあげてもいいわ」
紗矢華がどことなく嬉しそうな表情で言う。雪菜が褒められると、やはり気分がいいらしい。本当に雪菜のことが好きなんだな、と微笑ましく思う一方で、なぜ俺に対してはそんな上から目線なんだ、と古城はうんざりする。しかし紗矢華はますます調子に乗って、
「でも、いいやつ、なんて陳腐な表現は感心できないわね。雪菜を褒める以上は、それなりの覚悟と誠意をもってやってもらわないと」
「……覚悟と誠意が必要な褒め方ってなんだ？」
「そんなに難しいことじゃないわ。あるがままの雪菜の姿を忠実に再現すればいいだけだから。きめ細やかな肌、金色の産毛、鎖骨の下にある小さなほくろ。天使の翼のような肩胛骨から、引き締まった脇腹と、骨盤にかけての高低差が織りなす黄金比　！」
「　外見っつか、身体のことだけじゃねえかよ！」
よどみなく雪菜の魅力を語り始めた紗矢華を、古城がたまりかねて制止した。
「もっとほかに褒めるところがあるだろ！　つか、おまえが言うとなんか生々しいわ！」

「……外見以外で？」

紗矢華が、この男はやはり危険だわ、と警戒した目つきで古城を見る。

「そうね。たしかに私も雪菜のベッドには、こっそり潜りこんだりしてたけど。あの子の残り香に包まれて、あれは本当に至福の時間だったわ」

「――誰が匂いを褒めろっつった!?」

古城は激しい頭痛を感じながらうめいた。

「そうじゃなくて性格の話をしてやれよ！　真面目なこととか、努力家なこととか、人見知りのくせに意外に世話焼きなこととか、気が強いくせになんだかんだで甘くて押しに弱いところとか――」

「や……やるわね、暁古城」

紗矢華が、ぽかん、と呆気にとられたように古城を見る。

「まさかこの私とここまで張り合うなんて」

「いやべつに張り合ってるわけじゃないけどな」

そもそも話が噛み合ってないだろ、と古城は疲れた気分になる。

「言っとくけど、私は雪菜と一緒にお風呂に入ったことだってあるんだからね！」

「知るかっ！　そんなわけのわからん対抗心を燃やされても困るわ！」

「うるさいわね！　私はあの子が七歳のときから一緒にいたのよ。雪菜の本当の家族よりも、

私のほうがあの子といた時間が長いんだから　一

そう言いながら、紗矢華は勝ち誇ったように、自分の携帯電話を古城の前に突き出した。

画面に表示されていたのは、幼い少女が二人で写った古い写真だ。

年齢はそれぞれ七、八歳前後。強い目の光が印象的な少女と、淡い栗色の髪の少女だった。

寒々しい真冬の景色を背景に、裸足の彼女たちは、たったの二人きりで世界と対峙するかのように、強く手を握り合って寄り添っている。

その姿を見て、古城はふと思い出す。

雪菜は、自分の両親のことを覚えていないと言っていた

それはおそらく、紗矢華も同じなのだろう。獅子王機関は全国から孤児を集めてきて、若く優秀な攻魔師に育てているのだ。

紗矢華は、本当の家族よりも長く雪菜の傍にいたと言う。だがそれは彼女にとっても、雪菜が同じ時間だけ傍にいてくれたということを意味している。

家族を一度なくした紗矢華が、そんな長い年月をかけてようやく手に入れた新しい家族が、雪菜なのだ。そんなふうに考えると、雪菜に対する紗矢華の度を越した愛情にも共感できる気がした。

「ふーん。たしかにこれは可愛いかもな」

古城はもう一度、少女たちの写真を見る。雪菜も紗矢華も当時から今の面影があって、それ

だけにいっそう幼く思えた。デフォルメされたマスコットキャラを見ているようだ。

紗矢華が当然じゃないの、と自慢げに胸を張り、

「最初からそう言ってたでしょう。私の雪菜は天使だって」

「いや、もちろん姫柊もだけど、おまえもこの頃から美人だったんだなー」

「は……!?」

なんの考えもなく告げられた古城の感想に、紗矢華が、ぴき、と全身を硬直させた。

古城の中では、特に奇妙なことを言ったという意識はない。性格にはかなり問題があるが、黙っていれば紗矢華は文句なく美人のはずだ。特に写真の中の幼い彼女には、妖精めいた可憐さがあった。この頃の雪菜が天使だというのなら、紗矢華もきっと同じ種族だと思う。

「ば、ばか……な……なにを……」

しかし古城のその何気ないひと言に、紗矢華は面白いように狼狽した。白い肌が茹で上がったように真っ赤に染まり、両肩がぶるぶると震え出す。そして、

「――やっぱりあなたはここで殺すわ！」

「なんでそうなる!?」

いきなり剣を抜いて立ち上がった紗矢華から、古城が慌てて飛び退いた。

そんな古城たちの視界の片隅で、一瞬、強烈な閃光が輝いた。

少し遅れて、鈍い爆音が響いてくる。空中で花火のように膨れ上がったオレンジ色の火球が、

ばらばらと黒い破片を散らして消えた。やがて禍々しい黒煙をまとった炎が、地上から空高くまで噴き上がる。

「なに、今の!?　ヘリが撃ち落とされたみたいに見えたんだけど」

「事故か？　それともまさか――」

古城と紗矢華は、呆然と立ち尽くしたまま呟いた。

ヘリを一撃で撃ち落とす――ということは、地対空ミサイルかそれに近い武器ということだ。そんなものを市街地でぶっ放すのは、普通にテロリストと呼ばれる人種ではないだろうか。

「まさか、黒死皇派!?」

「あの方角……拡張工事中の増設人工島あたりか！」

紗矢華と古城が同時に叫んで、二人は慌ただしく非常階段を下り始めた。

雪菜には大人しく反省してるようにと言われたが、本当に黒死皇派が暴れ出したのなら、こんなところでのんびりしている場合ではない。

ヘリの撃墜がナラクヴェーラに関係しているとは思えないが、黒死皇派はもともとテロリスト集団だ。市街地で無差別攻撃を始める可能性も捨てきれない。無視することはできなかった。

しかし校舎の一階まで駆け下りたところで、古城は不意に立ち止まる。通路を塞ぐ形になった古城を、紗矢華が迷惑そうに突き飛ばして、

「どうしたの、暁古城？　邪魔なんだけど！」

「なんだ、この臭い……!?」

「臭い？」

古城の言葉につられたように、紗矢華が、すん、と鼻を鳴らした。そして困惑の表情へと変わる。校内に漂うかすかな異臭に彼女も気づいたのだ。

「血の臭い!?」

「いや……似てるけど、これは血じゃない……」

古城は開いていた近くの窓から、校舎の中へと飛びこんだ。限りなく血に近い濃密な異臭が強さを増す。臭いの源に気づいて古城は走り出し、保健室のドアを勢いよく開ける。

「――アスタルテ!?」

そこで古城が目にしたのは、淡い真紅の体液にまみれて床に横たわる人工生命体の少女の姿だった。

「この傷……銃創!?　いったいなにがあったの!?」

駆け寄ってきた紗矢華が、アスタルテの服をはだけて傷口の様子を確かめる。彼女の小柄な身体に残されていたのは、何発もの弾丸が撃ちこまれた凄惨な傷跡だった。

すでに身動きもできずにいたアスタルテだが、かろうじて意識は残っていたらしい。古城の姿を視認して、彼女は血まみれの弱々しい息を吐き、

「――報告します、第四真祖。現在時刻から、十五分十二秒前、クリストフ・ガルドシュと名

乗る人物が本校校内に出現。藍羽浅葱、暁凪沙、姫柊雪菜の三名を連れ去りました」

「な……!?」

アスタルテが伝えた情報に、古城は絶句する。

そう、雪菜はたしかに、浅葱を連れて保健室に行くと言っていた。凪沙も彼女たちに同行したはずだ。しかし保健室に残されていたのは血まみれのアスタルテだけ。雪菜たち三人の姿はどこにもない――

「彼らの行き先は不明。謝罪します……私は彼女たちを守れなか……った……」

淡い水色の瞳を揺らして、アスタルテが言う。そんな彼女の喉から、ごぼ、と大量の血塊がこぼれた。今の彼女は、本来ならしゃべれるような体調ではない。生きているだけでも奇跡に近い状況なのだ。

「お、おい、アスタルテ!?　しっかりしろ、アスタルテ――！」

古城が、人工生命体の少女の耳元で必死に呼びかける。

その横では紗矢華が、懸命にアスタルテの止血を始めていた。

3

雪菜たちは、窓を塞がれた狭い部屋にいた。

本来は食料品などを保管する倉庫なのだろう。椅子ひとつも置かれていない殺風景な部屋だ。天井は配管が剝き出しで、床には錆が浮いている。

目隠しされたまま連れてこられたせいで、周囲の状況はわからない。おそらくはどこかの地下室だろう。緩やかに建物が揺れているように感じるのは、ヘリコプターで運ばれてきたせいかもしれなかった。

「ねえ……ここってどこだと思う？」

空の木箱の上で膝を丸めて、浅葱がぽつりと訊いてくる。

普段よりも表情が硬いのは、雪菜たちがさらわれたのは自分のせいだと、責任を感じているのかもしれない。だが、パニックになっているわけではなさそうだ。

そのことに安堵しながら、雪菜は首を振り、

「わかりません。ヘリコプターが飛んでいた時間は十分くらいでしたから、それほど遠くまで連れてこられたわけではないと思いますけど……」

そんな雪菜の反応を見て、浅葱は怪訝そうに目を細めた。

「ずいぶん冷静ね。恐くないの？」

「え？　あ、いえ……そんなことはないですけど、あ、藍羽先輩も落ち着いてますよね」

そうかな、と照れたように呟いて、浅葱は眠っている凪沙の横顔を見た。

凪沙は意識をなくしたまま、隣にいる雪菜の肩にぐったりともたれている。誘拐された恐怖

のあまり気絶した、と浅葱たちは思っているはずだ。
だが本当は、錯乱状態に陥りかけた彼女を、雪菜が当て身で眠らせたのだ。あまり褒められない乱暴なやり方だが、あの状況ではほかに凪沙を守る方法がなかった。あのまま彼女を放置していたら、精神が崩壊する危険すらあったのだ。
魔族に対する凪沙の恐怖には、やはりどこか異様なものを感じる。魔族特区の住人としては明らかに不自然だ。
「凪沙ちゃんのアレを見ちゃうとね。自分がしっかりしなきゃって感じになっちゃうよね」
そんな雪菜の疑念に気づいたように、浅葱が苦笑して言った。
「古城たちが紗神島に引っ越してきた理由、知ってる？」
「……いえ」
雪菜はゆっくりと首を振る。古城たちが魔族特区へと転入してきたのは四年前。その原因については獅子王機関の報告書にも書かれていなかった。魔族特区への移住には、厳重な審査があるにもかかわらず　だ。
「これは、ここだけの話にしといて欲しいんだけどさ」
唇の前に人差し指を立てながら、浅葱がかすかに視線を伏せる。彼女がめずらしく見せた、素の真面目な表情だ。
「凪沙ちゃんは、一度死にかけたことがあるのよ」

「え？」

「四年前にね、魔族がらみの列車事故に巻きこまれてさ。どうにか命は取り留めたけど、一生意識が戻らないかもしれないって言われてたそうよ。ましてや元の生活に戻るなんて――」

そう言って浅葱が小さく首を振る。雪菜は唖然としたように唇を震わせて、

「でも、そんなこと、凪沙ちゃんは全然――」

「うん。あたしもよくは知らないんだけど、なんか特殊な治療を受けたみたいよ。ほら、ここは魔族特区だからさ」

浅葱の説明に、雪菜は沈黙する。

絃神島――魔族特区は学究都市だ。魔族の肉体や能力を研究して、それらを応用した技術や製品の開発が日々行われている。そしてその研究テーマには、最先端の医療技術も含まれているはずだ。未認可・実験段階の医療技術が。

「傷はもう完治したけど、今も定期的に検査に通ってるんじゃないかしらね。お金もずいぶんかかったみたい。占城たちの両親が離婚して、お母さんがあまり家に帰ってこないのは、そのことと無関係じゃないと思うわ」

そこまで言って浅葱は大げさに肩をすくめた。どうやら柄にもなく真面目な話をしたことに照れているようだった。

「凪沙ちゃんが、魔族を恐がるのは、もしかしてそれが原因ですか？」

「そんなこと本人には聞けないけどさ、そうだとしても無理はないよね」

雪菜は無言でうなずいた。

望まずに吸血鬼の力を手に入れた古城が、その事実を必死で妹に隠している理由がわかった気がした。肉親が魔族になったことを凪沙が知ってしまったら、彼女たちの今の生活は確実に失われてしまうだろう。

「あと、ごめん。あたしのせいで巻きこんじゃって」

黙りこんでしまった雪菜を気遣うように、浅葱が不意にいつもの軽い口調で言った。

雪菜は罪悪感を覚えながら首を振る。黒死皇派の犯行に、浅葱が責任を感じる必要はない。むしろ責められるべきは、彼女たちを守りきれなかった雪菜のほうである。

「藍羽先輩は、どうして自分がさらわれたのかご存じなんですか？」

「ううん、全然」

投げやりに両腕を広げて、浅葱が溜息をつく。

「でもまあ、心当たりがないわけじゃないのよね。連中、あたしに仕事をやらせようとしてるみたいだしさ」

「お仕事、ですか？」

雪菜がきょとんと首を傾げて訊き返す。学校には内緒だけどね、と浅葱は小さく舌を出し、

「あたし、バイトでフリーのプログラマーみたいなことをやってるから。たまにあるんだわ、

非合法なハッキングの依頼みたいなのが。さすがにここまで強引なお誘いは初めてだけどさ」

「ハッキング……のアルバイトですか？」

雪菜はますます困惑した。呪術の知識では国家攻魔官をも凌ぐ雪菜だが、英才教育の弊害で、それ以外の分野については普通の女子中学生以下の知識しかない。ハッキングという言葉には聞き覚えがあっても、その具体的な内容までは想像できないのだ。

「コンピューターを使った特殊なお仕事ってこと。ちょっと気の利いたプログラムを作ったり、よその会社のネットワークに侵入したり。あとはパスワードを解読したりとかね」

「黒死皇派が……どうしてわざわざそんな作業の依頼を？」

特区警備隊（アイランド・ガード）に追われる黒死皇派にとっては、たかが女子高生の誘拐といえども、相当なリスクを抱えた行為のはずだ。そんな危険を冒してまで、たった一人のプログラマーを欲しがる理由がわからない。

「それはあたしも不思議に思ってたのよね。黒死皇派ってあれでしょ、何年か前にヨーロッパのほうで話題になってたテロリスト。なんでそんなのがあたしに目をつけたのかしらね」

浅葱は、電波の入らない携帯電話を鏡代わりに使って、前髪の乱れを直している。そうしていると、やはり彼女はただの女子高生にしか見えない。とてもガルドシュが目をつけるような、特異な人材とは思えなかった。だが、

「　どうやら、きみは自分が有名人だという自覚が足りないようだな、ミス・アイバ」

突然、扉を開けて部屋に入ってきたガルドシュが、軍人らしい張りのある声でそう言った。
浅葱が息を呑んで振り返る。
ガルドシュの背後には、都市迷彩の軍服を着た護衛が二人。おそらく全員が獣人だ。
「少なくとも我々が雇った技術者たちの中に、きみの名前を知らない者はいなかったよ。さすがに彼らも、〝電子の女帝〟の正体が、こんな可愛らしいお嬢さんだとは思ってなかっただろうがね」
「そんな見え透いたお世辞を言われて、あたしが協力する気になるとでも思った？」
強面のガルドシュを怯むことなく睨め上げて、浅葱が言った。
そんな彼女の反応に、老将校は満足げに笑う。
「失礼した。特に空世辞のつもりはなかったが、きみのその冷静さと気丈な態度を我々は高く評価する。この状況で取り乱す民間人を軽蔑するつもりはないが、重要な仕事を任せる気にはなれないのでね」
ガルドシュが、眠り続ける凪沙を見下ろして無感動に告げた。
浅葱がムッとしたように立ち上がり、
「用があるのがあたしだけなら、この二人は先に帰してあげて。取り引きするのはそれからよ」
「どうしても解放しろと言うなら、それに従うのはやぶさかではないが」
ガルドシュが穏やかに苦笑する。

「きみが彼女たちの安全を本気で願っているのなら、その判断は支持できないな」
「どういう意味よ。言っとくけど、もし彼女たちに指一本でも触れたら――」
「我々は統率された戦士の集団だ。非戦闘員を辱めるような品のない真似をする者はいない」
浅葱の疑念を振り払うように、低く毅然としたガルドシュの声が響いた。
それでも浅葱は、邪眼めいたガルドシュの双眸から目を逸らさない。
「保健室にいた人工生命体の子は撃ったのに？」
「彼女は戦闘の道具だった。我々と同様のな」
平静な声でそう言って、ガルドシュはアスタルテを悼むように目を伏せた。言葉とは裏腹の敬意に満ちた声音が、戦士としての揺るぎない彼の信念を感じさせた。
「……信用していいのね」
「今は亡き我が盟友、黒死皇の名誉にかけて誓おう」
「いいわ。とりあえず話だけは聞いてあげる。説明しなさい」
深く溜息をついて、浅葱が木箱の上にどっかりと座る。
ふっ、と満足そうに口元を緩めて、ガルドシュが部下に目配せをする。
部下の男が浅葱の前に差し出したのは、リングファイルに綴じられた分厚い書類の束だった。
電子機器の設計仕様書とマニュアルである。
「これがなにかかわるかね？」

「〝スーヴェレーンⅨ〟!?　こんなものどこで手に入れたの？」

英語で書かれたマニュアルをめくって、浅葱が驚愕の声を洩らした。

「我々の理念に賛同してくれた篤志家がいてね。アウストラシア軍に納入予定のものを横流ししてもらった。絃神島の管理公社できみが使っているスーパーコンピューターの同型機の、最新機種だそうだな」

「こいつで、ナラクヴェーラとかって古代兵器の制御コマンドを解析しろ、ってことかしら」

何気ない口調で浅葱が呟く。

今度はガルドシュが息を呑む番だった。ナラクヴェーラと呼ばれる古代兵器の存在を、無関係の浅葱が知っているとは、さすがに思っていなかったのだろう。

「我々は、きみに対する評価をもう何段階か引き上げる必要がありそうだな。素晴らしい」

「昨日、つまんないパズルをうちに送りつけてきたのは、やっぱりあんたたちだったわけね」

不愉快そうに顔をしかめて、浅葱が訊いた。ガルドシュは重々しくうなずいて、

「我々はこれまで百五十人を超えるハッカーに同じ内容のメールを送ったが、きみのいうところの『つまらないパズル』を解読できたのはわずかに八人。その中で一切の矛盾のない正解を導き出せたのはきみだけだ。しかも二時間足らずという圧倒的な短時間でね」

「あたしにもいろいろあったのよ。現実逃避したい理由とか」

拗ねたように独りごちながら、浅葱はなぜか横目で雪菜を見た。雪菜は困惑気味に目を瞬い

て、なんとなく後ろめたそうに目を逸らす。

ガルドシュは、それに気づかずに言葉を続けた。

「我々の目的は、あの忌まわしき聖域条約の即時破棄と、我ら魔族の裏切り者である第一真祖の抹殺だ。その悲願を成就するために、ナラクヴェーラの力が必要なのだ」

「そんなことを聞かされて、協力できるわけないでしょうが。そんな計画が実現したら、最悪、世界中巻きこんだ全面戦争よ！」

マニュアルを床に叩きつけて、浅葱が叫んだ。ガルドシュが唇を捲り上げて笑う。

「それこそが我々の望む世界の姿なのだがね――たしかにきみたちの価値観とは相容れまいな。だがそれでも……いや、だからこそ、きみは我々に協力してくれると信じているよ」

「は？　なに言ってんのよ、そんなわけ――」

「これがなにかわかるかね？」

そう言ってガルドシュは、部下の手から薄いタブレットＰＣを受け取った。

そこに表示されていたのは奇妙な長い文字列だ。呪文のように見えるが、雪菜の知る限りのあらゆる魔術の術式が当てはまらない。しかし無意味な文章とも思えない。

どうやらなにかの複雑な計算式を、人間に発音できる形に変換したものらしい。浅葱は不機嫌そうにそれを眺めて、

「あたしが解読した例の暗号文……古代兵器の制御コマンドね。だけどそれって全体のほんの

一部なんじゃないの？」

「そのとおりだ。ナラクヴェーラとともに出土した石板は、全部で五十四枚。これはその中の一枚にしか過ぎない、だが、ここに書かれていた内容を覚えているかね？」

「まさか……あんたたち……」

ガルドシュの言葉を聞いて、浅葱が顔色を変えた。

戦王領域のテロリストは、愉快そうに、そして冷酷に笑っていた。

「そうだ。この石板の銘は『はじまりの言葉』――ナラクヴェーラの起動コマンドだ」

4

保健室の壁に背中を預けたまま、古城は震えている。浅葱たちの携帯に電話をかけてみても、圏外を知らせる無常な音声が流れてくるだけだ。

黒死皇派が彼女たちをさらったという情報は、やはり間違いではないらしい。

だが古城にはその理由がわからない。たしかに雪菜は黒死皇派の行方を追っていたが、だからといって彼女が誘拐される理由にはならないだろう。ましてや浅葱や凪沙には、黒死皇派との接点はなにもないはず――

「いや……」

ひとつだけ彼女たちを結びつける存在がある。そのことを思い出して、古城が悔恨りする。

ナラクヴェーラ。密輸された古代兵器の調査を浅葱に依頼したのは古城だが、彼女はなぜか最初から、その言葉を知っていたようだった。そしてナラクヴェーラの制御法を記した石板のことを気にかけていた。

浅葱の暗号破りの実力は、古城もよく知っている。彼女のその能力が石板解読に使えると、黒死皇派の連中がもしも考えていたとしたら――

1 暁古城、救急車の手配はまだ　!?」

そんな古城の思考を遮ったのは、紗矢華の切羽詰まった声だった。

彼女は、重傷を負ったアスタルテを手当てしている最中なのだ。

「救急車は回してもらってる。だけどすぐには来られないみたいだ」

「どうして!?」

「知らん。だけど、たぶんさっきのヘリの墜落と無関係じゃないだろ。車両が出払ってるのか、道路が封鎖されてるか」

「そう……そういうこと……」

紗矢華が苦悩するように唇を噛む。

「このままじゃ彼女が保たないわ。せめて体液の流出だけでも止めないと」

「止血ってことか？　だけど――」

そんなことができるのか、という言葉を古城は危うく呑みこんだ。

アスタルテが負った銃創は、普通の人間なら即死しているレベルだ。体内に強大な人工眷獣を宿しているとはいえ、アスタルテは戦闘用に調整された人工生命体ではない　肉体強度は、常人と大差ないはずである。

「大丈夫。処置は私がやるわ。あなたは消毒液と包帯をありったけ持ってきて」

迷いを振り切ったような口調でそう言って、紗矢華は、制服の袖口からなにかを取り出した。長さ十五センチほどの、目に見えないほど細い金属針である。

「神経構造マップはタイプI準拠の人間型。これならどうにか　――」

紗矢華は口の中でそう呟いて、その針をアスタルテの背筋に突き立てる。

「煌坂!?」

「心配しないで。鍼治療みたいなものよ。生命維持に必要な最低限を残して、肉体を仮死状態にするわ。これで失血による体組織や脳への損傷を最小限に抑えられるはずよ」

「……鍼治療って……おまえが？」

占城は戸惑いながら、紗矢華の繊細そうな指先を見つめる　この状況で頼れるのはたしかに彼女以外にはないが――

そして紗矢華は、強気な笑みを浮かべて、自分自身に言い聞かせるように告げた

「獅子王機関の舞威媛は、呪詛と暗殺の専門家だって言ったでしょう　人の生と死を操るのが、

私の役目よ。雪菜が一度助けた子を、私の目の前で死なせたりしないわ、絶対に！」

恐ろしく真剣な表情を浮かべて、紗矢華が言う。

そんな彼女の姿に、古城は目を奪われる。アスタルテの返り血にまみれて治療を続ける紗矢華は、どこか神々しく、美しさすら感じさせた。舞威媛　すなわち舞女は巫女の別称だ。彼女の本質も雪菜と同じように、神々の声を聴き、森羅万象を視る霊能力者なのだろう。

「……提案します、第四真祖……」

力無く倒れたままの人工生命体の少女が、消え入りそうな声で古城を呼んだ。古城は彼女の口元に耳を寄せる。

「アスタルテ？」

「南宮那月は……現在……黒死皇派の身柄確保のため……彼らの潜伏場所に向かいました……藍羽浅葱ほか、名を連行したクリストフ・ガルドシュの行き先も、同じく黒死皇派のアジトだと思われます……」

「……那月ちゃんが向かった先に、浅葱たちが捕まってるかもしれないってことか？」

「肯定」

伝えるべき情報をすべて伝えた、という安堵の表情を浮かべて、アスタルテは目を閉じた。そして完全に意識をなくす。まるで死人のような深い眠りだ。しかし、

「たぶんこれで大丈夫。魔族特区内の病院なら、人工生命体用の調整槽も設置されてるはずだ

し、彼女たちには移植した臓器に対する拒絶反応もないから」
ぐったりと床にへたりこんで、紗矢華が言った。彼女の口元に、満足げな笑みが滲んでいる。
「そうか。本当に助かったよ、煌坂がいてくれてよかった」
古城はホッと息を吐いて、紗矢華の前に手を差し出した。彼女はその手を取って立ち上がり、
「え、うん。ありがとう……って、べつにあなたのためにやったわけじゃないんだけど！」
突然我に返った紗矢華が、古城の手を乱暴に振り払った。手の甲を思いきりはたかれて、古城もさすがに眉を逆立てる。
「痛ェな。なんなんだよおまえは」
「なんでもないわよ。あんたは死になさいよ……もう」
吐き捨てるように言い残して、紗矢華は保健室備えつけの洗面台へと向かった。血まみれの手を洗いに行ったのだ。
その間に、古城はもう一度携帯電話を取りだした。那月の番号を呼び出してコールする。が、
「　さすがに電話は通じないか！　くそ、那月ちゃんがテロリストのアジトを知ってても、肝心のあの人の居場所がわからないんじゃ意味ねえじゃねえかよ！」
応答のない電話を早々に諦めて、古城は苛々と嘆息した。
アスタルテの言うように、那月たちが黒死皇派のアジトに向かったのだとしたら、おそらく戦闘が起きるはずだ。黒死皇派に連れ去られた浅葱たちが、その戦いに巻きこまれる可能性は

高い。その前に那月と合流して、誘拐の事実を伝えなければならない。

だが、今の古城たちには肝心の那月の居場所を突き止める手段がない――

「暁、古城。その人工生命体の主人は、黒死皇派の確保に向かったって言ってわね」

人工血液を洗い落として戻ってきた紗矢華が、汚れたサマーセーターを脱ぎながら言った。

「ああ」

「だとしたら派手な戦闘になるわね」

「わかってる。だからこうして焦ってんだろ」

古城が苛々と言い返す。紗矢華は、そんな古城を呆れたような顔で見た。物わかりの悪い刑事をからかう名探偵のような口調で告げる。

「それでは質問。今、この島で派手な戦闘が行われている場所があるとしたら、どこでしょう」

「あ……」

地対空ミサイルが飛び交って、ヘリが爆発するような派手な戦場。そんな場所を思い出して、古城は、ぽん、と両手を鳴らした。

5

絃神島を構成しているのは東西南北、四基の超大型浮体式構造物だが、実は島の周囲には、

そのほかにも細々とした拡張ユニットが多く存在している。

それはたとえば原油などを備蓄する海上タンクであり、船舶の修理を行うための浮きドック、あるいはひたすら燃えないゴミを詰めこむために作られた廃棄物処理殻などというものもある。

絃神島十三号増設人工島は、建設中のそんなゴミ埋め立て施設のひとつだった。

「――お客さん、悪いけど、この先は無理だよ。警察に道路が封鎖されてる」

海沿いに連結された増設人工島の少し手前で、タクシーの運転手が車を止める。後部座席にいた紗矢華と古城は、身を乗り出して前方の景色を見た。

半径約五キロほどの、海へと突き出した扇形の大地。

造成中の埋め立て地を連想させる、だだっ広く平坦な土地である。埋め立て地との違いは、土地全体が、分厚い鋼板の蓋に覆われていることくらいだろうか。

増設人工島に連結する橋のたもとには、たしかに黄色と黒のバリケードが置かれている。赤色灯をつけたパトカーの姿も見える。

「運転手仲間の噂話だけどね、この先で国際指名手配中のテロリストたちが見つかったんだと。ほら、聞こえるでしょ、あの音。ありゃね、銃声だよ。あたしはこの仕事に就く前に、島原の内戦地帯にいたからよく知ってる」

運転手はそう言って、窓越しに聞こえてくる断続的な破裂音に肩をすくめてみせた

紗矢華が、はー、なるほど、と適当にうなずいて、
「わかりました。ありがとう。ここで降ります」
「あいよ。八百九十円」
運転手は特に古城たちを引き留めようともせずに、あっさりと料金だけを請求してきた。
血なまぐさい臭いをぷんぷんと漂わせながら、怪しげな楽器ケースを担いでいる高校生の男女二人組。かかわり合いたくないと思われても無理はなかったが
「だそうよ、暁古城。はい、お金」
「はい、じゃねえよ！　おまえも獅子王機関から金もらってるんだろ！　経費で落とせよ」
「お財布持ってきてないのよ。あなた貴族でしょ、そのくらい払いなさい。そして死になさい」
「死ぬかっ。財布も持ってないのに、タクシー呼び止めんな！」
ぶつぶつと文句を言いながら、古城は仕方なく運賃を払った。貧乏高校生である古城の身分では、タクシー代といえども大金なのだ。
もっとも贅沢にタクシーを使ったおかげで、移動時間はだいぶ短縮できた。学校を出てから、ここまで来るのにかかった時間は十五分程度。広大な増設人工島の先端では、墜落したヘリの残骸がまだ燃えていた。そして立ちこめる白煙の中で、今も銃撃戦が続いている。
「これじゃ、ほとんど戦争じゃねえか……」
絶え間ない銃声を聞きながら、やり場のない苛立ちに古城がうめいた。

建設途中のこの増設人工島では、作業用のクレーンや監視塔が、あちこちに朽ち木のように立っていた。その中でも最大の監視塔は、五階建てのビルほどもある円筒形の建物だ。

その監視塔を取り囲むようにして、分厚い鉄板に覆われた装甲車が数台配置されている。特区警備隊の機動隊員たちが、車の陰から小銃などを乱射する。そのたびに監視塔側から反撃が繰り返されて、苛烈な銃撃戦は膠着状態に陥っているようだった。

監視塔の周囲には破壊された装甲車の残骸が散らばり、負傷者の数も少なくない。まさに泥沼のような消耗戦である。古城たちのような民間人が、のこのこと顔を出せるような雰囲気ではない。

「どうやらテロリストが籠城してるみたいね」

そんな戦況を冷静に眺めて、紗矢華が言った。

「籠城？　こんなところにか？」

古城は疑わしげな視線を彼女に向けた。

味方の援護も期待できず、武器弾薬も限られたこの状況で、黒死皇派が籠城するメリットは皆無である。軍の将校だったというガルドシュが、そんな愚かな戦術を選ぶとは思えない。

しかし紗矢華は燃え続けるヘリの残骸を指さして、

「テロリストたちは本当はあれで脱出する計画だったんじゃないかしら。だけど特区警備隊にヘリを撃墜されて、逃走手段を失った」

「それで仕方なく立てこもった、ってわけか」

ふうん、と古城は鼻を鳴らす。紗矢華の説明には、いちおうスジが通っているように思えた。追い詰められた犯罪者が、手近な建物に立てこもる。典型的な立てこもりパターンだ。

だが、うまく言葉にできないが、もやもやとした奇妙な違和感が古城の中に残る。

「こんな見晴らしのいい場所でヘリを降ろそうとするなんて、まるで撃ち落としてくれと言っているみたいだよな――」

「え？」

「いや、なんでもない　それよりも逃げ場がなくなった黒死皇派が、姫柊たちを人質に使う、って可能性はないのかな」

「ひ、人質……」

その瞬間、紗矢華の小さな顔から、ザッと音を立てて血の気が引いた。まずった、と古城は舌打ちした。古城の不用意なひと言で、紗矢華が完全に冷静さを失っている。

紗矢華は担いでいたキーボードケースから、迷わずに剣を引き抜くと、

「助けに……助けに行かなきゃ、雪菜……」

「落ち着け、煌坂！　特区警備隊が、人工島の入り口を封鎖してる。そんなもの振り回しながら突っ込んだら、あっという間に逮捕されるぞ！」

羽交い締めにした紗矢華の耳元で古城が怒鳴った。

紗矢華は両手脚をじたばたさせながら、
「わ、わかってるんだけど、そんなこと！　なんとかならないの⁉」
「なんとかってなんだ？」
「術よ、術。邪眼で警官を魅了するとか、霧に変化してすり抜けるとか、空を飛ぶとか」
「ねえよ、そんな人外の特技は！」
「はあっ？　あなた吸血鬼の真祖でしょう？」
正直に告白した古城の顔を、紗矢華が唖然として振り返る。
「だから俺はついこないだまで、ただの人間だったって言ってんだろうが！」
「眷獣は⁉　第四真祖の十二体の眷獣の中に、使えそうな能力を持っている子はいないの？」
期待に満ちた眼差しを向けられて、古城は気圧されたように言い淀む。
「いやそれが、俺の言うことをまともに聞く眷獣は今のとこ一体だけなんだ。ありビリビリもこないだ姫柊の血を吸って、ようやく俺のことを宿主と認めたばっかで」
「なにい……」
紗矢華が剣を握りしめた左手に力を入れる。
「もしかして、アルデアル公が言ってた霊媒というのはそのこと……⁉　雪菜があなたに血を吸わせたのは眷獣の暴走を防ぐためだったわけ？　じゃあ、さっき屋上であなたが使った眷獣はなんなのよ――？」

「あれは俺が使ったんじゃねえ。一四、勝手に出てこようとしただけだ」
「勝手に……って」
立ち眩みに襲われたように紗矢華が、ふらふらと力無く後退した。
やがて彼女は、なにか決意したようにキッと柳眉を吊り上げ、通路を封鎖中の警察官たちを睨みつけた。
「あなたには頼れないということはよくわかったわ。こうなったらやっぱり私が……」
「待て待て！　おまえがなにをする気だ!?」
鬼気迫る表情を浮かべた紗矢華の前に、古城が慌てて立ちはだかる。
「大丈夫、証拠が残るようなヘマはしないわ」
「そういうことを言ってるんじゃねえよ！　ああ、くそっ。要するに向こうの増設人工島に渡れればいいんだろうが！」
「……なにする気？」
開き直ったように叫んだ古城を、紗矢華が不審そうな目つきで見た。
古城は、槍の入ったギターケースを背負うと、紗矢華の横につかつかと回りこみ、
「悪いな、ちょっと動くなよ」
「え、ちょっと……ひゃっ!?」
お姫様抱っこで抱き上げられた紗矢華が、驚愕のあまり全身を硬直させた。

占城はその間に自分の唇を小さく噛み切った。じわり、と口の中に広がる血の味を引き金に、吸血鬼としての筋力を解放。紗矢華を抱いたまま、増設人工島を目がけて走り出す。

警察が封鎖しているのは、増設人工島につながる連絡橋だけ。

つまり連絡橋を使わなければ、どこからでも渡れるということだ。

絞神島本体と増設人工島を隔てている距離は、約八メートルほど。普通の人間でも、走り幅跳びのオリンピック選手なら余裕で飛び越えられる距離である。

ましてや吸血鬼の筋力をもってすれば、余分な荷物を抱えていてもいけるはず――だったが、

「――っと!?　あれ、思ったよりもギリギリだったな」

増設人工島の崖っぷちぎりぎりのところに着地して、占城が荒い息を吐く。あと一歩、踏み切る位置をミスっていたら、あやうく海に落ちるところだった。

さすがに人一人抱えてこの距離を跳ぶのは、吸血鬼の筋力でも厳しかったのかもしれない。

それとも紗矢華が見た目よりも重いのか――と、占城が失礼なことを考えたとき、

「な、な、な……なんてことをしてくれるのよ!?」

そんな古城の腕の中で、紗矢華が突然暴れ出した。

「渡れたんだから文句ねーだろ。警官にも怪我をさせずに済んだし――」

「ノーカウント！　こんなのノーカウントだからね!?」

意味不明な言葉をまくし立てながら、紗矢華が古城の頭を殴る。やはり動揺が大きいのか、

攻魔師とは思えないへろへろパンチである。

「なに言ってんだおまえ？　てか、この状態で暴れるな、海に落ちるって」

「うるさいっ、黙れっ！　灰になれっ！」

「痛っ!?　って、おまえ、その剣はやめろシャレにならねーから！」

紗矢華はなぜか涙目で剣を振り回し、それを咄嗟によけようとした古城が、紗矢華を抱えたままその場に転倒。結果的に紗矢華を押し倒す形になる。

それでも攻撃をやめようとしない紗矢華の両腕を、古城がどうにか押さえつけたとき、

「……なにをやってるんだ、おまえたちは」

古城たちの眼前に、いきなりフリルの塊が現れた。なにもない虚空から歩き出てきたような、唐突な出現だ。

高価そうな日傘に、装飾過多の黒いドレス――この常夏の紗神島で、そんな恰好をしている物好きは、古城の知る限り一人しかいない。

「那月ちゃん？　テロリストの相手をしてたんじゃなかったのか？」

「たまには特区警備隊の連中にも花を持たせてやらなければな。突入部隊が黒死皇派の生き残りどもを圧倒しているみたいだし、私の出番はないだろう」

銃撃戦の続く監視塔を眺めて、南宮那月が答えてくる。やはり古城たちが予想したとおり、あの中には黒死皇派が立てこもっているらしい。

「それで、私のことを那月ちゃんと呼ぶのはこの口か？」
「痛て痛て痛て、やめて……」
無抵抗な古城の頬を、那月がぐりぐりと捩じ上げる。紗矢華を押さえつけているせいで、古城の両手は塞がったままなのだ。
「こんなことしてる場合じゃないんだって……姫柊たちが誘拐されて人質に……」
それでも古城は事の重大さを伝えようと、必死で那月にそう訴えた。
あれだけ激しかった銃撃の音が途絶えたのは、その直後のことだった。
突然訪れた奇妙な静寂に、古城たちはハッと顔を上げ、
ゴオオオオオオオオオオン――
爆撃にも似た轟音が、その場にいた人々の耳をつんざいた。
中空の増設人工島がその爆音を反響して、地震のように激しく揺れた。
爆音の発生地は、黒死皇派が立てこもっていたはずの監視塔だった。剝き出しの鉄骨で構成された塔が炎に包まれ、飛び散った破片が、監視塔を包囲していた特区警備隊の頭上に降りそそぐ。
「なんだ、あの爆発!?　あれも特区警備隊の攻撃か？」
炎に包まれた監視塔の崩壊は続いている。その非現実的な光景を眺めて古城は唖然とする。
那月が古城の頬をつねり上げたまま首を振り、

「いや……自爆、か？」

「自爆って……」

獣人化したテロリストの一部は、爆煙にまぎれて監視塔を脱出したようだ。だが、監視塔の崩壊に巻きこまれた者も多い。あの爆発が彼らの仕組んだことならば、それはたしかに自爆としかいいようのない光景だが――

「なに……この気配……!?」

のしかかっていた古城を突き飛ばして、紗矢華が立ち上がる。

彼女が見ていたのは、倒壊した監視塔の基底部だった。降り積もった大量の瓦礫を押しのけて、巨大ななにかが動き出そうとしている。

地底から噴き出してきたのは、巨大な魔力だ。濃密で奇妙に人工的、そして喩えようもなく禍々しい異様な気配である。

「ふぅん、よくわからないけどサ、まずいんじゃないのかなァ。これは」

異変に圧倒される古城たちの背後で、皮肉っぽく笑う声がした。

振り返った古城が見たのは、純白のスーツを着た金髪の美青年――

「ヴァトラー!?　なんでおまえまで!?」

「どうしてあなたがここに!?」

ニヤニヤと笑うディミトリエ・ヴァトラーを振り返って、古城と紗矢華が同時にうめいた。

那月も不機嫌そうに眉を寄せて、
「なんの用だ、蛇遣い？」
「まあまあ。積もる話はあとにして、その前にきみたちの部隊を撤退させたほうがいいんじゃないかなァ。どうせ、ここにガルドシュはいないしね。残っている連中は、ただの囮サ」
サングラスを少しズラしたヴァトラーが、美しい碧眼を悪戯っぽく細めた。
那月が、あどけない美貌を歪めて彼を睨み、
「囮だと？　こんなところに特区警備隊を集めてなんの得がある？」
「それはもちろん標的が必要だからだよ。新しく手に入れた兵器のテストにはサ。きみたちも、黒死皇派がこの島になにを運びこんだのか、忘れたわけじゃないンだろ」
「……兵器!?」
その瞬間、那月の表情が凍りついた。
占城の脳裏に渦巻いていた疑問が、ようやくはっきりと形になった。
勝算のない籠城。呆気なく撃墜されたヘリ。もしも黒死皇派の目的が、特区警備隊の機動隊員をここに呼び集めて壊滅させることだったとしたら。
この増設人工島の空っぽの地下に隠されているのは
「　ナラクヴェーラか!?」
占城の叫びに呼応するように、瓦礫を撒き散らして巨大な影が出現する。

そして古城は、その影が真紅の閃光を放って地上を薙ぎ払うのを見た。
閃光を浴びた装甲車が、まるで薄っぺらな紙細工のように呆気なく切り裂かれ、凄まじい炎とともに爆発四散した。

6

その爆発をクリストフ・ガルドシュは、ネットワークを経由したリアルタイムの中継画像で見ていた。軍用無線機のマイクに向かって、満足さを滲ませた声で訊く。
「状況を報告しろ、グリゴーレ」
『こちら、グリゴーレ。正解ですよ、少佐。サンプルは動き出しました』
ナラクヴェーラに乗りこんでいた彼の部下が、興奮気味の口調で叫んでいた。
神々の兵器と呼ばれたナラクヴェーラの正体は、意思を持った機械の獣だ。一度起動してしまえば、自らの判断で敵対する者を勝手に攻撃し、殲滅する。
操縦者の命令には従順だが、ナラクヴェーラを操る者は、制御用の特殊なコマンドを音声入力しなければならない。神々の兵器を従えられるのは、神々の言語を解する者だけなのだ。
「戦闘の継続は可能だな？」
『こちらは楽なものです。高みの見物ですからね。この鳥が、こいつの攻撃にどこまで保つか

はわかりませんがね』

グリゴーレはそう言って猛々しく笑った。

どのみち彼らが手に入れた制御コマンドは、浅葱が解読した『はじまりの言葉』だけである。動き出したナラクヴェーラを止められる人間はもういない。

「了解だ、グリゴーレ」

無線を切ったガルドシュが、ゆっくりと浅葱たちのほうに向き直った。

浅葱は、タブレットPCに映し出された中継画像を、放心したような表情で見つめていた。ナラクヴェーラが閃光を放つたびに、巨大な爆発が増設人工島を揺らす。燃え上がる装甲車。逃げ惑う特区警備隊の隊員たち。その惨劇を引き起こしたのは、浅葱が読み解いた起動コマンドだ。その事実が彼女を動揺させているのだろう。

「　ということだが、まだなにか質問はあるかね？」

そんな浅葱たちを無表情に眺めて、ガルドシュが訊いた。

沈黙を続ける浅葱の代わりに、口を開いたのは宇菜だった。

「なぜですか」

「……なぜ？」

「どうしてあなたたちがここにいるんです？」

「我々の目的はすでに説明したと思ったが？」

「いいえ、そうではなく、なぜアルデアル公があなたたちに協力したのか、ということです」
ガルドシュが小さく眉を上げた。灰色の瞳に、かすかな驚きの色が浮かぶ。
「そうか。服装が違うからわからなかったが、きみはあの夜の、第四真祖の同伴者だな」
「ここは〝オシアナス・グレイヴ〟の中なんですね」
雪菜がうなずいて薄く溜息を洩らす。
気づくのが遅れたのは、雪菜も同じだ。頬に傷を持つ大柄な老人。理知的な顔立ちに似合わぬ凄絶な威圧感。ヴァトラーが古城を招待したあの夜、給仕を務めていた彼の執事――捜していたガルドシュは、最初から雪菜たちの目の前にいたのだ。
「特区警備隊の人々が、どれだけ調べても黒死皇派のアジトを発見できなかった理由は、それが外交官特権に守られた船の中にあったから――ですね」
「これ以上隠す意味はなさそうだな」
ガルドシュは素っ気なく呟いて、部下たちに窓を開けるように命じた。
シャッターで塞がれていた窓が開く――と、その向こうに広がっていたのは、陽光に煌めく海面だった。水平線上に浮かんでいるのは、紋神島の人工的な島影だ。雪菜たちの現在地は、紋神島の沖合約十キロといったところだろう。
「船の……中……」
眩い陽射しに目を細めて、浅葱が弱々しい声を出す。

「戦王領域、アルデアル公ディミトリエ・ヴァトラー所有のクルーズ船だよ」

ガルドシュが淡々と説明した。戦王領域貴族の絃神島訪問については、一般市民にも報道されている。容姿端麗なヴァトラーの姿はワイドショーなどでも騒がれていたから、浅葱もヴァトラーの名前は知っているはずである。

「なぜですか」

雪菜が同じ質問を繰り返す。

獣人優位主義の黒死皇派は、戦王領域の貴族であるアルデアル公と敵対関係にあるはずです。ましてや彼は、あなた方の指導者だった黒死皇を暗殺した張本人なのに――」

「そう。だからこそ魔族特区の警備隊も、この船を疑おうとはしなかった」

ガルドシュは、特に勝ち誇ることもなく無表情に告げる。

「この船の乗組員の約半分は、我ら黒死皇派の生き残りだ。しかし、ああ見えてヴァトラーは貴族だからな。自分の船に乗り組んでいる船員の素性など、いちいち詮索したりはしない。船員を雇った船の管理会社の責任、ということになるのだろうな――」

雪菜が不快そうに眉をひそめた。

「アルデアル公は、なにも知らなかった、と言い張るつもりですか。そんなことをして、彼になんのメリットが？」

「不老不死の吸血鬼の考えなど知ったことではないが、おそらくやつは退屈だったのだろうさ」

「――退屈？」

「そうだ。だからナラクヴェーラとの戦いを求めた。真祖をも倒しうるやもしれぬ神々の兵器。暇を持て余した吸血鬼にはちょうどいい遊び相手だ。その前に第四真祖がナラクヴェーラと戦うというのなら、その見物もまた一興。どう転んでもやつの退屈はまぎれるというわけだな」

「そんな……」

常軌を逸したヴァトラーの思考に、雪菜は激しい困惑と怒りを覚えた。ほんのいっときの退屈しのぎのために、自分の命を狙っているテロリストさえも匿い、利用する。まともな神経の持ち主がやることではない。

雪菜の感想に賛同するように、ガルドシュも苦々しげな表情を浮かべてみせた。

「我々はそこまで悪趣味ではない。が、黒死皇派にはどのみち真祖を倒す力が必要なのだ。真祖にもっとも近い男といわれるヴァトラーならば、ナラクヴェーラの力を試すのにちょうどいい。互いに闘争を望むという一点においてのみ、我らの利害は一致をみたというわけだ」

「――そんなくだらない理由で、あの化け物を甦らせたのですか。紋神島が壊滅するかもしれないというのに……！」

『魔族特区』という名の『檻』を造った人間たち、そしてその中で飼い馴らされた魔族どもが何万人死んだところで、我らの罪になるとは思わんな」

ガルドシュが感情の欠落した口調で言う。

「もちろん我々とて無益な殺戮を望んではいない。我々の最優先の撃破目標はヴァトラーだ。市街地の被害を最小限に抑えるよう配慮しよう。ナラクヴェーラを完全に制御できるならな」

「だから絃神島を焦土にしたくなければ、制御コマンドを解析して寄越せ、ってわけ？」

それまで無言だった浅葱が、憎悪の視線をガルドシュに向けた。

ガルドシュは唇の端を吊り上げて笑った。

古代兵器はすでに動き出している。その無差別破壊をやめさせるためには、浅葱が制御コマンドを解析するしかない。その結果として、黒死皇派がナラクヴェーラを自由に使えるようになるとわかっていてもだ。

「さすがはテロリストね。最ッ低だわ」

〝スーヴェレーンⅨ〟は、この奥だ。必要なデータはすでに揃えてあるし、ネットワークにもつながっているから好きに使ってくれて構わない」

「どのみち私には選択肢はないってわけね。いいわ。だけど、この貸しは高くつくわよ」

浅葱の罵倒を意に介した素振りもなく、ガルドシュは部下たちを引き連れて部屋を出て行く。

彼は最後に一瞬だけ、浅葱を振り返り、

「きみの能力を疑うわけではないが、できるだけ急いだほうがいい。制御コマンドを手に入れる前にあの島が沈んでしまっては、我々としても困ったことになるのでね」

「言われなくてもやってやるわよ――！」

浅葱が憎々しげに叫びながら、部屋の奥にある扉を乱暴に蹴り開けた。
生鮮食品を保存するための冷蔵室である。ただし殺風景な部屋の中に置かれているのは鮮魚や生肉ではなく、ラックマウント式のHPCサーバー――いわゆるスーパーコンピューターである。回路を冷却するためにキンキンに冷やされた部屋の中へと、浅葱が自暴自棄になったように入っていく。その刹那、思いがけない方向から声がした。
「――焦るな、娘」
眠っていたはずの凪沙の口から流れ出したのは、冷たく澄んだ声だった。
どこか異様なその響きに、浅葱が吸い寄せられたように振り向いた。
短く結い上げていた凪沙の髪が解けて、腰近くまで流れ落ちている。虹彩の開ききった大きな瞳は、凪いだ水面のようになんの感情も写していない。ただ唇だけが笑っている。
「心を乱すな。おまえとその機械の性能なら、滅び去った文明ごときの書きつけを読み解くのに、さして時はかかるまいよ」
「凪沙……ちゃん？」
普段とは別人のような気配をまとう凪沙に、浅葱は戸惑いながら呼びかける。
雪菜が驚愕の表情で首を振った。
「いえ、違います……この状態は、神憑りか……憑依……？」
「ふふ、そうか。おまえも巫女だったな。獅子王の剣巫よ」

凪沙はそう言って愉快そうに笑った。困惑する雪菜を、品定めするようにじっと見つめて、

「ならばおまえにもわかっていよう。心配せずとも、あの坊やが時を稼いでくれる。そこの娘の策が練り上がるまでの時をな」

「あなたは……いったい……!?」

雪菜が鋭く目を細めて訊き返す。しかし凪沙はなにも答えない。無言のまま静かに瞼を閉じて、糸の切れた人形のようにその場にくずおれる。

床に激突する寸前の彼女を、雪菜が危ういところで抱き留めた。

「今のは、なに？　誰なの？」

浅葱の質問に、雪菜は黙って首を振る。

凪沙の変調の理由は、雪菜にもまったくわからない。さっきの彼女は、明らかに人間以上の存在を受け容れているように見えた。神憑りか、あるいは凪沙自身の裡にある潜在人格という可能性もある。獅子王機関の報告書にも書かれていなかった彼女の負傷と、なにか関係があるのかもしれない——だが、なんにせよ、今はそれを詮索するべき状況ではなかった。

雪菜は、強引に気持ちを切り替えるように、自分の頬を叩いて立ち上がる。

[1]藍羽先輩。携帯電話を貸していただけますか？」

「それはいいけど、なにする気？」

浅葱が、薄桃色のスマートフォンを放り投げてくる。船が絃神島に近づいたせいで、携帯の

電波もつながるようになっていた。

「すみません。ちょっと胸騒ぎというか、悪い予感がしたので――」

使い慣れない電話機に手間取りながら、雪菜は暗記している電話番号を入力する。

凪沙に憑依していた謎の人格が思い出させてくれたこと。

そう、暁古城はきっとナラクヴェーラの凶行を止めようとするだろう。

たとえ本人がそれを望まなくても、彼のことだから勝手に巻きこまれている可能性は高い。

強大過ぎる第四真祖の力は、古城が知らないうちに運命を歪め、彼を戦場へと誘う。本当に目が離せない、危なっかしい少年なのだ。

だからこそ彼はきっとあの紋神鳥を守ってくれる

だが、その確信が逆に雪菜を不安にさせる。ナラクヴェーラは真祖と戦うために復活させられた兵器だ。今の古城の能力だけでは、あの古代兵器を倒せないかもしれない。

彼には力が必要だ。雪菜としてはあまり考えたくない事態だが、本当に最悪の状況に備えて、暁古城に伝えておかなければならない情報がある。

「まさかあの紗矢華さんに限って、先輩とややこしいことになるとは思えないですけど……」

そう呟いて雪菜は電話機を耳に当てた。回線がつながり、古城の声が聞こえてくる。

7

撒き散らされる真紅の閃光を眺めて、ヴァトラーが拍手喝采した。実に愉しげな姿である。
「あれがナラクヴェーラの〝火を噴く槍〟か。まあまあ、いい感じの威力じゃないか」
そんなヴァトラーを鬱陶しげに睨んで、古城が苛々と地面を蹴る。
「ああくそ。なんであんたがここにいるんだ。自慢の船はどうした!?」
「ああ。実は〝オシアナス・グレイヴ〟を乗っ取られてしまってねェ」
ヴァトラーは飄々とした口調で言う。古城はぽかんと口を開け、
「乗っ取られた!?」
「そうそう。そんなわけで、命からがら逃げてきたんだよ」
嘘くせーっ、と古城は心の中で絶叫した。その気になればヴァトラーは、自分の船を一瞬で焼き尽くすこともできたはずだ。テロリストごときに船を奪われるはずがない。
だとすれば、考えられる可能性はひとつだけだ。ヴァトラーは自分から嬉々として黒死皇派に船を譲り渡したのだ。
「なるほど。ガルドシュたちを絃神島に運んできたのは、おまえの船か――」
那月が黒いレースの扇子を、まるでナイフのようにヴァトラーに突きつける。

ヴァトラーは、わざとらしく物憂げな表情になって、
「いやァ、ホント。驚いたよ。まさかボクの船の船員にテロリストがまぎれこんでるなんて」
「善意の被害者を装うつもりか。まあ、おまえは昔からそういうやつだったよ」
それ以上の追及を諦めたように、那月が深々と息を吐いた。
面目ない、とヴァトラーは微笑して、
「ああ、そう言えば逃げてくる途中でこんなのを拾ったんだが」
足元にあったボロ布のようなものを、彼はひょいと前に放った。
ぐしゅ、と湿った音を立てて転がったのは、高校の制服を着た男子生徒だった。溺れて海にでも沈んでいたのか、全身に海草がまきついて顔は判別できない。
だがツンツンに逆立てた短い髪と、首にぶら下げたヘッドフォンには見覚えがあった。
「や、矢瀬!?」
「あれ、もしかして知り合いだった？」
ぎょっとする古城の反応を眺めて、ヴァトラーが愉快そうに笑う。
矢瀬は完全に気絶していたが、命に別状はなさそうだった。海に落ちる前に意識をなくしていたせいで、海水も呑まずに済んだらしい。
なにをやってるんだこいつは、と古城は疲れた気分で首を振り、
「さて、と。まあ、安心してくれ。ナラクヴェーラはボクが責任を持って破壊する」

その隙に、ヴァトラーが弾んだ声で宣言した。
「安心できるかっ。おまえ、最初からあの化け物を相手に暴れたかっただけだろ！」
ようやくヴァトラーの思惑に気づいて、古城が怒鳴る。
古城の携帯電話が間の抜けた着信音を鳴り響かせたのは、その直後だった。
「ああ、くそ。誰だよこんなときに――」
ぼやきながら古城は携帯を取り出し、表示された発信者名に息を呑む。
「浅葱か!?」
『……わたしです、先輩』
勢いこんで叫んだ古城の耳元で、なぜか不服そうな雪菜の溜息が洩れてくる。
「え!? 姫柊?」
思わぬ不意打ちに古城はわけもなく狼狽し、
「無事なの、雪菜!? 今どこにいるの!?」
そんな古城の耳元に顔を押しつけて、紗矢華が叫んだ。
さすがに雪菜のことになると反応が早い。その一方で、自分が古城とものすごい密着状態になっていることには気づいてないようだ。頬にかかる紗矢華の吐息がくすぐったい。
無事です、と雪菜が、いつもの生真面目な口調で答えた。
『今は〝オシアナス・グレイヴ〟の中です。藍羽先輩や凪沙ちゃんにも怪我はありません』

「そうか。とりあえず、こっちにいるよりは安全そうだな」
古城は脱力するほどの安堵を覚えて、自嘲気味の感想を洩らす。
雪菜が呆れたように息を吐く気配がした。
『やっぱりナラクヴェーラの近くにいるんですね』
「あ、ああ」
『またそうやって勝手に危ない場所に顔を突っこんで。先輩は自分が危険人物だという自覚があるんですか。紗矢華さんが一緒にいて、なにやってたんですか』
「いや、それはなんていうか、まさかあれが出てくるとは俺たちも思ってなくて」
「ゆ、雪菜たちが誘拐されたっていうから、心配で……」
明らかに機嫌を損ねている雪菜の叱責に、古城と紗矢華が苦しい言い訳を続ける。
しかし雪菜はそれを途中で遮って、
『でも、ちょうどよかったです。先輩、ナラクヴェーラが市街地に近づかないようにしばらく足止めをしてください』
「……足止め？」
『はい。藍羽先輩が今、ナラクヴェーラの制御コマンドの解析をしてくれてます　それが終われば、現在の無秩序な暴走は止められますから』
「浅葱が……なるほど、そういう話か……」

古城が重々しくうなずいた。

詳しい経緯はわからないが、雪菜たちの置かれた状況はおおよそ理解できた。

古城が予想したとおり、黒死皇派は浅葱を利用して古代兵器の制御コマンドを解読しようとしていたらしい。浅葱が暴走を止めるためのコマンドを調べている　ということは、今の段階では、テロリストたちもナラクヴェーラを制御できていないということになる。

『――足止めだけでいいんです。無理に破壊しようとして、被害を拡大するような真似だけはやめてください。あと、それから紗矢華さん』

「なに？　私にできることならなんでも言って！」

雪菜に名前を呼ばれた紗矢華が、声を弾ませながら電話機に耳を押しつけた。しかし雪菜は、冷淡な声で彼女を突き放す。

『暁先輩と二人だけで話がしたいので、ちょっと離れていてください』

「え!?　ええ!?」

泣き出しそうな表情で紗矢華はふらふらと後ずさり、その場にうずくまって膝を抱えた。彼女に少し同情しながら、古城はやれやれと首を振り、

「……話ってなんだ、姫柊？」

『時間がないので手短に説明します』

雪菜が、こほん、と咳払いした。そして唐突に口調をあらためて訊いてくる。

『先輩、もしかして二体目の眷獣が必要だと思っていたりしますか？』

「二体目？」

単刀直入な雪菜の質問に、古城が、ぐっと喉を詰まらせた。

雪菜の血を吸うことで獅子の黄金が古城の支配に降ったように、眷獣を手懐けるためには血が必要だ。それも気位の高い第四真祖の眷獣たちが満足するほどの、優れた霊媒の血が。

それを得るために必要な行為を想像して、古城は声を上擦らせ、

「い、いや、思ってない。全然そんなことは考えてなかったぞ！」

『そうですか。それならいいのですけど、実は、その――――』

紗矢華さんのことなんですけど、と声を潜めて雪菜が語り出す。

「……えっ」

雪菜の話を聞き終えた古城は、しばらく無言で唇を噛んでいた。断片的な短い情報だったが、そこには古城を沈黙させるのに十分な意外性が含まれていた。

背中を丸めたままの紗矢華が、恨みがましい目で、黙りこむ古城を見上げている。

なんとか落ち着きを取り戻した古城は、気を取り直すように首を振り、

「わかった。とりあえず足止めについては任せろ」

『はい。先輩もお気をつけて』

そう言い残して電話が切れる。古城は電話機をポケットに突っこみながら、破壊された監視

塔のほうを見た。

ナラクヴェーラは瓦礫に埋もれたまま動いていない。特区警備隊の装甲車部隊を壊滅させたことで、当面の脅威を排除したと判断したのだろう。

だからといって、なにひとつ危機が去ったわけでもない。

ナラクヴェーラ頭部の目玉のようなものが、絶え間なく周囲のスキャンを続けている。破壊するべき目標の情報を収集している動きである。なにかわずかなきっかけがあれば、ナラクヴェーラは再び戦闘を開始し、今度こそ紘神島を焼き尽くそうとするだろう。

「特区警備隊の撤退状況は？」

「サブフロートからはギリギリ脱出できたようだね。負傷者の数も予想したほどじゃない」

占城の質問にすらすらと即答したのは、ヴァトラーだった。

なんでおまえが答えるんだよ、占城は彼を睨む。どうせ周囲の状況を見ながら、戦闘を開始するタイミングを見計らってでもいたのだろうが、

「わかった。だったらあいつは俺が相手をする。捕まってる浅葱たちを頼む、那月ちゃん」

古城は一方的にそう言い切った。

優雅に日傘を回していた那月が、不機嫌そうに古城を睨む。勝手に仕切られたことに怒っているのか、それとも古城の呼び方が気に入らなかったのか。しかし彼女は、めずらしく文句を言おうとはしなかった。いちおう了解してくれたということでいいのだろう。

「他人の獲物の横取りするのは、礼儀としてどうかと思うな、暁古城」

一方、ヴァトラーはそう言ってやんわりと抗議してくる。しかし古城はそれに取り合わず、

「それを言うなら、他人の縄張りに入りこんで好き勝手してるあんたのほうが礼儀知らずだろ。俺がくたばるまでは引っこんでろ、ディミトリエ・ヴァトラー」

「ふぅむ、そう言われると返す言葉もないな」

青年貴族は意外にもあっさりと納得して引き下がった。そして、

「それでは領主たるきみに敬意を表して、手土産をひとつ献上しよう。きみが気兼ねなく戦えるようにね――〝摩那斯〟！　〝優鉢羅〟！」

「なっ!?」

ヴァトラーが解き放った膨大な魔力の波動に、古城は言葉を失った。

青年貴族の背後に出現したのは、全長数十メートルにも達する二匹の蛇だ。荒ぶる海のような黒蛇と、凍りついた水面のような青い蛇。蛇遣いの異名を持つヴァトラーの眷獣。それも、同時に二体である。それらが空中で互いに絡み合い、一体の巨大な混沌の姿へと変わる――一体の眷獣を合体させた!?　これがヴァトラーの特殊能力か――！」

荒れ狂う竜巻のような眷獣の姿に、古城が硬い声を出す。

かつて雪菜は言っていた　ヴァトラーは若い世代の〝貴族〟でありながら、格上の〝長老〟をも倒す特別な力を持っているはずだと。

おそらくこれがその秘密を解く鍵だ。二体の眷獣を合成して、より強大な眷獣へと変える。そんな能力を持った吸血鬼の存在など、これまでに聞いたことがない。

だが、ヴァトラーが呼び出した合体眷獣は、事実、古城の〝獅子の黄金〟に匹敵する魔力を撒き散らしていた。それはヴァトラーが、限りなく真祖に近い力を持っている、という証明でもある。

「まあこんなものかな」

そのヴァトラーが満足そうに呟いて、荒れ狂う群青色の龍を降下させた。

そして十三号増設人工島と、絃神島本体を連結するアンカーを、ひとつ残らず破壊する。重さ数百トンのコンクリートブロックと金属ワイヤーで造られたアンカーが、ガラス細工のように粉々に砕け散り、その爆発の余波で増設人工島は、ゆっくりと洋上を漂い始めた。

増設人工島を、絃神島本体から切り離したのか……!?」

ヴァトラーの目的に気づいて、古城が顔を上げた。青年貴族がニヤリと笑う。

「これで市街地への被害を気にせず、思うさま力が使えるだろう。せいぜいボクを愉しませてくれたまえ」

「あ、ああ……」

いちおう礼を言うべきか、と古城は迷ったが、すぐにそんな気はなくなった。今の眷獣の攻撃で、絃神島の本体のほうにも、かなりの被害が出ていることに気づいたのだ。市街地の被害

云々はただの言い訳で、この男は絶対、自分が暴れたかっただけに違いない。

「ナラクヴェーラが動き出したわ、暁古城！」

耳元で騒ぎ出した紗矢華の声に、古城が慌てて振り返る。

周囲の瓦礫や鉄骨を蹴散らして、ナラクヴェーラの本体がついに全貌を表していた。

高さはおよそ七、八メートルほどの、六本の脚を持った戦車である。全体的な印象としては、エビのような甲殻に覆われた巨大アリ、といったところか。楕円形の胴体に、半球型の頭部が埋もれるような形でくっついており、その先端に触覚のような副腕が二本生えている。

装甲の質感は、土偶や銅鐸に似ており、古代兵器と言われればそれっぽく見えなくもない。

「ふぅむ。ボクの眷獣を脅威と判断して、活性化したようだな。なるほど、やはり自己防衛プログラムだけで動いているのか――」

「って、あいつが動き出したのは、おまえのせいかよ!?」

他人事のように呟くヴァトラーを睨んで、古城が絶叫した。

そんな古城たちを真紅の瞳で睥睨して、ナラクヴェーラが閃光を放つ。

「暁古城！」

剣を構えながら紗矢華が叫び、

「ああ、くそっ！　結局こうなるのか！」

古城は全身に爆風を浴びながら、暴走する古代兵器を止めるために走り出した

第四章 双角の深緋

The Bicorn

1

道教で崇められる少年神〝哪吒〟は、三面八臂。蓮と黄金で造られた人工の肉体を持ち、火を放つ檄や、敵の頭を砕く腕輪を操る闘神という――

だが、その哪吒神のモデルとなった、古代兵器は、神と呼ぶにはあまりにも禍々しく、凶悪な姿をしていた。

分厚い装甲に覆われた六本の脚が、装甲車の残骸を踏みつぶし、周囲に屹立するクレーンを薙ぎ倒す。頭部から吐き出す眩い真紅の閃光は、鋼鉄で覆われた増設人工島を易々と切り裂き、凄まじい爆発を引き起こした。

その破壊力は、通常の陸戦兵器の水準を遥かに超えて、吸血鬼の眷獣にも匹敵するだろう。黒死皇派がこれを手に入れようとした理由もよくわかる。しかもこの古代兵器は、操縦者の意思と無関係に勝手に動き続けているのだ。

雪菜に言われるまでもなく、こんな危険な化け物を市街地に入れるわけにはいかなかった。

しかし間近で見たナラクヴェーラはあまりにも巨大で、どこから手をつければいいのかわからない――

「どうするの、暁古城。あの化け物をどうやって足止めするつもり？」

逡巡する古城のすぐ隣で、咎めるような紗矢華の声がした。古城は、ぎょっと目を剝いた。ここからナラクヴェーラまでの距離はせいぜい二十メートル。古代兵器の巨体から見れば、目と鼻の先も同然の超危険地帯である。

「煌坂!?　なんでおまえがついてくるんだよ!?」

「雪菜が時間を稼いで欲しいって言ってるんだから、私が協力するのは当然なんだけど！」

「そ、そういうものなのか……？」

冷静に考えるとそんなはずはないのだが、紗矢華の勢いに押し切られて、古城は危うく納得しそうになる。さらに紗矢華は大真面目な顔でうなずいて、

「そうよ。それに……」

彼女の言葉が終わる前に、ナラクヴェーラの頭部が閃光を吐いた。

火を噴く槍――その正体は、現代で言うところの大口径レーザー砲である。焦点温度二万度を超える光速の槍は、吸血鬼の肉体をも一瞬で灰に変えるだろう。

だが、その閃光が放たれる前に、紗矢華の行動は終わっていた。

獅子王機関の舞威媛は、霊視によって、瞬先の未来を視て行動する。ナラクヴェーラの光速の攻撃よりも紗矢華の防御のほうが速いのだ。

「――煌坂!?」

「私の〝煌華麟〟の能力はふたつ――そのうちのひとつは物理攻撃の無効化よ。感謝しなさい、

暁古城。私がいなければあなたは今ごろ消し炭だからね！」

紗矢華の剣が切り裂くのは物質ではなく、それを支える空間のつながりだ。どれだけ速い攻撃も、どんな超高温も、空間の断層を越えてダメージを与えることはできない。〝煌華麟〟が薙いだ空間は、その一瞬だけ、絶対無敵の防御障壁と化すのだ。

ナラクヴェーラの大口径レーザーは、古城の眼前で見えない壁にぶつかったように遮られ、そして虚しく消滅した。

「そしてあらゆる攻撃を防ぐ障壁は、すなわちこの世でもっとも堅牢な刃よ。たとえ神々の兵器が相手でも、私の剣舞に斬れないものはない――！」

レーザーを放ち終えて無防備になった古代兵器の足元へと、剣を掲げた紗矢華が疾走する。

ほっそりとした少女が使うには巨大すぎる両手剣。紗矢華はそれを己の一部のように自在に操り、美しく舞った。銀の刃をナラクヴェーラの脚に叩きつけ、分厚い装甲をものともせずに斬る、そして斬る。見た目の華麗さとは裏腹の苛烈な剣舞だ。

古城はその光景をただ呆然と見守っている。雪菜の戦闘能力も人間離れしているが、紗矢華の剣技もそれに劣らない。化け物と対等に渡り合う彼女も、ある意味、立派な化け物である。

レーザー砲の死角に回りこんだ彼女を、ナラクヴェーラは攻撃できない。それをいいことに、紗矢華は猛攻を続ける。さすがに一刀両断とまではいかないが、彼女の絶え間ない斬撃を受けて、ナラクヴェーラの脚の一本がちぎれかけていた。

続けて紗矢華は、同じ側にある残り二本の脚に攻撃を集中する。やがて脚の損傷で自重を支えきれなくなったのか、ナラクヴェーラの巨体がゆっくりと倒れこんだ。たった一人の少女が、剣一本で、神々の兵器を擱坐させたのだ。デタラメとしかいいようのない強さだった。

このまま彼女一人で、ナラクヴェーラを倒してしまうのではないか

占代兵器の機体に異変が起きたのは、占城がそんな淡い期待を抱いた直後のことだ

「えっ　!?」

それまで一方的にナラクヴェーラを斬り裂いていた紗矢華の剣が、突然、装甲の表面で弾かれた。紗矢華が再び斬撃を繰り出すが、やはりそれも防がれる。

ナラクヴェーラの装甲に奇怪な紋様が浮かんで、淡い魔力の輝きが機体を覆う　その輝きの正体に気づいて、紗矢華が呻いた。

「斥力場の結界!?」

〝煌華麟〟の刃は、空間の連結を斬り裂く。だがそれは、刃が触れた空間しか切り裂けない、ということでもある。ナラクヴェーラの装甲は、表面を斥力場で覆うことで、刃が触れる前に紗矢華の剣を撥ね返すように進化した。

もはや彼女の攻撃は、ナラクヴェーラには通用しない

「まさか……これが神々の兵器の能力なの……!?」

自ら学習して進化する兵器。それを想像して紗矢華は戦慄した。それが一瞬の隙になった。

ナラクヴェーラの触覚が、紗矢華の頭上から彼女を視る。
紗矢華がそれに気づいたときにはもう遅かった。触覚の先端が真紅の閃光を撃ち放つ。反応の遅れた紗矢華はそれを防げない。
分厚い鋼板を一瞬で焼き切る灼熱の槍。
そんなものを浴びれば紗矢華の肉体などひとたまりもないだろう。
だが、紗矢華を襲ったのは灼熱の閃光などではなく、もっと純粋に物理的な衝撃だった。
誰かが不器用なタックルで、紗矢華のことを突き飛ばしたのだ。
「――無事か、煌坂!?」
頭から紗矢華に突っ込んできた古城が、硬い地面の上を転がりながら叫んだ。
訓練を受けた紗矢華の肉体は、無意識に受け身を取ってすでに立ち上がっている。ダメージらしいダメージは皆無である。だが精神的な動揺は大きかった。
「暁古城!? その傷!?」
立ち上がった古城の左の太腿が、ごっそりと抉られて白煙を噴き上げている。紗矢華を庇って、ナラクヴェーラのレーザーを浴びたのだ。
「大丈夫だ。この程度の傷ならそのうち塞がる」
苦痛に顔を歪めながら、古城は笑ってみせた。
吸血鬼の真祖は不老不死。だが、傷を負ったときに感じる苦痛は普通の人間と変わらない。

そのことを知っているからだろう。紗矢華は軽く肯ざめて、古城にかけるべき言葉を見つけられずにいるようだった。

「――それよりも、あいつ、なにを!?」

古城は傷ついた脚で強引に立ち上がり、ナラクヴェーラに目を向ける。紗矢華の攻撃で損傷した古代兵器は、移動するのを諦めたようだった。

その代わりに、緩やかに湾曲した背中の装甲がゆっくりと開いていく、どことなく翅を広げたカブトムシを連想させる姿だ　その装甲の内側にあるのは、円筒形のスラスターノズル。

「まさか、飛ぶ気か！」

浅葱が調べたナラクヴェーラの資料には、飛行能力の存在が示唆されていた。そのことを思い出して古城が歯噛みする。

ナラクヴェーラのノズルが、轟音とともに爆風を撒き散らした

鳥や翼竜のような優雅な飛翔スタイルではない。パワーにものをいわせた強引な飛行だだが、ここから紗神島の市街地まではほんの数キロ。一度浮かび上がってしまえば、一瞬で目的地に到達するだろう。ここでナラクヴェーラを逃がすわけにはいかない

「　――叩き落とせ、〝獅子の黄金〟！」

古城が右腕を頭上に掲げた。その右腕が鮮血を噴いた。

鮮血が膨大な魔力の塊を生み出し、魔力は黄金の閃光へと変わった。凝縮されたその閃光が、上空に巨大な獣の姿を形作る。雷光をまとう巨大な獅子の姿を。

暁古城の、すなわち第四真祖の眷獣〝獅子の黄金〟――

いちおう手懐けたとはいえ、威力が巨大すぎて召喚するのをためらっていたのだ。だがもはやそんなことを言っていられる状況ではない。

「おおおおおおおおおおおっ――っ！」

古城の戦意に呼応して、雷光の獅子が宙を駆けた。

上昇するナラクヴェーラのさらに上空から、稲妻と化して地上へと疾走。黄金の稲妻と光を撒き散らしながら、古代兵器を急襲する。

天災にも匹敵するといわれる、真祖の眷獣の一撃。

ナラクヴェーラの機体はそれに耐えた。左右の翅は砕け散り、脚はちぎれ、全身の装甲の半分近くを失っても、どうにか爆発を免れた。

だが、激突の衝撃のすべてを打ち消すことは不可能だった。

雷光の獅子が、急降下してきた勢いのままにナラクヴェーラを地面に叩きつける。

中空構造の増設人工島が、耐えきれるような威力ではなかった。人工島の表面を覆う分厚い鋼板が捲れ上がり、張り巡らされた鉄骨がへし折れる。

ナラクヴェーラは巨大な砲弾と化して、そのまま地下深くへとめりこんでいった。

そしてその衝撃の余波は、当然のように古城たちをも巻きこんだ。
「うおおおっ!?」
古城たちの立っていた地面が、なんの前触れもなく一瞬で陥没する。
彼らの足元に開いていたのは、奈落の底まで続いているかと思えるような大穴だ。ふわり、とした不快な無重力感が襲ってきて、古城は自分が落下していることを知った。
すぐ隣には、紗矢華もいる。爆発の余韻と乱れた気流、そして瓦礫の崩れ落ちる轟音の中、
「バカーっ！」
絶叫する彼女の声だけが、妙に鮮明に古城の耳を打った。

2

廃棄物処理設として造られた十二号増設人工島は、基本的には石油タンカーと同じ構造だ。
サイズが桁違いに大きいことと、中に詰めこむものが石油かゴミかの違いだけである
いくつもの隔壁で仕切られてはいるが、つまりは頑丈な鋼鉄の外殻に覆われた空っぽの箱だ。
地表から最深部までの深さは、約三十メートル
十階建てのビルと同じ程度ということは、古城たちが住んでいるマンションよりも高い計算になる。もちろん、なんの装備もなくよじ登れるような高さではない　この高度から落下して、

命があっただけでも奇跡に近い。

「どうにか助かった……か」

瓦礫の山の上に立ち尽くして、古城は深々と溜息をついた。

二十メートルの高さを真っ逆さまに落ちたわけではなく、土砂崩れに押し流されるような形で緩やかに落下したこと。途中で何度も隔壁にぶつかって、そのたびに落下速度が落ちたこと。古城たちが助かったのは、そんな偶然の積み重ねの産物である。

建設途中の十二号増設人工島の中身が、空っぽだったのも幸運だった。

もしほかの廃棄物処理殻で同じような目に遭ったら、たちまち数万トンのゴミに押し潰されて生き埋めになっていただろう。いくら真祖が不老不死でも、その状態で復活できるとは思えない。

そして安堵の息を吐く古城の隣で、紗矢華がきーっ、と甲高い声を張り上げた。

「助かった、じゃないんだけど！　なに考えてるのよあなたは!?　手加減ってものを知らないの!?　わざわざ人工島ごと撃ち抜かなくてもいいでしょうが！」

「仕方ねーだろ、あの化け蟹に逃げられないように焦ってたし……あれでも手加減したつもりだったんだよ……」

古城が小声でぼそぼそと言い返す。いちおう周囲に被害を出さないよう、努力はしたつもりだったのだ。結果からいえば、あまり意味がなかったわけだが。

ああもう、と紗矢華が呆れたように首を振る。
「たしかに世界最強と呼ばれるのも納得の威力だけど、なんて傍迷惑な眷獣なの。一歩間違えたら宿主のあなたも巻きこまれて死んでたわよ」
「迷惑なのは認めるけどな……おかげで化け蟹は撃ち落とせたんだし、まあいいだろ」
古城は、埃まみれになったパーカーをはたきながら投げやりに答えた。
反省した素振りを見せない古城を、紗矢華は少し怒ったように睨んで、
「ナラクヴェーラは？」
「さあな。普通に考えたらあの下に埋もれてるはずだけどな」
降り積もった瓦礫の山を指さして、古城が言う。古代兵器が落下したとおぼしき場所には、高さ十メートル近い瓦礫がこんもりと盛り上がっていた。
積み重なった大量の鉄骨や鋼板に邪魔されて、ナラクヴェーラの姿は見えない。だが、その下でなにかが蠢いている気配も感じない。
「破壊したの？」
「たぶんな。修理もしないで動けるようなダメージじゃなかっただろ」
「そう。ならいいんだけど……で、私たちはこれからどうすればいいわけ？」
紗矢華に訊かれて、古城はガリガリと頭をかいた。
ただひたすら大量のゴミを詰めこむために造られた増設人工島の内部は広大だ。おまけに建

設途中ということで、案内板や照明などの、脱出に必要な最低限の設備すらない。もともとこの中に人間が迷いこむことは、あまり想定されていないのだ。

「探せばどこかに点検用のハシゴくらいあるだろ」

そう言って古城は周囲を見回し、適当にあたりをつけて歩き出す。

「ちょ、ちょっと待ってよ。置いてく気？」

人取り残されそうになった紗矢華が、慌てて古城を追いかけようとして、

「あ」

その瞬間、彼女の足元が崩れた。不安定な形で乗っかっていた瓦礫がシーソーの原理で傾き、バランスを崩した紗矢華が転倒する。

「お、おわ!?」

仰向けに倒れてきた彼女の背中を、運良くその場にいた古城が反射的に抱き支えた。そして掌に伝わってくる程良い弾力に眉をひそめる。

「――ひゃっ!?」

古城に思いきり胸を揉みしだかれる形になった紗矢華が、女の子らしい悲鳴を上げた。

自分が握りしめているものの正体に気づいて、古城は慌てて両手を放す。サマーセーターを着ていたときには気づかなかったが、紗矢華はいわゆる着やせするタイプらしい。ほっそりしているくせに胸のボリュームがものすごい。

「あー、悪い」
気まずい気分で古城が謝る。紗矢華は自分の胸元を押さえたまま、そんな古城を上目遣いに睨んで、
「どうして謝るのよ？　故意なの？　やっぱり邪な下心があったわけ？」
「違うって。そうじゃないけど、さっき姫柊が電話で教えてくれたんだ」
紗矢華が当惑したように首を傾げた
「雪菜が？　なにを？」
「おまえの男嫌いの理由」
古城が自分の足元を見下ろして、ぼそりと言った
ぎしっ、と紗矢華の表情が人形のように強張った
「悪いな　おまえが男に触られるのを恐がってるって知らなかったからさ」
雪菜は詳しく説明してくれなかったが、おおよその事情は古城にも想像できる
優れた霊能力を持って生まれた子どもは、しばしば実の両親にも疎まれて虐待される　紗矢華の唯一の肉親だった父親も、やはり彼女に恒常的に暴力を振るうような男だったらしい。
その父親は、紗矢華が小学生になる前に死んで、彼女は獅子王機関に引き取られた
だが幼い頃に刻まれた父親への恐怖は、そのまま男性への嫌悪に姿を変えて今も彼女の心に残っているらしい。安っぽい同情をする気はないが、そのことで紗矢華を責めるのは筋違いだ

ろう。

非常事態で仕方がなかったとはいえ、抱き上げたり押し倒したり、けっこう無神経に触ってしまったなあ、と古城は反省する。

紗矢華は憮然とした表情で、そんな古城をしばらく眺めていた。

そして唐突に古城の唇をつかんで、乱暴につねり上げた。古城は彼女の手を振り払うことができずに、無抵抗のまま抗議する。

「痛えな、なにすんだ!?」

「雪菜は、どうしてあなたにそんな話をしたのかしら……」

自問するような口調で紗矢華が言う。古城は、唇をつねられたまま肩をすくめ、

「おまえを恐がらせるようなことはするなって説教されたぞ。心配してたんだろ」

「べつに恐いんじゃなくて、苦手なだけなんだけど。ていうか、ウザい？　気持ち悪い？」

「そっちのほうがひどいだろ。普通に俺が傷つくっての」

強引に首を振って、古城がようやく唇の自由を取り戻す。赤く腫れた彼の唇を見て紗矢華は微笑んだ。気負いのない、柔らかな笑顔だった。

「本当に変な吸血鬼ね、あなたは」

自由になった右手の指先で、紗矢華は古城の手の甲にそっと触れた。

なにかを慎重に確かめるように、手を握る力を増していく。

まったく意味不明の彼女の行動を、古城は戸惑いながら見つめていた。
ただ、自分から男子に触れるという行為が、紗矢華にとって、勇気のいることだというのは、なんとなくわかる。
「さっきの傷、大丈夫？」
紗矢華が、心配そうに古城の脚を見つめている。紗矢華を庇って負傷した脚だ。
古城は軽く膝を上下させてみる。痛みはまだ残っているが、感覚もだいぶ戻っていた。
「とりあえず歩ける程度には回復したか」
「そう、よかった……あの……た、助けてくれてありがとう」
照れたように顔を伏せながら、紗矢華が言った。ほんのりと赤らんだ白い頬。形のいい鼻梁。強調された長い睫毛に、古城の心臓がドクンと大きく脈を打ち、
「冷てっ!?」
「な、なんでよ!?　私がせっかく下手に出てあげてるのに　――！」
まったく予想外の古城の反応に、紗矢華が猛然と頬を膨らます。
古城は、首を振りながら背中に手を回し、
「いや、おまえのことじゃなくて……背中に今なんか冷たいものが……」
そのとき紗矢華の口からも、ひゃっ、と細い悲鳴が洩れた。
彼女が手で押さえた制服の肩から、なぜか水滴がしたたっている。増設人工島の骨組みを伝

ってきた水が、雨のように落下してきたのだ。
「なにこれ？　海水!?」
くそ……本格的にガタが来てんな、この人工島は！」
ヴァトラーの眷獣による無茶な切り離し、ナラクヴェーラのレーザー乱射、そして〝獅子の黄金〟によるとどめの一撃。いくら頑丈に造られた増設人工島とはいえ、さすがに限界だったらしい。占城たちが気づかなかっただけで、水漏れはすでにあちこちで発生していたようだ。
「文句を言ってる場合じゃないんだけど！　早く地上に戻る方法を探さないと！」
紗矢華が冷静に指摘する。水漏れの勢いはそれほどでもないが、浸水防止用の隔壁が閉鎖されたら、脱出がいっそう難しくなってしまう。こんなところにずぶ濡れのまま閉じこめられるのは、あまりいい気分ではない。
「とりあえず迷路で迷ったときには、壁沿いに歩くといいんだっけか？」
「なんでもいいから早く！」
間の抜けた会話を交わしながら、占城たちが歩き出そうとする。
そのとき薄暗い増設人工島の地下を、真紅の閃光が眩く照らした。
閃光は縦横に闇を斬り裂き、無差別に増設人工島の骨組みを斬り裂いていく。ナラクヴェーラの大口径レーザーだ。
瓦礫の山が、轟音とともに崩れ落ちる。

その中から現れたのは、青白い光に包まれた古代兵器だ。少し形が変わっているが、破壊されたはずの装甲や脚も復活している。

「嘘だろ!?　あんだけぶっ壊したのになんで……!?」

「まさか、元素変換!?　増設人工島の建材を融合して自己修復してたんだわ！　まだ飛行能力は回復してないみたいだけど――」

自分の周囲の瓦礫を融合し、古代兵器がダメージを回復させていく。

二本の触覚がゆっくりと頭上を振り仰ぎ、上空からの脱出は不可能だと判断したのだろう。

ナラクヴェーラは、大口径レーザーの砲門を自らの足元へと向けた。

海面下三十メートルにある増設人工島の底面外殻。灼熱の閃光が、厚さ数十センチの複合鋼板を一瞬で撃ち抜き、大穴を開けた。

水圧で加速された海水が、噴水のように高々と噴き上がった。それはたちまち濁流となって、古城たちの足元へと押し寄せてくる。

「くそ……マジか!?」

自ら造り出した穴を通って、ナラクヴェーラが海中へと脱出していく。しかし古城たちには、それを気にしている余裕はなかった。今のレーザー攻撃で、増設人工島のあちこちが猛烈な勢いで浸水を始めたからだ。

互いに手をつないだまま、古城たちは走り出す。そんな彼らの全身を、容赦なく降りそそぐ

海水がぐっしょりと濡らしていく。

3

凍えるような冷気が立ちこめる部屋で、浅葱は制御コマンドの解析を続けていた。滑らかにキーボードを叩く彼女の姿は、プログラマーというよりも熟練したオルガン奏者を見ているようだ。

浅葱は白い息を吐きながら、チャット用のマイクを使って、ネットワークの向こうにいる相棒に呼びかける。

「モグワイ、こいつの形態要素解析はもういいわ。ERアルゴリズムを適用、全パラメータ先行再評価、ゼータ分布ベースの投機的プロセスを実行後、順次データ照合を開始」

『相変わらず人使いの荒い嬢ちゃんだな。システムバスが上限ギリギリだぜ。これ以上やると、絃神島の環境維持に支障が出そうなんだがな』

浅葱の呼びかけに答えたのは、機械的な合成音声だ。その声の主は、絃神島すべての都市機能を掌握する五基のスーパーコンピューター。浅葱がモグワイと名付けた人工知能である。

船内の〝スーヴェレーンⅨ〟基では処理に時間がかかりすぎると判断した浅葱は、ネットワーク経由でモグワイを呼び出し、絃神島そのものの頭脳を使って制御コマンドの解析をや

らせているのだ。

「バッファを全部ぶちこんでもいいから保たせなさい。十五分以内に片を付けるわ」

『ククク……いい感じにいつもの調子を取り戻してきたんじゃねーか』

うっさいわね、と獰猛な笑みを浮かべて、浅葱が言う。

「ようやくパズルのルールがわかってきたわ。神々の兵器とはよく言ったものね。言語学者がさじを投げ出すわけだわ。思考過程に論理演算を必要としない言語、なんてものが存在するとは思わないものね」

論理演算を必要としない。すなわちナラクヴェーラは状況を判断しない　なぜなら破壊するだけの存在だからだ。拳銃や爆弾が自らの意思を持たないように、古代兵器も考えない

破壊するべきものを発見したときには、ナラクヴェーラによる破壊は終わっている。これは本質的に神の思考と同じものだ。光あれ、すると光があった――人類とはまったく異質な、神々の言語。

「だけど綻びがわかってしまえば、どうってことはない、時代遅れのアーキテクチャたわ」

解析プログラムのデバッグを終えて、浅葱は、ふん、と鼻息を洩らす。

石板に書かれたナラクヴェーラの制御コマンドは全部で五十四個　十五分もあれば、解読はすべて終わる。それはあの恐ろしい古代兵器が、テロリストたちの制御下に入るということを意味していた。だが、すでに動き出したナラクヴェーラを止める方法はほかにない

黒死皇派も馬鹿ではないから、浅葱の作業はどこかで監視されているだろう
風沙や雪菜、それに紘神市そのものを人質に取られている今の状況では、作業を遅らせたり、彼らを騙すことにも意味はない。
だが、このまま連中のいいなりになるのは、藍羽浅葱のスタイルではない――
「さてどうしたものかしらね」
無意識に耳のピアスを撫でながら、浅葱は呟く。
自分をタダでこき使おうとしてくれた連中に、目にもの見せてやるにはどうすればいい？

そんな鬼気迫る姿の浅葱を残して、雪菜はそっと部屋を抜け出した。
浅葱がなにをやっているのか、雪菜にはよくわからない。しかし彼女のずば抜けた才能は、素人の雪菜の目にも明らかだった。プログラミングに関する浅葱のセンスや閃きは、論理的思考の産物というよりも、むしろ雪菜たちの霊視や、神憑りに近いものがある。
案外、浅葱が獅子王機関に育てられていたなら、雪菜を凌ぐレベルの剣巫になっていたかもしれない。彼女もやはり魔族特区の住人なのだ。
「……どうして？」
予想に反して、部屋の外に、雪菜たちを監視する見張りの兵士はいなかった。
雪菜が部屋を抜け出したのは、そのことを疑問に思ったからだ。

いくら逃げ場所のない船上とはいえ、あまりにも無警戒に感じられた。練度の高い黒死皇派らしからぬ不手際だ。そのことを疑問に思いながら、雪菜は舷側の通路に出る。だが、やはり兵士たちの姿は見当たらない。広大な〝オシアナス・グレイヴ〟の船内はひっそりと静まりかえって、まるで幽霊船を見ているようだった。

困惑しながら船内を歩き続けて、雪菜は不意に足を止める。

〝オシアナス・グレイヴ〟に搭載されていた小型の連絡艇が、水面に下ろされていることに気づいたのだ。船の乗員や黒死皇派の非戦闘員たちが、次々に連絡艇に乗り移っていく。船内に見張りの兵士がいなかったのも、おそらくそのせいだ。

「……なぜ、こんなときに非戦闘員の避難を？」

雪菜は困惑するが、もちろん答えは出ない。今のところ〝オシアナス・グレイヴ〟には特に危険はないはずだ。ナラクヴェーラを手に入れて、圧倒的に有利な状況にいるはずの彼らが、あえて船を捨てる理由はなにも思いつかない。

もしなにか危険があるとすれば、それは船の外ではなく――

「まさか……!?」

剣巫としての直感に従って雪菜は走り出す。行き先は上の操舵室ではなく、下　船底にある貨物室のほうだ。〝オシアナス・グレイヴ〟はクルーズ船でありながら、輸送艦のようなスターンゲートを持っていた。つまり巨大な貨物を積みこむことができるのだ

雪菜の予想を裏づけるように、貨物室に続く通路には、武装した黒死皇派の兵士が歩哨に立っていた。獣人が一人。武器は自動小銃だ。

迷っている時間はなかった。雪菜は通路に飛び出すと、全力疾走で兵士たちまでの距離を詰めた。さすがに油断していたのか、兵士たちの反応は鈍い。

彼らが銃を構える前に、雪菜はふわりと空中に舞い上がり、

「――伏雷！」

振り向いた兵士のこめかみに、強烈な回し蹴りを叩きこむ。

強靱な体力を持つ獣人といえども、肉体の構造は人間と同じだ。脳を揺らしてしまえば、容易く意識を刈り取ることができる。獣人化する前の段階ならば尚更だ。

「若雷！」

気絶した兵士を盾に着地した雪菜は、続けてもう一人の兵士の鳩尾を突き上げた。そのまま体内の呪力を一気に解放。屈強な獣人の兵士を一撃で悶絶させる。

倒れた彼らには目もくれずに、雪菜は貨物室へと向かった。金属製の重いドアを押し開け、そして呆然と目を見開いた。

「これは……」

広大な貨物室の中に所狭しと詰めこまれていたのは、分厚い装甲に覆われた兵器たちだった。六本の脚と一本の副腕。真紅に輝くレーザー砲の瞳。

「まさか……これが全部ナラクヴェーラ!?」

休眠中の古代兵器は全部で五体。その奥にはさらに巨大なにかが置かれているが、雪菜の位置からではその全貌を見ることができない。

あまりにも禍々しいその光景に、雪菜は途方に暮れたように立ち尽くす。

そんな雪菜の背後から、猛々しくも穏やかな声が聞こえてきた。

「――獅子王機関の剣巫か。噂以上だな。不意打ちとはいえ、素手で獣人を倒せる人間は欧州にもそう多くない。見事なものだ」

「クリストフ・ガルドシュ……！」

雪菜がその男の名前を呼ぶ。黒死皇派の老将校は、悠然と微笑んで雪菜を見た。

「こいつらの存在はヴァトラーも知らない。もし知っていれば、やつも我々に協力しようとは思わなかったかもしれんな」

「これがあなたの本当の目的だったんですか。ナラクヴェーラの軍団を手に入れることが!?」

ガルドシュが重々しくうなずいた。

「戦争というのは個々の兵器の性能ではなく、総合的な戦力で決まる。第一、真祖の戦闘能力はたしかに脅威だが、広大な戦王領域のすべてを一人で守りきるのは不可能だ。瓦礫を喰らって自己修復し、永遠に戦い続ける戦闘機械の群れ――心躍る光景だとは思わんかね？」

青ざめる雪菜を愉しげに見ながら、ガルドシュは滔々と解説を続ける。テロ集団の指導者で

もある彼は、弁舌の才にも恵まれているらしい。

「第一真祖を倒せなくても、やつの〝夜の帝国〟が崩壊すれば、どのみち聖域条約を維持することはできなくなる。それで我々の目的は達成されるというわけだ。戦闘マニアのヴァトラーには理解できない理屈だろうがな」

「絃神島だけでなく、あなたの故郷まで……戦王領域の人々まで犠牲にすると言うのですか」

雪菜が憤怒の眼差しでガルドシュを睨む。ガルドシュは表情を変えずにうなずいた。

「もちろんだ。だからこそ我々はテロリストと呼ばれているのだよ」

雪菜は無言で、重心を低くする。

たった一体のナラクヴェーラですら、絃神島を滅ぼしかねない脅威なのだ。それを黒死皇派はさらに五体も所有している。彼らにその力を与えるわけにはいかない。

たとえ刺し違えてでも、ここでガルドシュを倒さなければ――

「ふふふ、いい覇気だ。惜しいな。私もきみのような部下と出会えていれば、我が古き盟友、黒死皇をむざむざ見殺しにせずとも済んだものを――」

戦闘態勢の雪菜を眺めて、ガルドシュは愉快そうに頬の古傷を撫でた。そして背中からナイフを抜く。彼の骨格が音を立てて軋み、全身の筋肉が膨れ上がった。獣人化だ。

たとえどれほど理知的に見えても、彼の本質は闘争を望み、破壊を好むテロリストなのだった。殺戮の予感に歓喜の声を上げながら、凄まじい勢いでナイフを突き出してくる。

暴風のようなその一撃を、雪菜は紙一重ですり抜けた。
「ははっ、素晴らしい。この私のナイフをかわすか！」
ガルドシュが咄嗟にナイフの軌道を変える。だが、その強引な動きで彼の懐に隙が生まれた。
雪菜はガルドシュの攻撃をかいくぐって彼の脇腹に掌を当て、
「――響よ！」
零距離からの掌打を撃ち放つ。
獣人の分厚い筋肉を貫通し、内臓へと直接衝撃を送りこむ近接戦闘での雪菜の切り札。かつてロタリンギア殲教師の装甲強化服をも破った技である。
だが、掌から伝わる異様な手応えに、雪菜は顔をしかめて距離を取る。
ガルドシュの肉体にダメージはない。雪菜の掌打は、彼に通用しなかったのだ
「生体障壁!?」
「きみたちが気功術と呼んでいる技だな。獣人だからといって武術の素人だと思ったかね？」
ガルドシュが、愉しげに笑いながらナイフを構え直す。
雪菜にとっての脅威はナイフだけではない。獣人の筋力で放たれる蹴りや手刀は、かすっただけでも雪菜を容易く戦闘不能に陥らせる。ガルドシュの握力は雪菜の骨を軽々と粉砕し、その巨体を活かしたタックルは彼女の華奢な身体を一撃で粉砕するだろう
それがわかっていても、雪菜は逃げるという選択肢を選べない。

「――鳴雷っ！」

壁と天井を蹴って加速した雪菜のトリッキーな跳び膝蹴りが、ガルドシュの側頭部を襲った。回避不能のその一撃を、しかしガルドシュは額で正面から受け止めた。膨大な実戦経験に裏打ちされた、とてもつもない反応速度と判断力だ。

「ぬん！」

ガルドシュがヘディングの要領で首を振り、雪菜の軽い身体を吹き飛ばす。

雪菜は猫のように空中で一回転して着地した。その瞬間を狙って、ガルドシュが猛然と肩から突っこんでくる。雪菜がそれをギリギリまで引きつけてかわす。

ガルドシュの自爆を狙っての行動だったが、老将校はそのまま〝オシアナス・グレイヴ〟の外壁をぶち破って、ほぼ無傷のまま外に出た。

強靭な肉体を持つ獣人ならではのデタラメな破壊力だ。

雪菜もガルドシュを追って甲板に出る。狭い船内で戦い続けるよりは、そのほうが有利だと考えたのだ。しかしこのまま戦い続けても、ガルドシュには勝てる気がしない。

戦闘技術は、ほぼ互角。絶対的な速度ではガルドシュが、瞬発力では雪菜がそれぞれ相手を上回る。しかしパワーに差がありすぎた。

ガルドシュが一撃で雪菜を戦闘不能にできるのに、雪菜の攻撃は彼に一切通用しないのだ。しかもガルドシュは、雪菜を侮って手を抜くような真似をしない。

このままではいずれ敗北は必至――そんな絶望感に雪菜が支配されはじめた刹那。
凄まじい突風が、雪菜たちを襲った。
「なんだ、この風は!?」
突然の異変に、ガルドシュがうめいた。それは爆風としかいいようのない猛烈な風だった。風速は最大級の台風にも匹敵するだろう。軽量の雪菜は、気を抜くと簡単に吹き飛ばされてしまいそうだ。空気の塊が直接ぶつかってきて、息ができない。
だが、驚くべきことに〝オシアナス・グレイヴ〟の周囲の海は凪いだままだった。
この突風は、雪菜たちの周囲だけに吹き荒れているのだ。
その風に乗ってなにかが飛んでくる。それは美しい銀色の刃を備えていた。三つ叉に分かれた穂先。航空機を思わせる流麗なシルエット。全金属製の銀色の槍――
「雪霞狼〟!?」
暴風に乗って飛来したその槍を、雪菜が空中でつかみ取る。
その瞬間、荒れ狂っていた暴風がぴたりとやんだ。槍を雪菜に届けたことで、使命を終えたというように――
「いったい誰が!?　こんな……」
自分の手の中に戻ってきた槍を、雪菜は驚愕の表情で眺める。
全金属製の〝雪霞狼〟は、決して軽量な武器ではない。だいぶ陸地に近づいているとはいえ、

〝オシアナス・グレイヴ〟はまだ絃神島から四、五百メートルは離れている。

その距離から槍を投げ、雪菜のもとまで送り届ける――何者かは知らないが、とんでもない能力の持ち主だ。

そんな芸当ができる知り合いはもちろんいない。しかもどうやらその人物は、雪菜がこの槍の持ち主であるということを――つまり雪菜の正体を知っているらしい。だが、素性の詮索は後回しだ。討つべき敵は目の前にいる。

「ふむ。気流使いか」

風で乱れた頭髪を鬱陶しげに撫でつけ、ガルドシュが呟いた。

「さすがは極東の魔族特区。奇怪な技を使う者が多いな。だが――」

槍を構えた雪菜を睨んで、彼は愉快そうに唇を吊り上げた。

「これでようやくきみの本当の力が見られるというわけか。面白い。知略を突き詰めた上での、鋼を散らす血みどろの戦い。やはり戦争というのは、こうでなければな」

闘争の喜悦に、獣人の瞳が爛々と輝く。だが、雪菜の唇から零れ出したのは、老将校の猛る咆吼とは対極の静かな祝詞だった。

「　獅子の神子たる高神の剣巫が願い奉る」

雪菜の体内で膨れ上がった呪力を、〝雪霞狼〟が増幅。その輝きにガルドシュが目を細めた。雪菜の持つ銀色の槍が、魔族にとって極めて危険な存在だと気づいたのだ。

無防備に舞う雪菜へと、ナイフを構えたガルドシュが突進する。雪菜はむしろ緩慢な動きでそれを迎え撃ち――

「破魔の曙光、雪霞の神狼、鋼の神威をもちて我に悪神百鬼を討たせ給え！」

勝敗は一瞬で決した。銀光が美しく交差して消えたとき、雪菜の放った一撃は、ナイフを握るガルドシュの右手を、その腕のあたりで斬り落としていた。

「……見事だ、剣巫。だが、この戦争は私の勝ちだ」

傷口から派手に鮮血を噴きながら、ガルドシュは笑った。斬り落とされた右腕を拾い上げ、彼は雪菜の頭上、上部甲板のほうへと跳躍する。

そこにはガルドシュの二人の部下の姿があった。一人はタブレットPCを胸に抱き、もう一人は両脇に制服姿の少女を一人ずつ抱えている。

「藍羽先輩!?　凪沙ちゃん!?」

ぐったりと眠る彼女たちを見て、雪菜が短い悲鳴を上げた。

怒りに任せて槍を構え、彼らのほうへと突っこもうとする。だが、その雪菜の眼前を、突然、真紅の閃光が薙いだ。大口径レーザーによる砲撃だ。

「ナラクヴェーラ!?　まさか……!?」

海面を突き破るように浮上してきた古代兵器の禍々しい姿に、雪菜は血の気をなくした。

〝オシアナス・グレイヴ〟の船体に張りつきながらも、ナラクヴェーラは誰も攻撃しようとし

ない。そのことに気づいて雪菜は恐怖する。

今の古代兵器は暴走状態ではない。操縦者の意思に制御されているのだ。

「石板の解読は？」

ガルドシュが部下に報告を求めた。浅葱たちを床に下ろしながら、部下の一人が回答する。

「終わったようです。内容の正確性については、グリゴーレがすでに確認しています。あのように」

そうか、と満足そうにガルドシュがうなずいた。雪菜が斬り落とした右腕の出血はすでに止まって、接合した下腕部の癒着も始まっているようだ。獣人としても驚異的な生命力である。

――ということだ。投降したまえ、獅子王機関の剣巫。私もヴァトラーをずいぶん待たせてしまった。きみの相手をしている暇はもうないのだ」

ガルドシュが厳かに勧告した。雪菜は無言で唇を噛む。

完全に手詰まりだった。たとえ雪霞狼があったとしても、ガルドシュを含めた獣人二人を相手にすれば苦戦は免れない。おまけに彼らは浅葱と凪沙を人質にしており、しかもナラクヴェーラをも従えている。どう転んでも雪菜に勝ち目はなかった。

ナラクヴェーラに曳航つぱれて、〝オシアナス・グレイヴ〟が、海上を漂う十二号増設人工島に接岸する。

ガルドシュたちの目的は、貨物室にある休眠状態のナラクヴェーラを地上に運び出し、覚醒

させることだろう。そして六機のナラクヴェーラで、ヴァトラーと戦うつもりなのだ。
それがわかっていても、雪菜にはどうすることもできない。油圧ポンプの轟音を響かせて、〝オシアナス・グレイヴ〟のスターンゲートが開放されていく。
その直後
雪菜たちの耳をつんざく、絶叫にも似た獣の遠吠えが空に鳴り響いた。
そして爆撃を喰らったかのように、無数の破片を撒き散らして、増設人工島が激しく揺れた。

4

「くそ……こっちも行き止まりか」
闇の中に古城の疲れた声が反響する。増設人工島に張り巡らされた、狭いメンテナンス通路の中である。
理屈では、この通路は地上まで続いているはずなのだが、実際はそう簡単にはいかなかった。迷路のように入り組んでいる上に、あちこちが瓦礫で塞がっている。何度も行ったり来たりを繰り返しているうちに、古城たちはすでに自分たちの現在地も見失っていた。
しかも彼らの足元には、ひたひたと海水が迫りつつあった。すでに頭上からの水漏れで、古城と紗矢華は全身ズブ濡れになってしまっている。

「まずいわね。水位の上昇速度が上がってる。このままだと十分も保たずにここも沈むかも」
行く手を塞ぐ瓦礫を眺めて、紗矢華が恨めしげに呟いた。
古城は足元の鉄骨を蹴飛ばして、
「――〝獅子の黄金〟で吹き飛ばす、ってわけにはいかないだろうな」
紗矢華がじっとりとした目つきで古城を見る。
「こんなずぶ濡れの場所であんな電気の塊を喚び出されたら、あたしも地上にいる人たちも黒焦げなんですけど……あなただって無事では済まないんじゃないの？」
「まあ、そうだよな」
古城はがっくりと肩を落とした。前から薄々感じていたのだが、吸血鬼の眷獣というやつは、役に立たない状況が多すぎる。あの凶悪な雷光の獅子よりも、携帯電話のバックライトのほうがまだしも懐中電灯代わりになって便利なくらいだ。
「〝煌華麟〟でも、さすがにこれだけの瓦礫をどうこうするのは無理だわ」
紗矢華が、左手の剣を重そうに引きずりながらそう言った。
まあそれはそうだろう、と古城も思う。
「岩を真っ二つにする剣の達人がいても、日本刀じゃトンネルは掘れないもんな」
「うん」
そう言って弱々しく微笑んだ紗矢華が、くしゅっ、と妙に可愛らしいくしゃみをした。水に

濡れた彼女の肩が小さく震えていることに古城は気づく。
「さすがに地下は冷えるな。ずぶ濡れだしな」
白い息を吐きながら呟いて、古城はふと紗矢華の胸元に目を留めた。
濡れた開襟のブラウスが素肌に張りつき、下着がくっきりと透けていた。淡いピンクの花柄に包まれた豊かな丘陵と、そこに挟まれた魅惑の深い谷間。
闇を見通す吸血鬼の視界が、その姿を必要以上に鮮明に映し出す。
「どうしたの？」
突然黙りこんだ古城の顔を、紗矢華が不思議そうにのぞきこんでくる。
お、おう、と慌てて目を逸らす古城。そんな古城を紗矢華は訝しげにじっと見つめ、やがてハッと自分の胸元を隠した。
「暁古城っ……！」
「ち、違う！　俺は寒そうだから、俺のパーカーを貸したほうがいいかと思って　」
「あんたのエロ体液が沁みついたパーカーなんて着られないんだけど！　妊娠するし！」
「するかっ！　おまえは本当に吸血鬼をなんだと思ってるんだよ!?」
古城が乱暴に怒鳴りつける。が、返ってくるはずの紗矢華の反論はなぜか聞こえてこなかった。所在なげに俯いた彼女が、ぷちぷちと自分の指先を弄り始める。
「……ゆ、雪菜になんか悪い気がするし」

「は？　姫柊は今は関係ないだろ。いいから着てろ、ほら」

古城は自分のパーカーを、無理やり彼女の肩に羽織らせる。ずぶ濡れの状況は変わらないが、古城の体温で暖まっているぶん、少しはマシなはずである。

その体温を味わうように、紗矢華はパーカーの襟元をきゅっと引き寄せて、

「ねえ、暁古城」

「なんだよ」

「べつの眷獣が使えたらいいのに、って思ってる？」

「それはまあ……この状況だとな」

前にも誰かに似たような質問をされたな、と思いながら古城は顔をしかめた。

古城が受け継いだ第四真祖の眷獣は全部で十二体。この状況で瓦礫を吹き飛ばせる眷獣も、おそらくその中にはいるはずだ。たとえば学校の屋上を危うく粉砕しかけた、あいつとか。

「――けど、前に〝獅子の黄金〟を無理やり喚び出したときは、絃神島の東地区を丸ごと焼き払いかけたんだ。ここでまた似たようなことが起きたら、こんな壊れかけの人工島なんかひとたまりもなく海に沈むな」

そう言って古城は溜息をつく。第四真祖の眷獣ってやつは、どうしてこうも扱いにくいのか。

しかし紗矢華は、古城をじっと見上げて続けた。

「制御ができればいいのよね。雪菜は、そのためにあなたに血を吸わせたんでしょう？」

「煌坂？」

どこか思い詰めたような紗矢華の態度に、古城は眉を寄せた。

紗矢華はなぜか頬を赤らめて、頼りなく視線を彷徨わせている。

「あ、あのさ……大きいかな、私。やっぱり」

彼女の唐突な質問に、古城は、うっと答えに詰まった　パーカーの合わせ目からのぞく胸元に、無意識に視線が行ってしまう。

「そ、それはまあ、姫柊なんかと比べたら、小さくはないよな」

「だよね。可愛くないよね」

紗矢華がそう言って自嘲するように笑う。

どういう意味だ、と古城は戸惑う。胸があまり大きすぎると、可愛いデザインの下着が着られない、ということか。たしかにメリハリの利きすぎた紗矢華の体型だと、そういうこともあるのかもしれないが。

「そんなの気にすることないだろ」

「え？」

「でかいほうが好きな男子のほうが多いんじゃないか。女の子らしくて」

ツンツン頭の親友の顔を思い出しながら、古城が言う。

しかし紗矢華は、困惑したように首を傾げて、

「女の子らしい？　小さいほうが可愛くない？」
「いやまあ、そういうのが好きなやつもいるだろうけどさ。そのへんは人の好き好きだからな。まあ、本人は肩が凝ったりして大変なのかもしれないけど」
「……肩が凝る？　なんの話？」
紗矢華が、ぱちくりと目を瞬く。古城も同じように首を傾げて、
「え？　違うのか。前にどっかのグラビアアイドルがそんな話をしてたんだが――」
「グラビアアイドル？」
紗矢華が本気で混乱したように表情を消した。やがてその肩が、怒りで小刻みに震え出す。
「――誰が胸の話をしてるのよ!?　身長よ、身長！」
「え、身長？　なんでいきなりそんな話に？」
「いきなりもなにも最初からそういう話しかしてないんだけど！」
紗矢華が、猛犬のようにぐるぐると喉を鳴らした。
古城は気怠そうな表情でそんな彼女を見下ろして、
「ていうか、煌坂、そんなでかくもねーだろ。百六十六とか七とか、そんなもんじゃねえか？普通にスタイルいいと思うけど」
元バスケ部員の古城の感覚では、紗矢華程度の身長はごく普通である。むしろ目線の位置が近くて話しやすい、とすら思う。

最後のひと言が効いたのか、紗矢華は少し機嫌を直して、
「うちの学校じゃこれでもいちばん大きかったの！　おかげでいつもお姫様抱っこをするのは、私の役で……」
「お姫様抱っこ？」
ノーカウントと必死で叫んでたあれか、と古城は思い出す。妙にこだわってるような印象は受けたが、身長にコンプレックスを持つ紗矢華にとっては、重大な問題だったのだろう。
「だ、だから、ちょっとだけ嬉しかったの。今まであんなことなかったから」
耳まで真っ赤にして、紗矢華が言った。
「ほ、ほんとにそれだけだからね　いつか巡り会う運命の相手に、強引に抱き上げられて恋に落ちるかもとか、そんなことを妄想してたわけじゃないから　－」
「あ、ああ」
紗矢華が怒っているわけではないと知って、古城は少し安心する
今の彼女は、古城の同級生たちと同じ、ごく普通の高校生の少女に見えた　ナラクヴェーラを相手に勇戦していた舞威媛と同一人物とは思えない。雪菜はきっとこんな紗矢華を、ルームメイトとしていつも見ていたのだろう。可愛い、という感想が出てくることにも共感できる。
紗矢華が、古城の制服の胸元をつかんで、くいっ、と優しく引っ張った
そして自分からも古城のほうへと近づいてくる。いつの間にか古城たち二人の距離は、互い

の息がかかるほどになっていた。

「だから……言葉には内緒だよ」

呟く紗矢華の声が震えている。寒さと、そして恐怖のせいだろう。

しかし、覚悟を決めたように古城に体重を預けてきた瞬間、彼女の震えは止まっていた。

「一度だけ、お礼に私の血を吸わせてあげる。それとも、やっぱり私じゃだめかな」

見上げてくる紗矢華の潤んだ瞳を、古城は動揺しながら見つめた。

「いや、そんなことはないけど。だけど、いいのか、煌坂、おまえは……」

気遣うように問いかける古城の背中に、紗矢華がそっと手を回した。

古城たちの身体は冷たく濡れそぼったまま。だが密着した互いの肌からは、柔らかな温もりが伝わってくる。

「あなたのことは、恐くないわ。不思議ね……世界最強の吸血鬼のくせに」

紗矢華はそう言って、古城の口元にそっと触れる。鋭く尖った、古城の牙に。

通路に流れ込む水が勢いを増していた。二人で強く抱き合っていないと、そのまま流されてしまうほどに。やがてふたつの影が融け合うようにひとつに絡まり、紗矢華のか細い喘ぎ声が、水面に反響して広がっていった。

5

「くそ……やっぱ駄目だったか」

喉に詰まったカプセルの残骸を吐き出しながら、矢瀬が荒い息を吐いていた。

彼の周囲を乱れた気流が渦巻いているのは、能力を使った後遺症である。

置き去りにされていた雪菜の〝雪霞狼〟を、洋上に浮かぶ〝オシアナス・グレイヴ〟まで投げ飛ばす。気流を操る矢瀬にしかできない荒技だが、そこまでは上手くいったのだ。

雪菜は期待どおりにガルドシュを倒してくれた。矢瀬の計算では、雪菜が浅葱たちのことも、そろそろ助け出してくれているはずだった。誤算だったのはナラクヴェーラの制御コマンドが、予想以上に早く解析されてしまったことだ。

「いくら姫柊っちでも、あの古代兵器が相手じゃどうにもならねーよな。こっちは懲罰ものリスクを冒してまで手助けしてるってのに　浅葱のやつ、頑張り過ぎなんだよ　―」

地面にぐったりとうつ伏せて、矢瀬が弱々しく愚痴を垂れた。

そんな矢瀬を面白そうに眺めながら、派手な揃えを着たヴァトラーが言う。

「なるほど。監視者であるきみが直接、戦闘に介入するのは禁忌というわけか。きみも意外に苦労してるんだねェ」

「あんたがあんとき邪魔してくれなきゃ、もうちょっと上手いこと立ち回れたんスけどねえ」

矢瀬が恨めしげに横目でヴァトラーを見た。〝オシアナス・グレイヴ〟に黒死皇派が乗りこんでいたことを、矢瀬は浅葱たちが誘拐された直後に気づいていた　その情報を特殊警備隊に流していれば、彼らが囮作戦に引っかかることもなかったし、その後の展開もずいぶん違っていたはずだ。

「おかげで面白いものが見られたじゃないか」

ヴァトラーは悪びれもせずにそう言った。

ちょうど十二号増設人工島に接岸した〝オシアナス・グレイヴ〟から、五機のナラクヴェーラが運び出されてきたところである。

一機でもそれなりの戦闘能力を備えた古代兵器が合計六機　ヴァトラーにとっても興味深い戦いになるだろう。それでこそ、こんな極東の小島にまでやってきた甲斐があるというものだ。

「さて、ガルドシュのほうの準備も済んだみたいだし、そろそろボクの出番かな」

久々となる華やかな死闘の予感に、浮き浮きとしながらヴァトラーが歩き出す

その背中に、矢瀬が皮肉っぽく笑いかけた。

「そいつはどうかね。第四真祖の親友として言わせてもらえば、古城が計算どおりに動いてくれるなんて期待しないほうがいいと思うぜ」

彼の言葉を裏づけるように、キィン、という耳障りな高周波が、ヴァトラーたちの周囲を覆

った。続けて増設人工島全体を、強烈な振動がビリビリと震わせる。

「……へえ」

ヴァトラーが感心したように呟いた。増設人工島の地下に凄まじい魔力の塊が出現し、その禍々しい波動を無差別に撒き散らしている。

ヴァトラーの合体眷獣をも凌駕する、荒れ狂う凶暴なエネルギーの塊。そんなものはこの絃神島には存在しない。ただひとつ第四真祖・暁古城の眷獣を除いては――

「来たか、古城」

矢瀬が満足そうに呟いて、力尽きたように目を閉じる。

地下から噴き出した爆音が、衝撃波となって増設人工島の地面を撃ち抜き、大量の破片を巻き上げた。大地を揺るがす轟音はそれでも消えることはない。

振動によって凝縮された大気の歪みが陽炎を生み、その陽炎はやがて獣の姿へと変わった。緋色に煌めく鬣と、双角を持つ巨大な獣の姿へと――

ガルドシュの行動は俊敏だった。

「第四真祖の眷獣か！　グリゴーレ！　わたしが女王で出る。それまでやつの相手をしろ」

『――了解です、少佐』

無線機越しにそう言い残して、最初のナラクヴェーラが轟然と動き出した。真紅の閃光を撒き散らしながら、双角の眷獣のほうへと向かう。

その間にガルドシュは、船倉のほうへと走り出していた。雪菜が貨物室で見た、あの大型の古代兵器に乗り込むつもりなのだ。

「待ちなさい、クリストフ・ガルドシュ！」

銀色の槍を翻して、雪菜が彼らのあとを追う。そんな雪菜を鬱陶しげに一瞥して、ガルドシュの部下がなにかを放った。ジュース缶ほどの大きさの金属の筒である。

それが手榴弾だと気づいて、雪菜は愕然とする。

上甲板には、人質になっていた浅葱たちが放置されたままである。あんなものを至近距離で喰らったら、生身の彼女たちはひとたまりもない。

雪菜はガルドシュの追跡を諦めて、倒れている浅葱たちに覆い被さった。自らの身体を楯にして、手榴弾の爆発から二人を守ろうと考えたのだ。

「……！」

だが、覚悟していた衝撃が、雪菜たちを襲ってくることはなかった。

遥か遠くの海上で、小さな水飛沫が飛び散っただけだ。

「え？」

雪菜は混乱しながら起き上がる。手榴弾を拾って投げ返すような時間はなかった　ましてや

あんな遠くまで投げ捨てるような余裕は絶対になかったはずだ。

しかし実際に手榴弾は移動していた。まるで何者かが空間ごと転移させたかのように。

「いちおう全員、無事だったようだな」

雪菜の眼前。なにもない空間を波紋のように揺らして、小柄な女性がゆっくりと歩み出る。

黒いフリルの日傘をさした豪奢なドレスの女性。

「おまえがその槍を振り回してくれたおかげで、この船の結界が裂けて、ようやく転移できた。うちの生徒を庇ってくれたことには、いちおう礼を言っておこう、姫柊雪菜」

「南宮先生!?」

虚空から音もなく出現した那月を、雪菜は驚きに打たれて見上げた。

空間転移は最高難度の魔術のひとつだ　個人レベルでそれを使える人間は、獅子王機関にも数人しかいない　ましてやこんな、隣の部屋に入るかのように気楽に使いこなす術者がいるとは、これまで聞いたこともなかった。

あどけない見た目にもかかわらず、彼女は雪菜が想像する以上の怪物だったらしい。

さすがは第四真祖のクラス担任といったところか。普段の偉そうな態度も、伊達ではないということか。

「私はこいつらを安全な場所まで連れて行く。おまえはどうする、転校生。一緒に来るか？」

眠っている浅葱たちを抱き寄せて、那月が訊いた。

雪菜は首を振って立ち上がる。
「わたしは暁先輩と合流します。監視役ですから」
「ふん、仕事熱心だな」
好きにしろ、と言いながら那月が空間を歪めた。眠り続けている浅葱と凪沙を、乱暴にその中に放りこむ。そして彼女は少し意地悪く、ふふん、と笑い、
「だが、おまえが助けに行くまでもないかもしれんぞ」
「え？」
最後に意味深な言葉を残して、那月の姿がかき消えた。雪菜は困惑しながらも、ナラクヴェーラと戦っているはずの古城を探す。
増設人工島の上では、古城の眷獣が、手負いの古代兵器を圧倒していた。
緋色の鬣を持つ双角獣。雪菜の知らない眷獣だった。
それが意味することはただひとつ。古城が雪菜の知らないところで、僅かの血を吸ったのだ、なぜかその事実が雪菜にはひどく不愉快に思えて、そしてそんな苛立ちを感じる自分自身に少し戸惑った。
だが冷静に考えてみれば、監視役の自分に黙って勝手に他人の血を吸ったのだから、雪菜が怒るのも当然だ。そう、ただそれだけのことだと、雪菜は自分に言い聞かせる。
そのとき雪菜の懐で携帯の着信音が鳴った。着信音の源は、浅葱のスマートフォンだった

画面に表示された名前を見て、雪菜はその着信に応答する。
『よお、嬢ちゃん。例の作業、終わったぜ』
電話回線から聞こえてきたのは、浅葱の相棒の人工知能の声だった。紋神島の全都市機能を掌握している彼ならば、電話くらいかけることができて当然なのだろう。
「え……と、モグワイさん？」
雪菜が恐る恐る呼びかける。モグワイはすぐにそれを解析して、声の主を割り出したようだった。
『ありゃ。あんた、嬢ちゃんの恋敵の転校生ちゃんか？』
「え？　ライバル？」
『浅葱嬢ちゃんは？』
「今は安全なところに避難して、眠ってるはずです」
雪菜の言葉に、モグワイはうーん、と悩むような素振りを見せた。人工知能にしては、芸が細かい。大雑把なように見えて実は繊細な、浅葱の性格が反映されているのだろう。
『そうか、どうしような。テロリストに気づかれないように携帯に送れと言われてたんだが』
「なんのことですか？」
雪菜が声を大きくする。ガルドシュたちの目を盗んで、浅葱がこっそり進めていた作業。なにか重要な意味があるとしか思えない。

『いや、だからさ』
雪菜の剣幕に圧倒されたように、モグワイは渋々と口を開いた。
『古代兵器ってやつの制御コマンドだろ　五十五番目のな』

6

古城と紗矢華は、なだらかに傾いた坂道の上に立っていた。
頭上には久々に目にする眩い陽光。冷たく濡れた身体に、夏の海風が心地好い。
古城たちの背後にあるのは、干上がった湖を思わせる直径三百メートルほどのクレーター増設人工島表面を覆っていた鋼板製の大地が、同心円状に陥没しているのだ。
そして陥没したクレーターの中央では、緋色の双角獣が、耳障りな雄叫びを上げていた。
「……あなたは本当に無茶苦茶ね」
そのクレーターを振り返って、心底呆れ果てたという表情で紗矢華が嘆息する。
しかし言葉の内容とは裏腹に、彼女の口調はどこか愉しげだ。
「たしかに地上には出られたけど、だからってこんな馬鹿でかいクレーターを造ることはないじゃない。私が〝煌華麟〟の障壁で瓦礫を防がなかったら、今ごろ生き埋めになってたわよ」
「文句は俺じゃなくて、眷獣に言ってくれ。俺は通路を塞いでる瓦礫をどうにかしてもらえ

ばそれでよかったんだよ」

古城が精神的疲労の滲んだ声で反論する。

そう。新たに手に入れた眷獣の力で、通路の瓦礫を吹き飛ばす。古城が望んだのは、ただそれだけのことだった。しかし実際に出てきた眷獣は、『天井が高くて出られないのなら、低くすればいいじゃない』とばかりに、徹底的な破壊を敢行。増設人工島内の柱や隔壁を振動波と衝撃波で片っ端から粉砕し、本当に天井を陥没させてしまったのだ。

〝獅子の黄金〟もたいがい傍迷惑な眷獣だが、あの双角獣のじゃじゃ馬ぶりも負けず劣らずというか、むしろ輪をかけて酷いと感じるのは気のせいか。だが今だけは、その凶暴さが頼もしい。

「やっぱりあなたなんかの近くにいたら、雪菜が危険だわ」

紗矢華が古城を見上げて言った。その声に、かつての刺々しい響きはない。古城に寄り添うように立ちながら、彼女は笑みを浮かべてみせる。

「だから今回だけは、私があなたの面倒を見てあげる。さっさとあいつらを片付けましょう」

紗矢華が視線を向けた先には、再び上陸してきた古代兵器の姿があった。古城たちが最初に交戦した、手負いのナラクヴェーラである。

最後に見かけたときと形は変わっていない。だが明らかに動きの質が違う。操縦者の意思を反映した知的な動きだ。陥没した地表を楯のように使って、副腕から真紅の閃光を放つ。

古城一人では、そんな変則的な攻撃をよけることはできなかっただろう。
だが、その光速の一撃を受け止めたのは紗矢華の剣だ。面倒を見るという約束どおり、彼女が古城の楯となってくれている。
「疾く往れ、九番目の眷獣〝双角の深緋〟――！」
そして紗矢華に庇われた古城が、手懐けたばかりの新たな眷獣に命じた。
緋色の双角獣が咆吼した。
陽炎のような姿のその眷獣は、肉体そのものが凄まじい振動の塊だ。
頭部に突き出した二本の角が、音叉のように共鳴して凶悪な高周波振動を撒き散らす。その振動は岩を粉砕し、金属を引き裂く。近所迷惑という意味では、間違いなく最凶の眷獣だろう。
そして双角獣の咆吼は、衝撃波の弾丸となってナラクヴェーラを襲った。
真祖の眷獣の持つ膨大な魔力を、振動という物理エネルギーの塊に変換して叩きつけたのだ。
それは神々の兵器を、原型を留めないまでに破壊した。装甲は砕け散り、骨格をへし折り、急激に圧縮された周囲の空気が、数千度の高温となって機体を焼き尽くす。
そのまま数百メートル近く吹き飛ばされて、ナラクヴェーラは動きを止めた
「やば……中の操縦者は……死んだ、か？」
双角獣の容赦ない攻撃に、慌てたのは古城のほうだった
ナラクヴェーラの内部には、黒死皇派のテロリストが乗りこんでいたはずである　あそこま

で派手に吹き飛んで、生きていられるとも思えないのだが――

「獣人の生命力なら、あの程度で死にはしないわ。当分は身動きできないと思うけど」

動揺する古城の耳元で、紗矢華が叫んだ。

「それよりも、あっちの五機を！　操縦者が乗りこむ前に潰して！」

「お、おう」

紗矢華が指さしたのは、〝オシアナス・グレイヴ〟から運び出された五機のナラクヴェーラだった。操縦者のいないそれらの機体は、いまだに休眠状態である。それなら、なんの気兼ねもなく叩き潰すことができるはず。

だが、緋色の双角獣が古代兵器の群れへと襲いかかろうとしたそのとき、その巨体を、横殴りの巨大な爆発が襲った。

「――なんだ!?」

双角獣の突進をとめたのは、炎を噴きながら飛来した円盤だ。西域の闘神が持つという戦輪によく似ている。そして双角獣と激突した戦輪は、爆発して巨大な炎を巻き起こした。

どうやら戦輪の正体は、爆薬を満載したミサイルのようなものらしい。

その威力はおそらく都市攻撃用の巡航ミサイルと同等か、それ以上。真祖の眷獣を一撃で倒すほどの力ではないが、少なくとも双角獣の突進を止める程度の効果はあった。

全身にまとわりつく炎の残滓を、緋色の眷獣が鬱陶しげに振り払う。

双角獣が睨んでいたのは、〝オシアナス・グレイヴ〟の後部甲板だ。メガヨットの美しい船体を引き裂いて、巨大ななにかが出現する。

ナラクヴェーラと同じ材質の装甲をまとっているが、桁違いにでかい　八本の脚と、三つの頭。そして女王アリのように膨らんだ胴体。その胴体を覆う装甲が割れて迫り出してきたのは、戦輪を詰めこんだミサイルランチャー――

威嚇するように吼えた双角獣に向かって、無数の戦輪が一斉に撃ち放たれた。

「暁古城、伏せてっ！」

「なっ――!?」

紗矢華が剣を振って、防御障壁を造り出す。その障壁に守られた古城たちの頭上を、灼熱の爆炎が覆い尽くした。戦輪の一斉射撃に対抗するために、双角獣も振動波を放出。ふたつの巨大な力が正面から激突し、周囲に凄まじい破壊を撒き散らす。

古城は爆風に翻弄されながら呆然と、それを見上げていた。

被害が及んでいたのは、十二号増設人工島だけではない。爆炎で目標を見失った戦輪数個が、絃神島本体へと落下していったのだ。

大きな爆発が次々に巻き起こり、市街地に黒煙が噴き上がる

「なんて……ことを……」

その場に弱々しく膝を突いた古城が、怒りにまかせて地面を殴りつけた。

この付近の住民は、特区警備隊が避難させているはずだ。だが被害が出たことにはかわりない。まったく無関係な人々の生活を、黒死皇派は無差別に破壊する。彼らはまさしくテロリストだった。

動き出した女王ナラクヴェーラが、ゆっくりと増設人工島に上陸してくる。

残る五機のナラクヴェーラも動き出していた。

彼らは見事に調和の取れた動きで、古城たちを包囲しようとする。おそらく女王ナラクヴェーラが彼らを指揮しているのだろう。それはまさに兵器の姿だった。兵器とは作戦目標遂行のために連携して戦うものなのだ

「ふぅん……これが本来のナラクヴェーラの力か」

歯軋りする古城の耳に、どこか浮かれたような男の声が聞こえてきた。焦げ臭い爆煙の中を飄然と歩いてきたのはヴァトラーだ。

「やってくれるじゃないか、ガルドシュ。こんな切り札を残していたとはね。どうする、古城？　やっぱりボクが代わりにやろうか？」

白い牙を剝きながら、ヴァトラーが挑発するように古城に言った。こんな状況ですら、この気障な男の所作には奇妙な愛嬌があった。

古城は苦々しげに舌打ちし、攻撃的な顔つきで彼を睨む。

「引っこんでろって言ったはずだぜ、ヴァトラー……！　どいつもこいつも好き勝手しやがっ

て、いい加減こっちも頭に来てるんだよ！」

煮えたぎるような本気の怒りが古城の身体を包みこんでいた。それが眠っていた古城の闘争心に火をつけ、真祖の〝血〟を滾らせる。

「相手が戦王領域のテロリストだろうが、古代兵器だろうが関係ねえ。ここから先は、第四真祖の戦争だ！」

古城がまとう禍々しい覇気を、ヴァトラーが満足げに眺めて笑った。

なにも言わずに立ち上がった紗矢華が、左手に剣を構えて古城の隣に立つ。

そして古城の右隣には、当然そこにいるべきというような自然さで小柄な影が歩み出た。

「――いいえ、先輩。わたしたちの、です」

銀色の槍を構えた制服姿の少女。姫柊雪菜が、なぜか拗ねたような瞳で古城を見上げていた。

7

「ひ……姫柊？」

古城は驚いて彼女の名前を呼んだ。雪菜は無感情な冷たい瞳のまま、小首を傾げた。

「はい。なんですか？」

「え、と……どうしてここに？」

根拠のない不安と謎の後ろめたさを覚えながら、古城が訊く。

彼女はさっきまで浅葱たちと一緒に〝オシアナス・グレイヴ〟にいたはずだ。それがここにいるということは、浅葱たちを安全な場所に避難させて、なおかつ〝雪霞狼〟も手に入れてきたということか。あの短時間でよくもそこまで。

「監視役ですから。私が、先輩の」

なぜか倒置法で強調して、雪菜は槍の穂先を古城に向けた。表情を消したまま古城と紗矢華、そして爆炎の中から姿を現す緋色の双角獣を見比べる。

「新しい眷獣を掌握したんですね、先輩」

抑揚のない冷たい声で雪菜が訊いた。古城はぎくしゃくとうなずき、紗矢華と目を合わせ、

「あ、ああ。なぜか、いろいろあってこんなことに」

「そ、そう。不慮の事故というか、不可抗力的なものがあって」

紗矢華がぎこちなく目を伏せながら、着ていたパーカーの襟を指先で引っ張った。

そんな彼女の態度を、雪菜は少し意外そうな表情で見つめて、

「そうですか」

仕方のない人たちですね、とでも言いたげに長い溜息をついた。銀の槍をナラクヴェーラに向けて構え直す。

「では、そのお話はまたあとで。まずは彼らを片付けましょう」

「あ、ああ」

そうしようそうしよう、とうなずく古城。

雪菜は、もう一度短く息を吐き、地上に這い出した巨大な古代兵器を睨んで言った。

「先輩、クリストフ・ガルドシュはあの女王ナラクヴェーラの中です」

「女王……指揮官機ってことか？」

古城のその言葉が終わる前に、古代兵器の女王が再び戦輪の一斉砲撃を放った。双角獣の咆吼がそれらを撃ち落とし、再び空が爆炎に包まれる。

続けて五機の小型ナラクヴェーラが、真紅の閃光を乱射した。

灼熱の光線が古城たちの周囲を次々に襲って、紗矢華が必死にそれを撃ち落とす。

攻撃の余波で〝オシアナス・グレイヴ〟の船体が燃え上がり、古城たちのいる増設人工島が不気味な軋みを上げた。さすがの強靭な外殻も、もう限界が近いのだ

「ああくそ、どいつもこいつも無茶苦茶しやがって……！」

絶え間ない爆音に耳を塞いで、古城がうめいた。紗矢華が荒い息を吐きながら叫んだ

「暁古城。このままじゃジリ貧だわ！」

「わかってる！　――疾く在れ、〝獅子の黄金〟！」

古城が右腕を高らかに掲げて、もう一体の眷獣を喚び出した

雷光の獅子が、稲妻を撒き散らして敵陣へと躍りかかり、五機の古代兵器を一瞬で蹴散らす。

そして紫電の速度で指揮官機へと突撃。女王ナラクヴェーラの巨体を海へと突き落とした。

沈降する指揮官機に、さらに追撃を加えようとする。

「だめです、先輩！　あんな電力の塊を海水にぶつけたら――」

雪菜が古城を慌てて制止した。だがそのときにはもう、雷光の獅子が海面への激突を終えていた。莫大な電流が海面を流れて拡散し、熱による水蒸気爆発を起こす。

「ぐわっ……」

巨大な水柱が上空数百メートルまで立ち上り、爆発の振動が増設人工島を揺らした。予期せぬ衝撃に古城がたじろぐ。どうやら獅子の黄金はその性質上、海中では使えない眷獣だったらしい。

「なら、これで――！」

戦輪の攻撃が途絶えたことで、自由になった双角獣が吼えた。共鳴する二本の角が振動を増幅。撒き散らされた衝撃は大地を揺るがし、巨大な波を生み出した。まるで聖書の一節のように、緋色の眷獣を中心に海が割れていく。

古城たちの戦いを眺めていたヴァトラーが、はは っ、と歓声を上げながら手を叩いた。

「海を割ったか、古城。さすがは第四真祖の眷獣。こいつは実にいいスペクタクルだね」

「見世物じゃねえっての！」

無邪気な青年貴族に怒鳴り返しながら、古城はさらに猛攻を続けた。あらわになった女王ナ

ラクヴェーラの巨体へと、双角獣が衝撃波の弾丸を叩きこむ。干上がった海底へと激突し、大型古代兵器はそのまま半分以上埋もれて動きを止めた。

割れていた海が元に戻り、激しい波が女王ナラクヴェーラの姿を覆い隠す。

「やったか……」

古城が脱力しながら呟いた。二体の眷獣の同時制御は、さすがに神経をすり減らす。少しでも気を抜けば、いつ暴走してもおかしくない連中なのだ。

だが、なかば放心状態だった古城を、紗矢華が鋭く叱咤した。

「まだよ、暁古城！」

彼女の剣が閃いて、降りそそぐ真紅の閃光から古城を守った。

〝獅子の黄金〟に破壊されたはずの五機の小型ナラクヴェーラが、再び動きだしていた。そして、その向こう側にもう一機、双角獣が最初に破壊した機体が、焼け焦げた姿のまま立ち上がろうとしている

「自己修復……!?　あんな状態からでも復活できるのか!?」

「それだけじゃないわ。破損した装甲の材質を変化させて、振動と衝撃への抵抗力を増してる。あなたの攻撃を解析して対策してるのよ」

紗矢華が冷静な表情で分析する。彼女の剣舞が防がれたときと同じだ。ナラクヴェーラは、一度受けた敵の攻撃を学習して、それに耐えられるように変化する。

しかもナラクヴェーラ同士のネットワークを経由して、情報は瞬時に他の機体にも伝わるらしい。たとえ一体のナラクヴェーラを行動不能にしても、他の機体はすでに攻撃への耐性を身につけている。そして破壊された機体も自己修復によって、やがて戦線へと復帰する。

「獅子の黄金」の攻撃に耐えたのも、すでに学習を終えてたせいか。攻撃を受けるたびに強くなる……って、そんなものどうやって倒せばいい!?」

古城は気が遠くなるような感覚を覚えた。どれだけ破壊されても自己修復し、しかも攻撃を受ければ受けるほど強くなる兵器。まさに真祖をも倒し得る究極の力なのではないだろうか。

しかし雪菜は、焦燥に駆られる古城を見上げて、華やかに笑った。

「いいえ、先輩。大丈夫、勝てますよ」

そう言って彼女が取り出したのは、薄桃色の小さなスマートフォンだ。

雪菜が、液晶画面に浮かぶ縫いぐるみのような人工知能に呼びかける。

「――そうですよね、モグワイさん」

『おう。浅葱嬢ちゃんが、逆襲の段取りをきっちり済ませておいてくれたからな』

「浅葱が……？」

告げられた予想外の名前に、古城が唖然とする。無力な女子高生のはずの浅葱が、無敵の古代兵器を相手になにをできるというのか。

「藍羽先輩は、ナラクヴェーラの制御コマンドを解読しながら、こっそり新しいコマンドを作

ってたんです」

『ナラクヴェーラの自己修復機能を悪用して、連中を自滅させる　一種のコンピューター・ウィルスだな。名付けて『おわりの言葉』ってところか』

「ウィルスって……そんな簡単に作れるものなのか？」

浅葱が優秀なプログラマーだということは、もちろん古城も知っている。

しかし相手は、そこらにあるパソコンやゲーム機とはわけが違う　それどころか人類が造ったものですらない神々の兵器なのだ。世界中の学者が寄ってたかって手も足も出なかった石板を解読する片手間に、その脆弱性を利用したウィルスを仕込む

天才という言葉が生ぬるく思えるほどの荒技である。無茶苦茶だ。

『それを作っちまうのが、あの嬢ちゃんのおっかねえところでな……〝電子の女帝〟を本気で怒らせたのが、テロリストどもの運の尽きってやつだ。おまえさんもせいぜい嬢ちゃんの機嫌を損ねないように気をつけるんだな。ククク……』

モグワイがからかうような口調で言う。古城は黙って肩をすくめ、

「それで、俺たちはなにをすればいいんだ、姫柊？」

「ナラクヴェーラは音声コントロールです。女王ナラクヴェーラの中に入って、藍羽先輩が作った音声ファイルを流せれば、すべての機体が停止するはずです」

そう言って、雪菜が海へと視線を向ける。海底に沈んだはずの大型古代兵器が、ちょうど自

己修復を終えて再び這い上がってきたところだ。

「あのでかいやつの中に入る……って、どうやって？　集中砲火の餌食だぞ。せめてあいつらの動きを止めないと」

絶望の予感に蝕まれて古城がうめく。古城の二体の眷獣は、すでに古城たちの防御に回っていた。嵐のように降りそそぐ戦輪、そして絶え間なく放たれる大口径レーザー、それらを防ぐだけで手一杯である。

眷獣たちの反撃は、すでに学習を終えたナラクヴェーラたちには効果が薄い。今はまだ圧倒的なパワー差で強引に圧しきっているが、その優位もそう長くは続かないだろう。

この状況で生身の古城たちが女王ナラクヴェーラに近づくのは、自殺行為だと思われた。せめてもう一度だけでも彼らを破壊して、自己修復の隙が作れればなんとかなるのだが古城が己の力不足に歯軋りしたとき、

「ナラクヴェーラの動きは、私が止めるわ、雪菜」

長い髪を美しく揺らして、紗矢華が前に歩み出た

「煌坂？」

「わかってるわね、暁古城。敵がこちらの攻撃を解析して進化するというのなら、チャンスは一度きりよ。私と雪菜の足を引っ張ったら、灰にするからね」

紗矢華が、剣を握った左手を前に突き出した。

その銀色の刀身が突然、前後に割れた。鍔に当たる部分を支点にして、割れた刀身の半分が百八十度回転。銀色の強靭な弦が張られて、新たな武器の姿へと変わる。

「――弓!?　洋弓か！」

古城が感嘆の声を洩らす。紗矢華の剣は、今や美しいアーチを描く銀色の弓に変わっていた。リカーブ・ボウと呼ばれる現代的な形態の洋弓である。

自らのスカートをたくし上げた彼女は、太腿に巻いていた革製のホルスターから、金属製のダーツを取り出した。彼女が右手を一閃すると、それが伸びて銀色の矢に変わる。

「六式重装降魔弓。これが〝煌華麟〟の本当の姿よ」

新しい玩具を自慢する子どものような表情で、紗矢華が笑った。

流れるような美しい仕草で矢をつがえ、力強く弓を引き絞る。

「――獅子の舞女たる高神の真射姫が謹え奉る」

紗矢華の唇から、澄んだ祝詞が流れ出す。

彼女の体内で練り上げられた呪力をさらに弓が増幅、それが銀色の矢に装塡されていく。

〝煌華麟〟には、ふたつの能力があると紗矢華は言った。ひとつは物理攻撃を無効化する、絶対防御の障壁。

だとすればもうひとつはなにか――

「極光の炎駒、煌華の麒麟、其は天楽と轟雷を統べ、憤焔をまといて妖霊冥鬼を射貫く者なり！」

紗矢華が銀の矢を射放った。

大気を引き裂く甲高い飛翔音が、慟哭の声にも似た忌まわしき遠鳴りへと変わった。その飛翔音こそが、六式重装降魔弓――呪われた魔弓の真の能力だ。

「――音が!?」

魔弾が引き起こした異変に、古城も気づく。紗矢華の放った矢は、ナラクヴェーラを狙ったものではない。あの銀色の矢の正体は、鳴り鏑矢。大音響を放つ降魔破邪の呪矢なのだ。

紗矢華は舞威媛。暗殺と呪詛の専門家だ。人間の声帯や肺活量では唱えられない喪われた秘呪を、紗矢華は魔弾を使って詠唱する。戦場全体に鳴り響く鏑矢の呪文は、半径数キロメートルにも達する巨大な不可視の魔法陣を描き出した。

そこから生み出された膨大な〝瘴気〟が古代兵器に降りそそぎ、彼らの機能を阻害する。

「先輩!」

雪菜が、銀の槍を閃かせて駆け出した。

神々の兵器が耐えきれないほどの壮絶な瘴気。普通の人間がそれを浴びれば確実に命はない。吸血鬼といえども耐えきれるかどうか。だが、あらゆる魔力を斬り裂く雪菜の槍が、その瘴気を無効化する。

彼女の背中を追って、古城も疾走った。狙うのはただひとつ、女王ナラクヴェーラだ。

だが古城の眷獣の攻撃は、すでに学習されている。ならば、どうすればいい――?

「疾く在れ　獅子の黄金！　双角の深緋！」

刹那、古城の脳裏をよぎったのは、一体の巨獣を合体させたヴァトラーの姿だった。

あんな器用な真似は、今の古城にはできない。だが、単なる同時攻撃ならば雷光の獅子と緋色の双角獣が、瘴気に耐えて立ち上がろうとした女王ナラクヴェーラを襲った。雷撃でもない。衝撃波でもない。左右からの同時攻撃が生み出す、膨大な爆圧。それが古城の狙いだった。

いかな神々の兵器といえども、未学習である以上、この攻撃には耐えきれない　逃げ場のない超高圧が大型古代兵器の装甲を破砕し、骨格をバキバキと押し潰す

女王が機能を停止したことによって、周囲の小型ナラクヴェーラたちも動きを止めた。致命傷を与えたわけではない。だが、自己修復が終わるまで、彼らはもはやただのガラクタだ。

「――ははは、戦争は楽しいな、剣巫！」

古城たちの頭上から、ガルドシュの声がした　獣人化した老将校が、破壊された女王ナラクヴェーラのコクピットを開けて、血まみれの姿を現している

生身でも古城たちと闘うつもりなのだろう。ガルドシュは左手でナイフを引き抜いた。

戦場の狂気に支配された彼を、雪葉は哀れむように見上げて首を振る。

「これは戦争ではありません。あなたはただの身勝手な犯罪者です。守るべき国も民も持たな

いあなたに、戦争を語る資格はないんです！」

雪菜の呟きに、ガルドシュの笑みが引き攣った。年若く非力な少女のひと言が、老将校の心の奥底に決定的な敗北を刻んだのだと、古城は気づいた。

憤怒の雄叫びを上げて、ガルドシュが雪菜へと突進した。

雪菜は槍を構えることもなく、わずかに身体をずらしただけだった。

風を裂いて飛来した矢が、ガルドシュの左肩を貫き、のけぞらせた。矢を放ったのは、もちろん紗矢華だ。そしてさらに、

「――終わりだ、オッサンっ！」

がら空きになった彼の脇腹を、古城が力任せに殴りつけた。

さらに殴る。殴る。彼に攫われた浅葱と凪沙のぶんだった。あともう一人、雪菜のぶんも

やがてガルドシュの長身が、力尽きたようにゆっくりとくずおれた。

強靭な体力を誇る獣人の彼にも、ついに限界が訪れたのだ。

「ぶち壊れてください、ナラクヴェーラ」

誰もいない操縦席に乗りこんだ雪菜が、浅葱の用意した音声ファイルを再生する。

その瞬間、終わりはあっさりと訪れた。

弱々しい哭き声のような音を残して、すべての古代兵器が朽ち木のように地面に転がった。

落下の衝撃に耐えきれず、ナラクヴェーラの装甲に亀裂が走った。風化の進んだ岩のよう

に、さらさらと音を立てて彼らの巨体が崩れ出す。浅葱の造ったプログラムの仕業だ。自己修復機能の暴走によって、ナラクヴェーラたちが自分自身を解体しているのだ。やがてすべての古代兵器は砂へと変わり、風に運ばれて海に消えていった。わずか五分足らずの出来事だった。

「……これで文句はないな、ヴァトラー」

古城は、気怠そうに振り返りながら訊いた。ただ一人、ろくに汗もかいていない戦王領域の青年貴族が、ブラボーと拍手しながら近づいてくるところだった。

「ああ、もちろん。堪能させてもらったよ、古城。これでしばらくは退屈せずに済みそうだ」

「あ？」

飽きたらまた事件を起こす、とでも言いたげな彼の発言に、古城が殺気立つ。

ヴァトラーはそれを気にした素振りもなく、倒れているガルドシュのほうへと近づくと、

「黒死皇派の身柄は、ボクが引き取らせてもらうけどいいよね　彼らは戦王領域の法で裁く。船も沈められてしまったし、せめてそのくらいの働きはしないとボクの沽券にかかわるからね」

「……好きにしろよ」

身勝手なヴァトラーの言い分を、古城は鬱陶しげに手を振って認めた。古城がここで断った

ところで、ヴァトラーは日本政府に犯人引き渡しの要求をするだけだろう。彼が後始末を引き受けてくれるというのなら、全部任せてしまえばいい。

ナラクヴェーラはすべて失われて、黒死皇派の脅威は去った。古城たちの役目はここまでだ。

「そうそう。彼らを処刑したりはしないから、安心したまえ。ボクの命を狙ってくれる貴重な強敵を、殺したりしたらつまらないからね」

立ち去る直前、ヴァトラーが物騒なことを言い残し、古城は疲労が倍増するのを覚えた。

どうやらあの男はまったく懲りてないらしい。いずれまた自分の命を狙う敵を探し出して、似たような事件を起こすのだろう。巻きこまれないのを祈るしかなかった。

そして古城の気を重くしている原因がもうひとつ

「紗矢華さんの血を吸ったんですね、先輩」

雪菜が深い湖のような瞳で、古城を見上げて訊いてくる

古城は、ぐふっと息を詰まらせた　いちばん恐れていた事態だった。雪菜はもともと古城の監視者であり、自らの判断で古城を抹殺する権限すら与えられているのだという。

そんな雪菜の監視の目を盗んで、彼女の友人の血を吸ったのだ。雪菜が怒り狂ったとしても当然だ。黙っていればバレないかもしれないと期待していたのだが、やはりそう甘くはなかったらしい。

「あ、うあ……いや、あれはなんというか」

「非常事態。そう、非常事態だったの、雪菜」
古城と紗矢華が、二人並んで必死に言い訳をする。雪菜は彼らを無表情に見つめて、
「そうですよね」
「そうなんだ。地上への出口がガーッて瓦礫で塞がってドバーッって水が押し寄せて来て」
予想外に落ちついた雪菜の反応が、古城たちを逆に不安にする。
「う、うん。あのまま地下に閉じこめられてたら溺れると思って。雪菜に内緒にしておこうなんて気持ちは全然――」
「なにを慌ててるんですか、二人とも」
雪菜が冷静な口調で訊いてきた。そして雪菜は、不意に紗矢華のほうに視線を向け、
「そういえば紗矢華さん、そのパーカーは先輩のですよね」
ひうっ、と紗矢華が全身を硬直させる。
「違うの、雪菜。このパーカーは嫌がる私にこの男がいきなり無理やり――」
ちょっと待て、と古城は勢いよく彼女のほうを向いて、
「そこまで無理やりでもなかっただろ!?　おまえだってお姫様抱っこがどうこうって喜んでたじゃねーか!?」
「ばかばか！　なんで今そんなことを言うのよ!?」
紗矢華がグーで古城の頭をぽかぽかと殴り出す。じゃれ合っているとしか思えない二人の姿

を、雪菜はしばらく無言で見つめ、

「ずいぶん仲良くなったみたいで、よかったです。抵抗する紗矢華さんの血を、先輩が強引に吸ったのなら怒ってますけど」

やがて深々と溜息をついた。古城がぎこちなく首を回して雪菜を見る。

「じゃあ、今は怒ってない……んだよな？」

「はい。全然。これっぽっちも」

雪菜が薄く苦笑して、それを見た紗矢華が安堵のあまり、へなへなとその場に倒れこんだ。さっきまでの勇壮な戦いぶりが嘘のようなヘタレぶりである。よかったよう、としがみついてくる彼女の頭を、雪菜はよしよしと優しく撫でる

仲睦まじい二人の姿を眺めて、古城がホッと息を吐いたとき、こちらを見ていた雪菜と突然、目が合った。雪菜がにっこりと可憐な笑顔で言う。

「先輩がわたしの血を吸ったとき、わたしのことを可愛いって言ったくせに、なんて全然っ、思ってませんからね！」

終章

Outro

紘神島の中心部、キーストーンゲート内の高級ホテル。豪華な椅子にゆったりともたれて、ディミトリエ・ヴァトラーはロビーを行き交う宿泊客たちを眺めていた。

そんな彼の背後へと、誰かがゆっくりと歩いてくる気配があった。小柄な人物なのだろう。体重を感じさせない軽い音を立てて、ヴァトラーと背中合わせの椅子に座る。

しばらくは何事もなかったように時が過ぎ、やがて独り言を呟くように、その人物がヴァトラーに訊いた。

「　取り調べは、もうよろしいのですか？」

若い女の声だった。恭しい口調だが、堅苦しさはない。笑いを含んだ悪戯っぽい響きだ。

「まァね。外交官特権ってやつだよ」

ヴァトラーも背後を振り返らずに、誰にともなく返事をする。

「久しぶりだね、〝静寂破り〟――それとも獅子王機関・二聖の長とお呼びするべきかな」

「どちらでも、ご随意に」

自らの仰々しい肩書きに、女は自嘲のような吐息を洩らした。

ヴァトラーが皮肉っぽく微笑んで訊き返す。

「それで今日はなんの用かな？　きみがボクを殺しに来てくれたというのなら歓迎するけど？」

「残念ですが、それはまたの機会に。今日はただ、ご依頼の書類をお届けに上がりました。――それから、ひとつだけ、質問を」

彼女が薄い封筒を取り出す気配があった。ふむ、と青年貴族が彼女に続きを促す
「今回の黒死皇派の企みは、あの御方の差し金なのですか？」
一瞬の沈黙を挟んで、彼女が訊いた。
まるでその名を口にすることを恐れているかのような口振りだった。
ヴァトラーは椅子に背中を預けたまま目を閉じて、慎重に言葉を選んで言う。
「この騒ぎは、全部ボクが趣味で引き起こしたことだよ。そういうことにしときなよ　大丈夫、まだもう少し時間はあるサ」
「そうですか」
重苦しい気配を消し去って、彼女は元の華やいだ口調に戻っていた。
そのまま立ち上がろうとする彼女に、ヴァトラーが何気ない声で呼びかける。
「ところで、賭けはきみたちの勝ちってことでいいのかな」
あら、と彼女が悪事を咎められた子どものような声を出す。
「やはり気づいていたのですね」
まァね、とヴァトラーが得意げに喉を鳴らす。
「意外に早く陥落ちたね、彼女。男性嫌いって聞いてたから、どうなることかと思ったけど」
「わたくしたちの目的を知っていて、なぜ協力を？」
彼女がかすかに首を傾げた。

「美味いものを喰おうと思ったら、せっせとエサを運ぶくらいのことはしないとね。せっかくのご馳走も、もう少し育ってくれないと食いでがないからさ」

ヴァトラーが愉快そうに笑ってみせた。その唇から鋭い牙がのぞく。

「今回はきみたちと利害が一致したってことでいいじゃない。次もこんなふうにいくといいね」

「同感です」

制服のスカートのしわを直して立ち上がり、振り向くこともなく彼女は歩き出す。

混み合ったロビーの人波にまぎれて、その姿はすぐに見えなくなった。

フロントで宿泊の手配を終えて、煌坂紗矢華はロビーへと戻ってきた。

途中で見知らぬ少女とすれ違う。眼鏡をかけ、小脇に本を抱えた女子高生だ。何気なく目を留めてしまったのは、彼女が雪菜と同じ学校の制服を着ていたからだった。

だがそれ以上は特に気にすることもなく、紗矢華は目立つ容姿の青年貴族のほうへと向かう。

「お待たせいたしました、アルデアル公」

「やあ、おかえり。どうだった？」

見慣れない封筒を眺めていたヴァトラーが、金髪をかきあげながら訊いてくる。

「問題ありません。すぐに部屋の準備も終わるそうです」

努めて事務的な口調で紗矢華が言った。ずぶ濡れになってしまった制服の代わりに、彼女が

着ているのは大人びた灰色のジャケットとパンツ。長身のおかげで、企業重役あたりの秘書に見えなくもない。紗矢華は、滞在するホテルの予約をヴァトラーに頼まれていたのである。

〝オシアナス・グレイヴ〟が、戦闘のどさくさで沈没してしまったために、急遽、彼が今夜、寝泊まりする場所が必要になってしまったというわけだ。

突然の依頼だったが、ヴァトラーは腐っても戦王領域の大貴族であり、ホテル側も大急ぎでロイヤルスイートを手配してくれた　ヴァトラー本人は、マンガ喫茶や二十四時間営業のファミレスでの夜明かし、というものに興味津々だったのだが、そこをなんとか説き伏せて、ここまで連れてきたのである。

「ありがとう。悪いね、ホテルの手配なんか任せちゃってさ　なにしろ、ほら、有能な執事が急にいなくなってしまったものでね」

「――監視役ですから」

自分の命を狙っているテロリストを執事に雇う、というヴァトラーの無謀さを今更ながらに思い出して、紗矢華は呆れた。

「そういえば、お帰りの航空券の手配はどうなさいますか？」

さっさと日本から出て行って欲しい、という希望をこめて、紗矢華は訊いた。自慢のクルーズ船が沈んでしまった以上、ヴァトラーも帰国するには飛行機を使うしかないはずだ。

黒死皇派の逮捕という目的を終えた以上、もう彼が絃神島に残る理由はない

しかしヴァトラーはまったく無関心な口調で、
「ああ、要らない」
「え？」
「だって帰らないから」
子どものようなワガママを言い出したヴァトラーを、紗矢華は唖然として見つめた。怒鳴り出したい気持ちを必死で抑えながら、無理やり冷静な声を出す。
「それは、どういう――」
「さっき、きみがいない間に書類が届いたんだ。ほら」
ヴァトラーが封筒の中から、なにやら物々しい書類を取りだした。
日本政府が発行した大使館設置の略式の同意書である。つまり戦王領域の大使館を、紘神市〝魔族特区〟内に開設することを、日本政府が正式に許可したということだ。
大使館の長たる特命全権大使の名は、アルデアル公ディミトリエ・ヴァトラー
彼はこの先、好きなだけ、この紘神島に居座り続けることができる。
第四真祖、暁古城のいるこの島に。
「そのうちきみにも新しい辞令が届くんじゃないかな。まあ、これからもよろしくね」
そう言ってヴァトラーはにこやかに微笑み、紗矢華はただ頭上を仰いで嘆息した。

夕刻――

†

粘りつくような赤い夕陽に照らされた部屋で、藍羽浅葱が目を覚ます
手入れの行き届いた髪がシーツの上に乱れて広がり、繊細な美貌も今は華やかさより幼さが目立つ。耳元にはターコイズの小さなピアス。焦点の合わない瞳で天井を見上げる彼女の顔を、古城は怖ず怖ずとのぞきこみ、
「気がついたか、浅葱？」
「……古城？」
浅葱が少しかすれた声で古城の名を呼んだ。ぼんやりと安堵の表情を浮かべていた彼女は、やがていつものニヤニヤ笑いを口元に浮かべて、
「もしかして、あたしの寝顔的なものに見とれてたりしたわけ？」
「せめて付き添ってたと言ってくれ」
古城は苦笑混じりに口を歪めた。誘拐されていた間の心的外傷が心配だったが、起き抜けで軽口を叩く余裕があるのなら、たぶん大丈夫なのだろう。

「ここは？」
浅葱が半分ほど身体を起こして言った。
「彩海学園の保健室。中等部のだけどな」
高等部の保健室は、アスタルテが撃たれたせいで閉鎖中なのだが、そのことは黙っておく。
「――ナラクヴェーラは？」
浅葱が不安げに声を硬くした。古城は曖昧に肩をすくめて、
「全滅だってさ。どっかの吸血鬼が暴れて全部ぶっ壊した。おまえが用意してくれたウィルスのおかげだって那月ちゃんが言ってたぜ」
「そっか。那月ちゃんが助けてくれたんだ」
「ああ」
今度は古城も力強くうなずいた。いちおう嘘はついてないはずだ。
浅葱も、さすがにホッとしたようにベッドに倒れこんで、
「凪沙ちゃんたちは？」
「食事に行ったよ。あいつら、昼間、なにも食べてなかったらしいからさ。浅葱も腹になにか入れといたほうがいいかもな。このあと、事情聴取があるみたいだから」
「うっわ……面倒くさ……」
浅葱がごろごろとベッドの上を転がる。いかにも彼女らしい不遜な物言いに古城は苦笑して、

「姫柊にだいたいの事情は聞いた。大変だったみたいだな」
「まあね。ちょっと頭使ったしねー……でも……そうか、姫柊ちゃんか……」
うつぶせのまま動きを止めて、浅葱が横目で古城を見た。
「で、あんたはなんでそんなボロボロになってるわけ？　制服血まみれだし、潮臭いし」
「う!?　いや、これは、おまえが誘拐されたって聞いて焦って、えーと、海に落ちた？」
あまりにも苦しい古城の言い訳に、浅葱はむしろ哀れむような表情になって、
「ふーん……あんたとあの姫柊って子には、あとで聞きたいことが山ほどあるんだけど、まあいいわ。安心しなさい　今日は特別に許してあげる」
「そう言われても今イチ安心できないんだが」
古城は口の中だけでうんざりと呟いた。
「あ。そうだ、あたしあんたに言っとかなきゃいけないことがあったんだけど」
浅葱が、そう言って勢いよく起き上がる。ベッドの上にちょこんと正座した彼女を、古城は怪訝顔で見返した。なにかよからぬことを企んでそうな浅葱の気配に、軽く緊張する
「なんだ？」
「えーと、その前に、ちょっと、このピアス、見てくれる　石のところグラグラしてない？」
自分の耳たぶに触れながら、浅葱が古城を見上げてくる　世話が焼けるな、と思いながらも、古城は無警戒に彼女に近づき、

「こっち側か？」
浅葱の横顔をのぞきこんだ瞬間、古城の頭はがっちりと彼女の両手につかまれた。そして、
「……っ!?」
突然、唇に押し当てられた柔らかな感触に、古城の息が止まった。
世界から、すべての音が消えた。
強引だが、ぎこちないキスの感触。二人の吐息が絡まり融け合う。
古城の頭は真っ白になったまま、どれだけの時間が経ったのかわからない。
気づくと浅葱は元どおりベッドの上に正座して、かすかに瞳を潤ませて笑っていた。
「そういうことだから」
浅葱が照れ隠しのように笑いながらそう言った。いつもと同じからかうような口調だったが、彼女なりの真剣な想いが伝わってきて、古城はただ呆然とうなずいた。
「……お、おう」
夕陽が照らす浅葱の頬が赤かった。窓から吹きこむ風が、彼女の前髪をさらさらと揺らす。頬にかかる髪を彼女が鬱陶しげに払いのけ、細い首筋があらわになる。
そして浅葱は、瞳を大きくして古城を凝視し、
「ちょっ、こ、古城!?　あんた大丈夫なのそれ!?　古城!?」
古城が噴き出した鼻血の勢いに、浅葱が驚愕して悲鳴を上げた。

そのとき保健室の扉が開いて、中等部の制服を着た女子が二人連れ立って現れた。なにやら騒いでいる浅葱の声に気づいて、ベッドを隔てたカーテンの隙間をのぞきこみ、
「あ、浅葱ちゃん、目が醒めた!?　よかった、無事で……って占城君、なにそれ!?　鼻血!?　て、なんかすっごい出てるし！　一人でなにやってたの!?」
暁凪沙が混乱した様相で絶叫する。浅葱は少し照れたように舌を出し、
「ん、なんだろ。球技大会の練習……だったりして？」
「ええー……？」
凪沙が疑わしげな表情で、兄とその友人の顔を見比べる。
そのころ血まみれの口元を押さえてうろたえていた占城は、横合いから無言で差し出されたティッシュ箱を感謝しながら受け取った。汚れた手と顔を拭き、ようやく出血の収まってきた鼻に折り畳んだティッシュを当てたところで、
「――反省してください って言いましたよね、先輩」
凍えた刃物のような雪菜の声を聞いて、今度は激しく咳きこんだ。
雪菜の大きな瞳が、意外なほど近くで、占城を上目遣いに睨んでいる。
占城は途方に暮れながらも必死に首を振り、
「待て、反省というか、これはそういう問題じゃなくて……」
雪菜は、なぜか拗ねた子どものような声で小さく言った。

「もう知りません。先輩のばか」[1]

あとがき

約一名、死亡フラグが立ちまくってる子がいる気がするんだけど、大丈夫か――

そんなわけで『ストライク・ザ・ブラッド2』をお届けしております。

実は前巻は、私も過去に経験がないくらいの規模で増刷がかかりまして、おかげさまでこうして無事に続きを出すことができました。手にとってくれた読者の皆様には、あらためて心から感謝いたします。本当にありがとう。

その前巻では、古城と雪菜の二人を中心に比較的小さな舞台で物語が進んでいましたが、今回のエピソードは、若干スケール大きめになりました。具体的に言うと海外から大物アーティストじゃねえ、テロリストがやってくるくらいのスケールアップ感です。曲がりなりにも主人公が世界最強の吸血鬼などという（頭悪そうな）肩書きを名乗っている以上、あまりちまちまとしたご町内の事件ばかり扱ってもねえ、ということで。これで、この世界の広がりや勢力分布というものが、少しずつでも伝わるといいかなあ、などと思っています。

新キャラクターも登場していますが、今回は一巻からの続投組も身体を張って頑張ってます。

特にまさかのアスタルテ。彼女が再登場することは当初からの規定事項だったのですが、正直ここまで活躍してくれるとは作者も予想していませんでした。ただし殲教師のオッサンは、今回出てきておりません。ファンの人、いたらゴメン。いねえか。

挿画を担当してくださっているマニャ子さま、今回も素晴らしいイラストをありがとうございます。毎回毎回「リア充っぽい感じで」などという適当すぎる要望しかお伝えしていないにもかかわらず、期待以上の素敵な作品を仕上げていただき感謝の言葉もありません

また、そのほかのお世話になった多くの方々にも、この場を借りてお礼申し上げます。

この巻、発売を一カ月延期してもらったのですが、それでもギリギリのスケジュールになってしまいました。ご迷惑をおかけした関係者の皆様、申し訳ありませんでした。

そして最後になりましたが、誰よりも、この本を手にとってくださった読者の皆様に最大の感謝を捧げます。これからもご期待に添えるような面白い作品にしていきたいと思っていますので、今しばらくのおつき合いをお願いいたします。

それではどうか、また次巻でお目にかかれますように。

二雲岳斗

◉三雲岳斗著作リスト

「コールド・ゲヘナ」（電撃文庫）
「コールド・ゲヘナ②」（同）
「コールド・ゲヘナ③」（同）
「コールド・ゲヘナ④」（同）
「コールド・ゲヘナ　あんぷらぐど」（同）
「レベリオン　放課後の殺戮者」（同）
「レベリオン　拭殺校庭園」（同）
「レベリオン　炎を背負う少年たち」（同）

「レベリオン　彼女のいない教室」（同）
「レベリオン　楽園に紅き翼の詩を」（同）
「i・d・I　神使いたちの長い放課後」（同）
「i・d・II　seven」（同）
「i・d・III　滅びの王国」（同）
「道士さまといっしょ」（同）
「道士さまにおねがい」（同）
「アスラクライン」（同）
「アスラクライン②　夜とUMAとDカップ」（同）
「アスラクライン③　やまいはきから」（同）
「アスラクライン④　秘密の転校生のヒミツ」（同）
「アスラクライン⑤　洛高アンダーワールド」（同）
「アスラクライン⑥　おしえて生徒会長！」（同）
「アスラクライン⑦　凍えて眠れ」（同）
「アスラクライン⑧　真夏の夜のナイトメア」（同）
「アスラクライン⑨　KLEIN Re MIX」（同）
「アスラクライン⑩　科學部カイメツ」（同）

「**アスラクライン⑪**　めぐりあい異世界」（同）
「**アスラクライン⑫**　世界崩壊カウントダウン」（同）
「**アスラクライン⑬**　さくらさくら」（同）
「**アスラクライン⑭**　The Lost Files」（同）
「**ストライク・ザ・ブラッド1**　聖者の右腕」（同）
「**M.G.H**　楽園の鏡像」（単行本　双葉社刊）
「**聖遺の天使**」（単行本　徳間書店刊）
「**カーマロカ**」（同）
「**煉獄の鬼王**」（双葉文庫）
「**海底密室**」（デュアル文庫）
「**ワイヤレスハート・チャイルド**」（同）
「**アース・リバース**」（スニーカー文庫）
「**ランブルフィッシュ①**　新学期乱入編」（同）
「**ランブルフィッシュ②**　中間試験暴走編」（同）
「**ランブルフィッシュ③**　場外乱闘恋心編」（同）
「**ランブルフィッシュ④**　伝説崩壊編」（同）
「**ランブルフィッシュ⑤**　凶天使襲来編」（同）
「**ランブルフィッシュ⑥**　亡霊殲滅編〈上〉」（同）

「ランブルフィッシュ⑦　亡霊殲滅編（下）」（同）
「ランブルフィッシュ⑧　決戦前夜秘湯編」（同）
「ランブルフィッシュ⑨　大会開幕奇襲編」（同）
「ランブルフィッシュ⑩　学園炎上終幕編」（同）
「ランブルフィッシュ　あんぷらぐど」（同）
「ダンタリアンの書架1」（同）
「ダンタリアンの書架2」（同）
「ダンタリアンの書架3」（同）
「ダンタリアンの書架4」（同）
「ダンタリアンの書架5」（同）
「ダンタリアンの書架6」（同）
「ダンタリアンの書架7」（同）
「旧宮殿にて」（単行本　光文社刊）
「少女ノイズ」（同）
「少女ノイズ」（光文社文庫）
「絶対可憐チルドレン・THE NOVELS」（ガガガ文庫）
「幻獣坐 -The Scarlet Sinner -」（講談社ノベルズ）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

■

あて先

〒102-8584 東京都千代田区富士見１８-19
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部
「三雲岳斗先生」係
「マニャ子先生」係

■

電撃文庫

ストライク・ザ・ブラッド2
戦王の使者（ぜんおうのししゃ）

三雲岳斗（みくもがくと）

発行　二〇一一年九月十日　初版発行

発行者　高野　潔

発行所　株式会社アスキー・メディアワークス
〒一〇二-八八八四　東京都千代田区富士見一-八-一九
電話〇三-五二一六-八二九九（編集）
http://asciimw.jp/

発売元　株式会社角川グループパブリッシング
〒一〇二-八一七七　東京都千代田区富士見一-八-一二
電話〇三-三二三八-八六〇五（営業）

装丁者　荻窪裕司（META + MANIERA）

印刷・製本　加藤製版印刷株式会社

※本書の一部または全部を無断で複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
※落丁・乱丁本はお取り替えいたしますので、カスタマーサポート係までお送りください。
※定価はカバーに表示してあります。

2011 GAKUTO MIKUMO
Printed in Japan
ISBN978-4-04-870752-7 C0193

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで〝小さな巨人〟としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の想い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Times,Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦

電撃文庫

ストライク・ザ・ブラッド1 聖者の右腕

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

ISBN978-4-04-870267-6

世界最強の吸血鬼、第四真祖の力を手に入れながらも平穏な日常を願う高校生、暁古城。そんな彼の前に現れた「監視役」とは……!? 待望の三雲岳斗新シリーズ開幕!!

み-3-30　2090

ストライク・ザ・ブラッド2 戦王の使者

三雲岳斗
イラスト／マニャ子

ISBN978-4-04-870752-7

世界最強の吸血鬼・暁古城と、彼を監視する雪菜の前に、欧州の真祖"忘却の戦王"の使者が現れる。その目的は古城に対する宣戦布告か、それとも……。

み-3-31　2191

アスラクライン

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN4-8402-3090-0

高校入学を明日に控えたその夜、留学中の兄から銀色のトランクが届けられた。そして僕と操緒の秘密を巡る、あまりにも賑やかな、高校生活が始まった――。

み-3-16　1123

アスラクライン② 夜とUMAとDカップ

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN4-8402-3179-6

かわいい女の子に囲まれ始まった高校生活。だけど、一人は幽霊、一人は悪魔、そしてもう一人はサイボーグ!? 普通の高校生智春は、どこへ行ってしまうのか!!

み-3-17　1160

アスラクライン③ やまいはきから

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN4-8402-3308-X

個性強すぎの美少女たちに囲まれて、刺激強すぎの高校生活を送る智春。今度の敵は過労と記憶喪失!? トラブルの連続に、ますます加速するスクールバンク第3弾!!

み-3-18　1221

電撃文庫

アスラクライン④ 秘密の転校生のヒミツ

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN4-8402-3449-3

智春のクラスに交換留学生がやってくる。貴族の末裔で美少女という前評判を聞きつけて、盛り上がるクラスメイトたち。しかし彼女は……。人気シリーズ第4弾。

み-3-19　1276

アスラクライン⑤ 洛高アンダーワールド

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN4-8402-3550-3

智春の前にまた新たな女の子が現れた!! 今度は小動物系美少女の沙原ひかり。美化委員の活動を通して親密な雰囲気になっていく二人だったが……。

み-3-20　1314

アスラクライン⑥ おしえて生徒会長!

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-8402-3685-0

入学以来、めちゃめちゃな学校生活を送る智春は、その原因である行方不明の兄に会いに行くことを決意。そして兄の手がかりを握る人物を訪ねるが……!?

み-3-21　1374

アスラクライン⑦ 凍えて眠れ

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-8402-3842-7

洛高の二年生が修学旅行へ出かけた。留守中、佐伯兄から洛高と玲子のことを託された智春だったが……。美少女たちに囲まれた高校生活が思わぬ急展開!?

み-3-22　1426

アスラクライン⑧ 真夏の夜のナイトメア

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-8402-3934-9

アルバイトのため海辺のペンションに滞在中の智春たちだったが……。解き明かされていく二巡目の世界と、悪魔出現の謎。絶好調スクールバンク夏休み編!

み-3-23　1469

アスラクライン⑨ KLEIN Re-MIX

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-8402-4118-2

機巧魔神や悪魔出現の謎を解く鍵を握る人物とは、操緒の姉の女子大生。水無神環緒だった!? 大好評人気シリーズ、新たな特技を身につけ暴走気味の第9弾!

み-3-24 1523

アスラクライン⑩ 科學部カイメツ

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-04-867088-3

水無神環緒が語る、"巡目の世界"の秘密。執拗に智春たちを狙う鳳島氷羽子。急速に非在化する奏――。物語は怒涛の急展開!! 人気シリーズ第10弾!!

み-3-25 1603

アスラクライン⑪ めぐりあい異世界

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-04-867267-2

鋼色の機巧魔神との戦闘に敗れ、一巡目の世界へと飛ばされた智春。異界の街で彼が出会った人物は!? そして「魔女」と呼ばれる美少女が現れて……。

み-3-26 1663

アスラクライン⑫ 世界崩壊カウントダウン

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-04-867763-9

人間化した奏と、高校生の姿に美しく成長したアニア。そして大破した機巧魔神《黒鐵》の中から、操緒を救い出す方法を知る人物が現れて……!?

み-3-27 1749

アスラクライン⑬ さくらさくら

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-04-868141-4

二巡目の世界へと帰還した智春たち。しかしここにも、世界崩壊の予兆が!? 非在化を始めた世界を前に、操緒と智春が選んだ最後の決断とは……!?。

み-3-28 1851

電撃文庫

アスラクライン⑭ The Lost Files

三雲岳斗
イラスト／和狸ナオ

ISBN978-4-04-868334-0

夏目智春が謎の失踪を遂げてから数ヵ月。智春の義理の妹・苑宮和葉が、洛高に残された記録から知った、智春の隠された記憶とは――

み-3-29 1902

花×華

岩田洋季
イラスト／涼香

ISBN978-4-04-868399-9

高校二年の春休み、園端夕の許に届いた心揺さぶるラブレター。そこに記された〝はな〟という名前は、お嬢様の華さまと元気な成宮花しか心当たりがなくて。

い-5-25 1914

花×華②

岩田洋季
イラスト／涼香

ISBN978-4-04-868768-3

二人の〝はな〟と臨む映像研の合宿は、夏ということで海の近くのお宿に決定！　もちろん目的は映画を撮ることなのだが、初お泊まりチャンスにそわそわを隠せず――。

い-5-26 1990

花×華③

岩田洋季
イラスト／涼香

ISBN978-4-04-870378-9

夏休み真っ盛り。〝はな〟たちと特別な想い出を作ろうと計画を練った矢先、華さまが母親と一時街を離れることに。そして三人の想いが詰まった夏が始まる

い-5-27 2099

花×華④

岩田洋季
イラスト／涼香

ISBN978-4-04-870812-8

新学期を迎え、迫るはカップル成立率最高のイベントと謳われる学園祭。〝はな〟たちもこれを機に……とやる気満々なのだが、学園祭に潜む要素は他にもあって――。

い-5-28 2192

電撃文庫

バベル

中田明
イラスト／ひと和

ISBN978-4-04-870745-9

この物語の主な登場人物は、ハッカーお嬢様、マフィアあがりの少年、巨漢女怪盗、キザ探偵、暴力女治安官、不良シスター etc……悪い人だらけの犯罪騒乱ストーリー開幕！

な-16-1　2200

ヘヴィーオブジェクト

鎌池和馬
イラスト／凪良

ISBN978-4-04-868069-1

超大型兵器オブジェクト。その操縦士、「エリート」。雪原の戦場に派遣留学したクウェンサーが出会ったのは、そんな素性を持つ奇妙な少女だった――。

か-12-21　1833

ヘヴィーオブジェクト　採用戦争

鎌池和馬
イラスト／凪良

ISBN978-4-04-868594-8

宇宙開発技術採用を巡る戦争の最中。戦地派遣留学生のクウェンサーと、見習い軍人のヘイヴィアの次なる相手は、姿が見えない超巨大兵器、ステルス・オブジェクト!?

か 12-24　1954

ヘヴィーオブジェクト　巨人達の影

鎌池和馬
イラスト／凪良

ISBN978-4-04-870051-1

巨大兵器オブジェクトが世界のバランスを支配する世界。不良兵士のクウェンサーとヘイヴィアは、今日もマイペースに戦場を駆ける。近未来アクション、懲りずに第三弾だ！

か-12-27　2032

ヘヴィーオブジェクト　電子数学の財宝

鎌池和馬
イラスト／凪良

ISBN978-4-04-870549-3

ミニスカサンタ！　ツンプリなお姫様と爆乳ブローレイティアさんのミニスカサンタっ……！一体これが、今回のクウェンサーとヘイヴィアのどんな伏線に!?　近未来アクション！

か-12-29　2136

電撃文庫

神様のメモ帳

杉井光
イラスト／岸田メル

ISBN978-4-8402-3691-1

大きな瞳、真っ白な肌、長い黒髪。アリスと名乗る少女は、自らを〝ニート探偵〟と呼んだ――。高校生ナルミを変えた冬の出会いと事件を描いた青春ストーリー

す-9-4　1381

神様のメモ帳2

杉井光
イラスト／岸田メル

ISBN978-4-8402-3888-5

ニート探偵事務所の扉をタイ人の少女が叩く。彼女は2億円を抱えていて父親から身を隠すように言われたというが――。ニートティーン・ストーリー第2弾。

す-9-5　1448

神様のメモ帳3

杉井光
イラスト　岸田メル

ISBN978-4-04-867097-5

記憶を失い戻ってきた彩臭。廃部の危機を迎えた園芸部。その創設に絡む死亡事件――ニート探偵アリスの出す答えは？ニートティーン・ストーリー第3弾。

す-9-8　1612

神様のメモ帳4

杉井光
イラスト／岸田メル

ISBN978-4-04-867910-7

かつて四代目とともに平坂組をつくりあげた平坂が街に戻ってくる。因縁ある二人の間に立たされたナルミの決断とは!?ニートティーン・ストーリー第4弾。

す-9-11　1800

神様のメモ帳5

杉井光
イラスト／岸田メル

ISBN978-4-04-868543-6

ミンさんのラーメンや平坂組のバカたちにまつわるエピソードを収録。書き下ろしでは草野球でヤクザと対決!?　ニートティーン・ストーリー、初めての短編集。

す-9-13　1943

電撃文庫

神様のメモ帳6

杉井光
イラスト／岸田メル

ISBN978-4-04-870272-0

ミンさんに結婚話!? それを聞いて真っ先に立ち上がったのは……ヒロさんだった！「電撃文庫MAGAZINE」に連載されたものに加筆訂正、さらに書き下ろしも！

す-9-14　2089

神様のメモ帳7

杉井光
イラスト／岸田メル

ISBN978-4-04-870691-9

全ニートの厄日、勤労感謝の日を息を潜めてやり過ごしたアリスのもとに依頼にやってきたのは人気のアイドルで――。ニートティーン・ストーリー、第7弾。

す-9-15　2155

神様のメモ帳8

杉井光
イラスト／岸田メル

ISBN978-4-04-870810-4

雀荘荒らしを調査中のナルミの前に現れたのは、四代目の父親！ 平坂組の危機と賭け麻雀騒ぎの裏で、一年前のあの悪夢がふたたび街に忍び寄る……

す-9-16　2186

アトリウムの恋人

土橋真二郎
イラスト／植田亮

ISBN978-4-04-870543-1

とある理由により閉鎖された仮想世界「東京スフィア」。高校生の前田は、普段は言葉を交わさない同級生の遥花から、その存在について相談を受けるが……。

と-8-11　2128

アトリウムの恋人2

土橋真二郎
イラスト／植田亮

ISBN978-4-04-870811-1

スフィア再開の宣伝をかねて、現実の東京で開催されたイベントゲーム「タクティクス東京」。しかしSSSメンバーは思いもよらぬトラブルに巻き込まれ……。

と-8-12　2193

電撃文庫

俺の妹がこんなに可愛いわけがない

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ

ISBN978-4-04-867180-4

「キレイな妹がいても、いいことなんて一つもない」妹・桐乃と冷戦状態にあった兄の京介は、ある日突然、桐乃からトンデモない〝人生相談〟をされ……。

ふ-8-5　1639

俺の妹がこんなに可愛いわけがない②

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ

ISBN978-4-04-867426-3

「責任とりなさい！」とある理由で桐乃を怒らせた京介に下った指令「人生相談」とは「夏の想い出」作り。どうも都内某所で、なんたらとかいう祭りがあるらしく……。

ふ-8-6　1696

俺の妹がこんなに可愛いわけがない③

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ

ISBN978-4-04-867758-5

お互いの書いた小説で口論になった桐乃と黒猫。ところが何を間違ったのか、桐乃の書いた「ケータイ小説」が絶賛されて、近々作家デビューすることに……!?

ふ-8-7　1744

俺の妹がこんなに可愛いわけがない④

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ

ISBN978-4-04-867934-3

沙織が開いた桐乃のケータイ小説発売記念パーティに招かれた京介。そこには何故かメイド姿の桐乃がいて……。そして、桐乃の〝最後の人生相談〟とは――？

ふ-8-8　1803

俺の妹がこんなに可愛いわけがない⑤

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ

ISBN978-4-04-868271-8

「じゃあね、兄貴」――別れの言葉を告げ、俺のもとから旅立った桐乃。……別に寂しくなんかないけどな。〝先の読めない〟ドラマチックコメディ、第5弾！

ふ-8-10　1876

電撃文庫

俺の妹がこんなに可愛いわけがない⑥

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ

ISBN978-4-04-868538-2

あやせから新たな相談を受けたり、友人の赤城とアキバ巡りをしたりと、いつもの（？）騒々しい日常が戻ってきたかと思いきや……沙織の様子がおかしい!?

ふ-8-11　1938

俺の妹がこんなに可愛いわけがない⑦

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ

ISBN978-4-04-870052-8

「――あんた、あたしの彼氏になってよ」桐乃の思わぬ〝告白〟に、京介は――？シリーズ最大級の山場（？）を迎える、ドラマチックコメディ第7弾!!

ふ-8-12　2031

俺の妹がこんなに可愛いわけがない⑧

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ

ISBN978-4-04-870486-1

「私と付き合ってください」新たな局面を迎えた恋愛模様。黒の予言書『運命の記述』に秘められた少女の〝願い〟とは!? 兄妹の関係にも、一大転機が訪れる――？

ふ-8-13　2122

俺の妹がこんなに可愛いわけがない⑨

伏見つかさ
イラスト／かんざきひろ

ISBN978-4-04-870813-5

『あたしの姉が電波で乙女で聖なる天使』『カメレオンドーター』『突撃 乙女ロード！』『過ちのダークエンジェル』他。それぞれの視点で語られる特別編！

ふ-8-14　2185

はじめてのクソゲー

麻宮 楓
イラスト／ネムネム

ISBN978-4-04-870869-2

目当ての国民的ゲームが売り切れたその日、僕は運命的な出会いを果たす。それはあらゆるバグだらけのクソゲーだけど、そのおかげで仲良くなった女の子は実は――。

あ-25-6　2194

おもしろいこと、あなたから。

電撃大賞

自由奔放で刺激的。そんな作品を募集しています。
受賞作品は「電撃文庫」「メディアワークス文庫」からデビュー！

上遠野浩平(『ブギーポップは笑わない』)、高橋弥七郎(『灼眼のシャナ』)、成田良悟(『バッカーノ！』)、支倉凍砂(『狼と香辛料』)、有川　浩・徒花スクモ(『図書館戦争』)、川原　礫(『アクセル・ワールド』)など、常に時代の一線を疾るクリエイターを生み出してきた「電撃大賞」。新時代を切り開く才能を毎年募集中!!!

電撃小説大賞・電撃イラスト大賞

●賞(共通)
大賞……正賞+副賞100万円
金賞……正賞+副賞 50万円
銀賞……正賞+副賞 30万円

(小説賞のみ)
メディアワークス文庫賞
正賞+副賞 50万円
電撃文庫MAGAZINE賞
正賞+副賞 20万円

編集部から選評をお送りします！
小説部門、イラスト部門とも1次選考以上を
通過した人全員に選評をお送りします！

詳しくはアスキー・メディアワークスのホームページをご覧ください。
http://asciimw.jp/award/taisyo/

主催：株式会社アスキー・メディアワークス